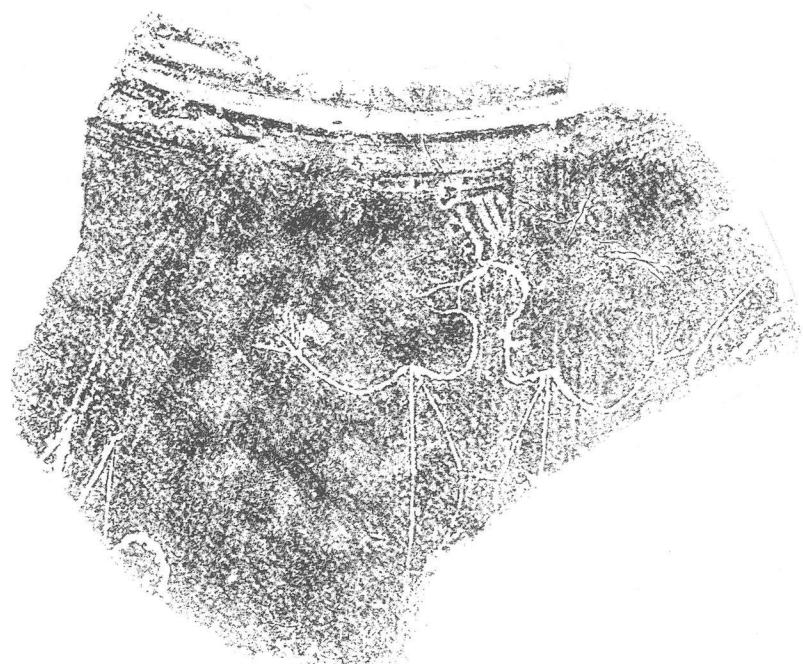


新庄尾上遺跡



2009年3月

岡山市教育委員会

卷頭図版 1



絵画土器（192）



絵画土器（192）部分



絵画土器（193）



絵画土器（193）部分

新庄尾上遺跡

2009年3月

岡山市教育委員会

序

岡山市は2005年3月に御津郡御津町、児島郡灘崎町を編入し、07年1月には御津郡建部町、赤磐郡瀬戸町を編入しました。それによって、人口約69万5千人(08年3月末日現在)、面積約790m²となりました。岡山県のみならず、中四国地方を代表する都市となりました。そして、2009年4月には政令指定都市になることが決定しています。

このように未来へ躍進する岡山市ですが、太古においては、吉備国を中心の大半を占めていました。そのため、古代文化が栄え、造山古墳に代表される大型古墳をはじめ、約2,710の遺跡が残されています。編入した各町もそれぞれに歴史を有し、御津町210、灘崎町約90、建部町約210、瀬戸町約370の遺跡(改訂 岡山県遺跡地図(2003)調べ)が存在しています。編入によって、それら旧町域の遺跡の保護、保存も岡山市の業務となりました。

今回報告する新庄尾上遺跡は旧御津町に存在する遺跡です。旧町教育委員会の調査で鳥装の人物の絵画土器が出土したことで知られていきましたが、全体の報告書は未刊のままでした。新庄尾上遺跡出土遺物の管理、活用も岡山市の業務となつたことを機に再整理し、本報告書を刊行することになりました。

最後になりましたが、本報告書が歴史研究の資料として、多くの方々にご活用頂ければ幸いに存じます。

平成21年3月31日

岡山市教育委員会
教育長 山脇 健

例　　言

- 1 本書は、岡山県営圃場整備事業五城北地区に伴う新庄尾上遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 新庄尾上遺跡は岡山市御津新庄640番地他に所在する。
- 3 発掘調査は御津町教育委員会（当時）が実施し、長谷川一英が担当した。
- 4 本書の作成は岡山市教育委員会 岡山市埋蔵文化財センターが実施した。
遺物の実測は草原孝典、高橋伸二、河田健司、岡本芳明、田嶋正憲、西田和浩が行った。
本書の執筆は第IV章第2節を西田が、その他は長谷川が行った。
- 5 図面の浄書は木村真紀、石井亜希子、山元尚子が行った。遺物の写真撮影は西田が行った。
- 6 出土遺物、図面、写真等は岡山市教育委員会で保管している。
- 7 本書の編集は長谷川が行った。

凡　　例

- 1 本書の高度値は標準海拔高(T.P.)である。
方位は図1～4が真北、他が磁北である。新庄尾上遺跡付近の磁針方向は西偏約7°80'である。
- 2 遺物実測図の縮尺率は土器1/4、石器2/3、土・鉄製品1/2を原則とする。また、石器にはS、
土製品にはD、鉄製品にはMの略記号を用いている。
- 3 実測図等の遺跡名称は新庄尾上(ShiNJoU-ONoUE)、または、略号SONとし、その後に調査
年度の西暦の下2桁を示した。89年度は二次に分かれたため、2次調査を89-2とした。
- 4 土器類観察表の色調は『新版 標準土色帖 第29版』(2007)による。
- 5 調査に際して、1つの調査単位を1つのトレンチとし、岡山県教育委員会調査のトレンチ番号に
続き、調査開始順に27から順にトレンチ番号を付与した。
本書の記述においても調査時に付与したものと踏襲しているが、89年度の調査地が90年度の調
査地を挟む様な位置のため、89年度2次調査と90年度調査のトレンチ番号を下表の様に変更した。
ただし、この新トレンチ番号は本書の記述にのみ使用しているものである。遺物の収納箱、図面、
写真等には調査時に付与した旧トレンチ番号が記載されている。利用の際には注意されたい。

トレンチ番号変更表

新トレンチ番号	旧トレンチ番号	新トレンチ番号	旧トレンチ番号
5 4	6 2	6 1	5 9
5 5	6 3	6 2	5 8
5 6	6 4	6 3	5 7
5 7	6 1	6 4	5 6
5 8	6 0	6 5	5 5
5 9	6 6	6 6	5 4
6 0	6 5		

6 遺物は、取り上げ単位ごとに、取り上げ年月日を優先して、01から遺物番号を付与し、別途作成した遺物台帳に遺物番号順に出土トレンチ、年月日、層位、遺構を記録している。

遺物への注記は略号、調査年度（89年度2次調査のみ89-2とする）、遺物番号のみとしている。

7 遺物の取り上げ、本書の記述に際して、以下の略記号を使用した。

S B … 壺穴建物・掘立柱建物

S D … 溝・流路

S K … 土壙

S P … ピット

各遺構種別ごとに、検出順に01から遺構番号を付与し、略記号の後に示した。年度ごとに01から遺構番号を付与したため、同じ略記号、遺構番号のものが年度ごとにある。本来ならば、整理すべきであろうが、新旧番号を対照する際の齟齬を避けるため、調査時に付与したもの踏襲している。

本書の記述に際しては、略記号と遺構番号の間に調査年度（89年度2次調査のみ89(2)とする）を付して、略記号、調査年度、遺構番号と記述して識別している。

8 本書の記述において、一般的には『壺穴住居』と呼ばれているものを指すのに、『壺穴建物』という呼称を用いている*。これは、その構造物の使途が判明しない状況で、『住まい』を表す『住居』という言葉で、その遺構の性格を決定することが疑問であるからである。

*長谷川一英1998「まとめ」『御津町埋蔵文化財発掘調査報告9 鍛冶屋谷遺跡』御津町教育委員会

目 次

卷頭図版

序
例 言
凡 例
目 次

第Ⅰ章 地理的・歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過	4
第1節 調査に至る経緯	4
第2節 調査日誌(抄)	5
第Ⅲ章 遺構	7
第Ⅳ章 遺物	95
第1節 土器類	95
第2節 石器	115
第Ⅴ章 考察	119
第1節 弥生時代中期から古墳時代の土器	119
第2節 絵画土器	124
図 版	129
報告書抄録	163

挿図目次

図 1 新庄尾上遺跡位置図	1
図 2 新庄尾上遺跡周辺遺跡分布図	2
図 3 東区遺跡範囲・トレンチ分布図	7
図 4 西区遺跡範囲・トレンチ分布図	8
図 5 27トレンチ遺構面・28トレンチ第2遺構面・29トレンチ遺構面平面図	10
図 6 SB8801平面図	11
図 7 SB8801土層断面図	12
図 8 28トレンチ第1遺構面平面図	12
図 9 30トレンチ遺構面平面図	12
図10 31・32トレンチ第1遺構面平面図	14
図11 31・32トレンチ第2遺構面平面図	15
図12 SB8803平面・土層断面図	16
図13 SB8802平面・土層断面図	17
図14 33トレンチ第1遺構面平面図	18
図15 33トレンチ第2遺構面平面図	18
図16 34・35・36・37トレンチ遺構面平面図	20
図17 SB8804平面・土層断面・断面図	21
図18 38・39トレンチ遺構面平面図	23
図19 SB8807・8808・8809平面図	24
図20 SB8807・8808・8809断面図	25
図21 SB8805平面・土層断面図	26
図22 SB8806平面・土層断面図	27
図23 SB8810平面・土層断面図	28
図24 SK8835平面・土層断面図	28
図25 40トレンチ第1遺構面平面図	28
図26 40トレンチ第2遺構面平面図	28
図27 SB8812平面・土層断面図	29
図28 SB8811平面・土層断面・断面図	29
図29 41・42トレンチ遺構面平面図	30
図30 43トレンチ第1遺構面平面図	31
図31 43トレンチ第2遺構面平面図	32
図32 SD8823北壁土層断面図	32
図33 44・45トレンチ第1遺構面平面図	34
図34 44トレンチ第2遺構面平面図	35
図35 44トレンチ第3遺構面・45トレンチ第2遺構面・46トレンチ遺構面平面図	36

図36 SB8901炭化材検出状況平面・断面図	37
図37 SB8901平面・土層断面図	38
図38 SB8902平面・土層断面・断面図	39
図39 44トレンチ第4遺構面平面図	39
図40 47トレンチ第1遺構面平面図	41
図41 47トレンチ第2遺構面平面図	41
図42 SB8903平面・断面図	41
図43 48トレンチ遺構面平面図	42
図44 SB8904平面・断面図	43
図45 49・50・51・52トレンチ第1遺構面平面図	44
図46 49・50・51・52トレンチ第2遺構面平面図	45
図47 SB8906平面・土層断面・断面図	46
図48 SB8905平面・土層断面図	47
図49 SB8907平面・土層断面図	48
図50 53トレンチ第1遺構面平面図	49
図51 53トレンチ第2遺構面平面図	50
図52 53トレンチ第3遺構面平面図	51
図53 SB8908平面・土層断面図	52
図54 SB8912土層断面図	52
図55 SB8913平面・断面図	53
図56 SB8911・8912平面・土層断面図	54
図57 SB8910平面・断面図	55
図58 SB8909平面・断面図	56
図59 54トレンチ遺構面平面図	57
図60 55トレンチ遺構面平面図	58
図61 SK9011平面・土層断面図	58
図62 SK9013平面・土層断面図	59
図63 SK9015平面・土層断面図	59
図64 SK9014平面・土層断面図	59
図65 SK9017平面・土層断面図	60
図66 SK9019平面・土層断面・断面図	60
図67 56トレンチ遺構面平面図	61
図68 SK9020平面・土層断面図	62
図69 SK9021平面・土層断面図	62
図70 SK9022平面・土層断面・断面図	63
図71 SK9024平面・土層断面・断面図	63
図72 SK9026平面・土層断面・断面図	64
図73 SK9028・9029平面・土層断面・断面図	64

図74 SK9018平面・断面図	65
図75 SK9023平面・土層断面図	65
図76 SK9025平面・土層断面図	65
図77 57トレンチ第1遺構面平面図	66
図78 57トレンチ第2遺構面平面図	67
図79 57トレンチ第3遺構面平面図	68
図80 58トレンチ第1遺構面平面図	69
図81 58トレンチ第2遺構面平面図	70
図82 58トレンチ第3遺構面平面図	71
図83 SB9001平面・土層断面図	72
図84 59トレンチ第1遺構面平面図	73
図85 59トレンチ第2遺構面平面図	74
図86 59トレンチ第3遺構面平面図	74
図87 SB9002平面・土層断面図	75
図88 SB9003平面・土層断面図	76
図89 60トレンチ遺構面平面図	77
図90 61トレンチ第1遺構面平面図	78
図91 61トレンチ第2遺構面平面図	78
図92 61トレンチ第3遺構面平面図	78
図93 62トレンチ第1遺構面平面図	79
図94 62トレンチ第2遺構面平面図	80
図95 63トレンチ遺構面平面図	81
図96 SB89(2)03平面・土層断面図	82
図97 64トレンチ遺構面平面図	83
図98 65トレンチ第1遺構面平面図	84
図99 65トレンチ第2遺構面平面図	85
図100 66トレンチ第1遺構面平面図	86
図101 66トレンチ第2遺構面平面図	87
図102 66トレンチ第3遺構面平面図	88
図103 66トレンチ第4遺構面平面図	89
図104 66トレンチ第5遺構面平面図	90
図105 66トレンチ第6遺構面平面図	91
図106 SB89(2)01・89(2)02炭化材検出状況平面・断面図	92
図107 SB89(2)01・89(2)02平面・土層断面図	93
図108 土器実測図(1)	96
図109 土器実測図(2)	98
図110 土器実測図(3)	99
図111 土器実測図(4)	101

図112 土器実測図(5)	102
図113 土器実測図(6)	104
図114 土器実測図(7)	105
図115 土製品・鉄製品実測図	106
図116 土器実測図(8)	107
図117 土器実測図(9)	108
図118 土器実測図(10)	109
図119 石器実測図(1)	116
図120 石器実測図(2)	117
図121 弥生時代中期土器分類図	122
図122 弥生時代後期から古墳時代前期土器分類図	123
図123 絵画筆順図	125
図124 建物絵画復元図	126

表 目 次

土器類観察表	110
石器観察表	118

図版目次

卷頭図版 1 1 絵画土器 (192)

2 絵画土器 (192) 部分

図版 1 1 調査地遠景 (西上空から)
2 東区遠景 (北西から)
3 東区遠景 (北東から)

図版 2 1 27トレンチ 遺構面 (西から)
2 27トレンチ SB8801 (東から)
3 28トレンチ 第1遺構面 (東から)

図版 3 1 28トレンチ 第2遺構面 (東から)
2 29トレンチ 遺構面 (南から)
3 30トレンチ 遺構面 (南から)

図版 4 1 31トレンチ 第1遺構面 (東から)
2 31トレンチ 第2遺構面 (東から)
3 31トレンチ SB8802 (北から)

図版 5 1 31トレンチ SB8803 (東から)
2 32トレンチ 第1遺構面 (東から)
3 32トレンチ 第2遺構面 (東から)

図版 6 1 33トレンチ 第2遺構面 (西から)
2 34トレンチ 遺構面 (西から)
3 35トレンチ 遺構面 (北から)

図版 7 1 35トレンチ SB8804 (北西から)
2 36トレンチ 遺構面 (西から)
3 37トレンチ 遺構面 (西から)

図版 8 1 38トレンチ 遺構面 (東から)
2 38トレンチ SB8807 (南から)
3 38トレンチ SB8808・8809 (南から)

卷頭図版 2 1 絵画土器 (193)

2 絵画土器 (193) 部分

図版 9 1 38トレンチ SB8805・8806・8810 (南西から)
2 38トレンチ SK8835 土器棺 (北東から)
3 39トレンチ 遺構面 (東から)

図版10 1 40トレンチ 第2遺構面 (東から)
2 40トレンチ SB8811 (東から)
3 40トレンチ SB8812 (東から)

図版11 1 41トレンチ 第2遺構面 (北から)
2 42トレンチ 遺構面 (東から)
3 43トレンチ 第2遺構面 (東から)

図版12 1 43トレンチ SD8823 (西から)
2 西区遠景 (北西から)
3 西区遠景 (北東から)

図版13 1 44トレンチ 第2遺構面 (西から)
2 44トレンチ 第3遺構面 (西から)
3 SB8901炭化材検出状況 (北から)

図版14 1 44トレンチ SB8901 (北から)
2 44トレンチ SB8902 (南から)
3 44トレンチ 第4遺構面 (西から)

図版15 1 45トレンチ 第2遺構面 (南から)
2 46トレンチ 遺構面 (東から)
3 47トレンチ 第2遺構面 (東から)

図版16 1 47トレンチ SB8903 (東から)
2 48トレンチ 遺構面 (西から)
3 48トレンチ SB8904 (北東から)

図版17	1 49トレンチ	遺構面（西から）	図版26	1 56トレンチ	SK9024（西から）
	2 50トレンチ	遺構面（南から）		2 56トレンチ	SK9026（東から）
	3 51トレンチ	第2遺構面（南から）		3 56トレンチ	SK9028・9029（南から）
図版18	1 51トレンチ	SB8906（南から）	図版27	1 56トレンチ	SK9018（北西から）
	2 51トレンチ	SB8905（西から）		2 56トレンチ	SK9023（西から）
	3 52トレンチ	第2遺構面（西から）		3 56トレンチ	SK9025（西から）
図版19	1 52トレンチ	SB8907（南から）	図版28	1 57トレンチ	第2遺構面（西から）
	2 SD8948	土器集中部1（南から）		2 57トレンチ	第3遺構面（西から）
	3 SD8948	土器集中部2（南から）		3 58トレンチ	第3遺構面（西から）
図版20	1 53トレンチ	第3遺構面（西から）	図版29	1 58トレンチ	SB9001（南から）
	2 53トレンチ	SB8908（南から）		2 59トレンチ	第3遺構面（東から）
	3 53トレンチ	SB8913（南から）		3 59トレンチ	SB9002（南から）
図版21	1 53トレンチ	SB8911・8912（西から）	図版30	1 59トレンチ	SB9003（南から）
	2 53トレンチ	SB8909（西から）		2 60トレンチ	遺構面（東から）
	3 53トレンチ	SB8910（西から）		3 61トレンチ	第3遺構面（南から）
図版22	1 54トレンチ	第4遺構面（南西から）	図版31	1 62トレンチ	第2遺構面（南から）
	2 55トレンチ	遺構面（南東から）		2 63トレンチ	遺構面（南から）
	3 55トレンチ	SK9011（北西から）		3 63トレンチ	SB89(2)03（西から）
図版23	1 55トレンチ	SK9013（南東から）	図版32	1 64(北)トレンチ	遺構面（東から）
	2 55トレンチ	SK9015（北西から）		2 65トレンチ	第1遺構面（北から）
	3 55トレンチ	SK9014（南西から）		3 65トレンチ	第2遺構面（北から）
図版24	1 55トレンチ	SK9017（南から）	図版33	1 66トレンチ	第6遺構面（北から）
	2 56トレンチ	遺構面（東から）		2 SB89(2)01・02炭化材検出状況（東から）	
	3 56トレンチ	SK9019（南から）		3 SB89(2)01・89(2)02（東から）	
図版25	1 56トレンチ	SK9020（南西から）	図版34	1 52トレンチ	SD8948 土器集中部出土遺物
	2 56トレンチ	SK9021（東から）		2 56トレンチ	土壤群出土遺物
	3 56トレンチ	SK9022（南から）		3 66トレンチ	SB89(2)01・89(2)02出土遺物

第Ⅰ章 地理的・歴史的環境

岡山市御津地区は岡山市の北部、岡山県のほぼ中央に位置する。地域の約8割は山林である。山地は比較的侵食、風化が進み、低平な丘陵状を呈しているが、西部には吉備高原へ続く標高400m級の山地もみられる。その山地の間を縫うように流れてきた中小河川は、地区の中央を南流する旭川に注ぎ込んでいる。それらの河川沿いに平地が形成され、集落の多くはそこで営まれている。

気候は瀬戸内式気候で、夏季は降雨が少なく、冬季は比較的温暖である。近年まで水稻栽培を中心とする農業が主要産業の静かな農村であったが、工業団地への企業の立地や宅地開発によってその姿は変貌しつつある。

新庄尾上遺跡は行政的には岡山市御津新庄に位置する。2005（平成17）年3月の『平成の大合併』以前は御津郡御津町大字新庄であった。さらに、1953（昭和28）年4月の『昭和の大合併』以前は赤磐郡五城村大字新庄であった。さらに、1889（明治22）年6月の合併以前は赤坂郡新庄村であった。

地理的に見ると、旭川の支流である新庄川の中流域の東岸に位置する。周辺の地形は、新庄川によって形成された平地を標高200m近い山地が取り囲む盆地状を呈している。新庄尾上遺跡は、松撫山の北麓、寺部川へ向かう緩斜面上に立地する。遺跡内の比高差は多い所で13.6mに達する。新庄尾上遺跡周辺の地質は花崗岩質で、表層風化によって真砂土を生成している。出土した土器にも含まれ、遺存状態を悪化させる一因ともなっている。遺跡の調査前の状況は耕作地であった。

新庄尾上遺跡は古くから知られ、遺物も採集されていたが、周辺の遺跡としては2基の前方後円墳をはじめとする数基の古墳と山城が知られているのみであった。1980年代後半から90年代前半にかけて施工された圃場整備事業に伴う分布調査や発掘調査によって、平地のほとんどに遺跡が存在することが明らかになってきた。

縄文時代の遺物は、鍛冶屋谷遺跡から草創期の有茎尖頭器と後・晩期の土器が、平岡西遺跡から早・前・晩期の土器が、寺部遺跡、伊田沖遺跡から後・晩期の土器が出土しているが、この時期の遺構は検出されていない。

弥生時代、特に後期になると遺跡数は爆発的に増加し、新庄尾上遺跡や前述の遺跡の他に、年次遺跡、矢知遺跡、赤鉢遺跡、新庄原遺跡、上伊田遺跡と平地は全て遺跡といった情況を呈する。これらの遺跡は以降も引き続き営まれている。発掘調査が行われた平岡西遺跡、鍛冶屋谷遺跡、上伊田遺跡からは後期の竪穴建物が検出されている。また、岩井山古墳群の下層から中期の竪穴建物が2棟検出されている。山麓からの比高差40m以上の地点である。高地性集落が存在するのであろうか。

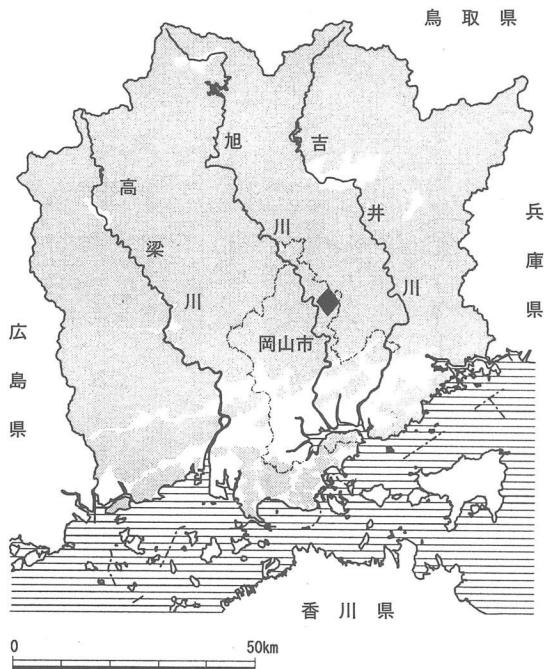


図1 新庄尾上遺跡位置図



図2 新庄尾上遺跡周辺遺跡分布図

古墳は、南西方向から新庄尾上遺跡の位置する平地へ至る峠越えの隘路を挟む様に2基の前方後円墳が存在する。天神鼻1号墳（墳長20.5m）との八つ塚古墳（墳長33m）である。八つ塚古墳からは円筒埴輪、形象埴輪の出土が報告されている。また、平地の周囲の高台には墳径10数mの小円墳が数基存在する。そのひとつ、天狗古墳は、新庄尾上遺跡の北側の天狗山々頂に存在する。径16m、高さ1.4mの列石をもつ墳丘に、現状で長さ3.7m、幅0.6m、高さ0.7mの横穴式石室がみられる。これら以外にも古墳が存在していたようで、鍛冶屋谷遺跡から埴輪片が出土している。

奈良時代になると赤鉢遺跡からこの時期の須恵器が多量に出土している。また、平岡西遺跡から綠釉陶器が、寺部遺跡から円面硯が出土している。寺部遺跡はその地名と併せ考えると寺院が存在していたのかもしれない。

平岡西遺跡や寺部遺跡からは古代から中世の掘立柱建物が検出されている。山裾の処々に建物が並び、その周囲に水田が広がるといった現在の景観はこの頃から続くものであろう。

中世になると御津地区は水陸交通の要衝であったことから、20を超える山城が築かれた。特に、新庄尾上遺跡周辺には大鳥帽子城、地頭城、矢知城、西谷城、松撫城と、「五城」地区と呼ばれるとおり多くの山城が築かれた。

参考文献

- 御津町1985 『御津町史』 御津町
平井泰男1986 「新庄尾上遺跡ほか」『蓮池尻遺跡 新庄尾上遺跡ほか 美野条里遺跡 二反田B遺跡ほか』 岡山県教育委員会
御津町教育委員会1976 『岩井山古墳群』 御津町教育委員会
御津町教育委員会1988 『伊田沖遺跡』 御津町教育委員会
御津町教育委員会1990 『寺部遺跡』 御津町教育委員会
御津町教育委員会1991 『平岡西遺跡 II』 御津町教育委員会
御津町教育委員会1992 『平岡西遺跡 I』 御津町教育委員会
御津町教育委員会1998 『鍛冶屋谷遺跡』 御津町教育委員会
御津町教育委員会2005 『上伊田遺跡』 御津町教育委員会

- 1 佐野古墳 2 大鳥帽子城跡 3 地頭城跡 4 年次遺跡 5 矢知城跡 6 矢知遺跡 7 須道山古墳
8 平岡西遺跡 9 鍛冶久古墳 10 天狗古墳 11 寺部遺跡 12 経畔古墳 13 熊野神社古墳
14 新庄尾上遺跡 15 鍛冶屋谷遺跡 16 松撫城跡 17 新庄原遺跡 18 西谷城跡 19 熊谷城跡
20 天神鼻1号墳 21 天神鼻2号墳 22 天神鼻3号墳 23 天神鼻4号墳 24 八つ塚古墳
25 岩井山18号墳 26 岩井山19号墳 27 岩井山20号墳 28 岩井山22号墳 29 岩井山9号墳
30 岩井山12号墳 31 岩井山16号墳 32 岩井山17号墳 33 寺山城跡 34 散布地 35 散布地
36 酒屋谷遺跡 37 伊田沖遺跡 38 散布地 39 上伊田遺跡 40 宅美池遺跡 41 宇那山城跡
42 宇那山古墳
○は消滅した古墳

第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

御津町では1980年頃から県営圃場整備事業が計画され始めた。当初は町域の中心部である宇垣地区等を対象に施工されていたが、84年には新庄尾上遺跡周辺の五城北地区でも計画され始めた。84年12月17日付で、岡山県岡山地方振興局（以下振興局）から計画地区内の周知の遺跡の取り扱いについての協議文書が岡山県教育委員会（以下県教委）へ提出された。協議の結果、工事着手前に確認調査を実施することとなった。

県教委ではそれに基づき、新庄尾上遺跡の規模、状況等を明らかにするための発掘調査を1985年12月から86年1月にかけて実施した。調査は圃場整備予定範囲の田畠に26ヶ所のトレーナーを掘削し、遺物、遺構の確認、土層断面観察及び図面作成、写真撮影等の記録を作成した。調査の結果、新庄尾上遺跡は大きく東西に分かれ、規模は約35,000m²を測り、弥生時代中期から古墳時代を中心に古代、中世に至る集落跡の存在が想定されることとなった。

県教委による確認調査の結果を基に、振興局、県教委、御津町役場、御津町教育委員会（以下町教委）等関係機関で遺跡保存のための協議を重ね、削平部分を極力少なくする様、設計変更がなされた。しかし、圃場整備予定範囲の斜面は比高差が10mもあり、効率的に耕作面積を確保するためには高位部を削平し、その発生土をもって、低位部を埋め立てざるを得なかった。水路、道路部と併せて約15,000m²については掘削することとなった。この部分についての事前の記録保存のための発掘調査は受益者である御津町で実施することとなった。

町教委は1988年11月7日、東区から現地の調査を開始した。89年3月31日、88年度の調査を終了した。

引き続き、89年度の調査に着手する予定であったが、88年11月に発見された鍛冶屋谷遺跡の調査を優先させることとなった。新庄尾上遺跡の範囲内の地権者の方々をはじめ関係機関のご理解によって、西区の中央部分の調査を90年度に延期し、鍛冶屋谷遺跡の調査期間を捻出した。89年度の調査は4月1日から6月26日まで実施した後、一旦中断し、鍛冶屋谷遺跡の調査を実施した。11月15日から新庄尾上遺跡の調査を再開し、90年3月31日、89年度の調査を終了した。

延期した部分を対象とした90年度の調査に引き続き着手する予定であったが、またしても、岡山市消防局北消防署御津出張所建設に伴う原遺跡の調査を優先させることとなった。再度、西区の中央部分の地権者の方々をはじめ関係機関のご理解によって、90年度の調査開始を延期し、原遺跡の調査期間を捻出した。90年度の調査は、原遺跡の調査終了後、7月5日から開始し、91年2月5日、延べ調査期間20ヶ月、調査面積16,000m²、出土遺物整理箱140箱の新庄尾上遺跡の調査を終了した。

調査と並行して整理作業を行い、現地での調査終了後も作業は続いた。出土遺物の洗浄、注記、一部の接合まで行って収納した。絵画土器については資料紹介をし、2003年3月に開館した御津町郷土歴史資料館で展示公開してきた。

しかし、全体の正式な報告書は作成されていなかったため、新庄尾上遺跡の実態について明らかにされないままであった。岡山市との合併に伴い、遺物の所管も岡山市教育委員会になった。そこで、2008年度事業として報告書を作成することになった。
(関係機関名は当時)

調査協力者（敬称略 関係機関名は当時）

岡山県岡山地方振興局・岡山県教育委員会・岡山県古代吉備文化財センター・御津町役場・地元地権者

報告書作成体制

岡山市教育委員会事務局

教 育 長 山根 文男（平成20年8月31日まで）

山脇 健（平成20年9月1日から）

文化財課長 神谷 正義

文化財副専門監 乗岡 実

主 査 扇崎 由

主任（経理員） 柿本 貴子

主査（担当者） 長谷川一英

第2節 調査日誌（抄）

1988年

11月7日 27トレンチ調査開始
11月10日 28トレンチ調査開始
11月12日 29トレンチ調査開始
11月14日 30トレンチ調査開始
11月17日 31トレンチ調査開始
11月19日 32トレンチ調査開始
11月21日 29トレンチ調査終了

12月7日 27トレンチ調査終了
12月5日 28トレンチ調査終了
12月8日 30トレンチ調査終了
12月10日 32トレンチ調査終了
33トレンチ調査開始
12月23日 31トレンチ調査終了
12月27日 88年の調査終了

1989年

1月9日 89年の調査開始
1月10日 34トレンチ調査開始
1月12日 33トレンチ調査終了
35トレンチ調査開始
1月13日 34トレンチ調査終了
1月18日 36トレンチ調査開始
1月21日 38トレンチ調査開始
1月25日 37トレンチ調査開始
1月27日 35トレンチ調査終了
1月31日 36トレンチ調査終了
37トレンチ調査終了
2月1日 39トレンチ調査開始

2月3日 38トレンチ調査終了
40トレンチ調査開始
2月4日 41トレンチ調査開始
2月6日 39トレンチ調査終了
2月7日 43トレンチ調査開始
2月9日 40トレンチ調査終了
2月13日 41トレンチ調査終了
2月14日 42トレンチ調査開始
2月23日 42トレンチ調査終了
3月3日 西区へ機材移動
3月6日 44トレンチ調査開始
3月7日 43トレンチ調査終了
3月9日 並行して平岡西遺跡調査開始

3月11日	45トレンチ調査開始	5月24日	52トレンチ調査開始
	46トレンチ調査開始	5月27日	51トレンチ調査終了
3月17日	46トレンチ調査終了	5月29日	53トレンチ調査開始
3月18日	45トレンチ調査終了	6月8日	52トレンチ調査終了
3月25日	47トレンチ調査開始	6月26日	53トレンチ調査終了
3月31日	平岡西遺跡調査終了	6月27日	鍛冶屋谷遺跡へ機材搬出
4月7日	48トレンチ調査開始		
4月21日	44トレンチ調査終了	11月15日	89年度2次調査開始
4月27日	47トレンチ調査終了		表土機械掘削開始
4月29日	49トレンチ調査開始	11月23日	表土機械掘削終了
5月3日	48トレンチ調査終了	11月24日	鍛冶屋谷遺跡から機材搬入
5月9日	50トレンチ調査開始		66トレンチ調査開始
5月13日	49トレンチ調査終了	12月25日	65トレンチ調査開始
5月16日	51トレンチ調査開始	12月27日	66トレンチ調査終了
5月22日	50トレンチ調査終了		89年の調査終了

1990年

1月8日	90年の調査開始	7月10日	表土機械掘削終了
1月22日	64トレンチ調査開始		58トレンチ調査開始
1月23日	65トレンチ調査終了	8月7日	57トレンチ調査開始
1月24日	64トレンチ調査終了	8月9日	58トレンチ調査終了
	63トレンチ調査開始	9月7日	57トレンチ調査終了
2月27日	62トレンチ調査開始		54トレンチ調査開始
2月28日	63トレンチ調査終了	10月16日	55トレンチ調査開始
3月16日	62トレンチ調査終了	10月17日	54トレンチ調査終了
	61トレンチ調査開始	10月24日	55トレンチ調査終了
3月31日	61トレンチ調査終了	10月29日	56トレンチ調査開始
	原遺跡へ機材搬出	12月5日	56トレンチ調査終了
7月5日	90年度調査開始	12月6日	60トレンチ調査開始
	表土機械掘削開始	12月8日	60トレンチ調査終了
			59トレンチ調査開始
		12月27日	90年の調査終了

1991年

1月7日	91年の調査開始	2月5日	新庄尾上遺跡から機材搬出
1月28日	59トレンチ調査終了		調査終了

第三章 遺構

圃場整備の施工方法は現状で2～3段に分かれている田畠を1段にして1段当たりの耕作面積を拡大するものである。高位側の田畠を削平し、その発生土を以って低位側の田畠に盛土を施し、両者を水平にするのである。遺跡保存のため、調査対象地を遺跡範囲内の削平される部分に限った。そのため、調査地が点在するような状況となった。

原則として、段差、水路によって区画される部分を一つのトレンチとして、トレンチ番号を付与した。また、県教委調査時のトレンチと区別するため、県教委のトレンチ番号1～26に続いて、27から付与した。遺跡が東西に分かれるため、東区が27～43、西区が44～66トレンチとなった。

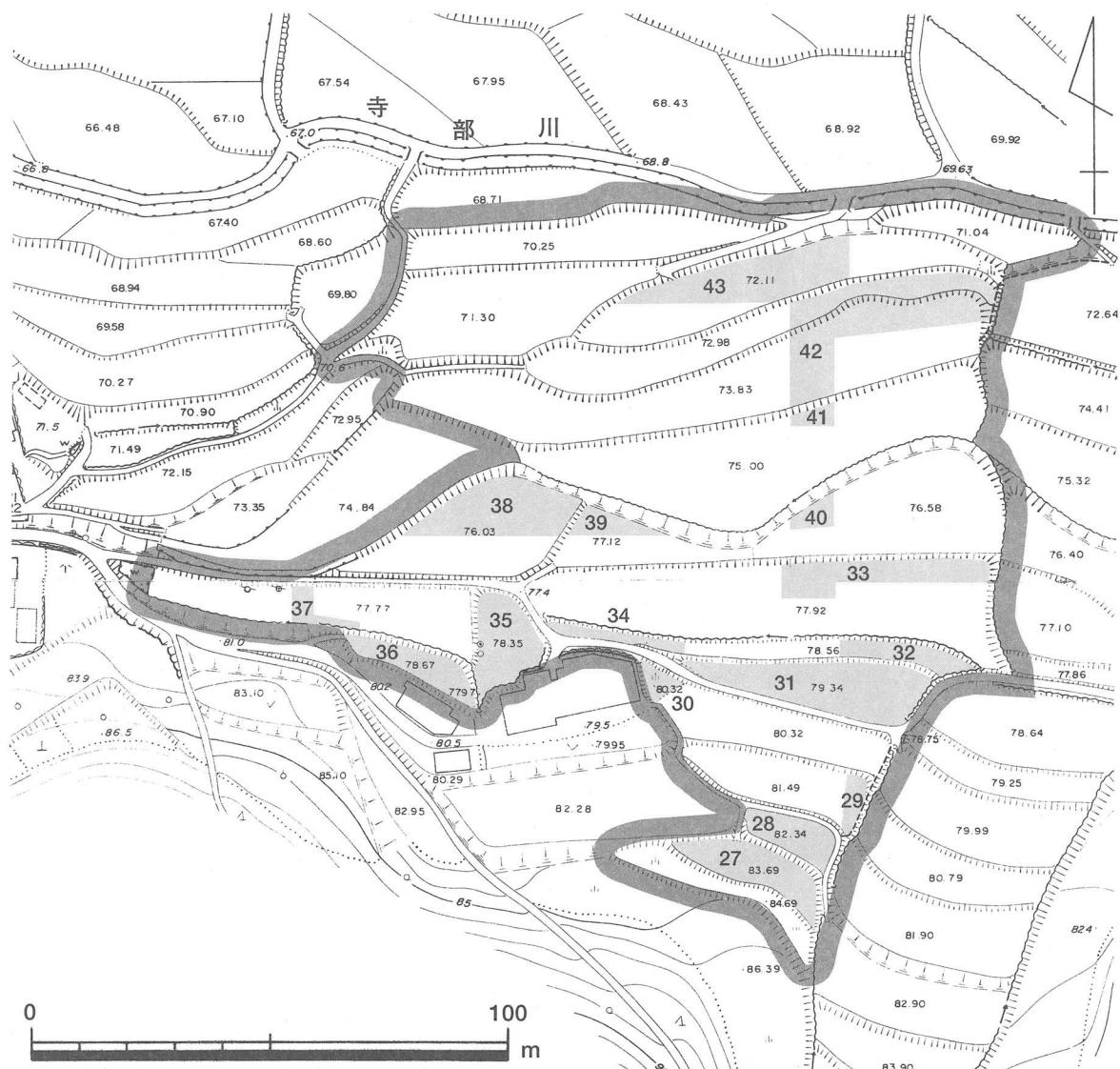


図3 東区遺跡範囲・トレンチ分布図（数字はトレンチ番号）

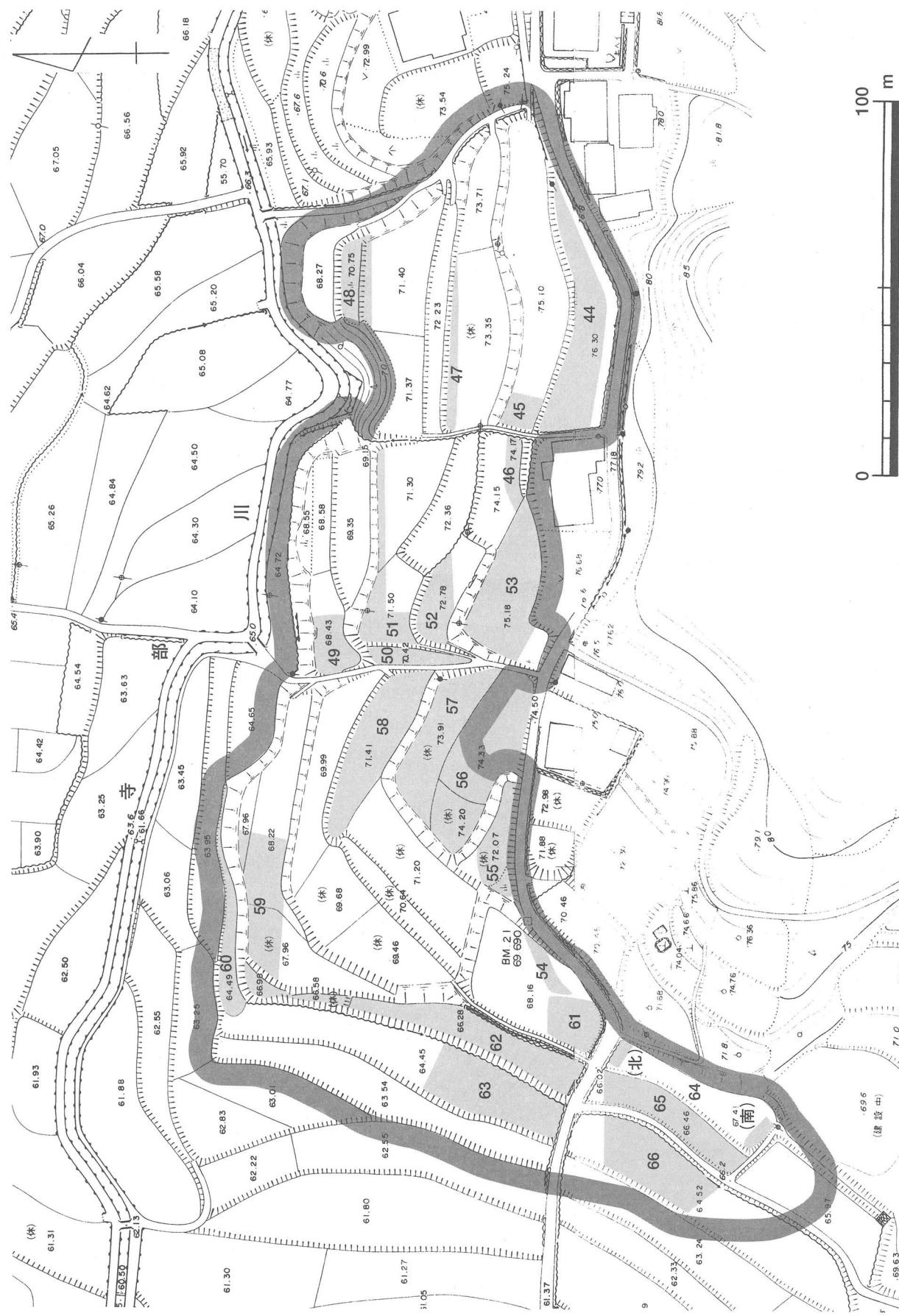


図4 西区遺跡範囲・トレンチ分布図（数字はトレンチ番号）

27トレンチ

27トレンチは東区の南端で、調査範囲内では最も高所である。地山面で標高82.6～83.1mで、緩やかに北へ傾斜していた。遺構面は地山面上に堆積していた灰色砂質土層を除いた面で、地山面1面のみであった。灰色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、備前焼、青磁、磁器が出土した。竪穴建物、溝、土壙、ピットを検出した。

竪穴建物SB8801はトレンチ東半で半円を描く溝とその内側でピットを検出したのみであるが、壁体溝、中央穴をもつ径5.5mの円形竪穴建物の南半部分である。他の部分は後世に削平されていた。壁体溝は幅0.2m、深さ0.05mである。中央穴の掘方は平面橢円形、長径0.5m、短径0.4m、深さ0.4mで、斜めに掘り込まれていた。上面に厚さ0.05mの木炭の堆積がみられた。また、北東、南西、西の三方に幅0.3m、深さ0.05～0.2mの溝が延びていた。柱穴の掘方は平面円形、径0.35～0.5m、深さ0.4～0.7mである。共伴関係は不明だが、柱は4～6本であろう。壁体溝、中央穴から弥生土器が出土したが、摩滅が著しい。詳細な時期の決定は困難だが、弥生時代後期に位置付けられよう。

壁体溝の外側で、壁体溝に並行する幅0.2m、深さ0.05mの円弧を描く溝を検出した。壁体溝ならば、径5.5mの建物を径6.3mに拡張したのかもしれない。

溝はトレンチ北辺西端で2条検出した。東西方向で、幅0.2m、深さ0.1mである。

土壙はトレンチ西端で1基検出した。平面長円形、長径0.7m、短径0.5m、深さ0.05mである。

ピットはトレンチ中央と西端で7基検出した。平面円形、径0.3m、深さ0.1mである。

いずれも遺物の出土はみられなかった。

28トレンチ

28トレンチは27トレンチの北側である。地山面で標高81.7～82.0mで、緩やかに北へ傾斜していた。遺構面は2面を検出した。

第1遺構面は黄赤色粘質土層を除いた面である。黄赤色粘質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、備前焼、サヌカイト製石鏃が出土した。溝、ピットを検出した。

溝は3条検出した。田面の長辺方向に並行する東西方向で、幅0.2～0.3m、深さ0.05mのもの2条と、トレンチ中央をほぼ東西に横断する幅0.4～1.4m、深さ0.1mのSD8804である。前者は近現代の耕作に伴う鋤溝である。後者の底面は西に傾斜していた。流水によって形成されたものであろう。弥生土器(1・2・3・4・5・6)、土師器、須恵器が出土した。

ピットは14基検出した。平面円形、径0.2m、深さ0.1～0.2mである。トレンチ北西端の1基からのみ土器の小片が少量出土したが、摩滅が著しい。

第2遺構面はトレンチ北半の地山面上に堆積していた褐灰色粘質土層を除いた面で、地山面である。褐灰色粘質土層からは弥生土器が出土した。トレンチ北半で多数のピットを検出した。平面円形、径0.2～0.7m、深さ0.1～0.3mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。弥生土器、土師器が出土したものもある。

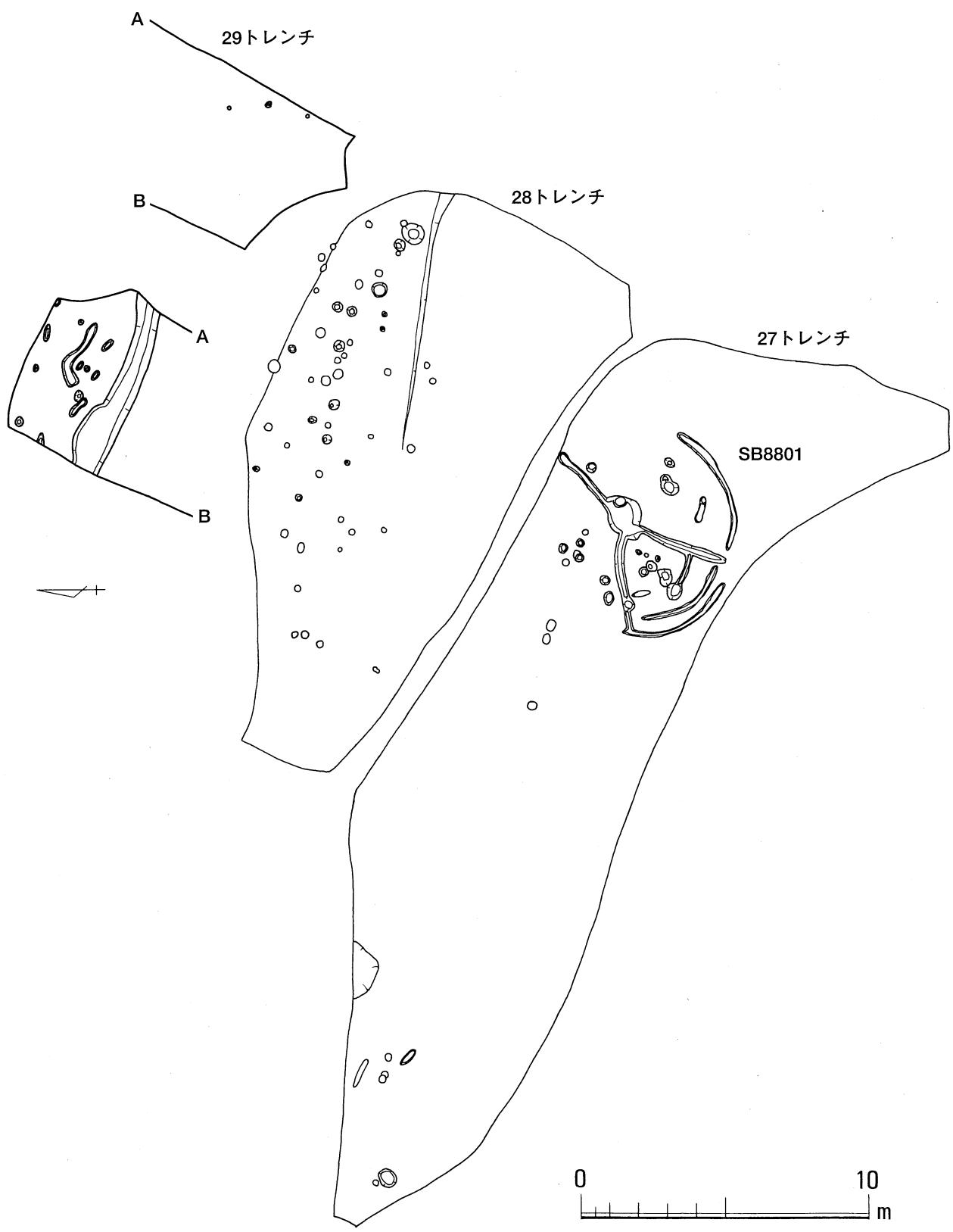


図5 27トレンチ遺構面・28トレンチ第2遺構面・29トレンチ遺構面平面図

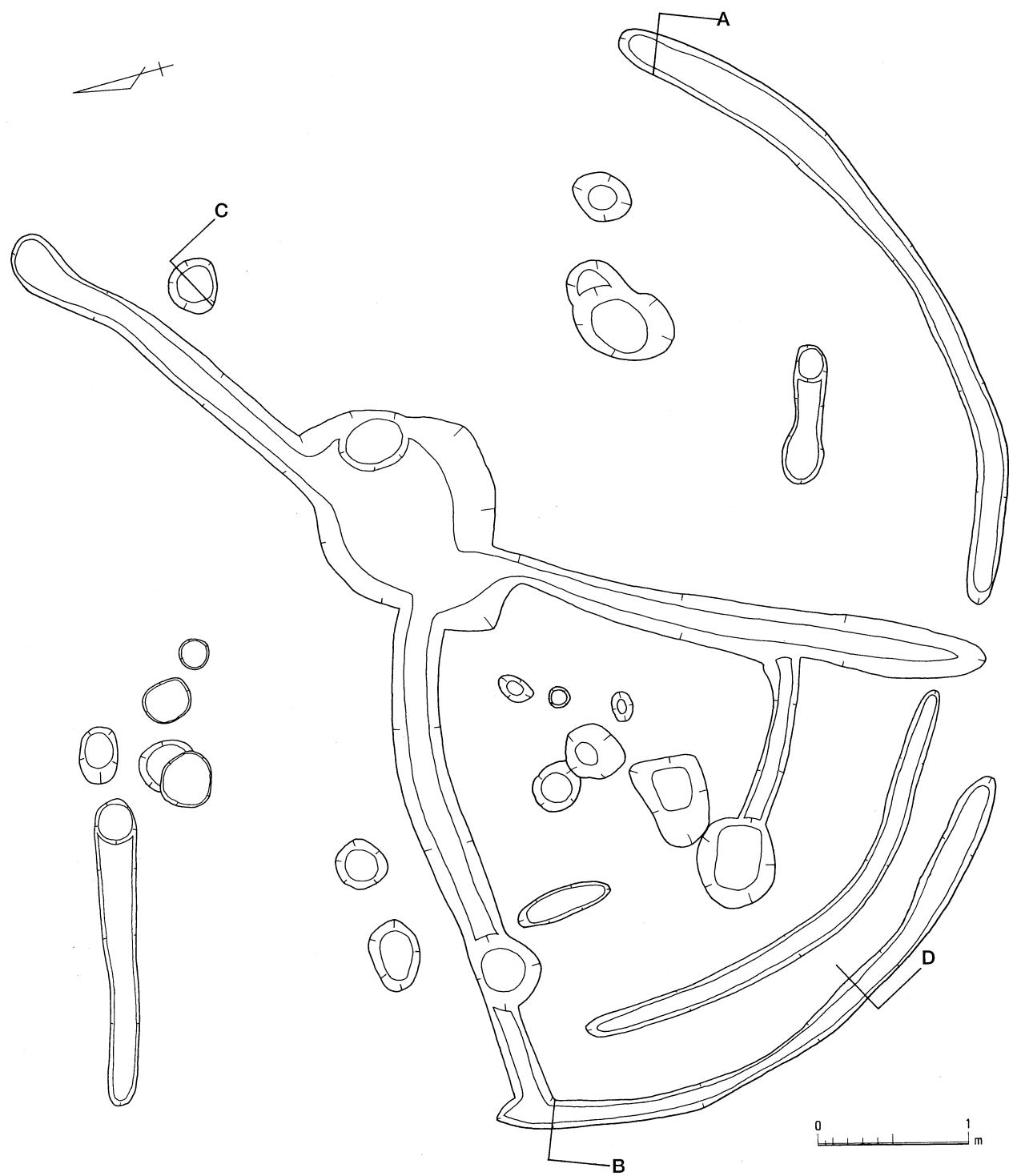


図6 SB8801平面図

29トレンチ

29トレンチは28トレンチの北東側である。地山面で標高80.7~81.3mで、北へ傾斜していた。遺構面は地山面上に堆積していた灰茶色粘質土層を除いた面で、地山面1面のみであった。灰茶色粘質土層からは土師器、須恵器、瓦器、備前焼が出土した。溝、ピットを検出した。

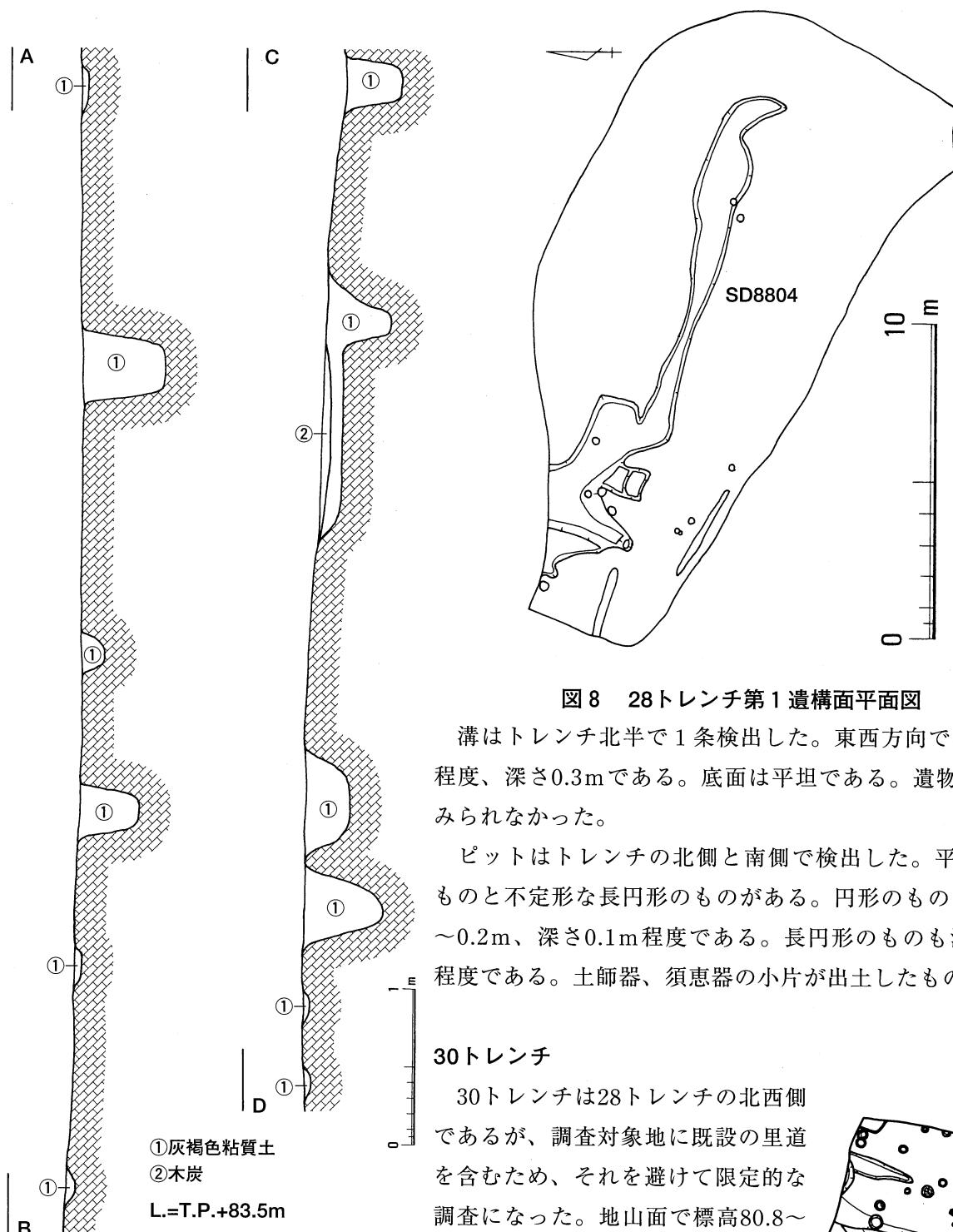


図7 SB8801土層断面図

砂質土層を除いた面で、地山面1面のみであった。灰褐色砂質土層からは土師器（7・8・9・10）、須恵器、瓦質土器、備前焼が出土した。遺構面は高さ0.2mの段差を挟んだ2段の平坦面から成る。溝、土壙、ピットを検出した。

溝は東西方向のものを2条検出した。幅0.3~0.6m、深さ0.1mである。

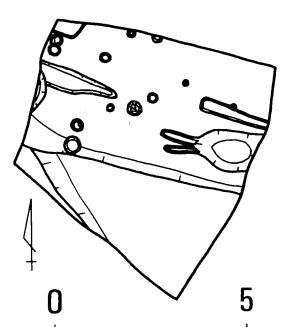


図9 30トレンチ
遺構面平面図

東側のものから土師器が出土した。

土壙は3基検出した。形状は様々で、深さ0.1~0.2mである。遺物の出土はみられなかった。

ピットは12基検出した。平面円形、径0.2~0.4m、深さ0.1~0.2mである。土器が出土したものもあるが、いずれも小片で摩滅が著しく、時期等は不明である。

31トレンチ

31トレンチは道路予定地のため東西方向に約50mの長さである。地山面で標高78.7~79.2mで、北へ傾斜していた。遺構面は2面を検出した。

第1遺構面は黄赤色砂質土層を除いた面である。黄赤色砂質土層からは土師器、須恵器、瓦器、備前焼が出土した。トレンチ中央付近で土壙、ピットを検出した。

土壙は平面橢円形、長径1m前後、深さ0.1~0.2mである。少量の弥生土器、土師器が出土したものもあるが、いずれも小片で摩滅が著しい。

土壙群の西側で検出した落ち込み状のものは東西12.5m、南北2m、深さ0.05~0.1mで、底面は東へ傾斜していた。弥生土器、土師器、須恵器が出土した。流水によって形成されたものであろう。

ピットは平面円形、径0.2~0.3m、深さ0.05~0.1mである。遺物の出土はみられなかった。

第2遺構面はトレンチ北半の地山面上に堆積していた茶褐色粘質土層を除いた面で、地山面である。茶褐色粘質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、備前焼、青磁が出土した。竪穴建物、溝、土壙、ピットを検出した。

竪穴建物はトレンチ東辺で南北に2棟検出した。

北側の**SB8803**は深さ0.3mの竪穴の床面から口の字形の溝とピット5基を検出した。壁体溝、中央穴をもつ4本柱の一辺5.1mの方形竪穴建物である。壁体溝**SD8807**は幅0.3m、深さ0.1mである。中央穴の掘方は平面橢円形、長径0.8m、短径0.6m、深さ0.5mで、斜めに掘り込まれていた。周囲に木炭が薄く堆積していた。柱穴の掘方は平面橢円形、長径0.4~0.8m、短径0.35~0.5m、深さ0.2~0.45mである。床面が赤変し、木炭が堆積していたことから、火災で廃絶したことが窺える。竪穴の埋土から弥生土器(11・12・13・14)、壁体溝SD8807から弥生土器(15・16・17)、柱穴から弥生土器が出土した。時期は弥生時代後期後葉に位置付けられよう。

南側の**SB8802**はトレンチ外の南へ延びる円弧を描く、幅0.2m、深さ0.05mの溝を検出したのみである。遺物の出土はみられなかった。壁体溝とすれば径2.8mの円形竪穴建物に復元できる。

溝はトレンチ西半で1条検出した。32トレンチへ延びる落ち込みへつながる。幅0.9m、深さ0.2mである。

土壙はトレンチ北辺で検出した。平面長円形、長径1m程度、深さ0.3mである。土師器の小片が出土したものもある。

ピットはトレンチ中央で検出した。平面円形、径0.2m、深さ0.2mである。土器の小片が少量出土したものもあるが、摩滅が著しく、詳細は不明である。

32トレンチ

32トレンチは31トレンチの北側である。地山面で標高78.4mで、ほぼ平坦であった。包含層からは土師器、須恵器、瓦器、備前焼が出土した。遺構面は2面を検出した。

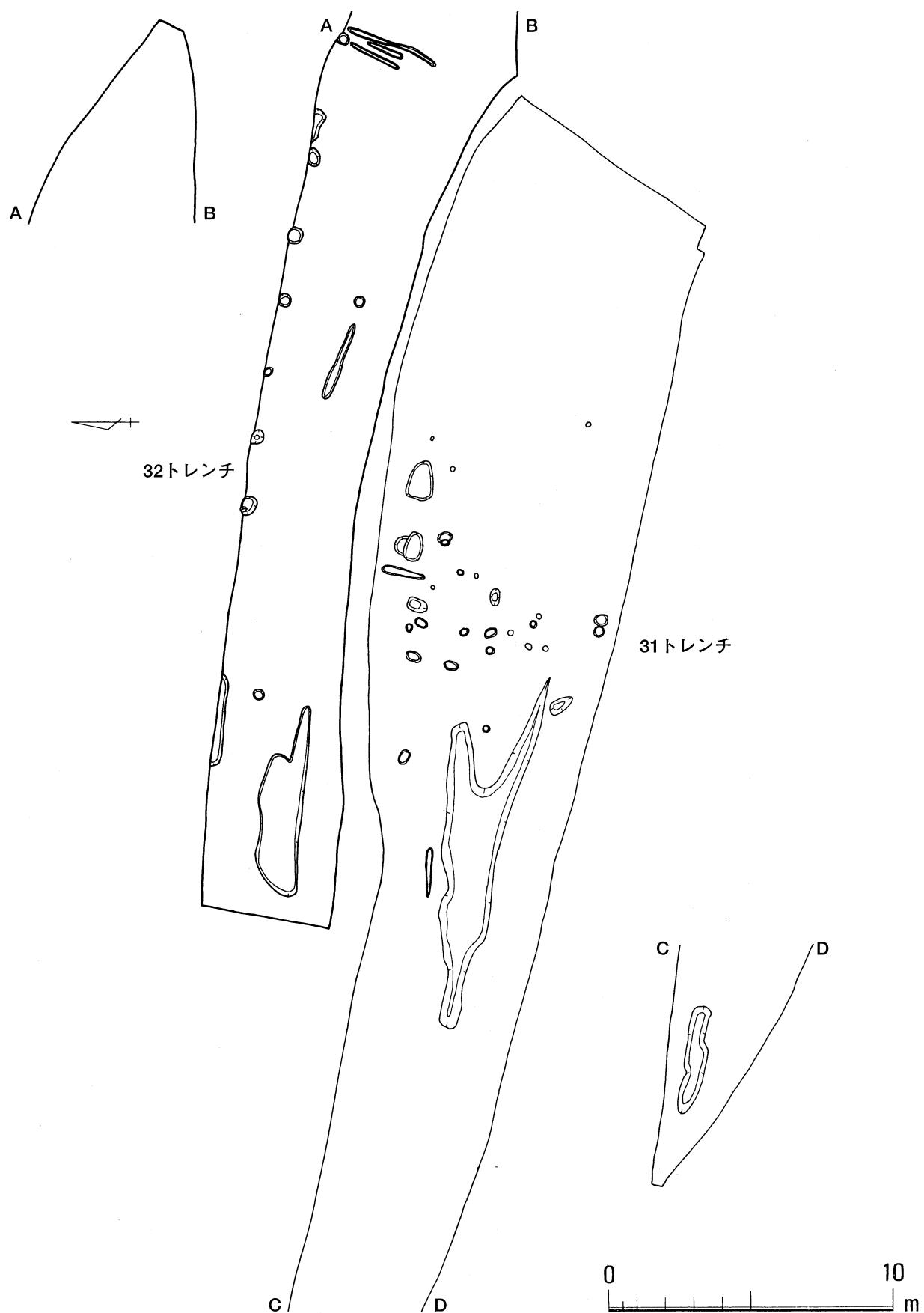


図10 31・32トレンチ第1遺構面平面図

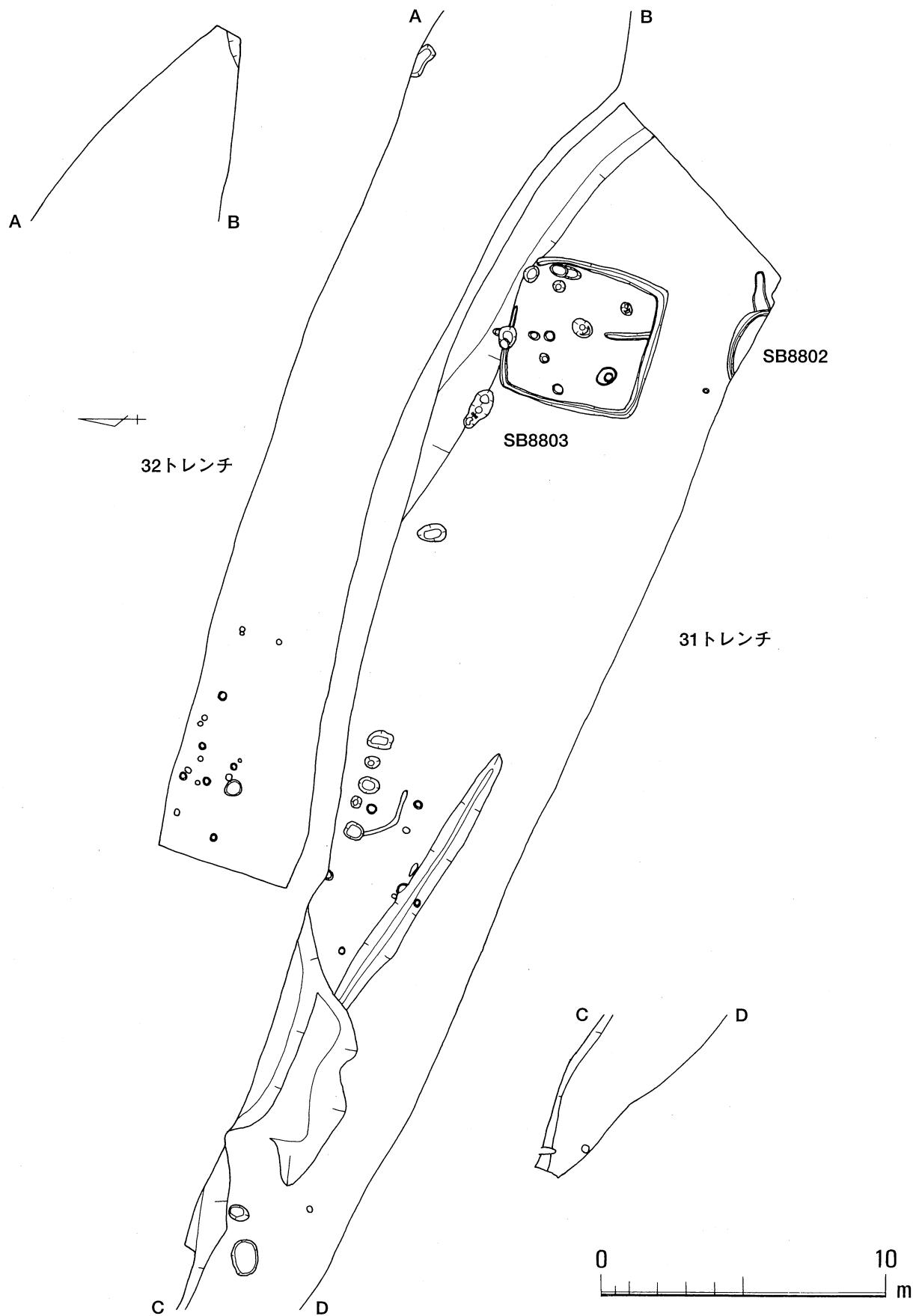


図11 31・32トレンチ第2遺構面平面図

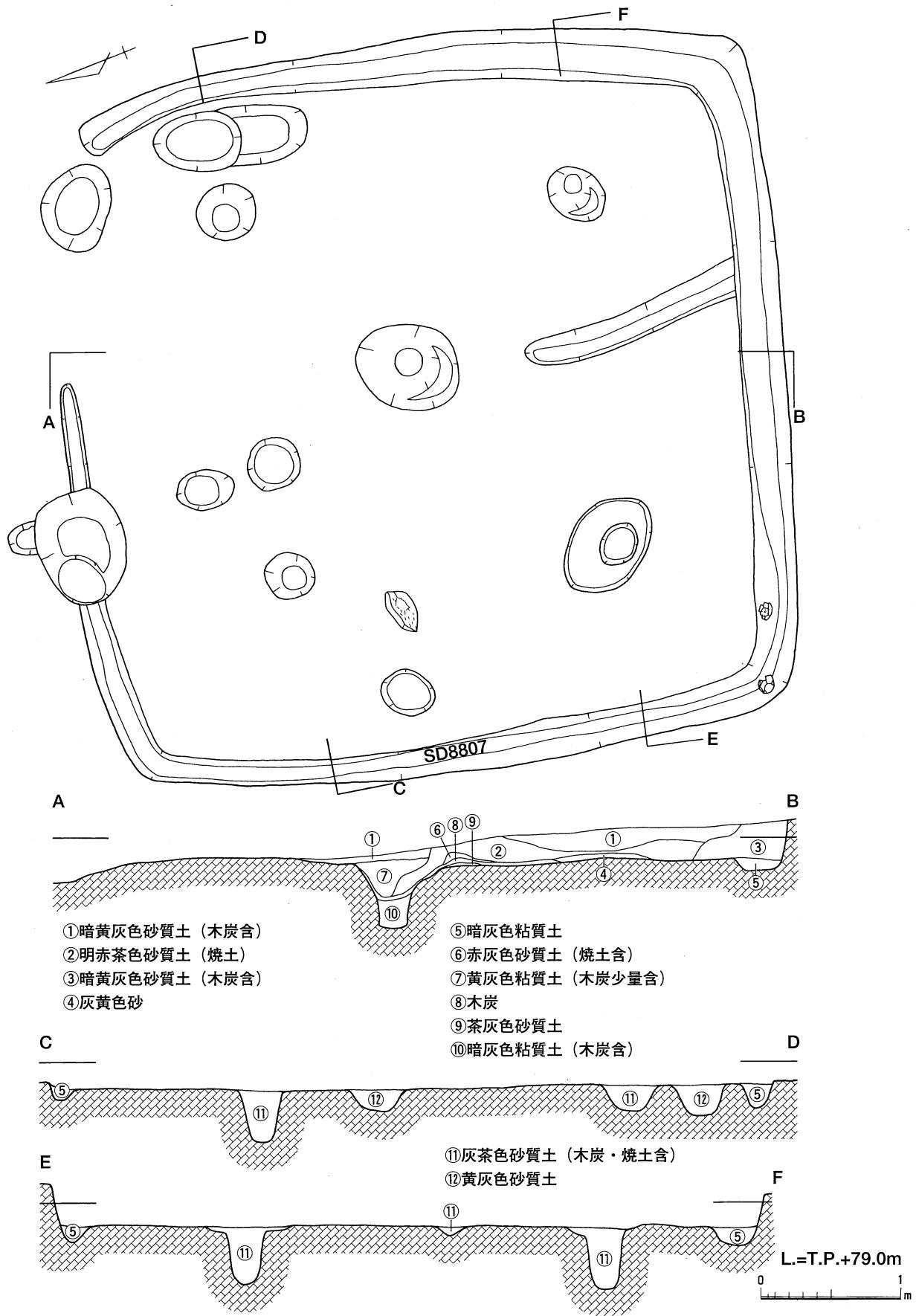


図12 SB8803平面・土層断面図

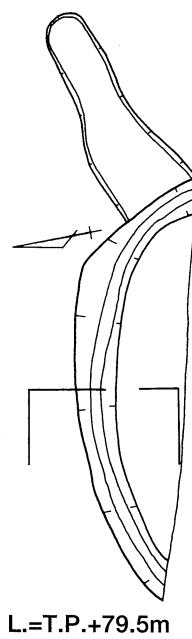


図13 SB8802平面・土器、土師器、須恵器、瓦質土器、備前焼、青磁等が出土した。溝、ピットを検出した。

第1遺構面は黄赤色粘質土層を除いた面である。黄赤色粘質土層からは土師器、須恵器、瓦器、備前焼が出土した。溝、土壙、ピットを検出した。

溝は田面の長辺に並行するものと直交するものがある。幅0.2m、深さ0.05mである。遺物の出土はみられなかった。近代の耕作に伴う鋤溝である。

土壙はトレンチの西辺で1基検出した。平面不定形、深さ0.05~0.1mである。土師器、須恵器、瓦器が出土した。溝と同様に、耕作に伴うものであろう。

ピットは平面円形、径0.4~0.6m、深さ0.1~0.3mである。トレンチ北辺中央で約2.5m間隔で一列に並ぶ6基を検出した。耕作に伴うものであろうか。

第2遺構面は地山面上に堆積していた灰色砂質土層を除いた面で、地山面である。

トレンチ北西部でピットを検出した。平面円形、径0.1~0.5m、深さ0.05~0.3mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。遺物の出土はみられなかった。

33トレンチ

33トレンチは32トレンチの北方である。第2遺構面で標高76.5~77.2mで、北へ傾斜していた。遺構面は2面を検出した。

第1遺構面は灰黄色粘質土層を除いた面である。灰黄色粘質土層からは弥生器、磁器が出土した。

溝はトレンチ南東と北東部で2条検出した。幅0.2m、深さ0.1mである。南東部のものから弥生土器、磁器が出土した。

ピット、SP8827はトレンチ中央で検出した。平面円形、径0.2m、深さ0.1mである。弥生土器(18・19)が出土した。

第2遺構面は灰褐色粘質土層を除いた面である。これより下層の暗黄茶色粘質土層からは遺物の出土がみられなかったことから、33トレンチの調査はこの面で終了した。灰褐色粘質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、備前焼、青磁、白磁が出土した。

遺構面は高さ0.3mの段差を挟んだ2段の平坦面から成る。下段で無数の土壙、ピットを検出した。平面円形のものが主で、径0.2~0.5m、深さ0.2~0.6mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。弥生土器、土師器、須恵器等が出土したものもある。

SK8811はトレンチ南東部で検出した。平面長円形、長径1.1m、短径0.5m、深さ0.25mで、二段に掘り込まれていた。土師器(20)が出土した。

SK8812はトレンチ中央で検出した。平面円形、径0.7m、深さ0.5mである。摩滅した土器片1片とサスカイト製打製石包丁(S1)が出土した。

SK8818はトレンチ北西部で検出した。数基の土壙が切り合っていた。平面長円形、長径0.5m、短径0.3m、深さ0.2mである。弥生土器(21)が出土した。

SK8822はトレンチ西辺近くで検出した。数基の土壙が切り合っていた。平面円形、径0.6m、深さ0.4mである。弥生土器(22)が出土した。

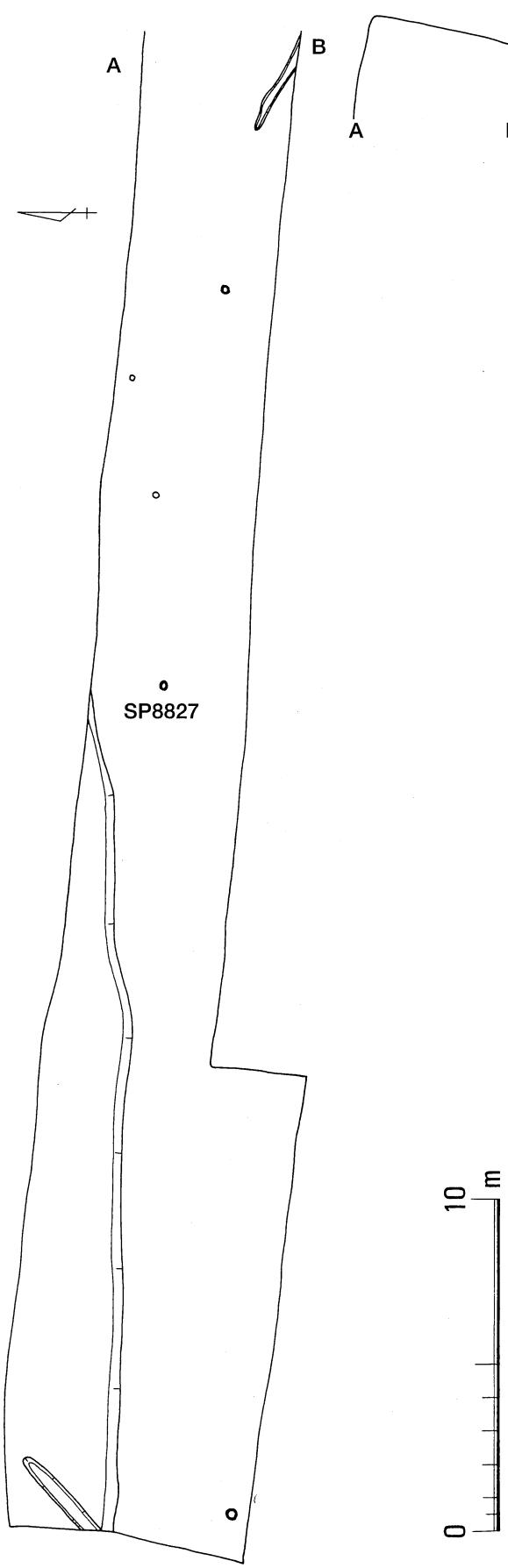


図14 33トレンチ第1遺構面平面図

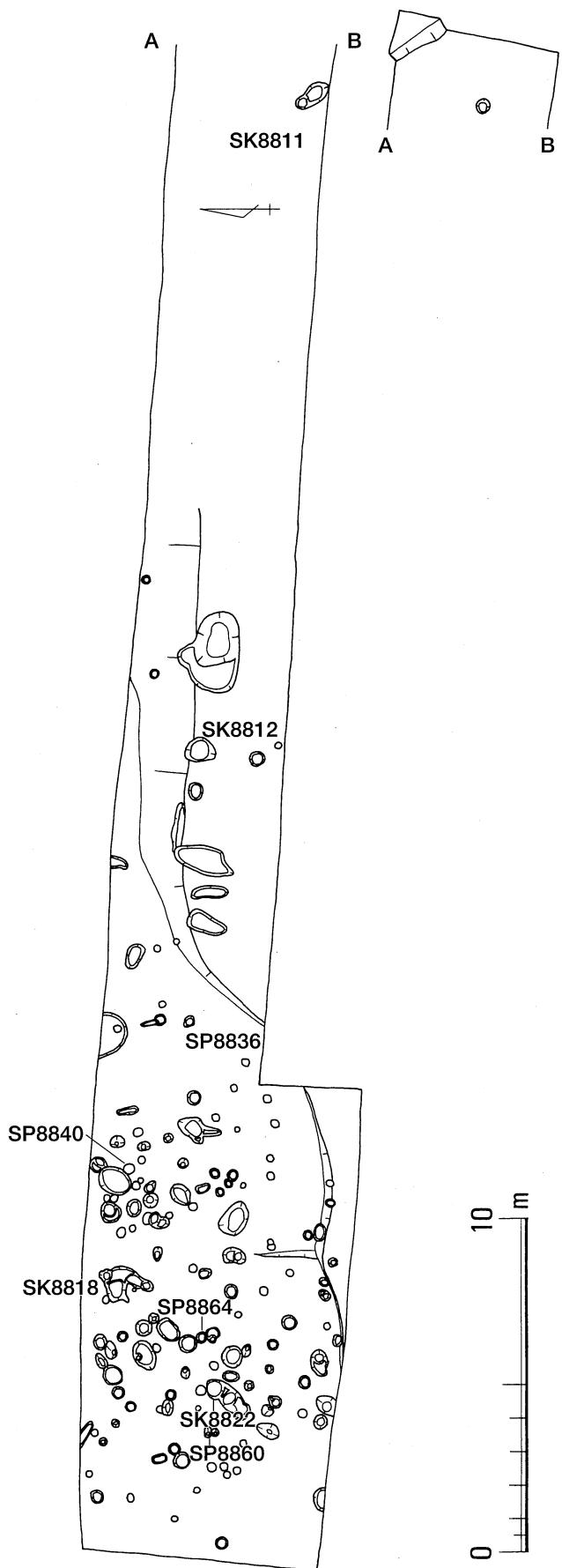


図15 33トレンチ第2遺構面平面図

SP8836はトレンチ中央部で検出した。平面橢円形、長径0.4m、短径0.3m、深さ0.2mである。弥生土器（23）が出土した。

SP8840はトレンチ西半で検出した。平面円形、径0.3m、深さ0.4mである。弥生土器（24）が出土した。

SP8860はSK8822の西側で検出した。平面長円形、長径0.3m、短径0.2m、深さ0.6mである。弥生土器（25）が出土した。

SP8864はSK8822の北西で検出した。平面円形、径0.3m、深さ0.4mである。弥生土器（26）が出土した。

第2遺構面下段は面積に比して検出された遺構が非常に多い。安定した場所であることから、長期に渡って利用されていたのであろう。

34トレンチ

34トレンチは31トレンチに続く道路予定地のため東西方向に約34mの長さである。地山面で標高78.1mで、ほぼ平坦であった。トレンチ東端では深さ0.3mの落ち込みがみられた。遺構面は地山面上に堆積していた灰褐色砂質土層を除いた面で、地山面1面のみであった。灰褐色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、青磁、白磁等が出土した。溝、土壙を検出した。

溝は形状は様々であるが、大半が南北方向で、深さ0.1mである。近世の耕作に伴うものであろう。

土壙は平面円形、径0.2~0.9m、深さ0.1~0.3mである。

また、東端の落ち込みの底面でまとまって土壙、ピットを検出した。平面長円形のものが主で、径0.2~0.7m、深さ0.2~0.4mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。弥生土器、土師器、須恵器等が出土したものもあるが、いずれも小片で摩滅が著しい。

35トレンチ

35トレンチは34トレンチの西側である。遺構面で標高76.6~78.4mで、北西へ傾斜していた。遺構面は暗灰褐色粘質土層を除いた面1面のみであった。これより下層の灰黄色砂質土層からは遺物の出土がみられなかったことから、35トレンチの調査はこの面で終了した。暗灰褐色粘質土層からは弥生土器、須恵器、青磁、サヌカイト製石鏃が出土した。竪穴建物、土壙、ピットを検出した。

竪穴建物**SB8804**はトレンチ南半で検出した。深さ0.4mの竪穴の床面から口の字形の溝とピット5基を検出した。壁体溝、中央穴をもつ4本柱の一辺4.5mの方形竪穴建物である。壁体溝は幅0.4m、深さ0.05mである。中央穴**SP8886**の掘方は平面円形、径0.7m、深さ0.65mで、斜めに掘り込まれていた。周囲に木炭が薄く堆積していた。柱穴の掘方は平面円形、径0.25~0.3m、深さ0.25~0.4mである。南角のものは平面橢円形、長径0.7m、短径0.4m、深さ0.4mで二段に掘り込まれていた。竪穴の埋土から土師器（27）が、中央穴**SP8886**から弥生土器（28・29）が、柱穴から弥生土器、サヌカイトが出土した。時期は弥生時代後期前葉に位置付けられよう。

土壙、ピットはトレンチ全面で散在して検出した。平面円形のものが主で、径0.3~0.6m、深さ0.1~0.3mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。弥生土器、土師器、須恵器等が出土したものもあるが、いずれも小片で摩滅が著しい。

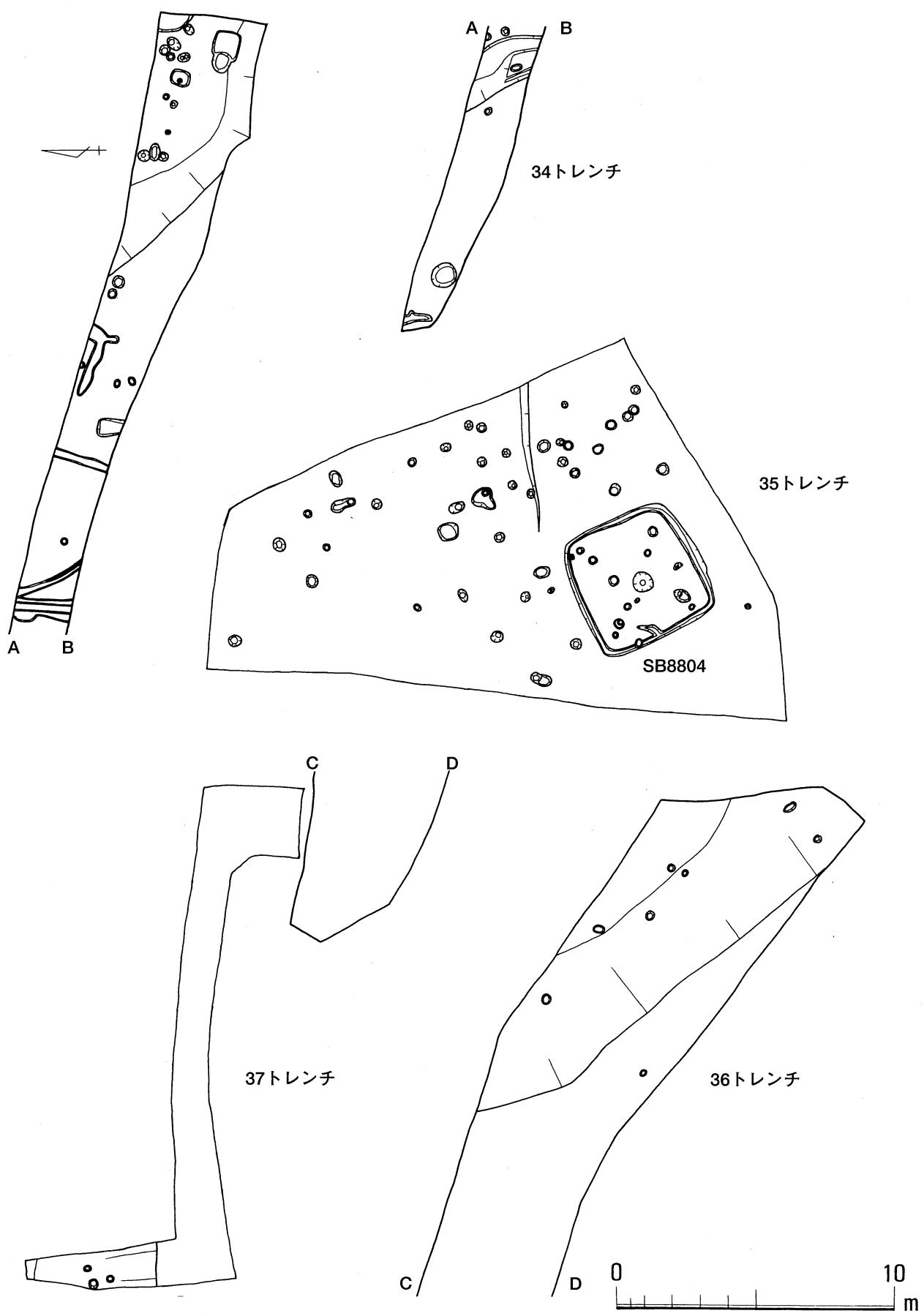


図16 34・35・36・37トレンチ遺構面平面図

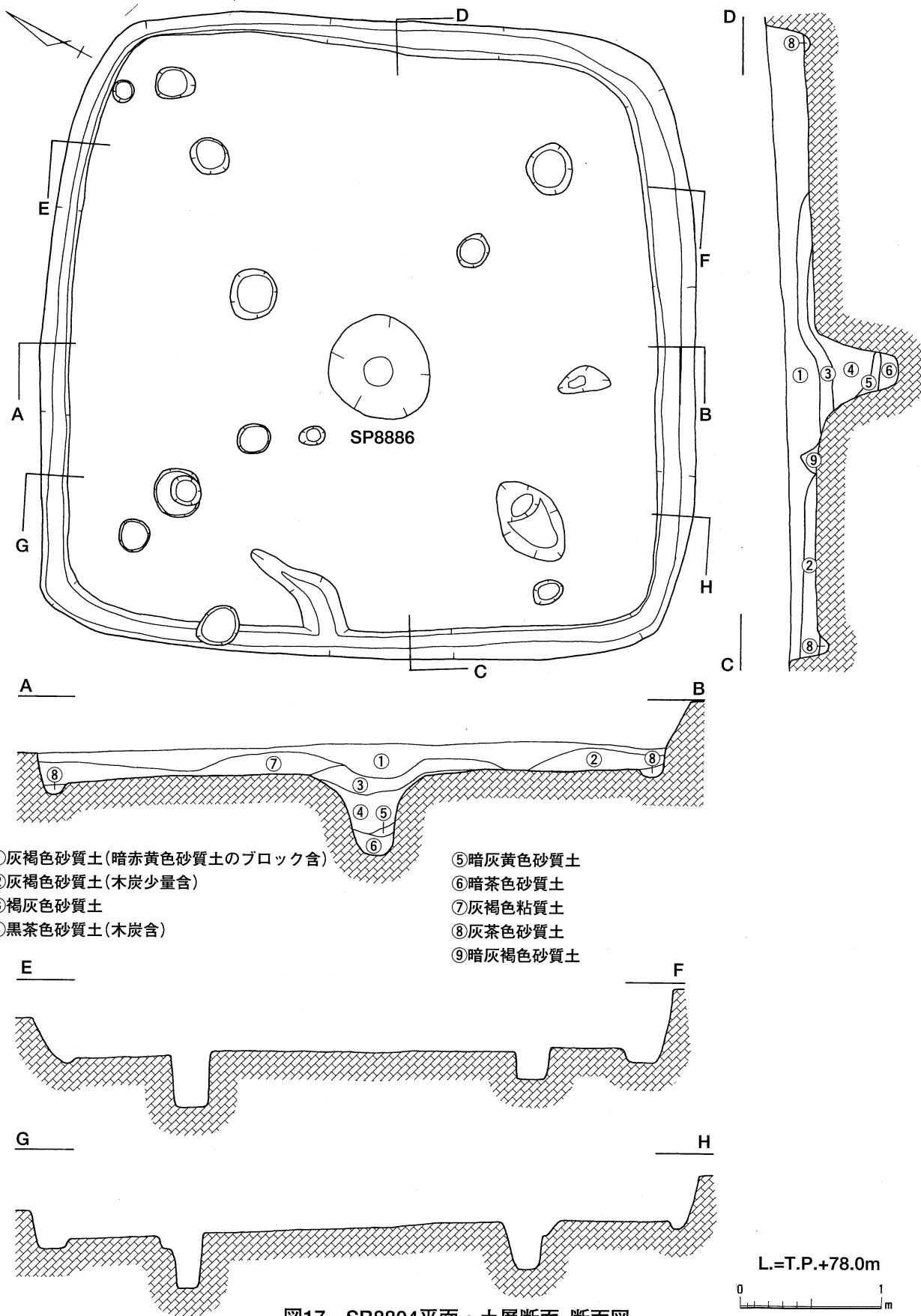


図17 SB8804平面・土層断面・断面図

35トレンチは周囲の田面とは0.4~0.6mの比高差がある、舌状に突出した高台である。堅穴建物を始め多くの遺構を検出した。安定していた土地であったことを示しているといえよう。

36トレンチ

36トレンチは35トレンチの西側である。地山面で標高77.9~78.2mで、北へ緩やかに傾斜していた。遺構面は地山面上に堆積していた淡茶褐色砂質土層除いた面で、地山面1面のみであった。淡茶褐色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、白磁が出土した。

トレンチ東半で北東方向への深さ1mの緩やかな落ち込みを検出した。埋土の暗灰褐色粘質土層からは弥生土器(31・32・33)、土師器(30・34)、須恵器(35)、安山岩製磨製石包丁(S2)が出土した。

落ち込みの斜面上からピットを8基検出した。平面円形、径0.3m、深さ0.2~0.3mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。遺物の出土はみられなかった。

37トレンチ

37トレンチは36トレンチの西側への延長部分である。水路予定地のため、底面で幅1mほどの狭隘なL字形のトレンチとなった。地山面で標高77.4mで、ほぼ平坦であった。遺構面は地山面上に堆積していた淡茶灰色砂質土層を除いた面で、地山面1面のみであった。淡茶灰色砂質土層からは遺物の出土はみられなかった。

北へ突出した部分で北方向への深さ1.8mの落ち込みを検出した。38トレンチの西側斜面へ続くものである。埋土の暗灰褐色粘質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、陶器が出土した。落ち込みの斜面上からピットを3基検出した。平面円形、径0.2~0.3m、深さ0.1~0.3mである。遺物の出土はみられなかった。

38トレンチ

38トレンチは35トレンチの北方である。地山面で標高75.1~75.7mで、緩やかに北へ傾斜していた。遺構面は地山面上に堆積していた暗灰褐色粘質土層を除いた面で、地山面1面のみであった。暗灰褐色粘質土層からは弥生土器、土師器、須恵器が出土した。堅穴建物、掘立柱建物、土壙、ピットを検出した。

堅穴建物はトレンチ中央でSB8807、8808、8809を重なり合って検出した。

上面の**SB8808**はコの字形の溝、ピットを、**SB8809**はL字形の溝、ピットを検出したのみであるが、壁体溝、中央穴をもつ方形堅穴建物である。北西部は後世の造成で削平されていた。壁体溝が並行に巡ることから、4本柱の一辺4.5mのSB8809を、4~6本柱の一辺6.2mのSB8808に拡張している。壁体溝は内側のSB8809のものが幅0.2m、深さ0.05m、外側のSB8808のものが幅0.3m、深さ0.05mである。中央穴の掘方は平面円形、径0.6m、深さ0.7mで、斜めに掘り込まれていた。周囲に厚さ0.1mの木炭、焼土の堆積がみられた。また、東、西の二方に幅0.2m、深さ0.05mの溝が伸びていた。柱穴の掘方は平面円形、径0.3~0.4m、深さ0.5mである。拡張に際して、四隅の柱穴と中央穴は再利用したようである。壁体溝、中央穴、柱穴から弥生土器、土師器が出土したが、摩滅が著しい。

下面の**SB8807**は深さ0.1mの堅穴の底面から半円を描く溝とピットを検出したのみであるが、壁体

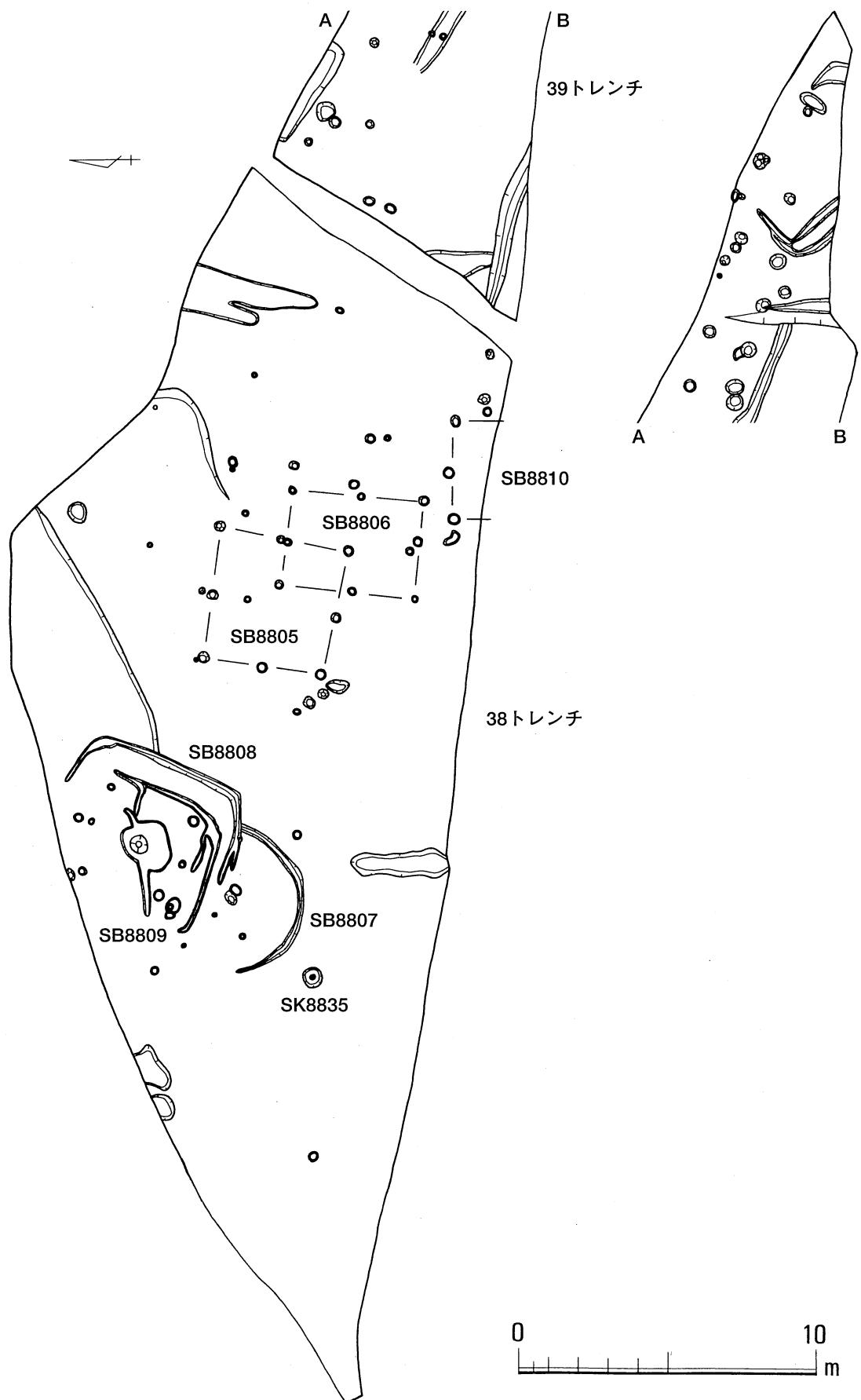


図18 38・39トレンチ遺構面平面図

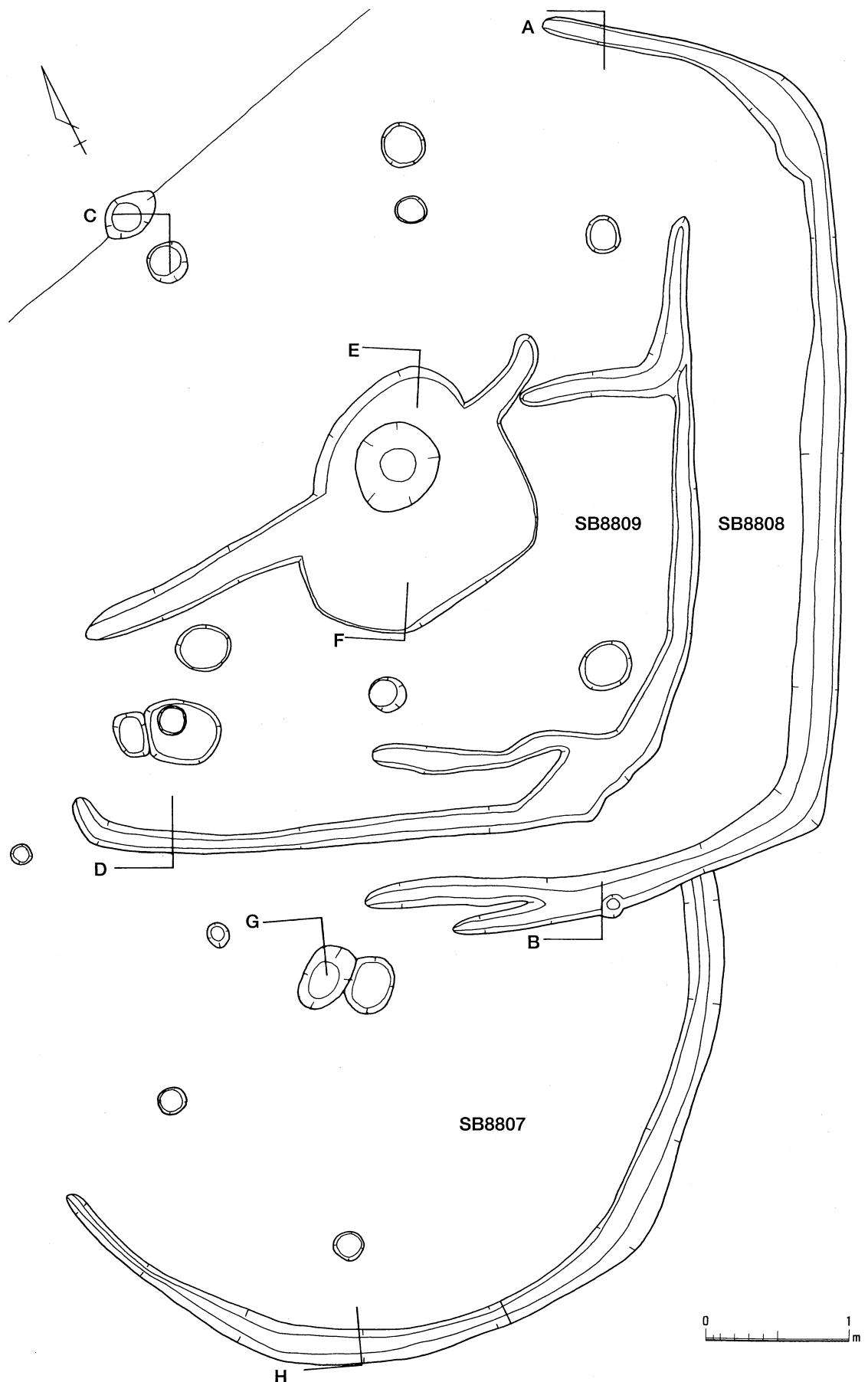


図19 SB8807・8808・8809平面図

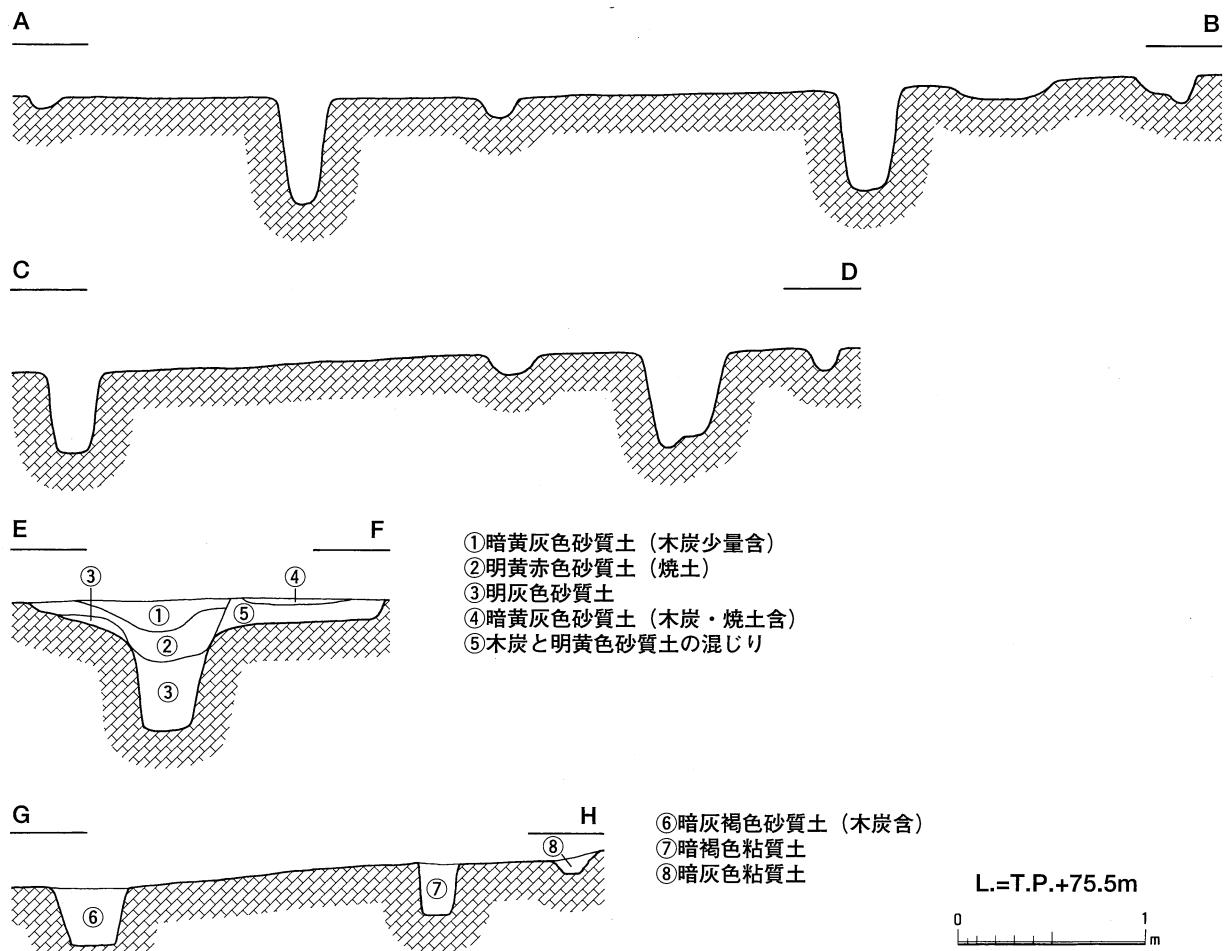


図20 SB8807 · 8808 · 8809断面図

溝、中央穴をもつ6本柱の径5.0mの円形竪穴建物に復元できる。壁体溝は幅0.2m前後、深さ0.1~0.2mである。中央穴の掘方は平面長円形、長径0.5m、短径0.3m、深さ0.3mで、斜めに掘り込まれていた。柱穴の掘方は平面円形、径0.2m、深さ0.2~0.3mである。壁体溝、中央穴から弥生土器が出土したが、摩滅が著しい。

これらの竪穴建物の詳細な時期の決定は困難だが、方形建物の内側のSB8809は弥生時代後期後半、外側の拡張されたSB8808は古墳時代前期前半、円形建物のSB8807は弥生時代後期前半に位置付けられよう。

掘立柱建物は竪穴建物の東側で重なり合ってSB8805、8806を、その南側でSB8810を検出した。

上面の**SB8805**は桁行2間で4.0~4.4m、梁間2間で4.3~4.4mの側柱の掘立柱建物である。主軸は南北方向である。柱間は桁行で2.0~2.3m、梁間で1.95~2.3mである。柱穴の掘方は平面円形、径0.3~0.35m、深さ0.2~0.4mである。土師器、須恵器の小片が出土したものもある。

下面の**SB8806**は桁行2間で4.3~4.55m、梁間2間で3.25~3.3mの側柱の掘立柱建物である。主軸は南北方向である。柱間は桁行で2.05~2.4m、梁間で1.4~1.9mである。柱穴の掘方は平面円形、径0.2~0.35m、深さ0.1~0.4mである。遺物の出土はみられなかった。

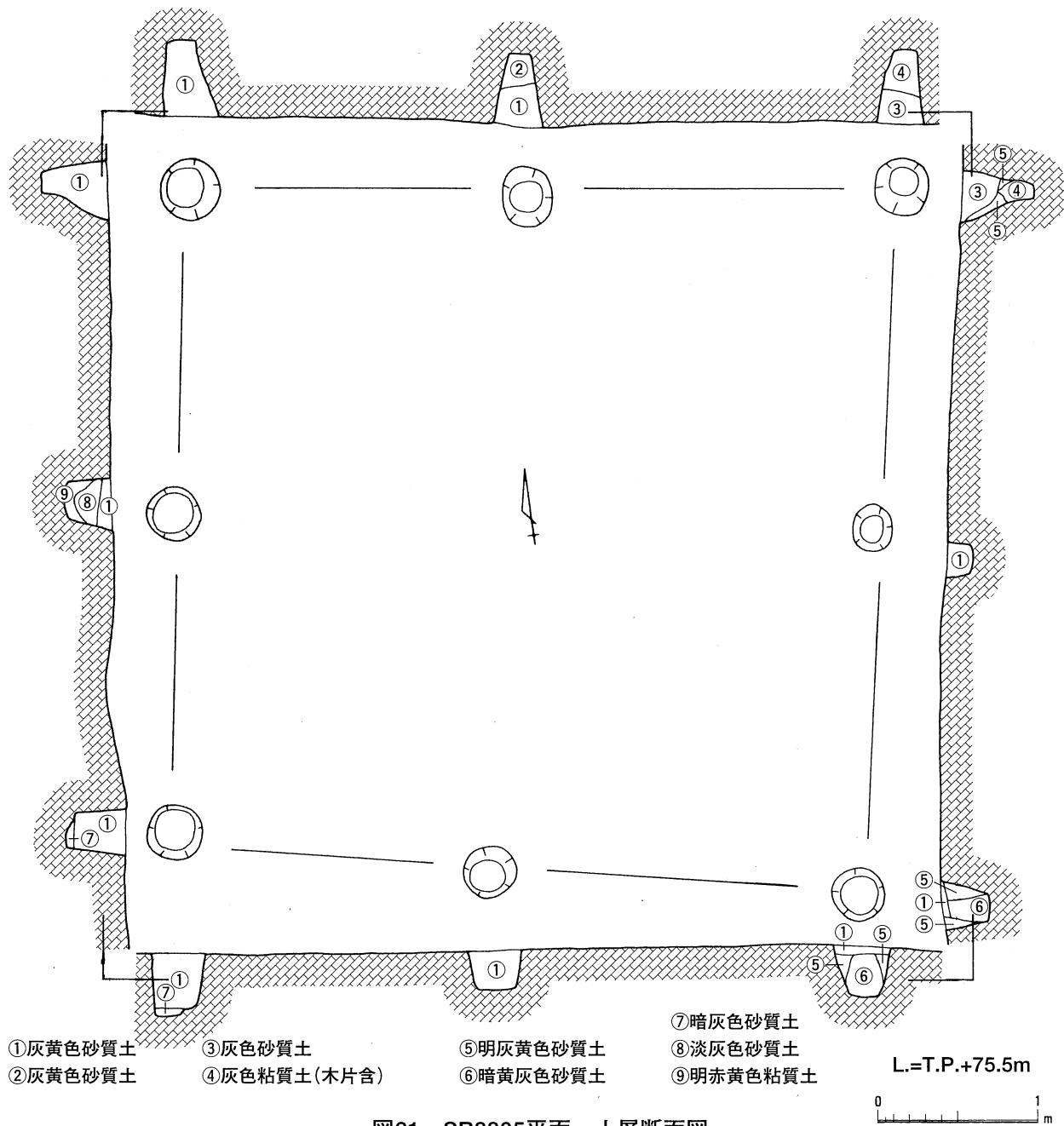


図21 SB8805平面・土層断面図

南側の**SB8810**はトレンチ南方へ延びる桁行1間以上で1.5m以上、梁間2間で3.25mの側柱の掘立柱建物の北辺である。他の部分はトレンチ外である。主軸は南北方向と考えられる。柱間は桁行で1.5m以上、梁間で1.55~1.7mである。柱穴の掘方は平面円形、径0.35m、深さ0.1mである。遺物の出土はみられなかった。

これらの掘立柱建物の詳細な時期の決定は困難だが、中世前半に位置付けられよう。

土壙、ピットはトレンチ内に点在して検出した。平面円形のものが主である。

SK8835は円形竪穴建物の南西1.1mで検出した。平面橢円形、長径0.67m、短径0.6m、深さ0.2mである。内壁に接するように弥生土器の大型の壺形土器（36）が斜めに据えられ、内部から弥生土器の高杯形土器（37）が出土した。土器棺墓の蓋であった高杯形土器が陥没した後に上半が削平されたものであろう。弥生時代後期前葉に位置付けられよう

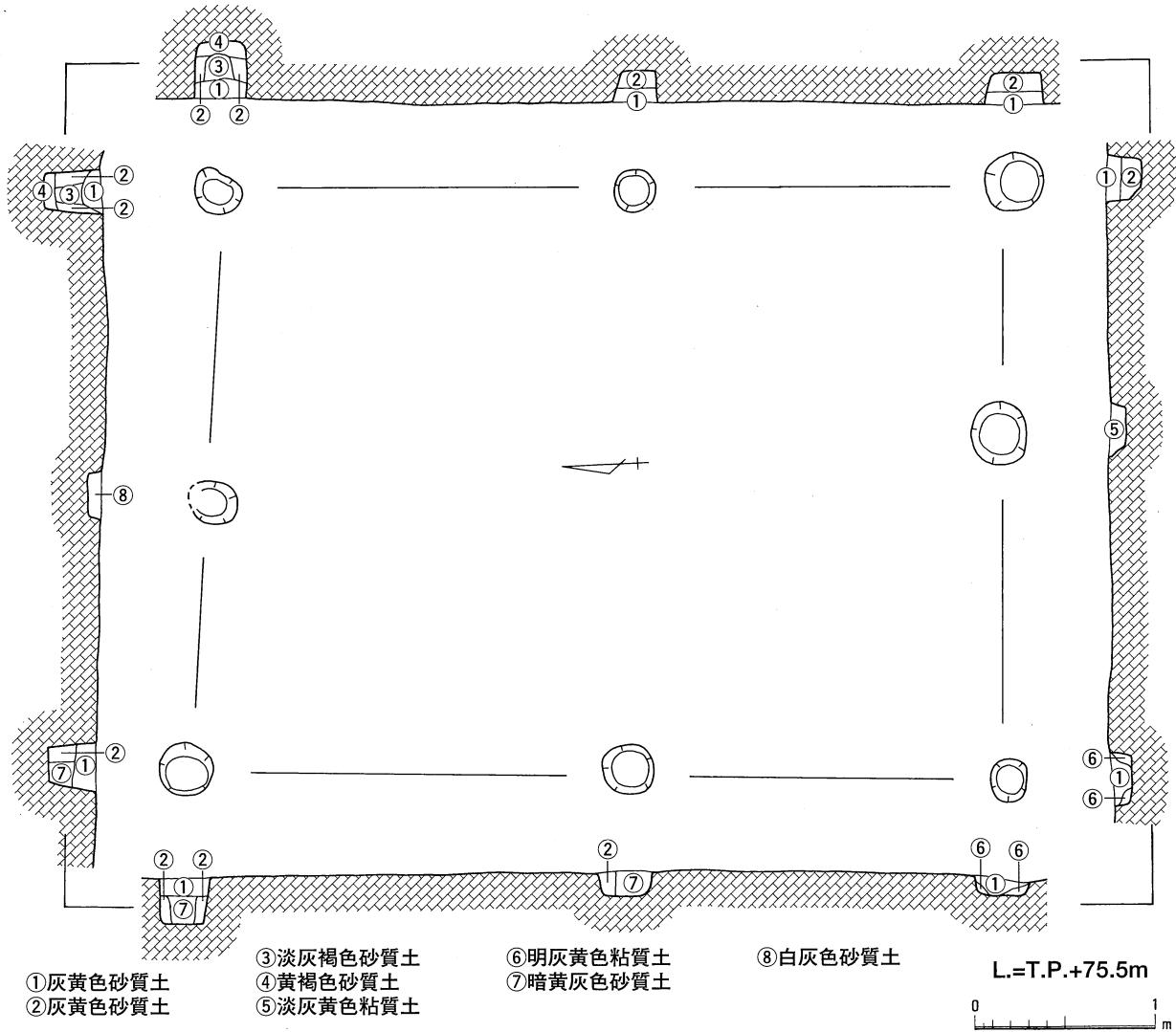


図22 SB8806平面・土層断面図

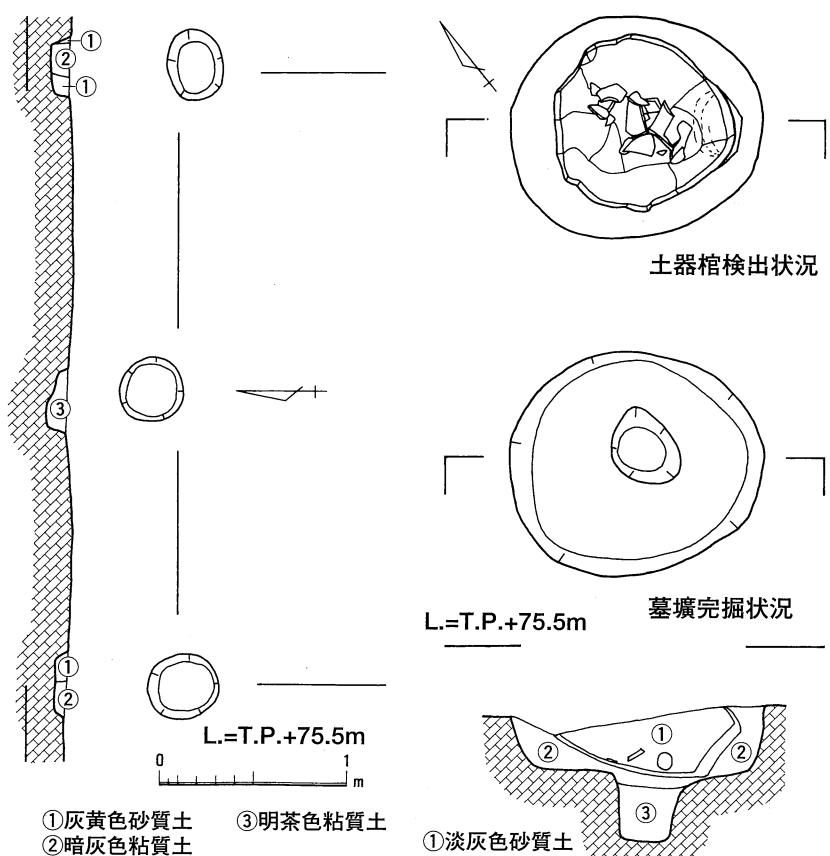
38トレンチは北側の田面とは1m以上の比高差がある、舌状に張り出した高位部の先端である。東区のトレンチの中では最も多くの建物を集中して検出した。南方の35トレンチと同様に、安定していた土地であったことから、東区の中心として、長期に渡って利用されていたことを示しているといえよう。

39トレンチ

39トレンチは38トレンチの東側である。地山面で標高75.7~76.7mで、緩やかに北へ傾斜していた。遺構面は地山面上に堆積していた灰褐色砂質土層を除いた面で、地山面1面のみであった。灰褐色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、青磁、白磁等が出土した。溝、土壙、ピットを検出した。

溝はトレンチ内に点在して検出した。形状は様々で、深さ0.05mである。弥生土器、土師器、須恵器が出土したものもあるが、いずれも摩滅が著しい。

土壙、ピットはトレンチの北半で検出した。平面円形、径0.2~0.5m、深さ0.2~0.4mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。弥生土器、土師器、須恵器が出土したものもあるが、い



いずれも摩滅が著しい。

39トレンチも北半を中心に比較的多くの遺構を検出した。38トレンチと同様の立地であることから、ここも安定していた土地であったことを示しているといえよう。

40トレンチ

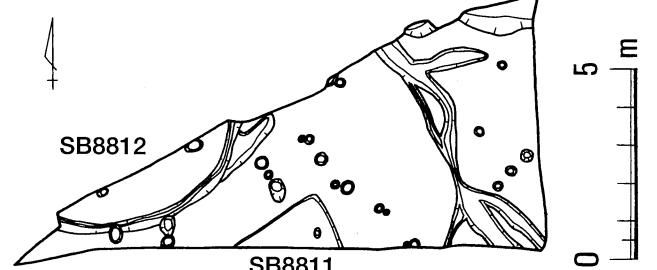
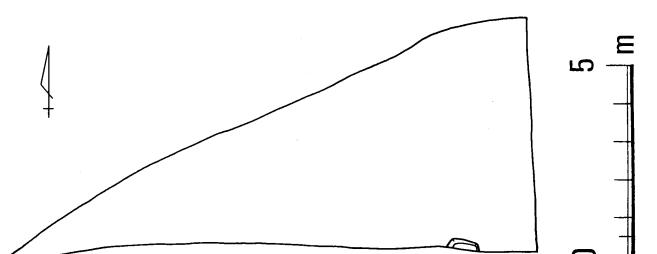
40トレンチは39トレンチの東方である。地山面で標高75.9～76.1mで、緩やかに北へ傾斜していた。遺構面は2面を検出した。

第1遺構面は茶灰色砂質土層を除いた面である。茶灰色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、青磁、白磁が出土した。トレンチ南辺でトレンチ外の南へ延びる土壙を1基検出した。深さ0.2m程度である。須恵器の小片が出土した。

第2遺構面は地山面上に堆積していた暗灰褐色砂質土層を除いた面で、地山面である。暗灰褐色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器が出土した。竪穴建物、溝、土壙、ピットを検出した。

竪穴建物はトレンチ西半で南北にSB8812、8811を検出した。

北側のSB8812は深さ0.5mの竪穴の床面から円弧を描く溝とピット2基を検出したのみであるが、壁体溝をもつ径6.9mの円形竪穴建物の南東部1/5程度である。全体の柱数は6～8本であろう。他の部分は後世の造成で削平されていた。壁体溝は幅0.35m、深さ0.1mである。柱穴の掘方は平面橢円形、長径0.3～0.5m、短



径0.2～0.3m、深さ0.65mである。壁体溝や柱穴からは少量の土器が出土したが、いずれも小片で摩滅が著しく、詳細な時期の決定は困難だが、古墳時代前期前半に位置付けられよう。

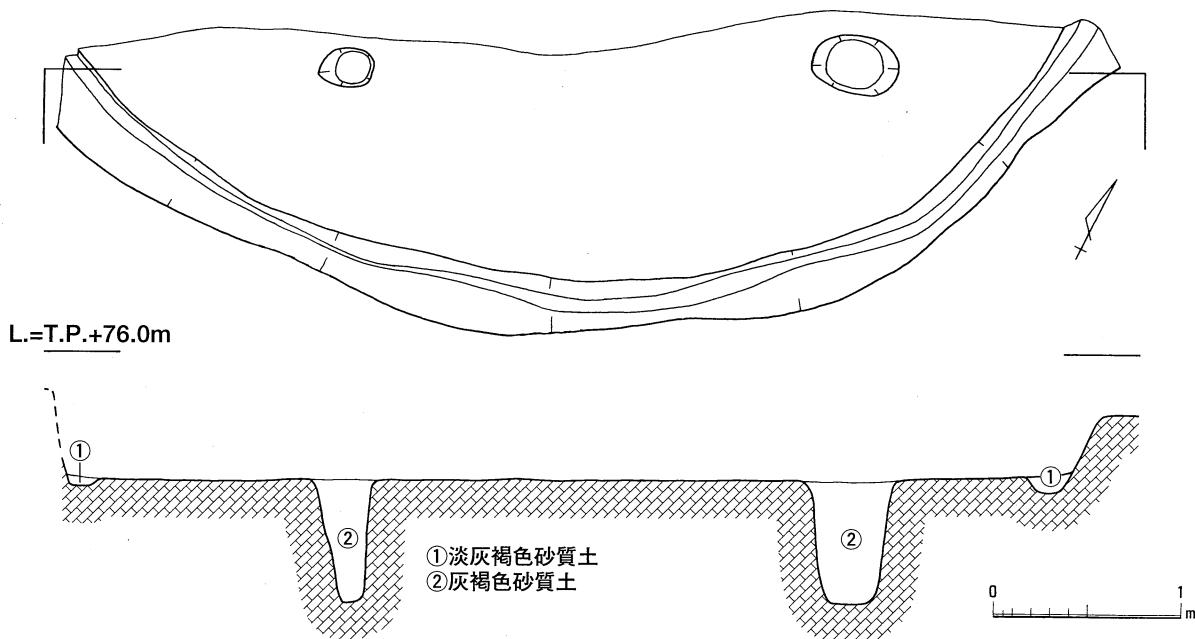


図27 SB8812平面・土層断面図

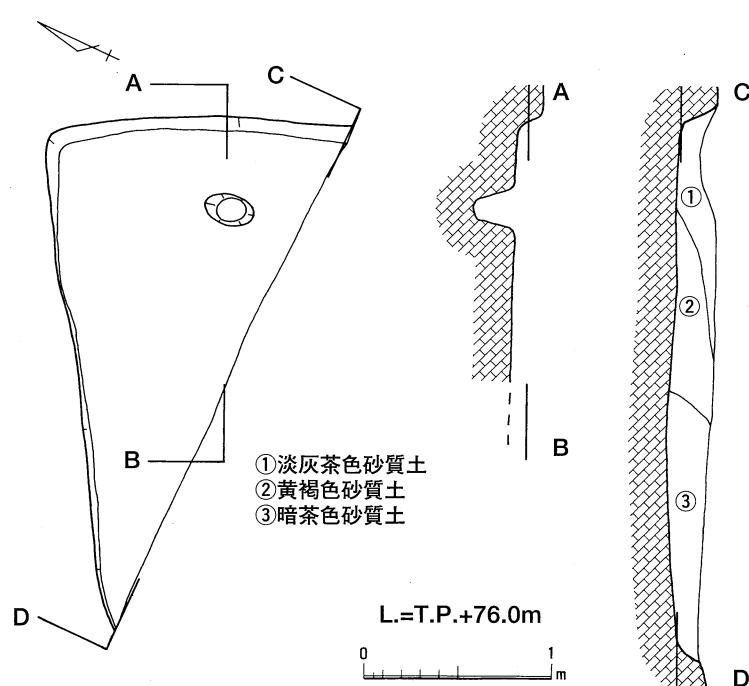


図28 SB8811平面・土層断面・断面図

南側のSB8811は平面三角形の深さ0.1mの竪穴の床面からピット1基を検出したのみであるが、方形竪穴建物の北角部分である。規模は不明だが、4本柱の建物であろう。他の部分はトレンチ外の南へ拡がる。柱穴の掘方は平面橢円形、長径0.25m、短径0.15m、深さ0.2mである。竪穴、柱穴の埋土から弥生土器が出土したが、いずれも小片で摩滅が著しく、詳細な時期の決定は困難だが、弥生時代後期に位置付けられよう。

溝はトレンチの東側で検出した。北流する複数の溝が切り合っていた。

土壤、ピットはトレンチ全面で散在して検出した。平面円形のものがほと

んどで、径0.2~0.4m、深さ0.1~0.3mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。土器が出土したものもあるが、いずれも摩滅が著しい。

40トレンチは38トレンチと同様に北側の田面とは1.5m以上の比高差がある、舌状に張り出した高位部に位置している。第2遺構面では調査面積に比して、竪穴建物を始め多くの遺構を検出した。この遺構面は南方の33トレンチ第2遺構面下段から続くものであろう。33トレンチや35、38、39トレンチと同様に、ここも安定していた土地であったことを示しているといえよう。

41トレンチ

41トレンチは40トレンチの北方である。地山面で標高74.0～74.3mで、ほぼ平坦であった。遺構面は2面を検出した。

第1遺構面は明灰茶色砂質土層を除いた面である。明灰茶色砂質土層からは土師器、須恵器、陶器、磁器が出土した。ピットを検出した。

ピットは4基検出した。平面円形、径0.3m前後、深さ0.1m前後である。遺物の出土はみられなかった。

第2遺構面は地山面上に堆積していた黄褐色砂質土層を除いた面で、地山面である。黄褐色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、備前焼等が出土した。



図29 41・42トレンチ遺構面平面図

土壙、ピットを検出した。

土壙はトレンチ中央で2基検出した。北の大型のものからは土師器が出土した。

ピットはトレンチ北半で検出した。平面円形、径0.3~0.4m、深さ0.1~0.4mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。土師器、須恵器が出土したものもあるが、いずれも小片である。これらのピットは42トレンチで検出されたものと一連のものである。

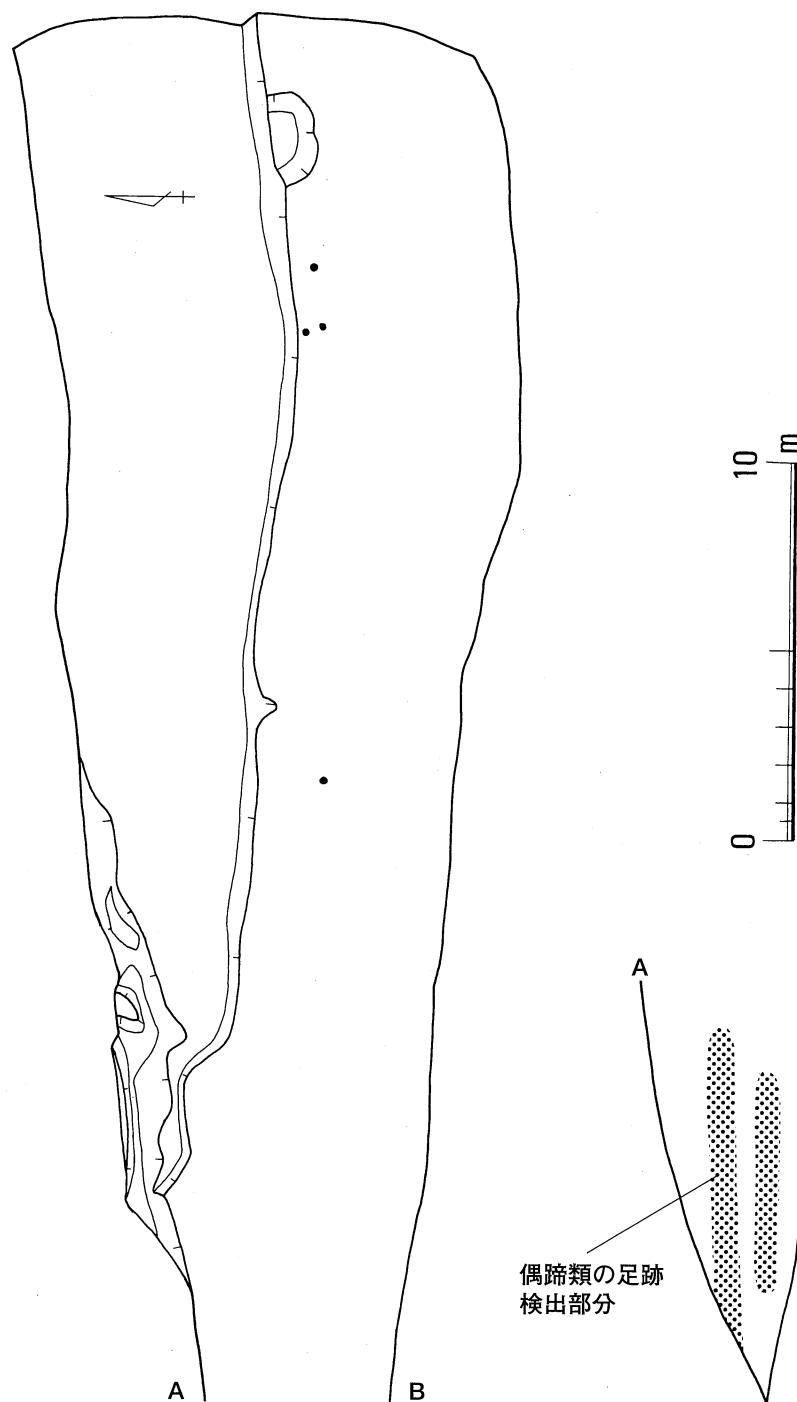


図30 43トレンチ第1遺構面平面図

42トレンチ

42トレンチは41トレンチの北側である。地山面で標高72.3~73.5mで、北へ3段の段を成して下がっていた。近世にその段差に盛土を施して、1面の耕作面にしたのであろう。遺構面は地山面上に堆積していた赤黄色砂質土層を除いた面で、地山面1面のみであった。赤黄色砂質土層からは土師器、須恵器、備前焼、青磁、白磁、磁器等が出土した。

トレンチ南東部を中心に土壙、ピットを検出した。平面円形のものが主で、径0.2~0.5m、深さ0.1~0.4mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。弥生土器、土師器が出土したものもあるが、いずれも摩滅が著しい。

43トレンチ

43トレンチは42トレンチの北側で、東区の北端である。地山面で標高70.4~71.5mで、北へ傾斜していた。遺構面は2面を検出した。

第1遺構面は茶灰色砂質土層を除いた面である。トレンチを南北に二分するように高さ0.5mの段差がみられた。近世にその

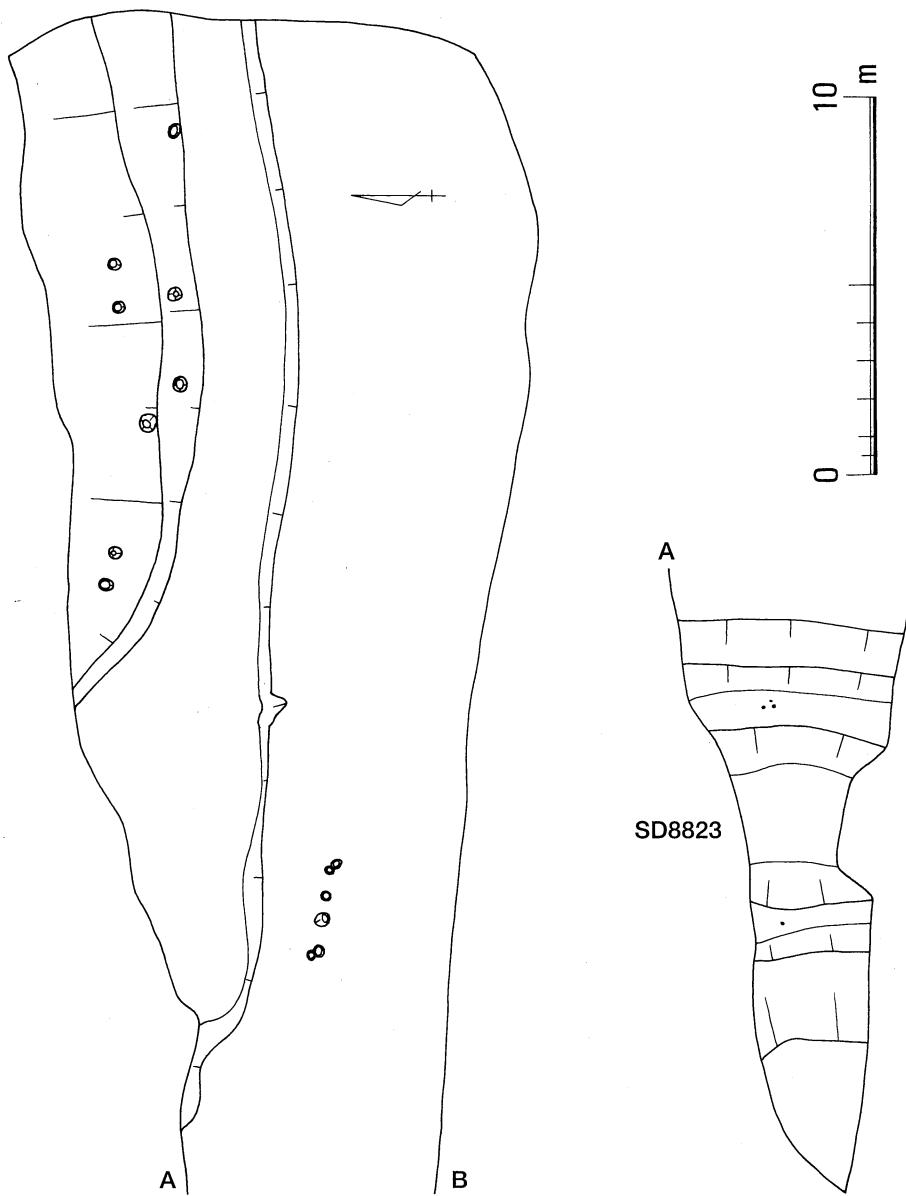


図31 43トレンチ第2遺構面平面図

師器、須恵器、備前焼等が出土した。流路、ピットを検出した。

流路SD8823はトレンチ西端で検出した。検出した範囲では、幅11m、深さ1.9mで、底面は北へ傾斜していた。河岸は2段の段を成して落ち込み、護岸のためか、先端を粗く削った丸太が打ち込まれていた。

段差に厚さ0.7mの盛土を施して1面の耕作面にしたのであろう。茶灰色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、備前焼等が出土した。

トレンチ北半で少数の土壌、ピットを検出した。土壌から弥生土器、土師器が出土した。また、トレンチ西端は後述する流路の埋没した場所のため湿地化していたようで偶蹄類の足跡を検出した。いずれも、近世の耕作に伴うものであろう。

第2遺構面は上面で検出した段差の下段の地山面上に堆積していた茶褐色粘質土層を除いた面で、地山面である。トレンチの北辺は北へ落ち込んでいた。これは調査区の北側を流れる寺部川の旧河道であろう。茶褐色粘質土層からは弥生土器、土

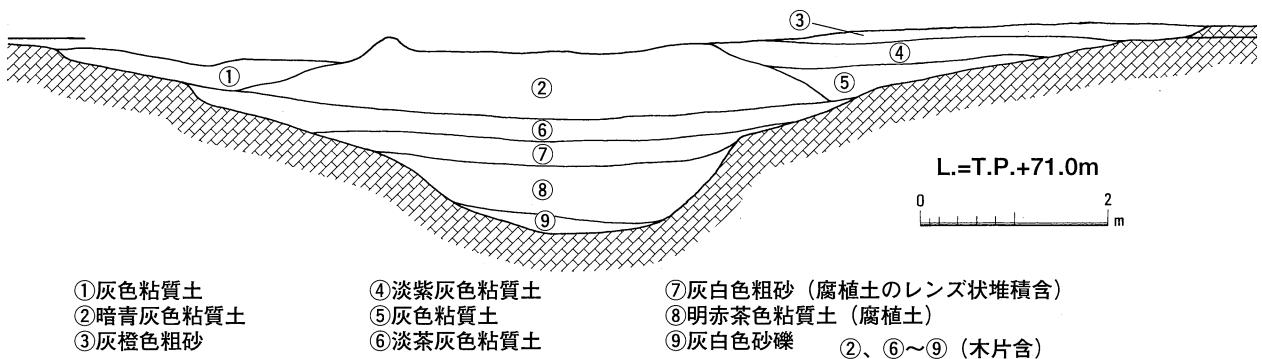


図32 SD8823北壁土層断面図

れていた。流路内には厚さ0.2m程度の砂と粘質土の互層が堆積し、最終的にはグライ化した暗青灰色粘質土層で覆われていた。最下層から弥生時代中期の土器、大型蛤刃石斧（S3）が出土した。SD8823は東区の中を流れ落ちてきた流れを集めた流路の北端で、新庄尾上遺跡の北側を流れる寺部川へ注ぐものであろう。

ピットはトレント北端の落ち込みの斜面上を中心に検出した。平面円形、径0.3~0.4m、深さ0.1~0.3mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。遺物の出土もみられなかった。

44トレント

44トレントは西区の南西端である。地山面で標高74.5~75.5mで、北へ傾斜していた。遺構面は4面を検出した。

第1遺構面は明赤黄色砂質土層を除いた面である。明赤黄色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、備前焼、陶器、磁器等が出土した。トレントの東端と西端で溝、土壙を検出した。

溝は南北方向で、幅0.8~1m、深さ0.2~0.4mのものと、幅0.3m、深さ0.1m未満の浅いものに大別できる。前者には礫が詰められていたものがあったことから暗渠排水路である。後者は耕作に伴う鋤溝である。

土壙は平面長円形、深さ0.2~0.4mである。弥生土器、土師器が出土したものもある。

SK8902はトレント南西角で検出した。平面円形、径0.4m、深さ0.4mである。亀山焼と考えられる陶器（38・39）が出土した。

第2遺構面は暗黄褐色砂質土層を除いた面である。暗黄褐色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、備前焼、青磁、陶器等が出土した。溝、土壙、ピットを検出した。

溝はトレント西辺で検出した。トレントの長辺に直交して北流する幅2.0mのSD8912、幅1.5mのSD8913と幅0.2m前後、深さ0.1m未満のものである。SD8912からは弥生土器、土師器（43）、須恵器、瓦器、備前焼（40）が、SD8913からは弥生土器、土師器、須恵器（42）、瓦質土器（41）が出土した。SD8912、8913は山裾からの湧水によって形成されたものであろう。深い溝は上面でも検出した鋤溝であろう。

土壙、ピットはトレントのほぼ全面で検出した。平面円形のものが大半である。ピットは径0.2~0.4m、深さ0.1~0.5mである。土壙はそれより平面規模が大きい。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。弥生土器、土師器、須恵器が出土したものもあるが、いずれも摩滅が著しい。

SK8908はトレント南辺中央で検出した。平面長円形、長径0.6m、短径0.35m、深さ0.2mである。弥生土器、土師器（44）が出土した。

SP8911はトレント南西隅で検出した。平面円形、径0.35m、深さ0.4mである。備前焼（45）が出土した。

SP8913はSD8912の東側で検出した。平面円形、径0.25m、深さ0.3mである。土師器（46）が出土した。

トレント西端近くで落ち込み状の遺構を検出した。検出した範囲で東西8.1m、南北4m、深さ0.7mの平面隅丸方形である。検出面が北西に傾斜しているため、遺構の北西部は削平されていた。床面には幅0.5m、高さ0.2mの土手状の高まりが壁面と1m間隔で並行してみられた。土手の1ヶ所が水口状に切れていた。さらに、土手の上面には径1m、深さ0.5mの擂鉢状の穴が3ヶ所みられた。土

手の内側は平坦である。遺物の出土はみられなかった。下位の田畠への水利施設であろうか。

第3遺構面は灰褐色粘質土層を除いた面である。灰褐色粘質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、備前焼、陶器、磁器等が出土した。竪穴建物、流路、ピットを検出した。

竪穴建物はトレンチ中央でSB8901、北辺東半でSB8902を検出した。

中央の**SB8901**は深さ0.5mの竪穴の床面からU字形の溝、ピット5基を検出した。壁体溝、中央穴をもつ4本柱の径4.5mの円形竪穴建物である。壁体溝は幅0.35m、深さ0.05mである。中央穴の掘方は平面長円形、長径0.9m、短径0.6m、深さ0.4mで、斜めに掘り込まれていた。底面から一辺0.1m

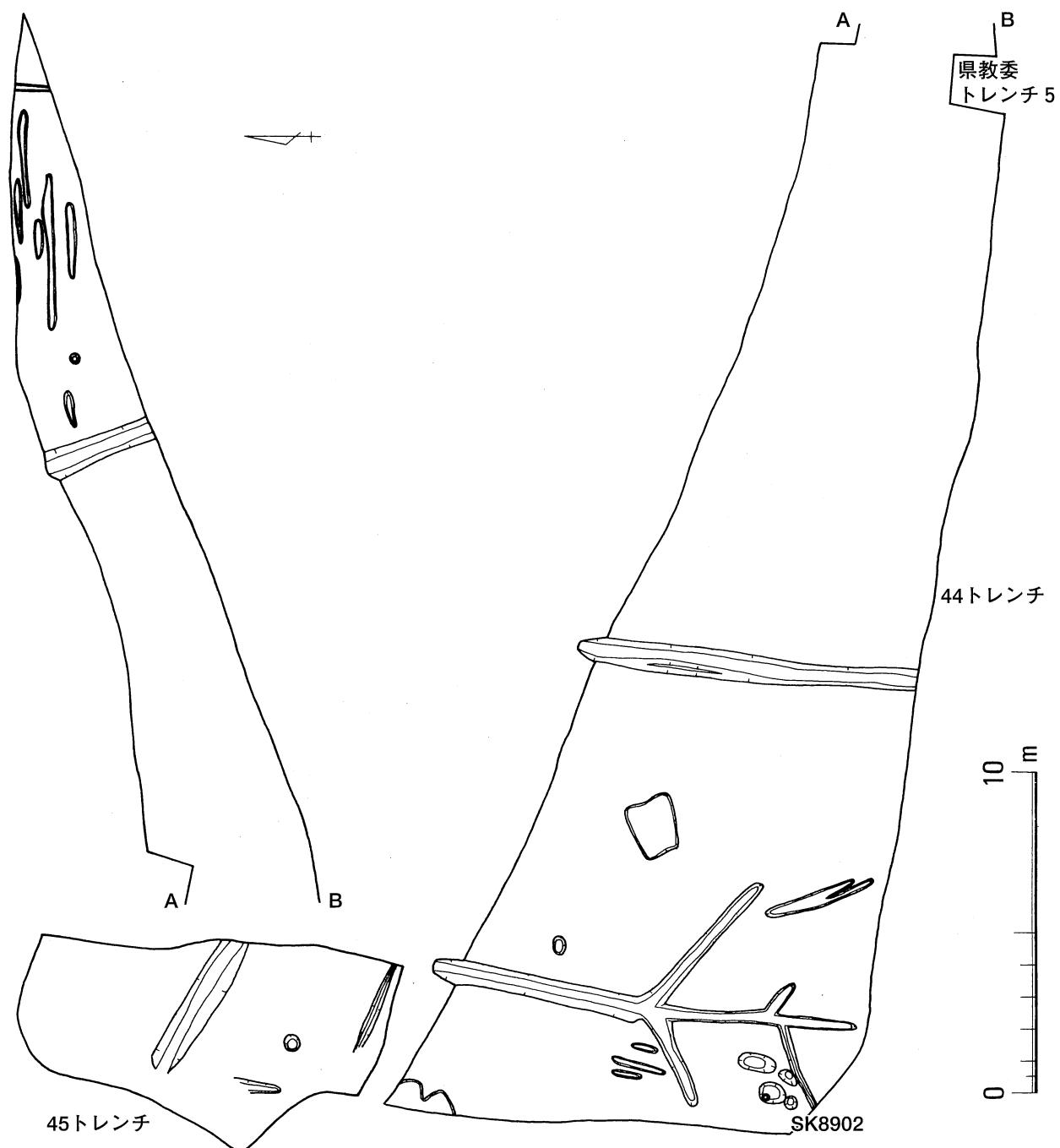


図33 44・45トレンチ第1遺構面平面図

の方形の板状の石を検出した。礎石であろうか。また、北東と南西の二方に幅0.3m、深さ0.1mの溝が延びていた。柱穴の掘方は平面楕円形、径0.3~0.45m、深さ0.3~0.5mである。床面から炭化材、焼土塊を検出したことから、火災で廃絶したことが窺える。炭化材はその木目から建物の中心に向かって倒壊していた。竪穴の埋土から弥生土器（47・48・49・50・51・52・53）が、中央穴から延びる溝SD8919から弥生土器（54）が、壁体溝、中央穴、柱穴から弥生土器が出土した。時期は弥生時代後期後葉に位置付けられよう。

東側のSB8902は深さ0.4mの竪穴の床面から半円を描く溝とピット1基を検出したのみであるが、壁体溝をもつ径8.6mに復元できる円形竪穴建物の南側1/5程度の部分である。柱穴は1基を検出したのみなので、全体の柱数は不明である。北側は後世の造成で削平されていた。柱穴の掘方は平面楕円形、長径0.5m、短径0.35m、深さ0.55mである。壁体溝、柱穴から少量の土器が出土したが、いずれも小片で摩滅が著しく、詳細な時期の決定は困難だが、古墳時代前期前半に位置付けられよう。

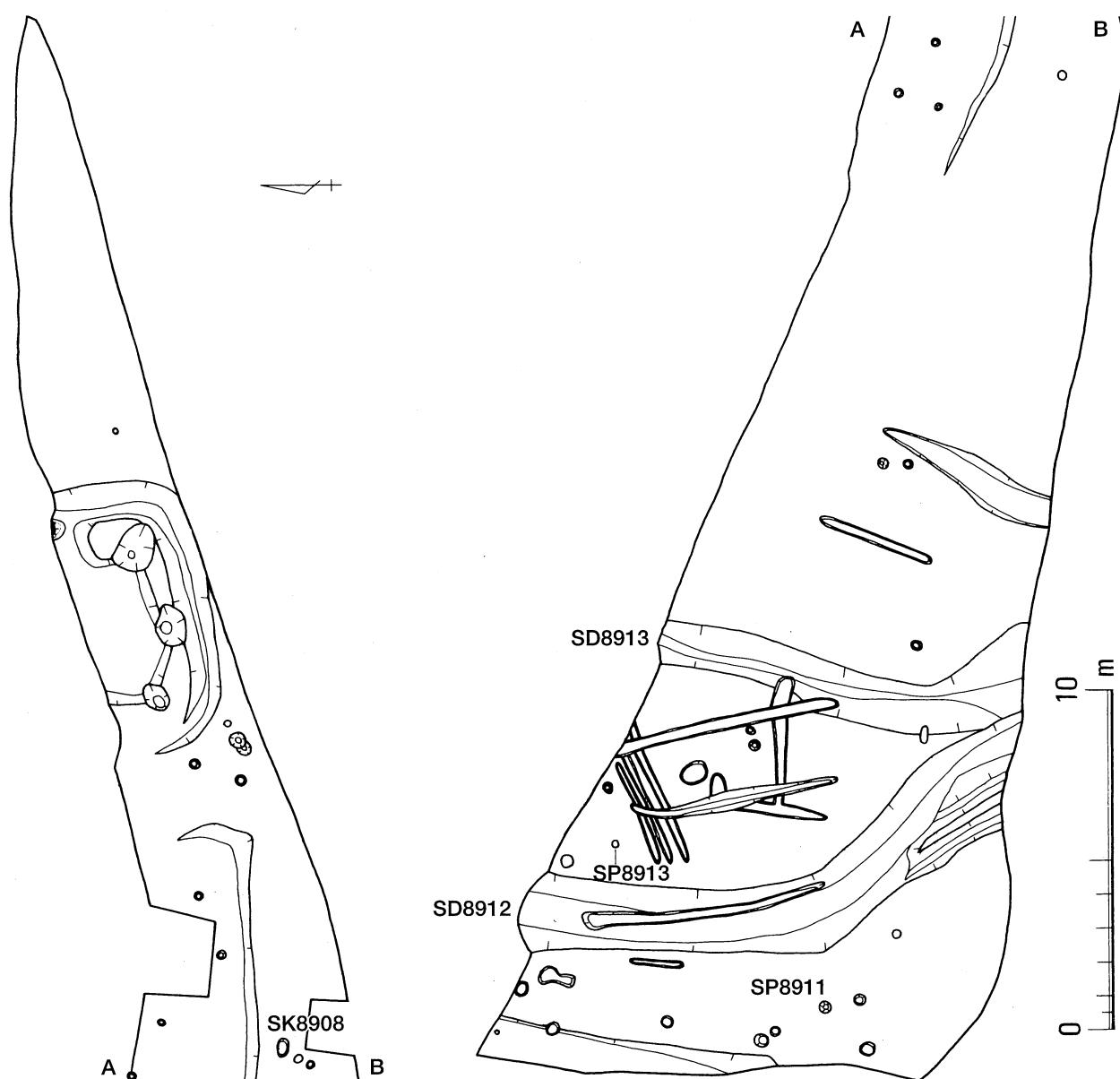


図34 44トレンチ第2遺構面平面図

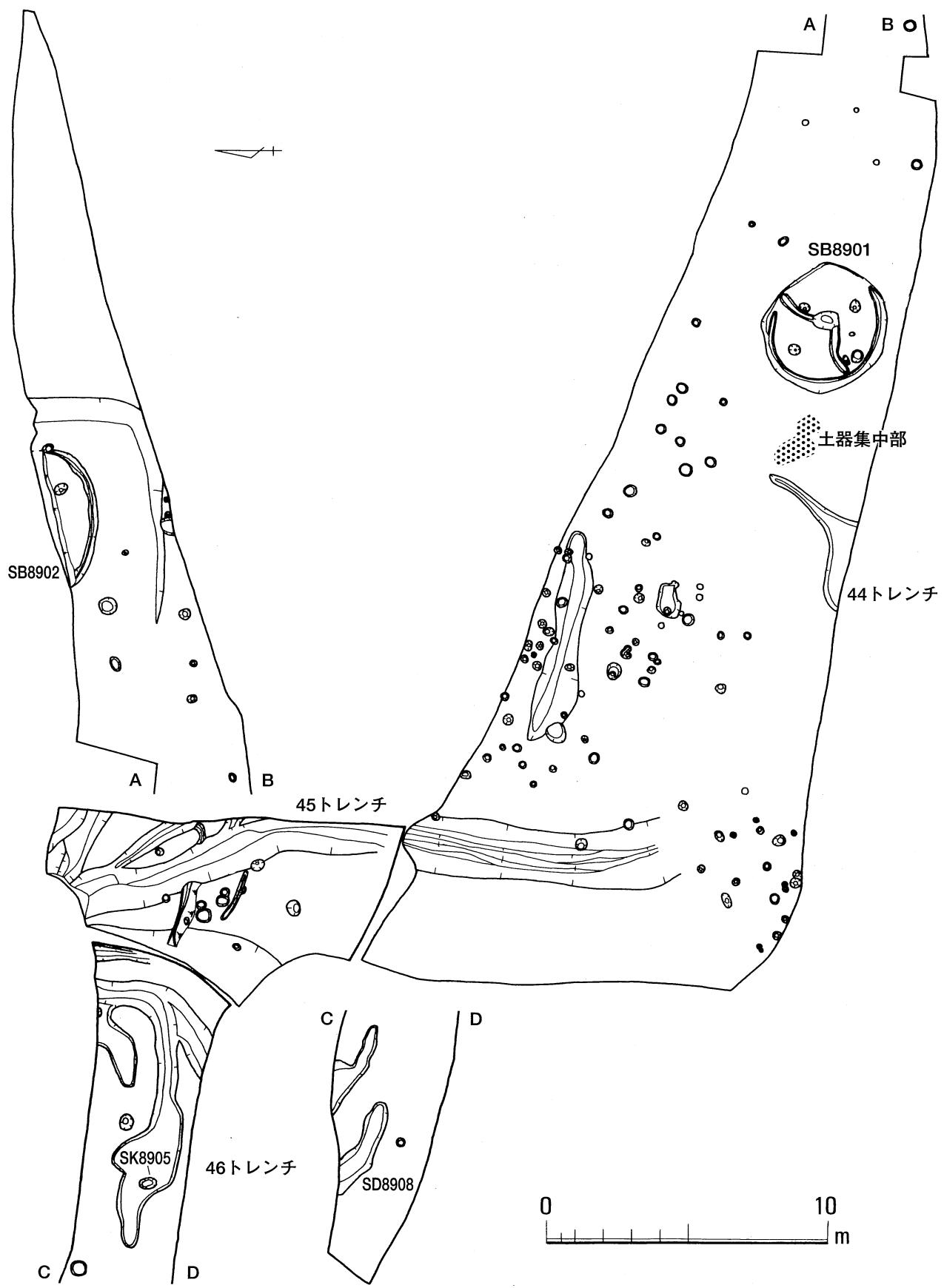


図35 44トレンチ第3遺構面・45トレンチ第2遺構面・46トレンチ遺構面平面図

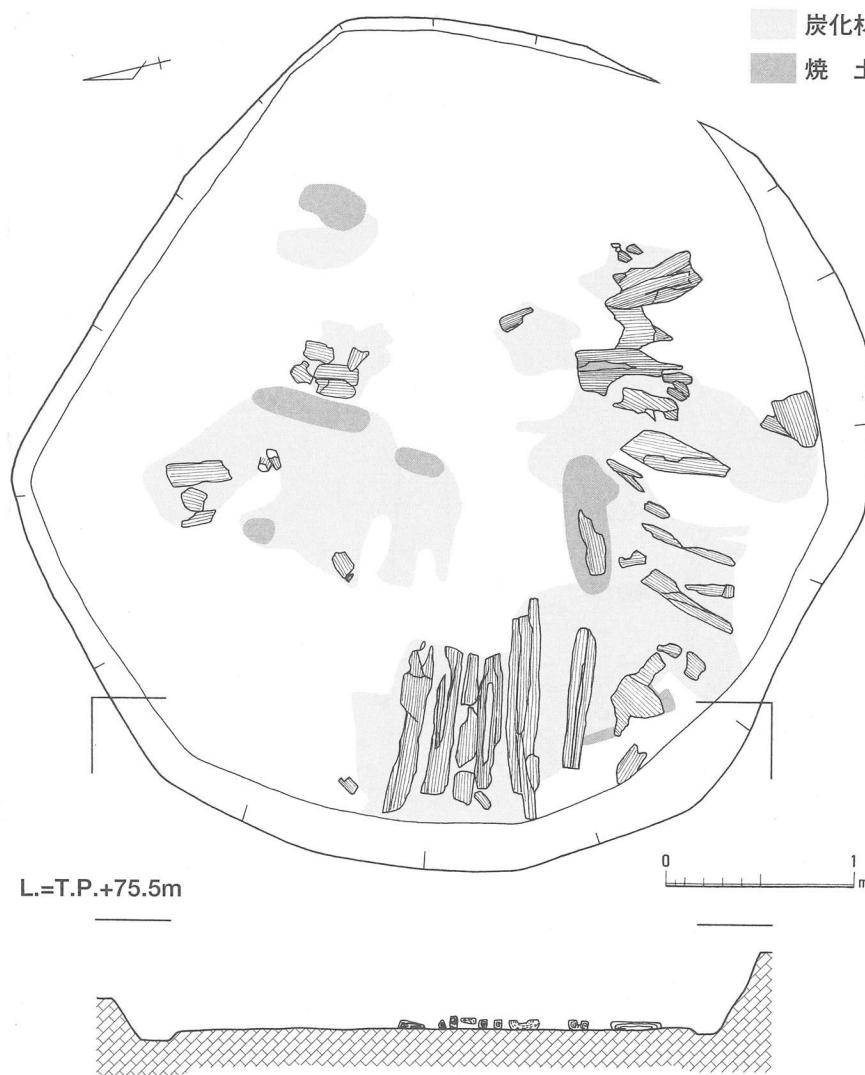


図36 SB8901炭化材検出状況平面・断面図

地山面である。黄褐色砂質土層からは弥生土器（64・67・68）、土師器（65・66）、サヌカイト製打製石包丁（S4）が出土した。溝、土壙、ピットを検出した。

溝はトレンチ中央で3条検出した。トレンチの長辺に並行で、幅0.3、深さ0.05m未満の浅いものである。弥生土器、土師器の小片が出土したものもある。

土壙はトレンチ中央で1基検出した。平面凸字形、東西3.5m、南北1.7m、深さ0.3mである。土器が出土したが、摩滅が著しく、詳細は不明である。

ピットは遺構面の全面で検出した。平面円形、径0.2~0.5m、深さ0.1~0.4mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。弥生土器、土師器が出土したものもあるが、いずれも小片である。

SP8963は遺構面の南西端で検出した。平面円形、径0.3m、深さ0.25mである。土師器（69）が出土した。

SP8965は遺構面の西半中央で検出した。平面円形、径0.2m、深さ0.3mである。弥生土器（70）が出土した。

SP8967は遺構面の中央部で検出した。平面円形、径0.3m、深さ0.3mである。弥生土器（71）が出土した。

■ 炭化材 流路はトレンチ西辺で1条
■ 焼土 検出した。幅2mで、2段に掘り込まれ、底面は北へ傾斜していた。45トレンチ第2遺構面で検出した流路へ続くものである。遺物の出土はみられなかった。

ピットはトレンチ西半を中心で検出した。平面円形、径0.2~0.4m、深さ0.1~0.4mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。土器が出土したものもあるが、いずれも摩滅が著しい。

SB8901の西側1.5mのところで東西2m、南北1.3mの8の字形の範囲に土器片が集中している部分を検出した。弥生土器（55・56・57・58・59・60・61・62・63）、サヌカイト製石鎌（S5）が出土した。

第4遺構面はトレンチ中央の地山面上に堆積していた黄褐色砂質土層を除いた面で、

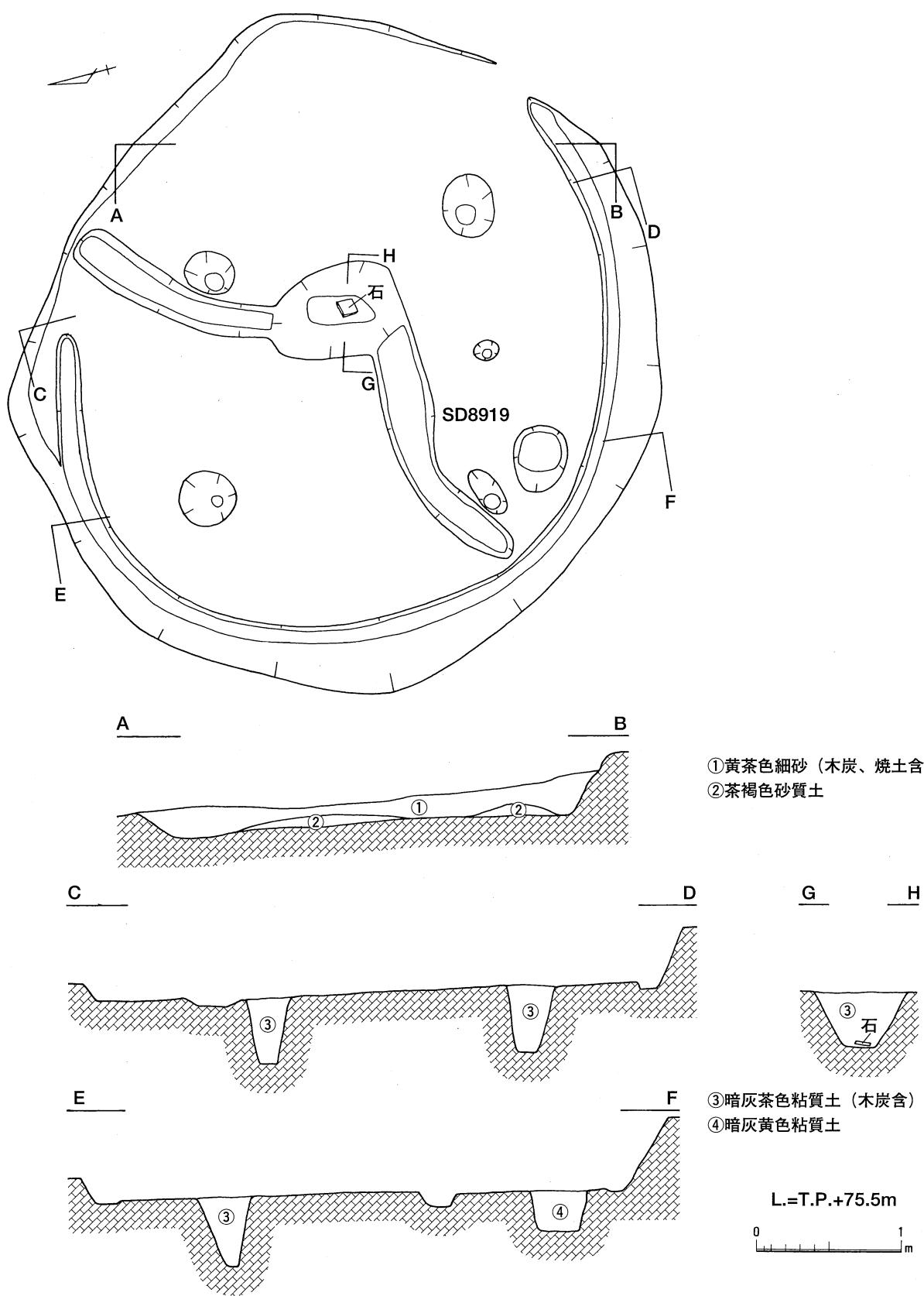


図37 SB8901平面・土層断面図

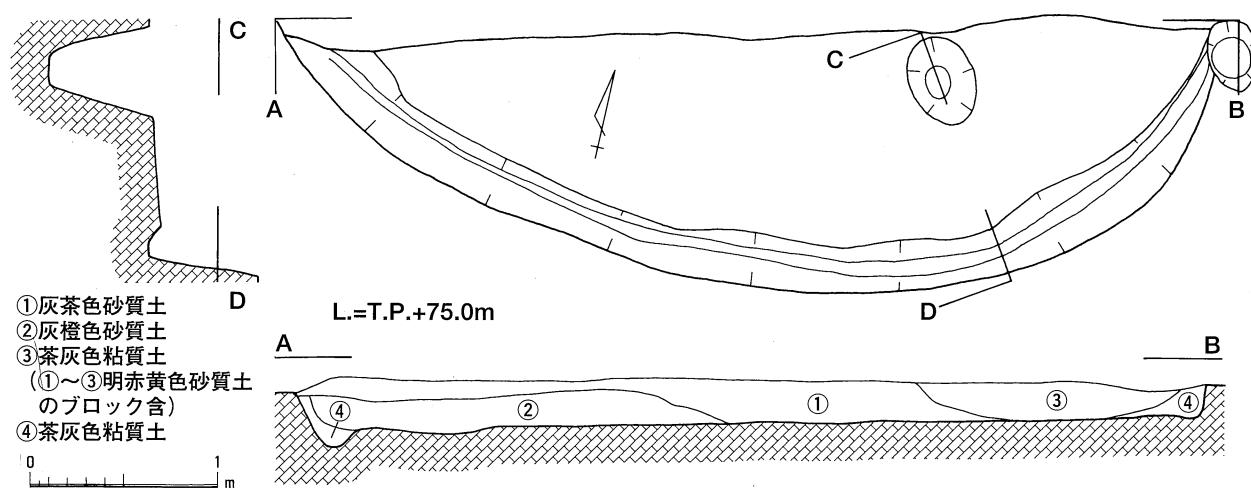


図38 SB8902平面・土層断面・断面図



図39 44トレンチ第4遺構面平面図

45トレンチ

45トレンチは44トレンチの北西側である。地山面で標高74.8~72.7mで、北へ傾斜していた。遺構面は2面を検出した。

第1遺構面は灰橙色砂質土層を除いた面である。灰橙色砂質土層からは土師器、須恵器(74)、備前焼(72・73)が出土した。溝、土壙を検出した。

溝は3条検出した。トレンチ中央で検出した東西方向で、幅1m、深さ0.3mのものは44トレンチで検出したのと同様の石詰め暗渠である。トレンチ南辺で検出した幅0.3m、深さ0.1mのものは44トレンチで検出したのと同様の鋤溝である。

土壙はトレンチ南半中央で1基検出した。平面円形、径0.5m、深さ0.24mである。土師器の小片が出土した。

第2遺構面は地山面上に堆積していた灰黄色砂質土層を除いた面で、地山面である。東、西辺を流路で削られ、平坦面はわずかであった。灰黄色砂質土層からは弥生土器、土師器(76・77)、須恵器、備前焼、青磁(75)等が出土した。流路、溝、土壙、ピットを検出した。

流路はいずれも北流するものであるが、複雑に切り合っていた。44トレンチ第3遺構面で検出した流路から続くものである。弥生土器、土師器、須恵器、備前焼が出土したものもある。

溝は2条検出した。東西方向で、幅0.2m、深さ0.1mである。遺物の出土はみられなかった。

土壙、ピットはトレンチ中央の平坦面を中心に11基検出した。平面円形、径0.3~0.5m、深さ0.2~0.4mである。弥生土器、土師器が出土したものもあるが、いずれも小片である。

46トレンチ

46トレンチは45トレンチの西側である。地山面で標高73.9mで、ほぼ平坦であった。

遺構面は地山面上に堆積していた暗黄褐色砂質土層を除いた面で、地山面1面のみであった。暗黄褐色砂質土層からは土師器、須恵器、瓦器、備前焼(78)等が出土した。流路、溝、土壙を検出した。

流路、溝は形状は様々であるが、底面は北へ傾斜していた。土師器、須恵器、瓦器、陶器が出土したものもあるが、いずれも小片である。

SD8908はトレンチの北辺西半で検出した。底面は北へ傾斜し、幅0.6mである。土師器、瀬戸系陶器(79)が出土した。

土壙は4基検出した。平面円形、径0.3~0.5m、深さ0.1~0.2mである。土師器、備前焼の小片が少量出土したものもある。

SK8905はトレンチ中央の浅い落ち込みの底面で検出した。平面長円形、長径0.6m、短径0.35m、深さ0.15mである。土師器(80)、備前焼が出土した。

47トレンチ

47トレンチは45トレンチの北方である。第2遺構面で標高71.7~72.4mで、北へ傾斜していた。遺構面は2面を検出した。

第1遺構面は茶灰色砂質土層を除いた面である。茶灰色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、備前焼が出土した。溝、ピットを検出した。

溝は2条検出した。深さ0.1m程度である。弥生土器、土師器、須恵器の小片が出土した。

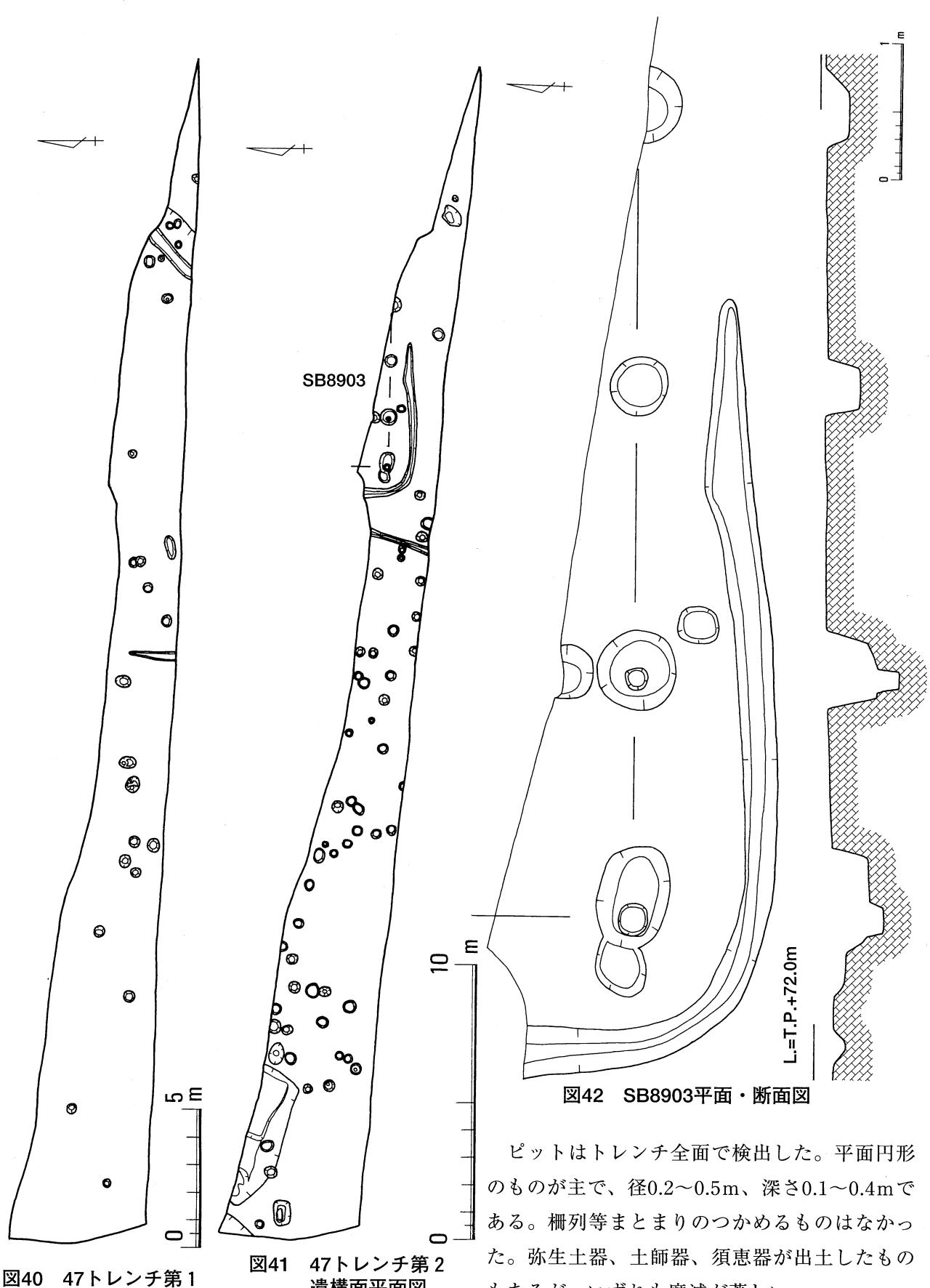


図40 47トレンチ第1
遺構面平面図

図41 47トレンチ第2
遺構面平面図

ピットはトレンチ全面で検出した。平面円形のものが主で、径0.2~0.5m、深さ0.1~0.4mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。弥生土器、土師器、須恵器が出土したものもあるが、いずれも摩滅が著しい。

第2遺構面は褐色粘質土層を除いた面である。これより下層の暗黄褐色砂

質土層からは遺物の出土がみられなかったことから、47トレンチの調査はこの面で終了した。褐色粘質土層からは土師器、須恵器が出土した。掘立柱建物、土壙、ピットを検出した。

掘立柱建物SB8903はトレンチ東半で検出した。検出したのは一列に並ぶ4基の柱穴のみであるが、柱穴列と並行してL字形に屈曲して北へ延びる幅0.3m、深さ0.1mの溝を検出した。この溝が建物に付属する雨落ち溝と考えられることから、柱穴列もさらに北方へ延びるものと考えられる。トレンチ北方へ延びる桁行3間で5.9m、梁間1間以上で1m以上の側柱の掘立柱建物の南辺であろう。主軸は東西方向と考えられる。柱間は桁行で1.75~2.1mである。柱穴の掘方は平面円形、径0.5m前後、深さ0.2~0.3mである。溝から弥生土器が、柱穴から弥生土器、土師器が出土したが、いずれも小片で、詳細な時期の決定は困難だが、44、48トレンチで検出した竪穴建物に伴う可能性もある。

土壙、ピットはトレンチ全面で検出した。平面円形、径0.2~0.5m、深さ0.1~0.4mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。弥生土器、土師器、須恵器が出土したものもあるが、いずれも小片である。

48トレンチ

48トレンチは47トレンチの北方である。地山面で標高70.9~71.8mで、北へ傾斜していた。遺構面は地山面上に堆積していた茶灰色砂質土層を除いた面で、地山面1面のみであった。茶灰色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、備前焼等が出土した。竪穴建物、溝、土壙、ピットを検出した。

竪穴建物SB8904はトレンチ北辺で検出した。深さ0.3mの竪穴の床面からコの字形の溝とピット3基を検出した。壁体溝をもつ4本柱の一辺3.4mの方形竪穴建物である。北側1/4程度の部分は後世の造成で削平されていた。壁体溝は幅0.3m、深さ0.05mである。柱穴の掘方は平面円形、径0.25~0.4m、深さ0.1~0.4mである。中央穴は検出されなかった。柱穴に囲まれた床面中央で深さ0.05mの窪みが検出された。炉跡の可能性がある。壁体溝から土器片が出土したが、摩滅が著しく、時期は不明である。

溝はトレンチ東半で検出した。東西方向のものが主で、幅0.2~0.4m、深さ0.1m未満である。土器片が出土したものもあるが、摩滅が著しい。

土壙はトレンチ全面で検出した。形状は様々である。弥生土器、土師器、須恵器が出土したものもあるが、摩滅が著しい。

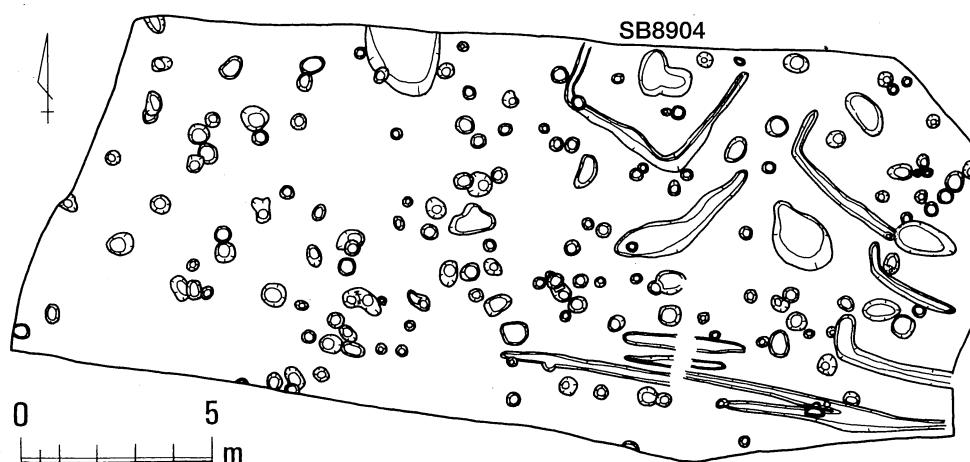


図43 48トレンチ遺構面平面図

ピットはトレンチ全面で検出した。平面円形、径0.2~0.6m、深さ0.1~0.4mである。弥生土器、土師器、須恵器が出土したものもあるが、いずれも小片で、摩滅が著しい。

土壙、ピットは弥生時代から古代にかけて長期に渡って形成されたものであろう。

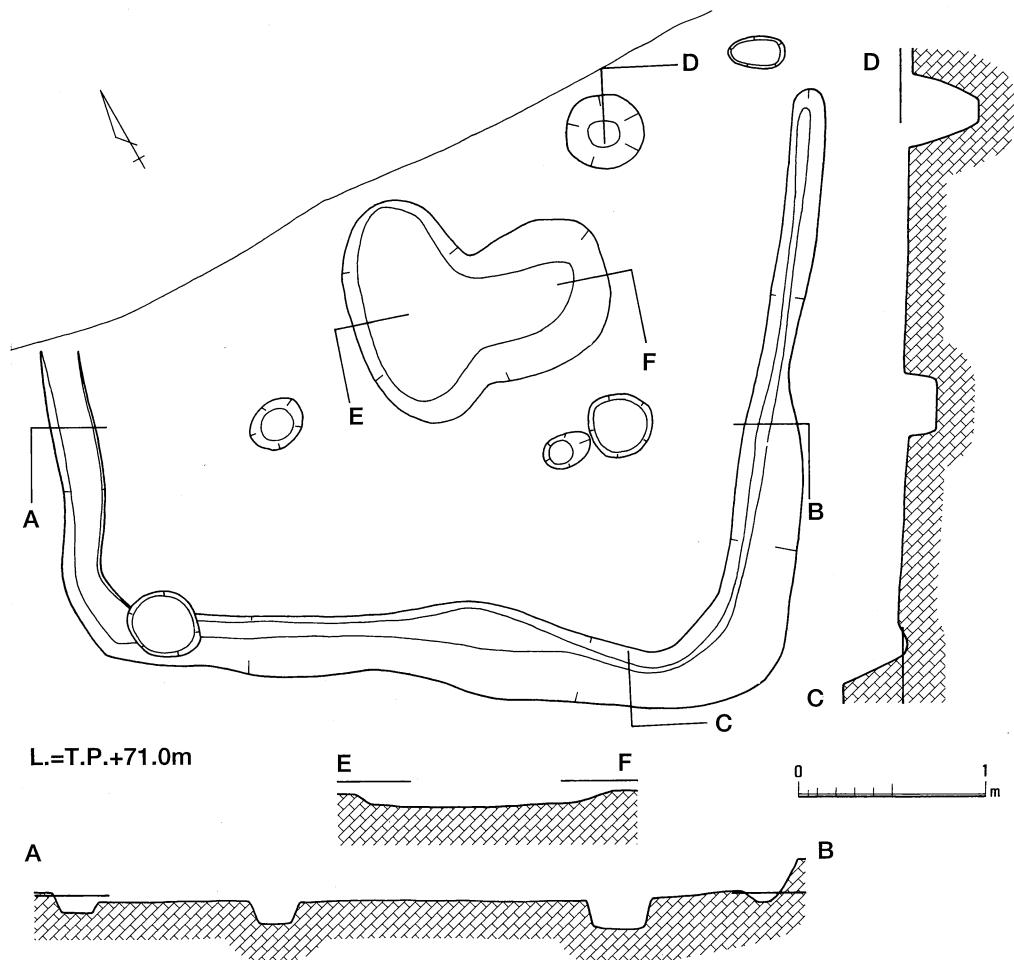


図44 SB8904平面・断面図

49トレンチ

49トレンチは西区の北辺である。トレンチの北側は寺部川によって形成された段丘崖で、北側の田面とは4.5mの比高差があった。西側は北へ開口する開析谷へ向かって落ち込んでいた。地山面で標高67.5～68.2mで、北へ傾斜していた。

遺構面は地山面上に堆積していた暗黄灰色砂質土層を除いた面で、地山面1面のみであった。暗黄灰色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、備前焼等が出土した。段差以外顕著な遺構は検出されなかった。トレンチ中央で偶蹄類の足跡を検出した。近世の耕作に伴うものであろう。

50トレンチ

50トレンチは49トレンチの南側で、北へ開口する開析谷部である。49トレンチ西側の開析谷に連なる地山面で標高68.9～73.8mで、北へ大きく傾斜していた。遺構面は地山面1面のみであった。覆土層からは弥生土器、土師器、須恵器、備前焼、陶器、磁器等が出土した。流水によって形成されたであろう段差以外顕著な遺構は検出されなかった。

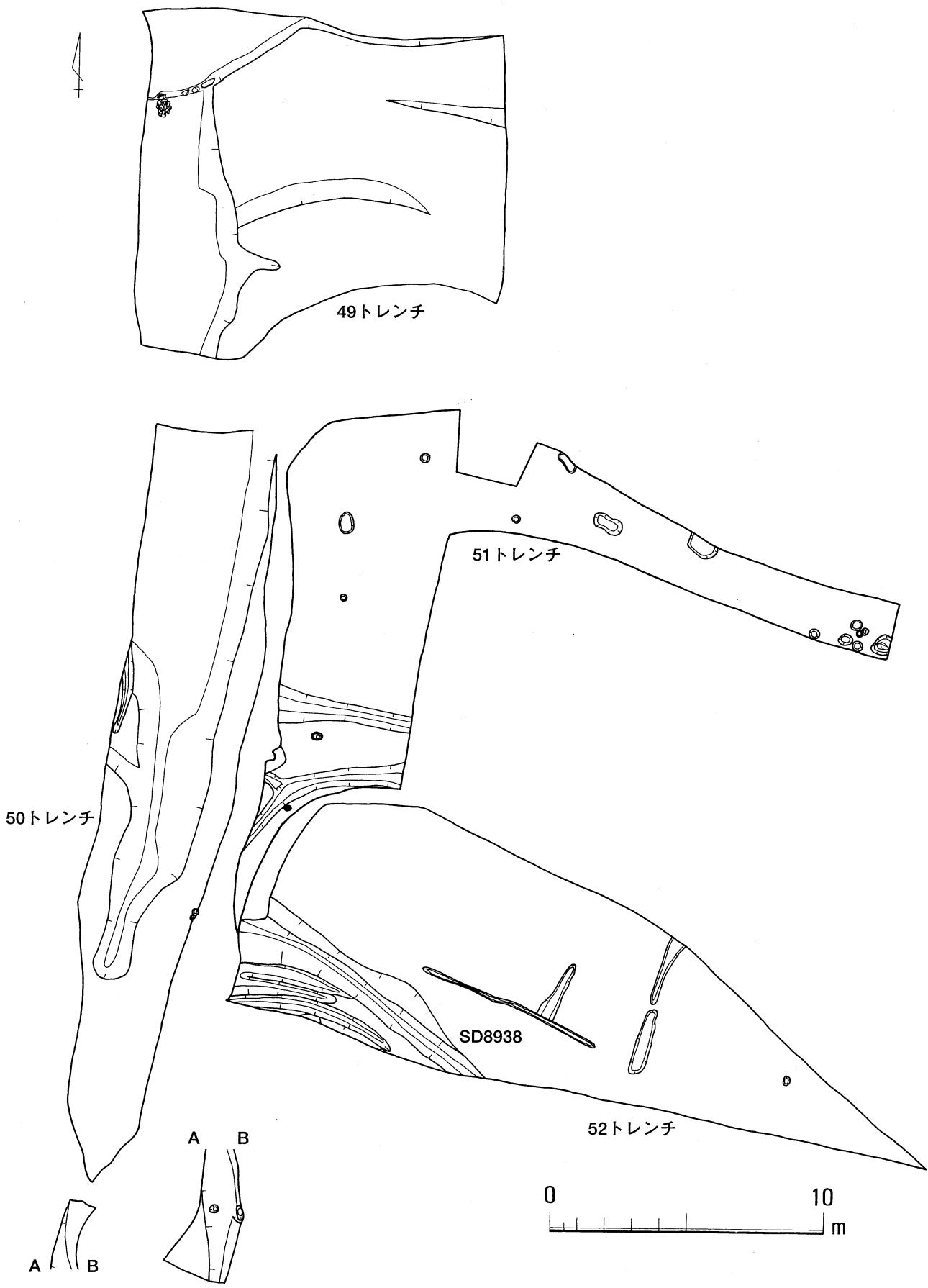


図45 49・50・51・52トレンチ第1遺構面平面図

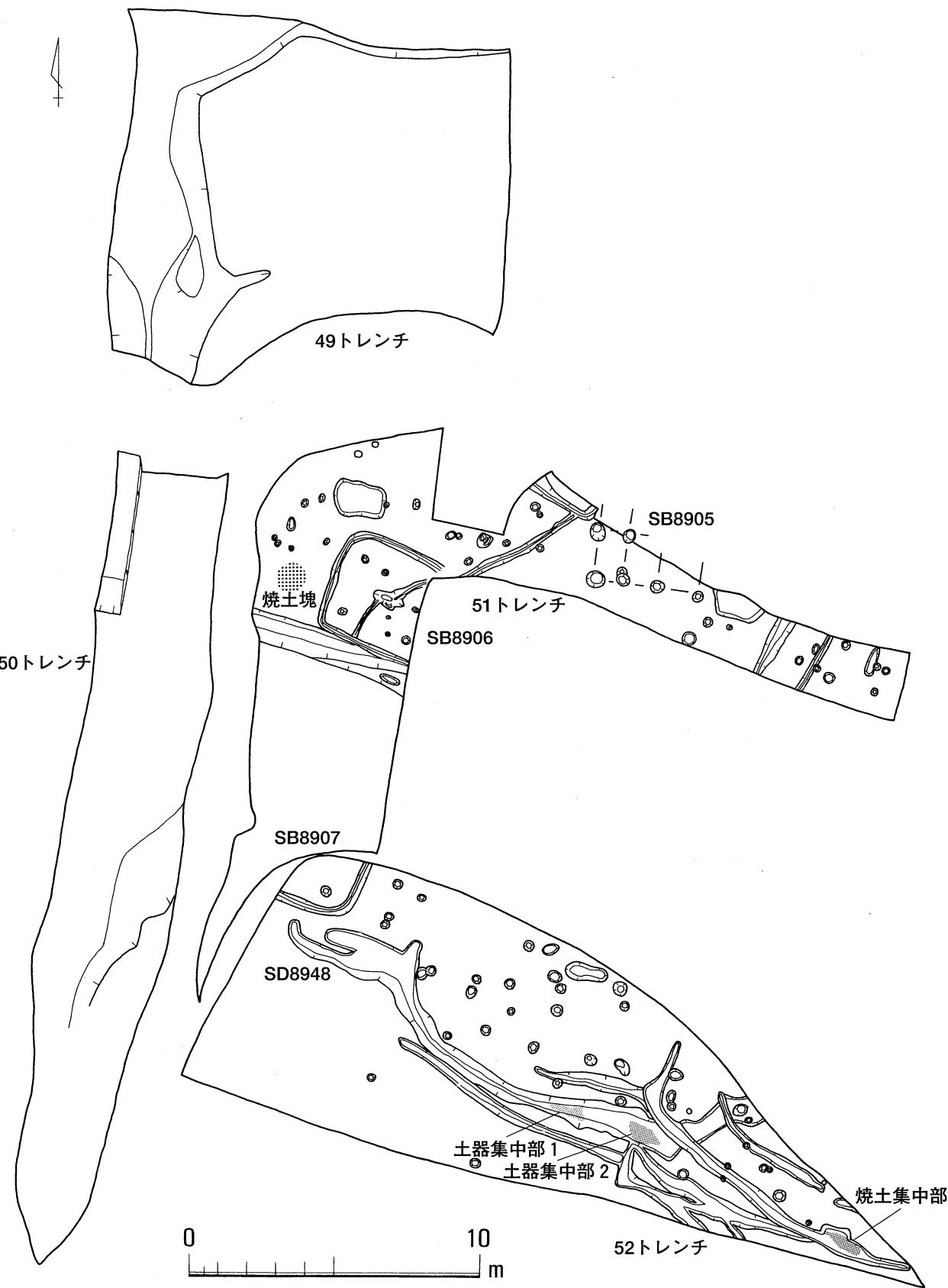


図46 49・50・51・52トレンチ第2遺構面平面図

51トレンチ

51トレンチは49トレンチの南側である。第2遺構面で標高70.1~71.2mで、北へ傾斜していた。遺構面は2面を検出した。

第1遺構面は灰茶色砂質土層を除いた面である。灰茶色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、備前焼等が出土した。溝、土壙、ピットを検出した。

溝はトレンチ南端で2条検出した。東西方向で、幅0.7m、深さ0.1mである。遺物の出土はみられなかった。近世の耕作に伴うものであろう。

土壙はトレンチ北辺で検出した。形状は様々である。弥生土器、土師器、須恵器が出土したものもある。

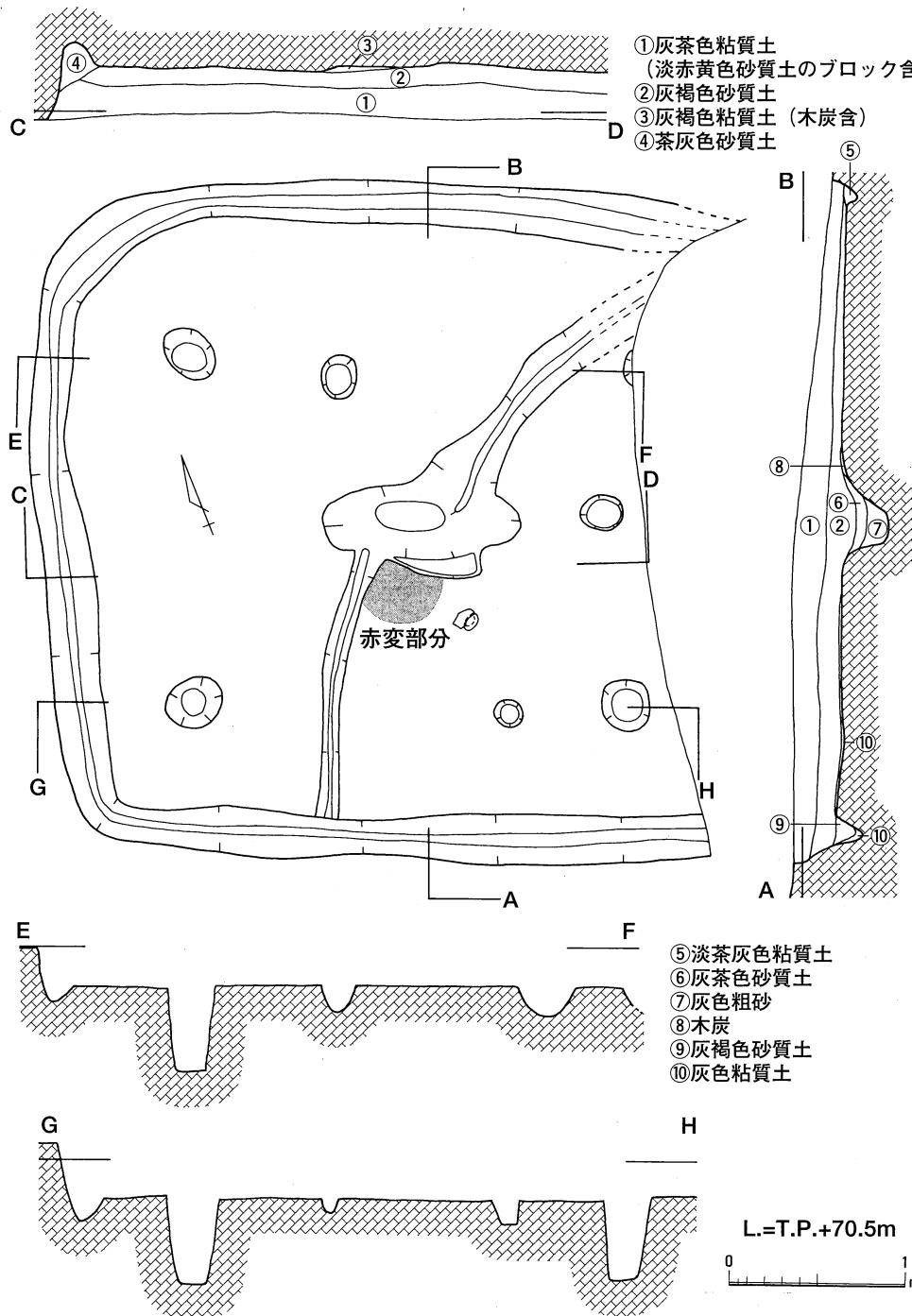


図47 SB8906平面・土層断面・断面図

ピットはトレンチ東端で検出した。平面円形、径0.2~0.4m、深さ0.1~0.4mである。弥生土器、土師器、須恵器が出土したものもある。

第2遺構面は灰褐色粘質土層を除いた面である。これより下層の灰黄褐色粘質土層からは遺物の出土がみられなかったことから、51トレンチの調査はこの面で終了した。灰褐色粘質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、備前焼が出土した。竪穴建物、掘立柱建物、溝、土壙、ピットを検出した。

竪穴建物SB8906はトレンチ中央で検出した。深さ0.3mの竪穴の床面からコの字形の溝とピット5基を検出した。壁体溝、中央穴をもつ4本柱

の一辺3.8mの方形堅穴建物である。東辺はトレンチ外である。壁体溝は幅0.3m、深さ0.1mである。中央穴の掘方は平面長円形、長径1.1m、短径0.4m、深さ0.3mで、斜めに掘り込まれていた。中央穴の南側の床面が赤変していた。また、周囲に木炭が薄く堆積していた。北東と南西の二方に幅0.2m、深さ0.1mの溝が延びていた。柱穴の掘方は平面円形、径0.3m、深さ0.4~0.5mである。堅穴の埋土から弥生土器（81・82）が、壁体溝、中央穴、柱穴から弥生土器片が出土した。弥生時代中期後葉に位置付けられよう。

この建物の西0.7mのところで径1mの円形の範囲に焼土塊が集中している部分を検出した。屋外炉であろうか。

掘立柱建物SB8905はトレンチ北辺で検出した。トレンチ北方へ延びる桁行3間で4m、梁間2間以上で1.6m以上の総柱の掘立柱建物の南半である。北半は後世の造成で削平されていた。主軸は東西南向と考えられる。柱間は桁行で1.2~1.5m、梁間で1.6mである。柱穴の掘方は平面円形、径0.5m前後、深さ0.4~0.5mである。弥生土器の小片が出土した。弥生時代後期に位置付けられようか。

溝は4条検出した。堅穴建物の北東で検出した、北東方向に延びる幅0.2m、深さ0.2mの溝から弥生土器が出土した。堅穴建物に伴う排水溝の可能性がある。

土壙は3基検出した。平面長方形、長辺2m、深さ0.1m程度である。底面は平坦である。弥生土器、土師器の小片が出土した。

ピットはトレンチ全面で検出した。平面円形、径0.2~0.4m、深さ0.1~0.5mである。弥生土器、土師器が出土したものもあるが、いずれも小片で、摩滅が著しい。

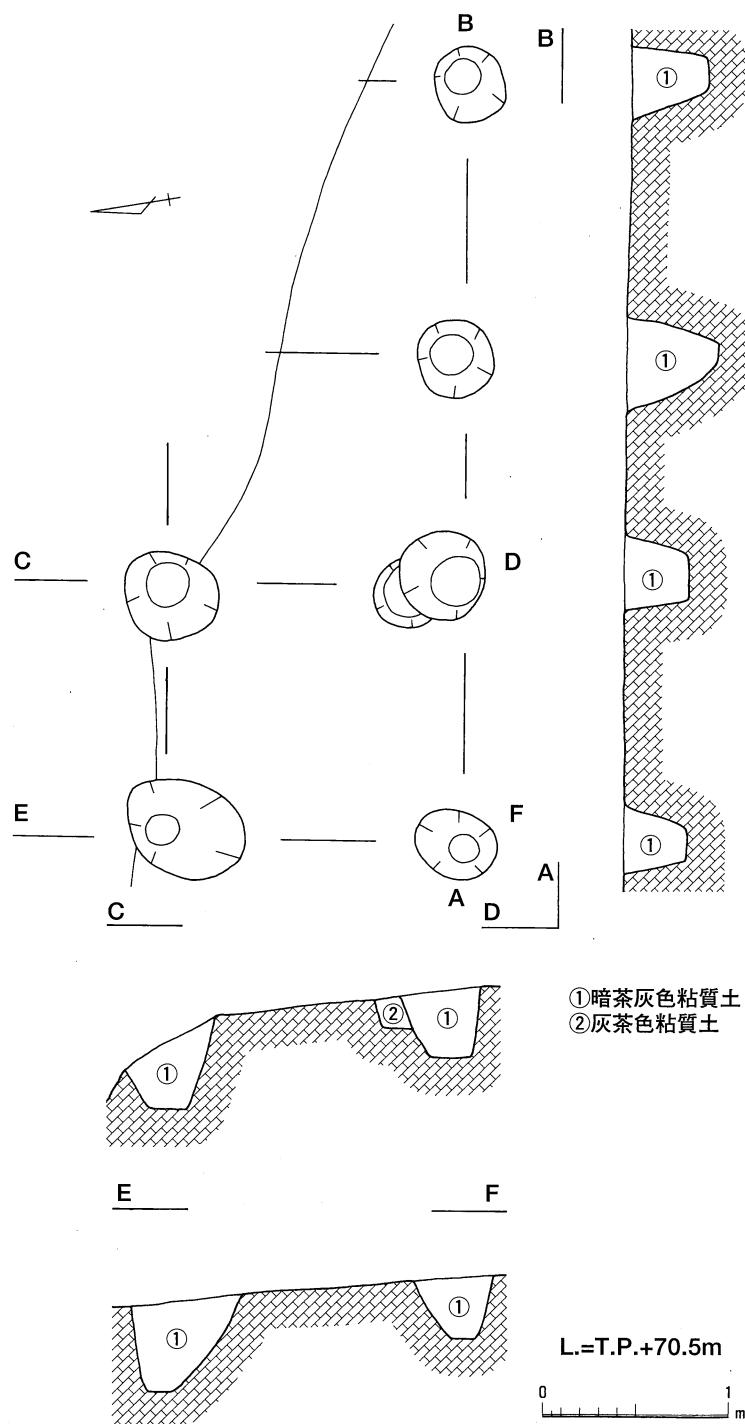


図48 SB8905平面・土層断面図

52トレンチ

52トレンチは51トレンチの南側である。地山面で標高71.7~72.5mで、北へ傾斜していた。遺構面は2面を検出した。

第1遺構面は淡茶灰色砂質土層を除いた面である。淡茶灰色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、備前焼、陶器等が出土した。溝、ピットを検出した。

溝はトレンチ中央と南西部分で検出した。中央で検出したのは田面の長辺に並行する幅0.2m、深さ0.05mのものと、それに直交する幅0.3~0.6m、深さ0.05mのものである。耕作に伴う鋤溝であろう。弥生土器、須恵器、備前焼が出土したものもある。南西部分で検出したのは4条以上の溝が切り合って並行していた。底面は北西方向へ傾斜していた。トレンチ西側の谷部へ流れ込むものであろう。

SD8938は南西部分で検出した溝のうち最も北側のものである。幅1.2m、深さ0.2mである。弥生土器、土師器(85)、須恵器(84)、青磁(83)等が出土した。

ピットはトレンチ東端で1基検出した。平面円形、径0.3m、深さ0.1mである。

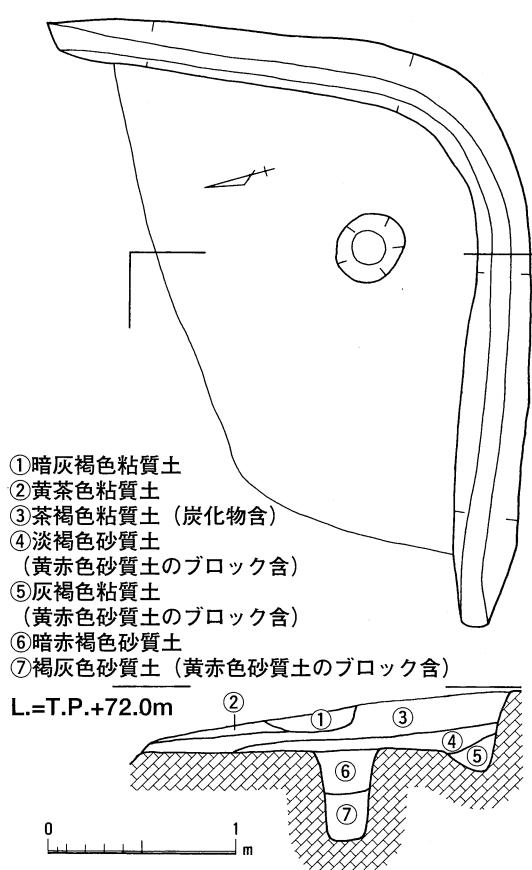


図49 SB8907平面・土層断面図

ケ所検出した。87・88・89・90・91・92・93・94・95が土器集中部1から、96・97・98・99・100・101・102・103・104、砥石(S6)が土器集中部2から出土した。二次焼成を受けて赤変していたものもあった。焼土も出土した。土器は弥生時代中期後葉から後期前半に位置付けられるものである。さらに、そこから南東10mのところで、溝の北岸に幅1.5mの範囲で焼土、木炭が集中している部分を検出した。焼土は径3~10cmの玉状に粉碎されていた。地面に被熱痕はみられなかった。鉄

溝、弥生土器も出土した。前述の被熱した土器と併せ考えると、近隣で鍛冶工房が営まれ、その廃棄物を投棄したのであろうか。

土壙、ピットはトレンチ北半を中心に検出した。平面円形のものが主で、径0.2~0.4m、深さ0.1~0.4mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。弥生土器、土師器、須恵器が出土したものもある。

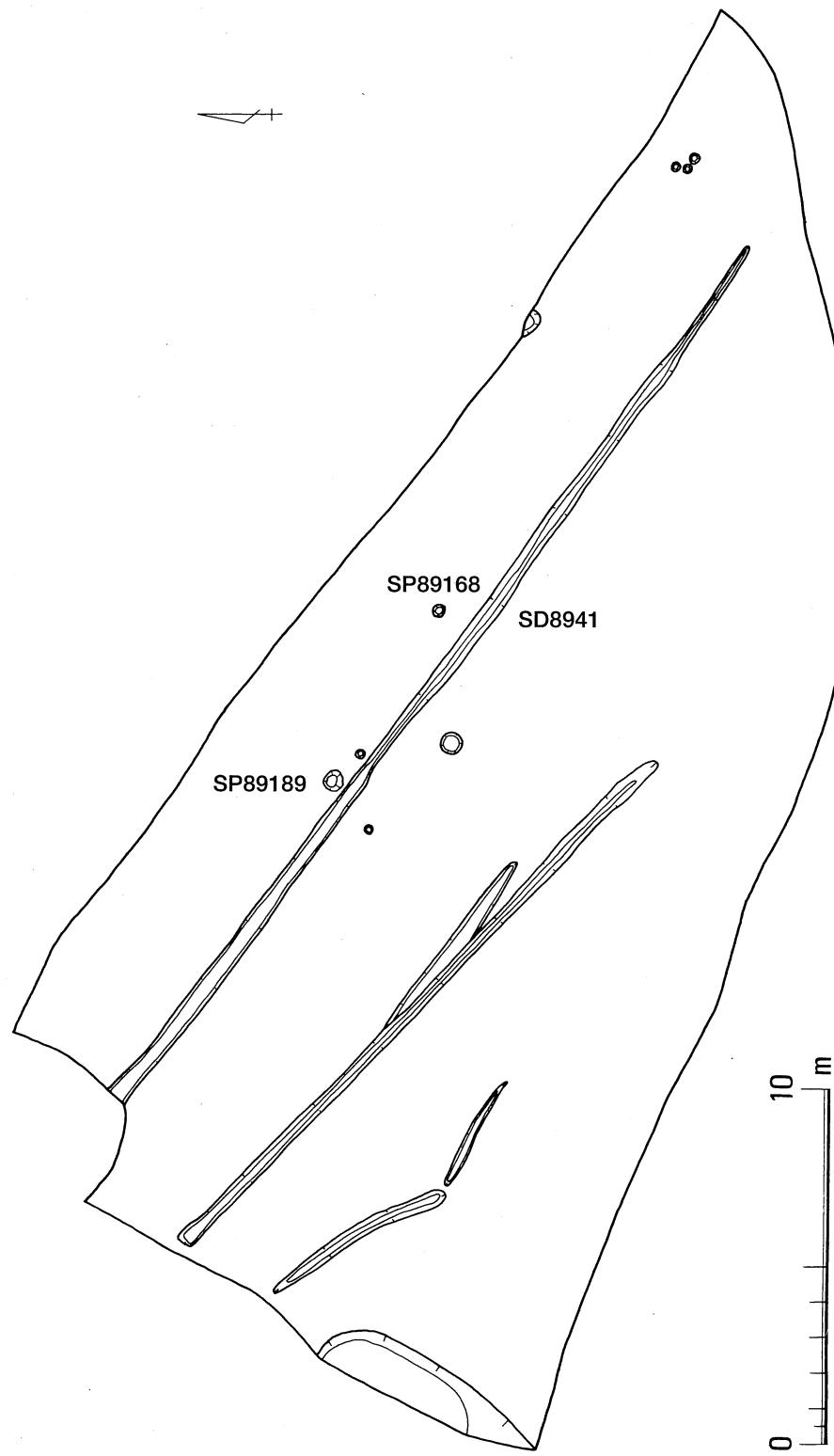


図50 53トレンチ第1遺構面平面図

53トレンチ

53トレンチは52トレンチの南側である。第3遺構面で標高73.4~74.9mで、北へ傾斜していた。遺構面は3面を検出した。

第1遺構面は厚さ0.5mの整地土層を除いた面である。整地土層からは弥生土器、土師器、須恵器が出土した。溝、土壙、ピットを検出した。

溝は田面の長辺に並行するものである。幅0.2~0.6m、深さ0.1mである。弥生土器、土師器、須恵器、陶器が出土したものもある。近世の耕作に伴う鋤溝である。

SD8941はトレンチ北側で検出した。深さ0.1m程度である。弥生土器、土師器、サヌカイト剥片(S7)が出土した。

土壙、ピットはトレンチ北半で9基検出した。平面円形、径0.2~0.6m、深さ0.1~0.2mである。弥生土器、土師器が出土したものもある。

SP89168はトレンチ北側中央で検出した。平面

円形、径0.35m、深さ0.2mである。土師器（105）、備前焼（106）が出土した。

SP89189もトレンチ北側中央で検出した。平面円形、径0.5m、深さ0.2mである。瓦質土器（107）が出土した。

第2遺構面は暗灰黄色砂質土層を除いた面である。暗灰黄色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、備前焼、青磁、サスカイト製石鏃が出土した。溝、土壙、ピットを検出した。

溝は上面で検出したものと同様に田面の長辺に並行するものである。幅0.3~0.8m、深さ0.1~0.2mで、底面は西側の谷地形へ傾斜している。弥生土器、土師器、須恵器、陶器が出土したものもある。近世の耕作に伴うものであろう。

土壙、ピットはトレンチ全面で検出した。平面円形のものが主で、径0.2~0.6m、深さ0.1~0.5mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。弥生土器、土師器が出土したものもあるが、いずれも摩滅が著しい。

第3遺構面はトレンチ北半に堆積していた茶褐色粘質土層を除いた面である。これより下層の茶黄色砂質土層からは遺物の出土がみられなかったことから、53トレンチの調査はこの面で終了した。茶褐色粘質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器が出土した。豎

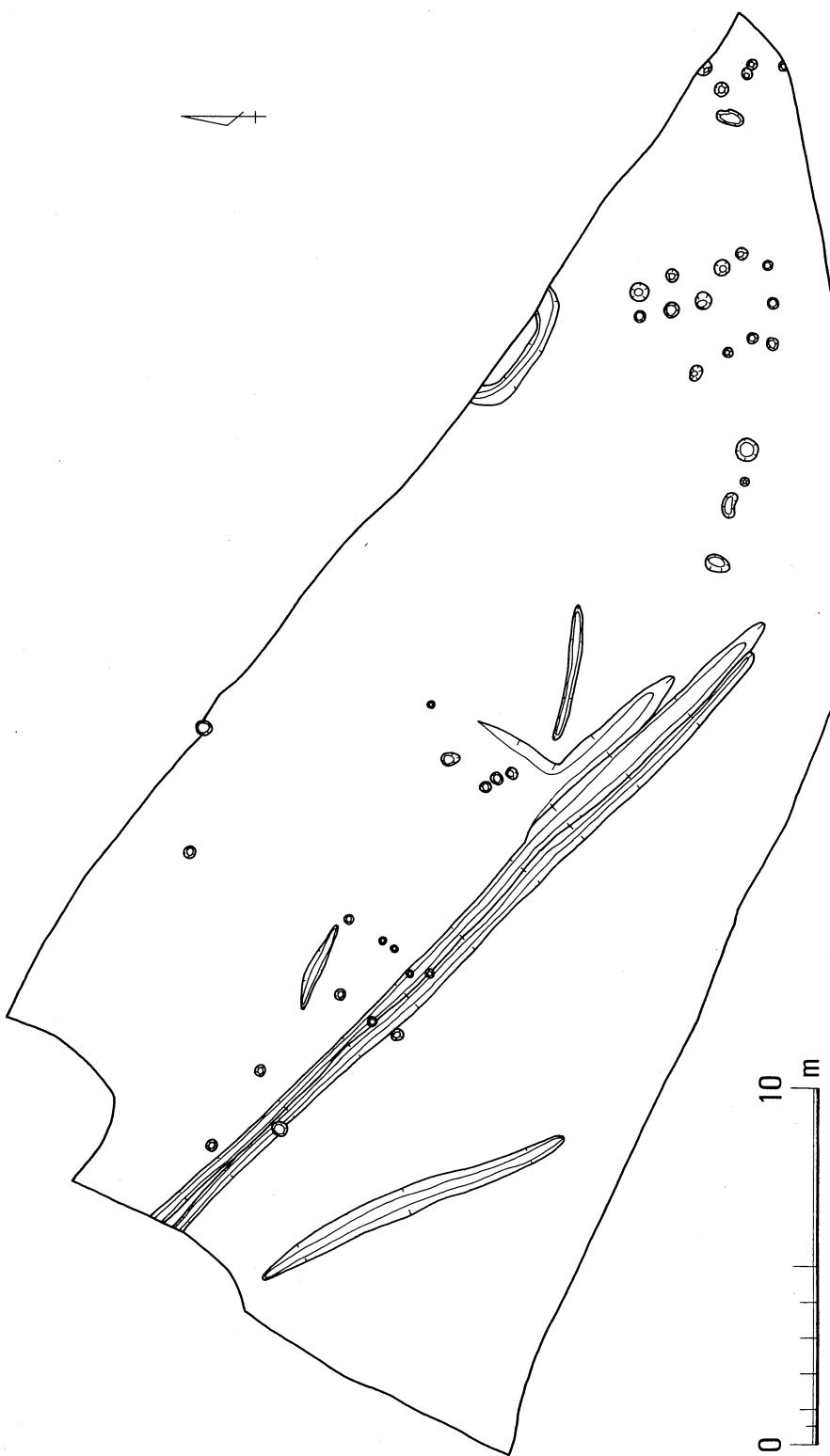


図51 53トレンチ第2遺構面平面図

穴建物、掘立柱建物、溝、土壙、ピットを検出した。

豊穴建物はトレンチ北辺でSB8908、8913、南西部で重なり合ってSB8911、8912を検出した。

北辺東側のSB8908は深さ0.3mの豊穴の床面からL字形の溝とピット1基を検出したのみであるが、壁体溝をもつ4本柱の一辺4.5m程度の方形豊穴建物の南西部分である。他の部分は後世の造成

で削平されていた。壁体溝は二段に掘り込まれ、幅0.4m、深さ0.15mである。柱穴の掘方は平面円形、径0.3m、深さ0.5mである。壁体溝からのみ弥生土器片が出土した。弥生時代後期に位置付けられよう。

北辺西側のSB8913は深さ0.35mの豊穴の床面からコの字形の溝とピット3基を検出した。壁体溝、中央穴をもつ4本柱の一辺4.2mの方形豊穴建物の南半部分である。他の部分は後世の造成で削平されていた。壁体溝SD8961は幅0.3m、深さ0.1mである。中央穴の掘方は平面長円形、長径0.5m、短径0.4m、深さ0.2mで、ほぼ垂直に掘り込まれていた。周囲に厚さ0.05mの木炭の堆積がみられた。柱穴の掘方は平面円形、径0.25m、深さ0.4mである。壁体溝SD8961から弥生土器(114・115)が、中央穴から弥生土器が出土した。弥生時代中期後葉に位置付けられよう。

南西部上面のSB8912

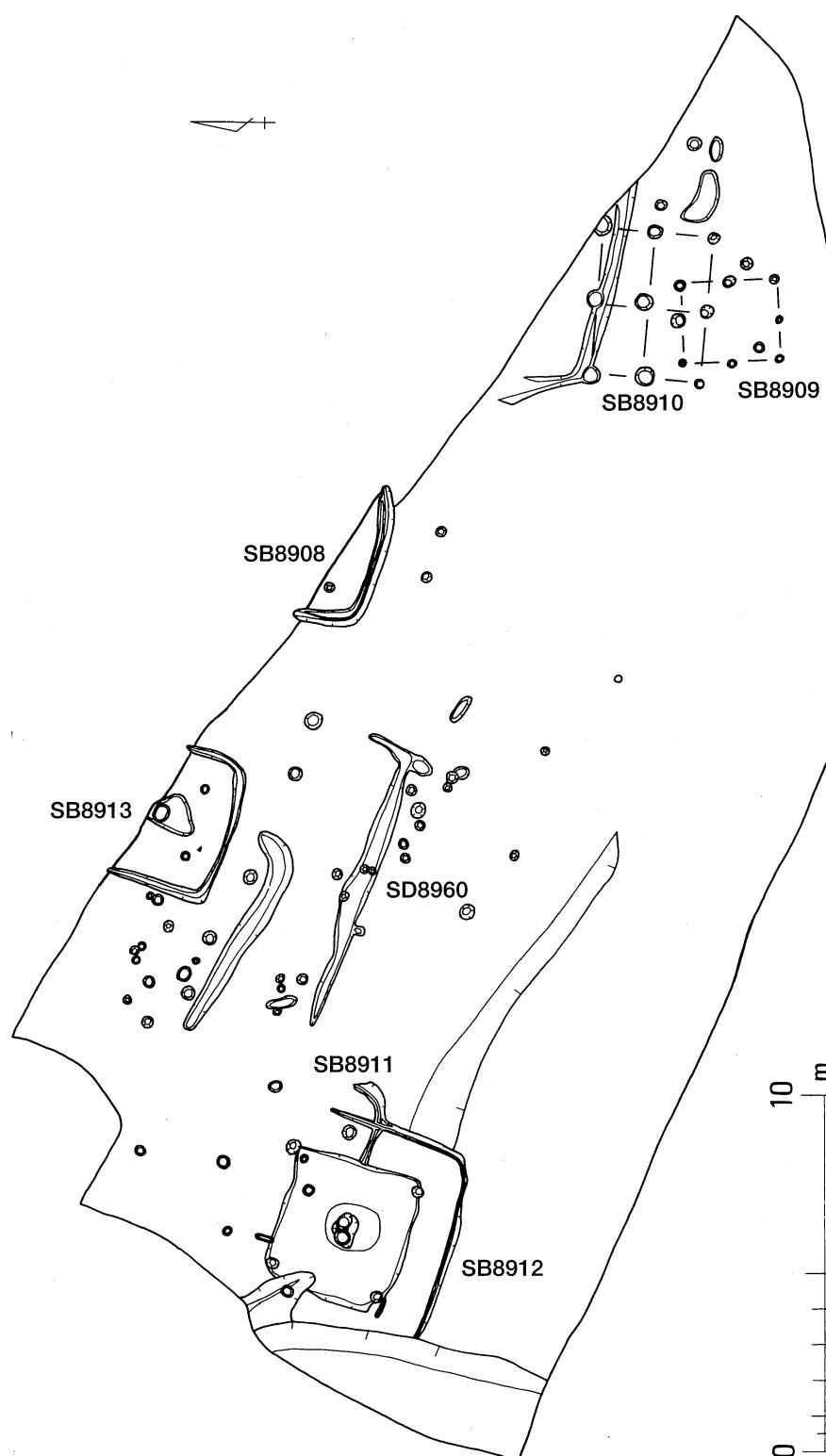
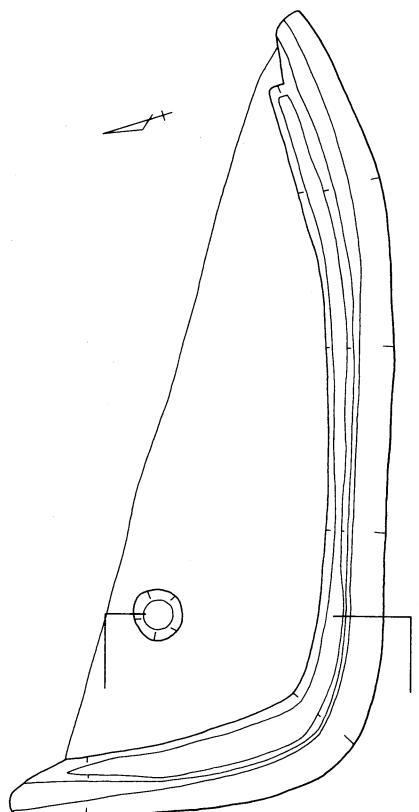
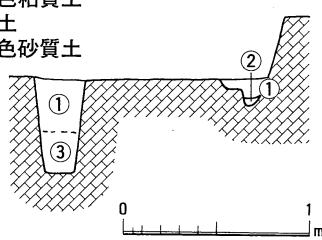


図52 53トレンチ第3遺構面平面図



L.=T.P.+74.0m

- ①淡茶褐色粘質土
- ②灰色粘土
- ③淡茶褐色砂質土



は深さ0.65mの堅穴の床面からL字形の溝とピット5基を検出した。壁体溝、中央穴をもつ4本柱の一辺6.5m程度の方形堅穴建物である。床面の壁体溝に沿った幅1mの範囲が、中央に比べて0.1m高く掘り残されていた。ベッド状遺構である。北辺、西辺は後世の造成で削平されていた。壁体溝は幅0.25m、深さ0.1mである。中央穴は隣接して2基検出した。東側のSP89208の掘方は平面長円形、長径0.5m、短径0.35m、深さ0.7mで、斜めに掘り込まれていた。西側の掘方は平面円形、径0.4m、深さ0.6mで、垂直に掘り込まれていた。周囲に厚さ0.05mの木炭の堆積がみられた。柱穴の掘方は平面円形、径0.3m、深さ0.5~0.6mである。南西の柱穴の底面から上面が平らな石を検出した。礎石であろうか。埋土から弥生土器(109・110・111・112)が、東側の中央穴SP89208から弥生土器(113)が、西側の中央穴、柱穴から弥生土器片が出土した。弥生時代後期末期に位置付けられよう。中央穴を2基検出したことから、同一地点で柱穴を再利用しての建て替えも考えられる。

下面のSB8911は深さ0.3mの堅穴の床面から、L字形の溝とピット1基を検出したのみであるが、壁体溝をもつ4本柱の方形堅穴建物の南東部分であろう。他の部分は後世の造成で削平されていた。SB8912の北側のベッド状遺構の上で検出した幅0.15m、深さ0.05mの溝が壁体溝の西側の残存であるならば、一辺5m程度になる。壁体溝は幅0.25m、深さ0.05mである。柱穴

図53 SB8908平面・土層断面図

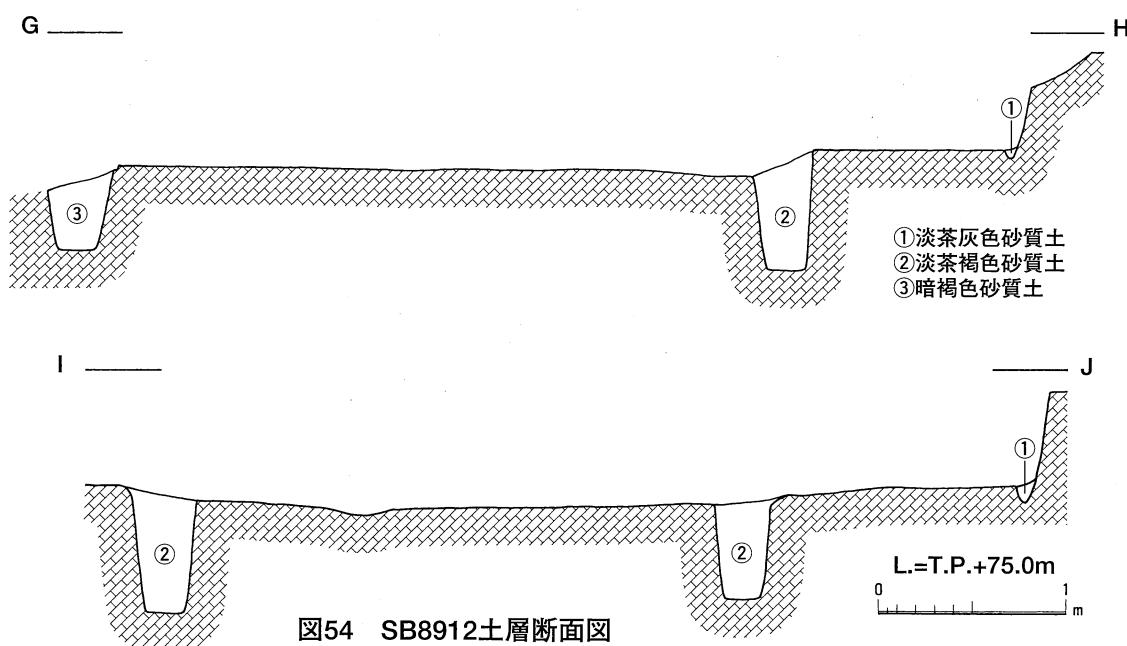


図54 SB8912土層断面図

の掘方は平面円形、径0.4m、深さ0.5mである。壁体溝、柱穴から弥生土器片が出土した。摩滅が著しく、詳細は不明だが弥生時代後期に位置付けられよう。

掘立柱建物はトレーンチ東端で一部重なり合ってSB8909、8910を検出した。柱穴の切り合いも無く、遺物も少ないため、前後関係は不明である。

北側の**SB8910**は桁行2間で4.1m、梁間2間で3.15mの総柱の掘立柱建物である。主軸は東西方向である。柱間は桁行で2.0~2.1m、梁間で1.5~1.65mである。柱穴の掘方は平面円形、径0.25~0.5m、深さ0.2~0.5mである。土器片が出土したものもあるが、詳細な時期は不明である。西側で検出した竪穴建物に伴う可能性もある。

南側の**SB8909**は桁行2間で2.65m、梁間2間で2.2mの側柱の掘立柱建物である。主軸は南北方向である。柱間は桁行で1.3~1.35m、梁間で1~1.2mである。柱穴の掘方は平面円形、径0.25~0.35m、深さ0.2~0.4mである。遺物の出土はみられなかった。

溝は3条検出した。東西方向で、幅0.5~0.7m、深さ0.1mである。弥生土器、土師器、須恵器が出土した。

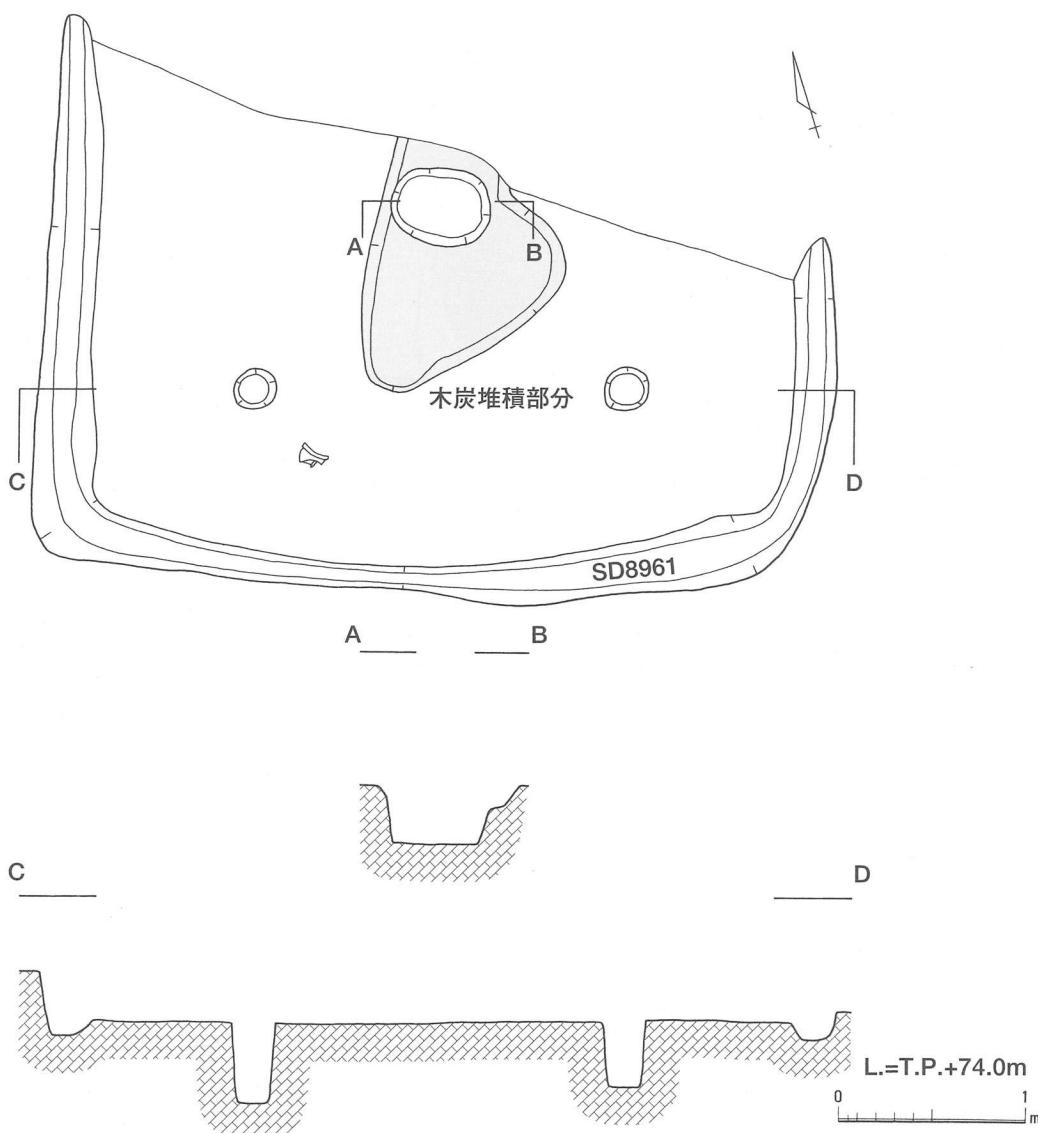


図55 SB8913平面・断面図

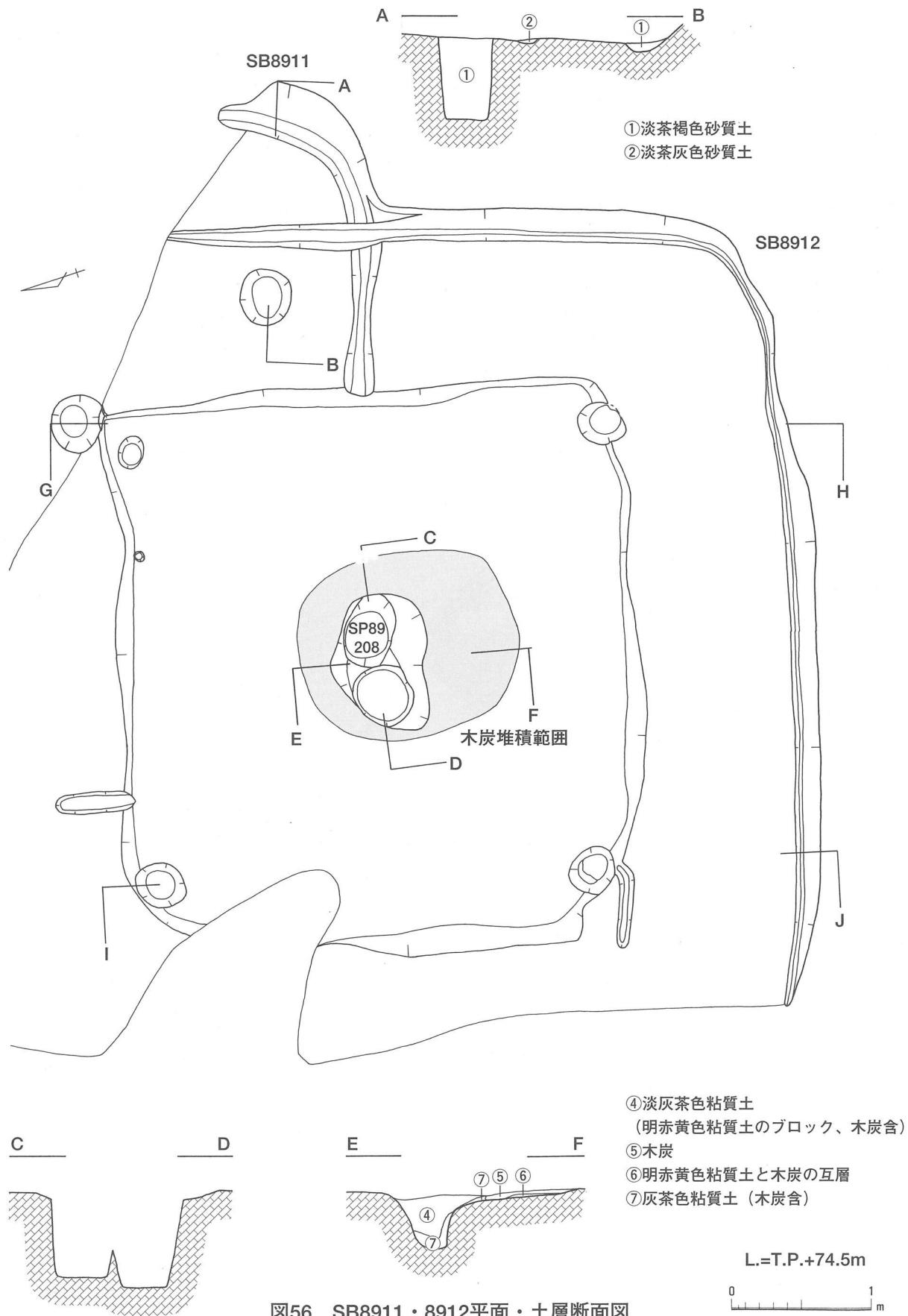


図56 SB8911・8912平面・土層断面図

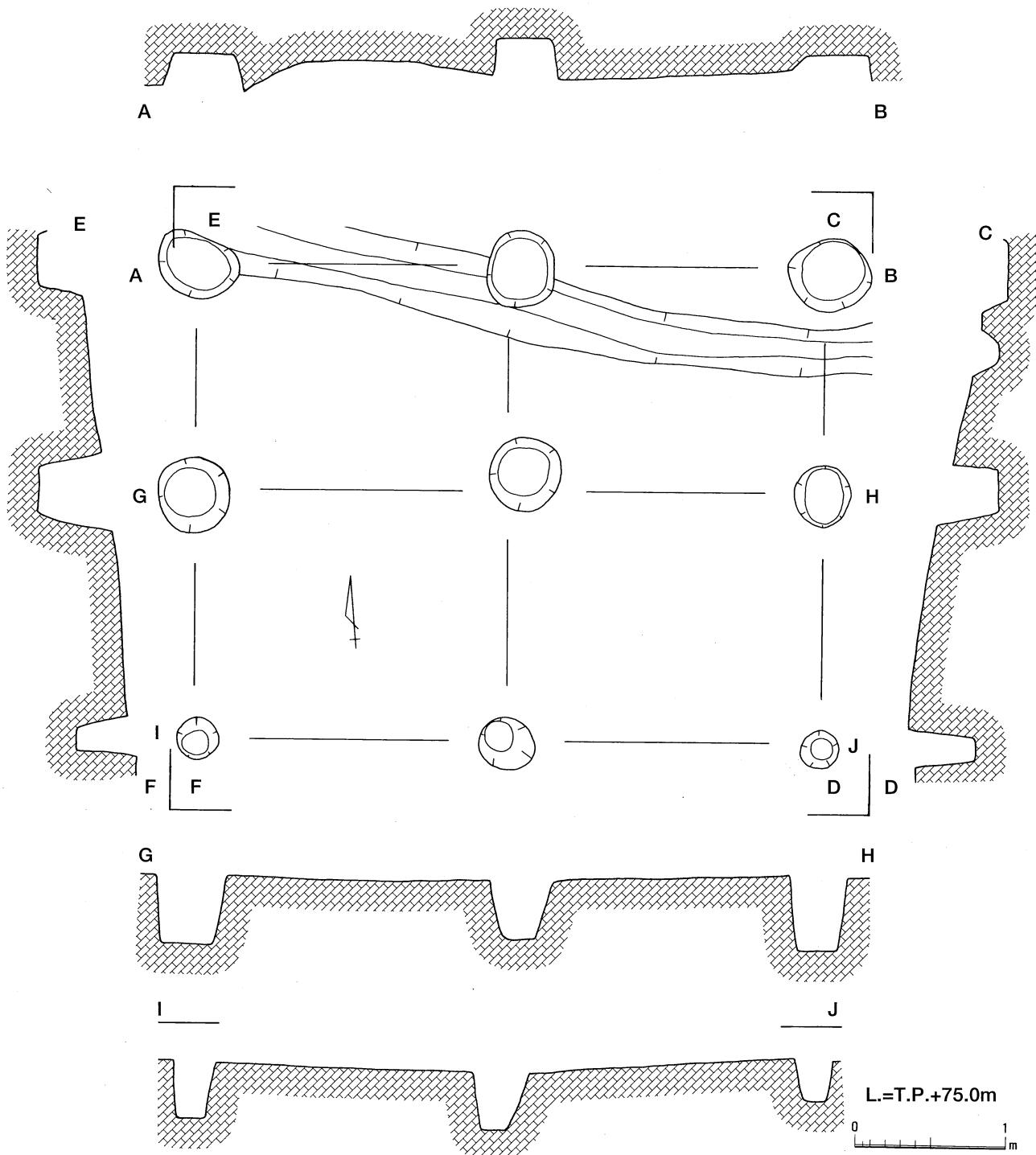


図57 SB8910平面・断面図

SD8960はトレンチの北西部、SB8913の南側で検出した。東西方向で、幅0.6m、深さ0.15mである。弥生土器（116）が出土した。

土壙、ピットは遺構面北半で検出した。平面円形のものが主で、径0.2~0.5m、深さ0.1~0.5mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。弥生土器、土師器の小片が出土したものもある。

53トレンチは北側の田面とは2.4mの比高差がある、舌状に張り出した高位部である。西区のトレンチの中では最も多くの建物を集中して検出した。東区の35トレンチと同様に、安定していた土地

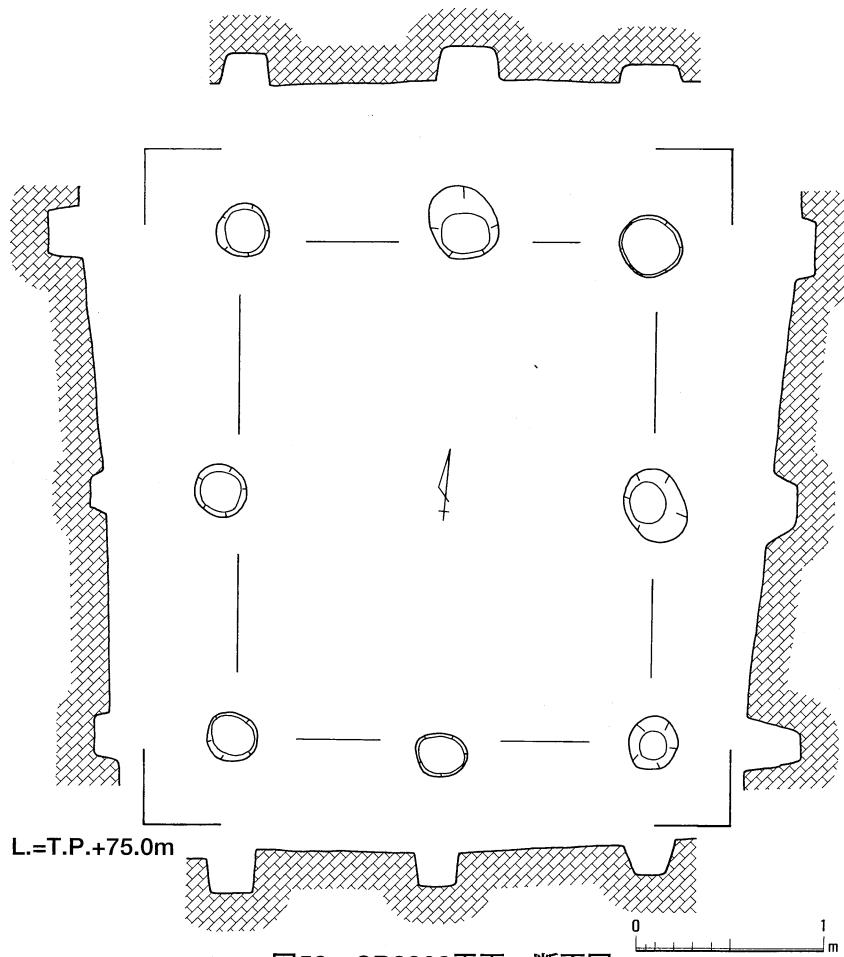


図58 SB8909平面・断面図

作地としたようで、下位の遺構面ではその一部と考えられる谷地形を検出した。地山面で標高66.8～68.0mで、西へ傾斜していた。包含層は低位部、トレンチ西半のみにみられた。従って、トレンチ西半で遺構面を4面検出した。

第1遺構面は淡茶褐色粘質土層を除いた面である。淡茶褐色粘質土層からは弥生土器、土師器等が出土した。トレンチ中央でピットを4基検出した。平面円形、径0.2～0.3m、深さ0.1～0.3mである。弥生土器、土師器等が出土したものもある。

第2遺構面は暗褐色粘質土層を除いた面である。暗褐色粘質土層からは弥生土器が出土した。溝、土壙を検出した。

溝はトレンチ西端で1条検出した。南北方向で、幅0.2m、深さ0.1mである。遺物の出土はみられなかった。

土壙はトレンチ南辺で4基検出した。平面橢円形、長径0.3～0.4m、短径0.2～0.3m、深さ0.1mである。弥生土器が出土した。

第3遺構面は黄茶色砂質土層を除いた面である。黄茶色砂質土層からは弥生土器、土師器が出土した。遺構面中央で溝を1条検出した。南北方向で、幅0.8m、深さ0.1mである。弥生土器、土師器が出土した。また、溝の東側で谷状の落ち込みの北岸をなすと考えられる斜面を検出した。

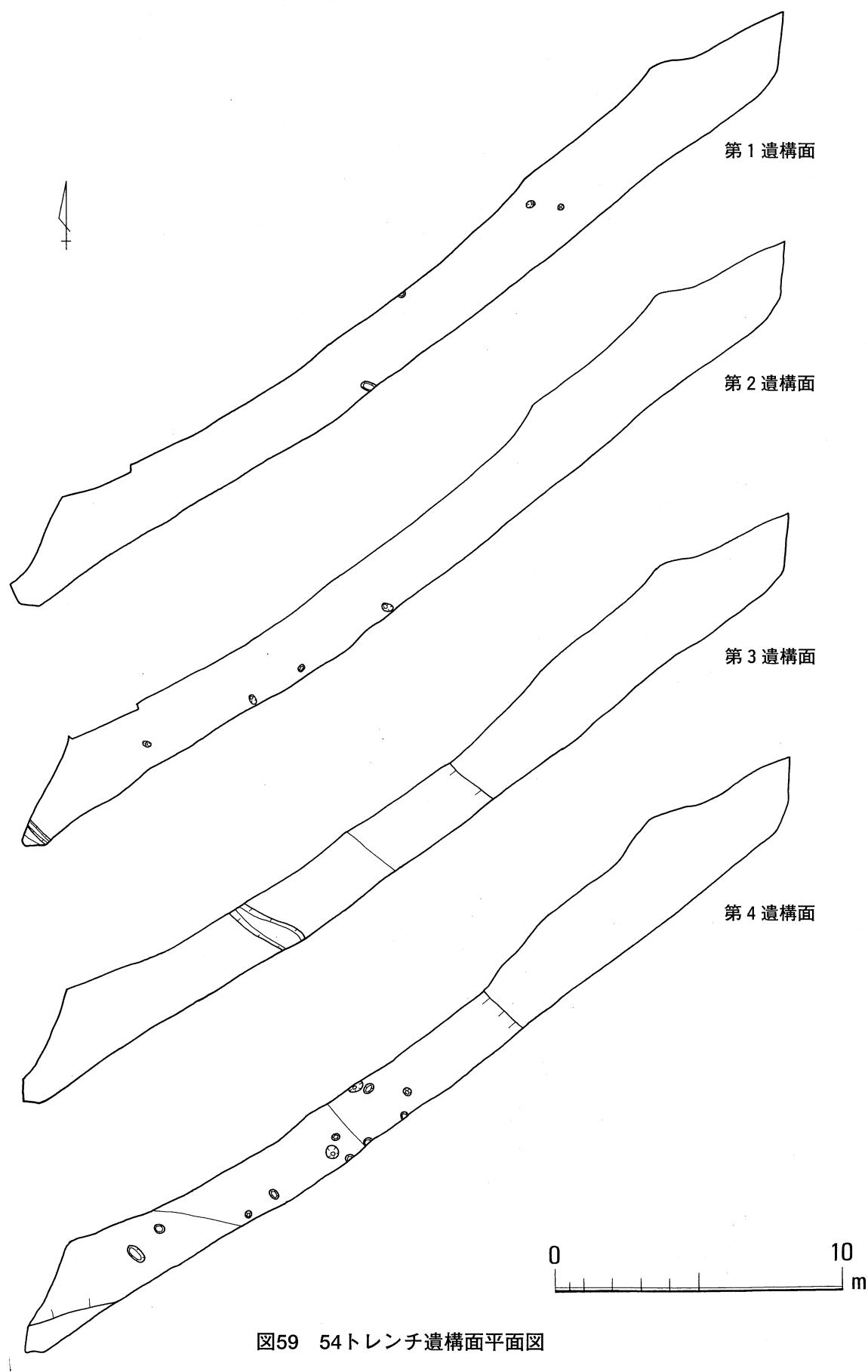
第4遺構面は地山面上に堆積していた暗灰褐色粘質土層を除いた面で、地山面である。暗灰褐色粘質土層からは弥生土器、サヌカイト剥片(S8)が出土した。谷状の落ち込み、ピットを検出した。

であったことから、長期に渡って利用されていたことを示している。また、下方の51・52トレンチも53トレンチと同様に舌状に張り出した地形であり、最も張り出した部分で建物を検出した。

51～53トレンチにかけては一つの尾根であったものを削平して平坦面を形成したもので、西区の中心として、安定して利用されていたことを示しているといえよう。

54トレンチ

54トレンチは61トレンチの西側である。水路予定地のため、底面で幅2mほどの狭隘なトレンチとなった。54トレンチを設けた田は西へ開口する開析谷が埋没した部分を耕



谷状の落ち込みは上面で検出したものと同様に西へ傾斜していた。

ピットは遺構面全面に散在して検出した。平面円形が主で、径0.2~0.4m、深さ0.1~0.2mである。弥生土器が出土したものもある。

55トレンチ

55トレンチも西区の南端である。地山面で標高70.0~71.8mで、西へ傾斜していた。

遺構面は地山面上に堆積していた明灰黄色砂質土層を除いた面で、地山面1面のみであった。明灰黄色砂質土層からは弥生土器が出土した。溝、土壙、ピットを検出した。

溝は2条検出した。トレンチ東辺で検出したものは南北方向で、幅0.5m、深さ0.1mである。遺物の出土はみられなかった。トレンチ西辺で検出したものは南北方向で、幅1.3m、深さ0.1~0.2mであ

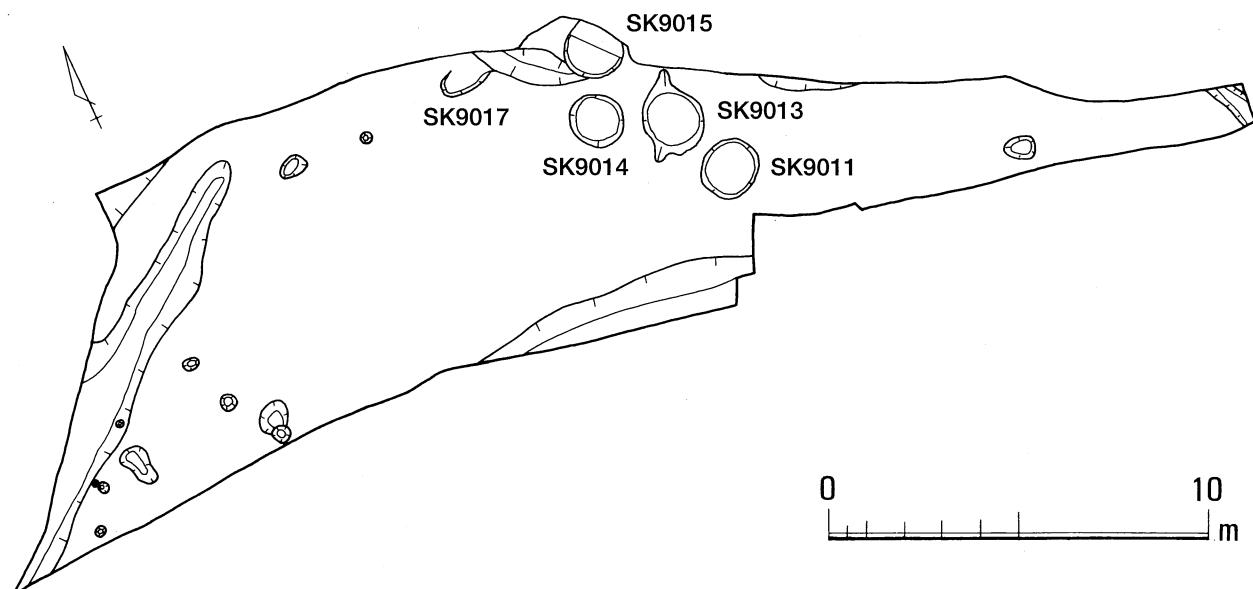


図60 55トレンチ遺構面平面図

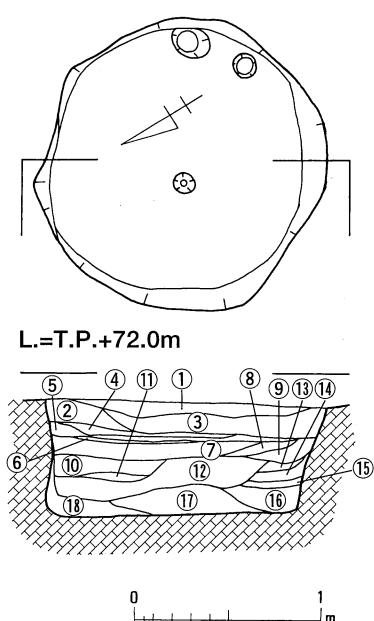


図61 SK9011平面・土層断面図

- ①淡茶褐色粘質土（炭化物含）
- ②暗灰黄色砂質土
- ③黄褐色粘質土（黄橙色砂質土のブロック含）
- ④明黄橙色砂質土
- ⑤淡褐色粘質土
- ⑥淡黄色砂質土
- ⑦淡茶褐色粘質土（橙色粘質土のブロック含）
- ⑧淡茶褐色粘質土と橙色粘質土の混じり
- ⑨暗黄灰色砂質土（炭化物含）
- ⑩淡褐色粘質土（炭化物含）
- ⑪暗黄色砂質土
- ⑫暗黄褐色砂質土（炭化物含）
- ⑬淡橙色砂質土
- ⑭黄灰色砂質土（炭化物含）
- ⑮淡橙色砂質土
- ⑯暗黄灰色砂質土（炭化物含）
- ⑰暗灰黄色砂質土
- ⑱暗橙色粗砂（炭化物含）

①上層、②~⑥中層、⑦~⑯下層とした

る。底面は西へ傾斜していた。54レンチで検出した谷状の落ち込みへつながるものであろう。弥生時代後期の弥生土器が出土した。

土壙はトレンチ中央で5基検出した。深さ0.6m以上のSK9011、9013、9015の3基、それより浅いSK9014、9017の2基に大別できた。

SK9011は検出面で、平面円形、径1.5mである。壁面はほぼ垂直に掘り込まれていた。深さ0.6mである。底面は平面

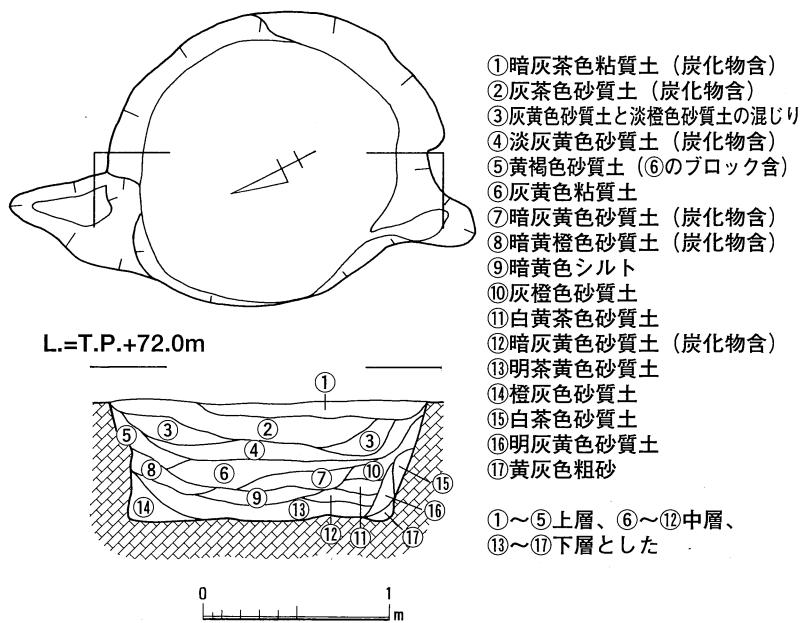


図62 SK9013平面・土層断面図

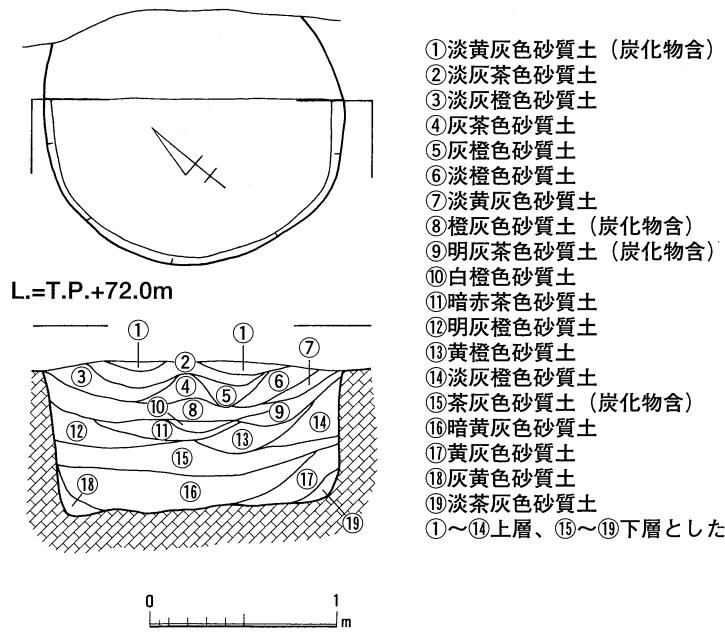


図63 SK9015平面・土層断面図

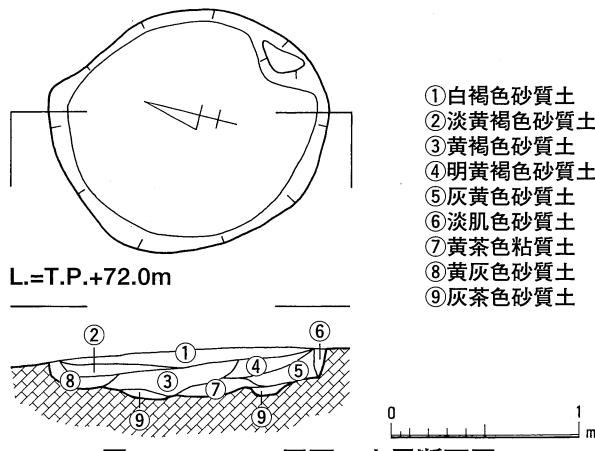


図64 SK9014平面・土層断面図

円形、径1.4mである。平坦であるが、径0.1m、深さ0.1~0.2mの円錐形状に底が狭まるピットを3基検出した。弥生土器が出土した。117・118が中層から、119が下層から出土した。

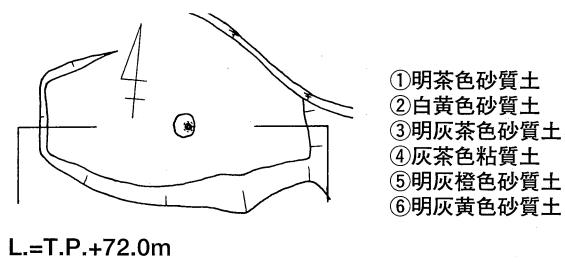
SK9013は検出面で、平面円形、径1.5mである。壁面はほぼ垂直に掘り込まれていた。深さ0.6mである。底面は平面円形、径1.3mである。平坦である。弥生土器が出土した。120・121・122が上層から、123・124・125が中層から、126・127が下層から出土した。

SK9015はトレンチの北辺で検出した。上段からの斜面堆積層に覆われていたため、西半部分のみ調査した。検出面で、平面円形、径1.6mである。壁面は垂直に掘り込まれていた。深さ0.8mである。底面は平面円形、径1.5mである。平坦である。弥生土器が出土した。128が上層から、129が下層から出土した。

これらは上段の56トレンチで検出された深さ1m以上の土壌と同様に、貯蔵穴であろう。弥生時代後期末期に位置付けられよう。

SK9014は平面橢円形、長径1.5m、短径1.3m、深さ0.25mである。壁面は斜めに掘り込まれていた。底面はほぼ平坦である。弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器が出土した。

SK9017は北側を削平されていたが、平面は東西に長い六角形を呈するようである。長径1.15m、短径0.85m、深さ0.05mであろう。壁面は斜めに掘り込まれていた。底面は平坦である。弥生土器が出土した。



これらは上段の56トレンチで検出された深さ1m以下の土壤と同様に、貯蔵穴の掘削途中で放棄したものであろうか。

ピットは主にトレンチ西側で検出した。平面円形が主で、径0.2~0.7m、深さ0.1~0.4mである。弥生土器が出土したものもある。

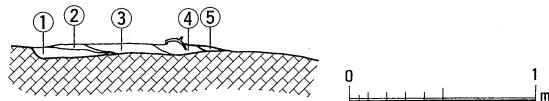


図65 SK9017平面・土層断面図

遺構面は地山面上に堆積していた黄灰色砂質土層を除いた面で、地山面1面のみであった。黄灰色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、備前焼、陶器等が出土した。溝、土壙、ピットを検出した。

溝はトレンチ西半で田面の長辺に並行する東西方向のものを2条検出した。北側のものは幅0.2m、深さ0.05mである。遺物の出土はみられなかった。南側のものは幅0.3~1.1m、深さ0.1mである。底面は西へ傾斜していた。遺物の出土はみられなかった。

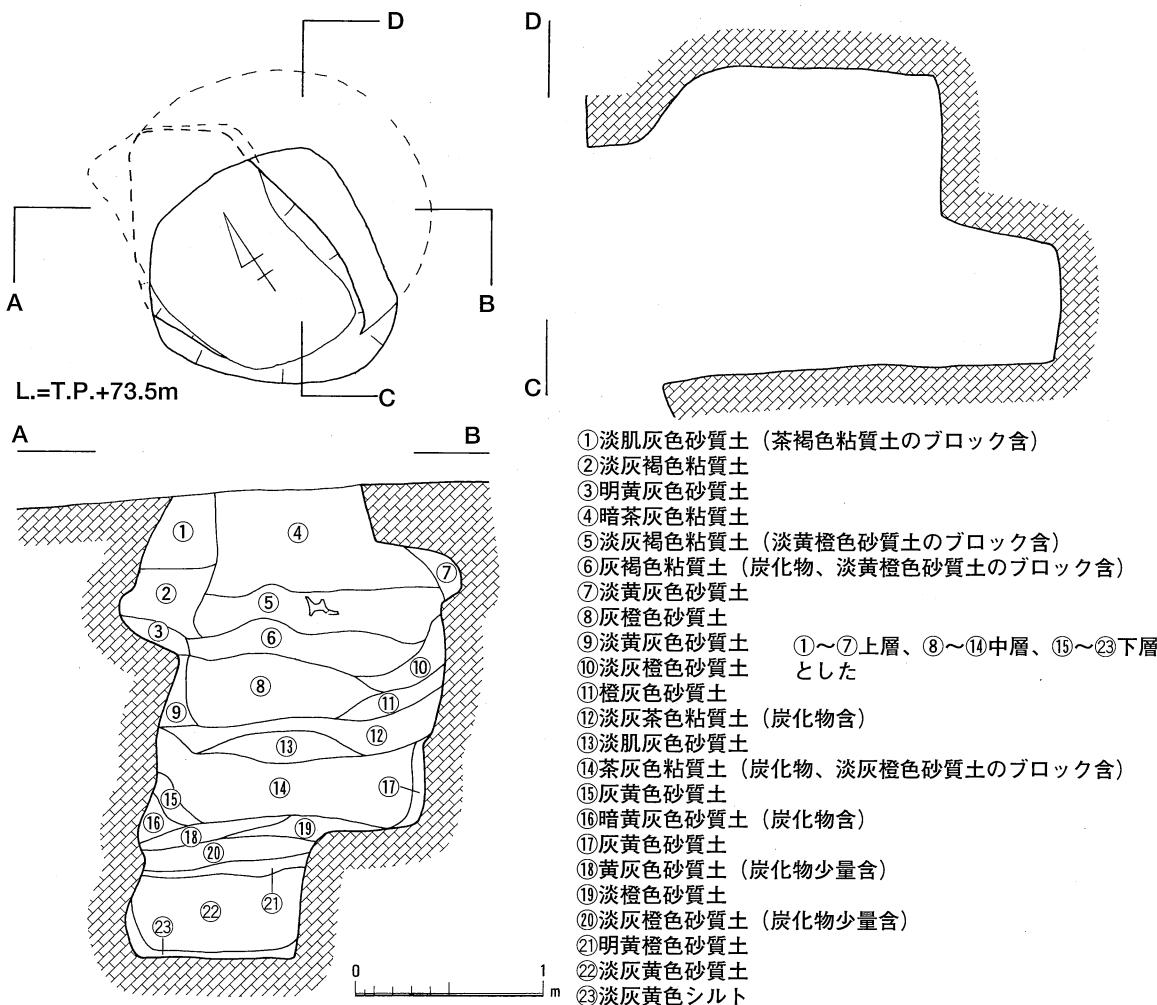


図66 SK9019平面・土層断面・断面図

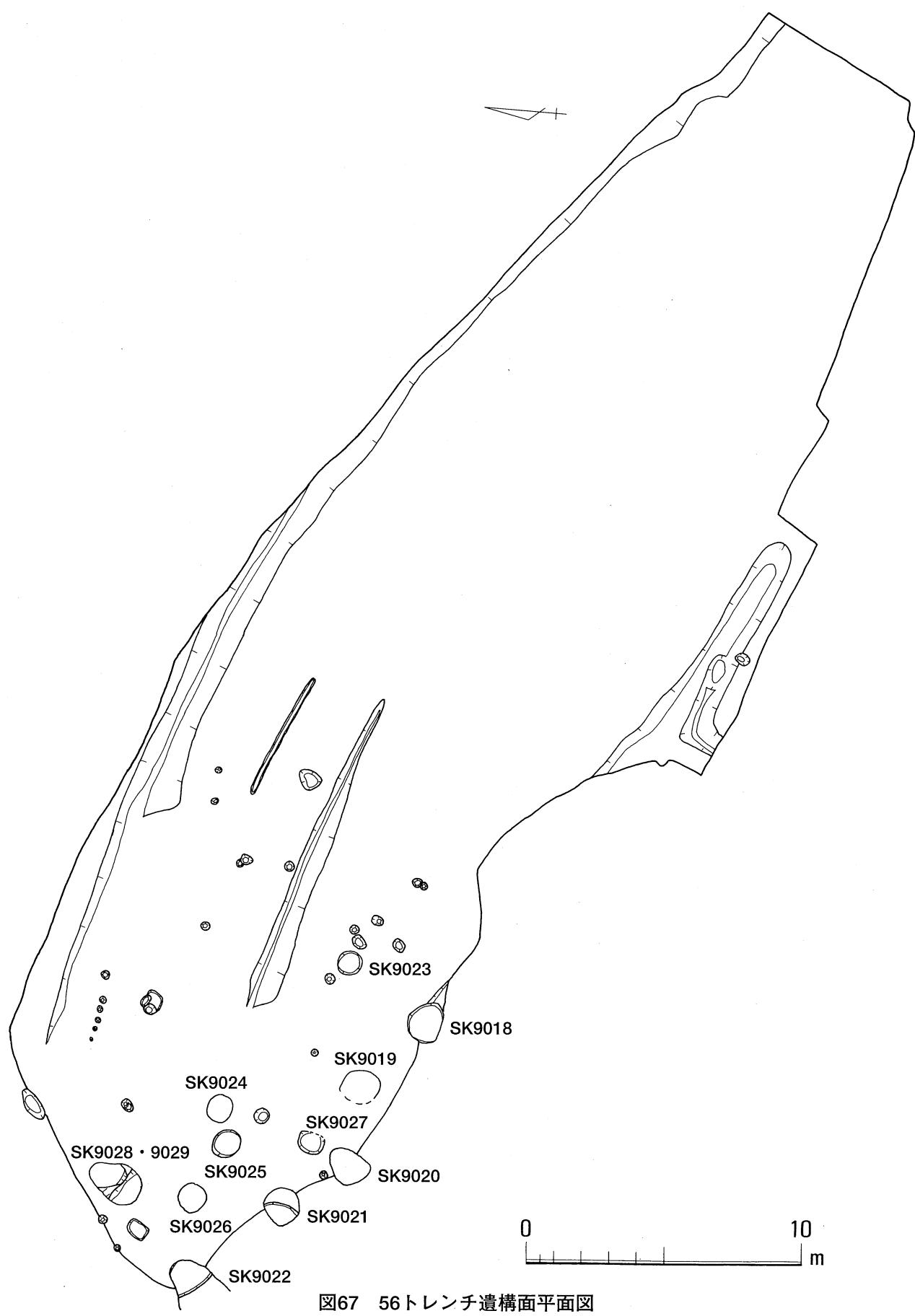


図67 56トレンチ遺構面平面図

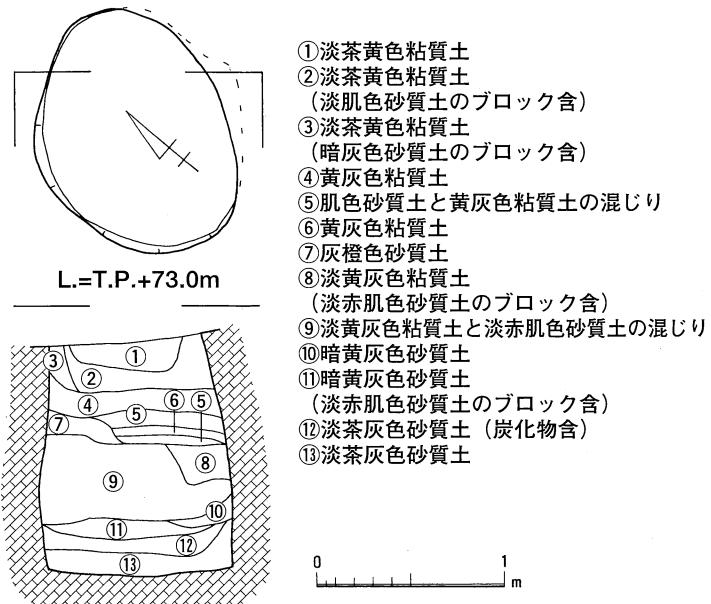


図68 SK9020平面・土層断面図

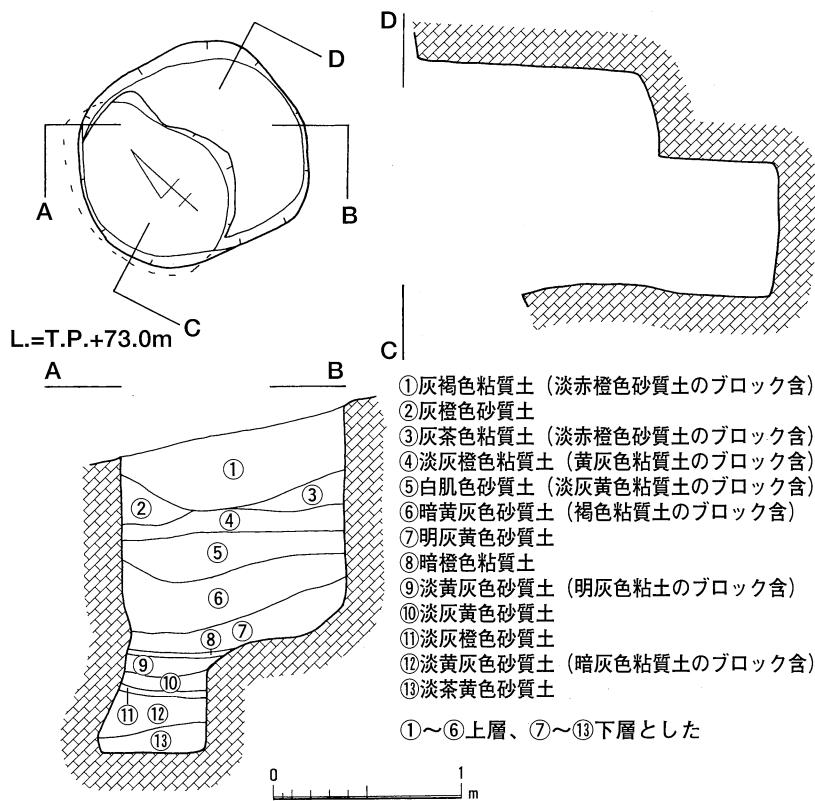


図69 SK9021平面・土層断面図

m、短径0.95mである。西へ緩やかに傾斜し、西半はさらに西側の壁面を抉り込みながら、0.6mの深さに掘り窪められていた。最深部の深さは検出面から1.9mである。弥生土器が出土した。135が下層から出土した。

SK9022は西側が斜面のため削平されていたが、検出面で、平面長円形、長径2.2m、短径1.2mになると考えられる。壁面は底面に向かって開きながら掘り込まれていた。深さ1.45mである。底面は

土壙はトレンチ南西部分で検出した。平面不定形、深さ0.2～0.3mである。弥生土器、土師器が出土したものもある。

この他に下段の55トレンチで検出したのと同様の土壙を12基検出した。深さ1m以上のSK9019、9020、9021、9022、9024、9026、9028、9029の8基、それより浅いSK9018、9023、9025、9027の4基に大別できた。

SK9019は検出面で、平面円形、径1.4mである。壁面は南側はほぼ垂直だが、他は北側を中心に大きく抉り込まれていた。深さ1.85mである。底面は平面円形、径1.6mである。平坦であるが、西半はさらに0.7mの深さに掘り窪められていた。最深部の深さは検出面から2.55mである。弥生土器が出土した。130・131・132・133・134が中層から出土した。

SK9020は検出面で、平面橢円形、長径1.35m、短径1mである。壁面はほぼ垂直だが、東側はやや抉り込まれていた。深さ1.3mである。底面は平面橢円形、長径1.3m、短径1.1mである。平坦である。弥生土器が出土した。

SK9021は検出面で、平面円形、径1.2mである。壁面は垂直に掘り込まれていた。深さ1.3mである。底面は平面やや長円形、長径1.25

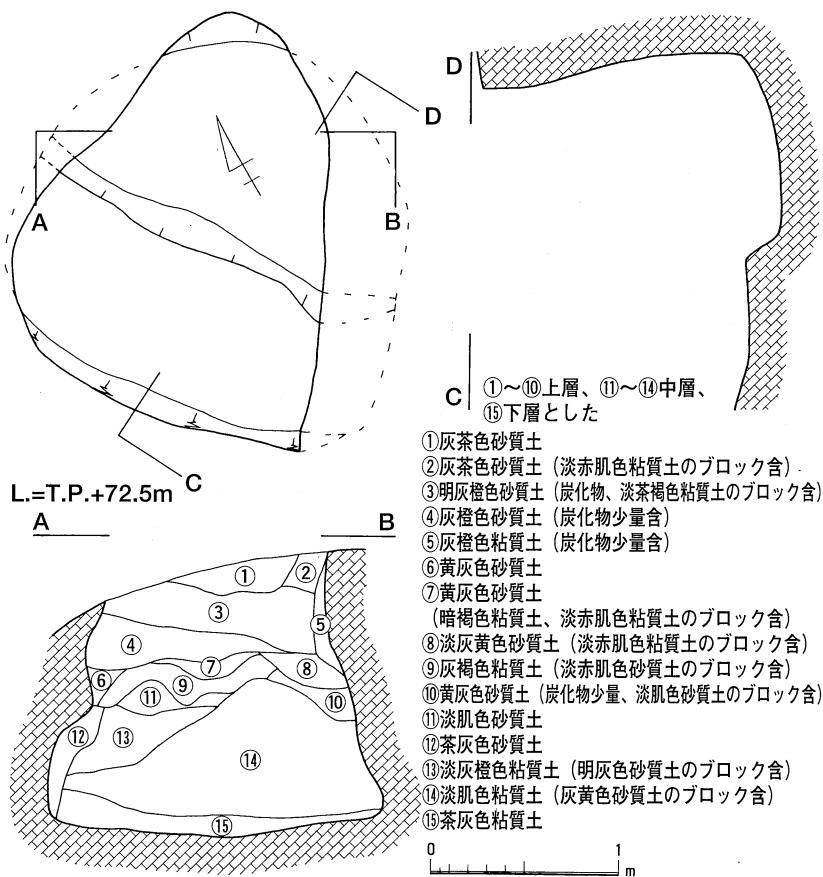


図70 SK9022平面・土層断面・断面図

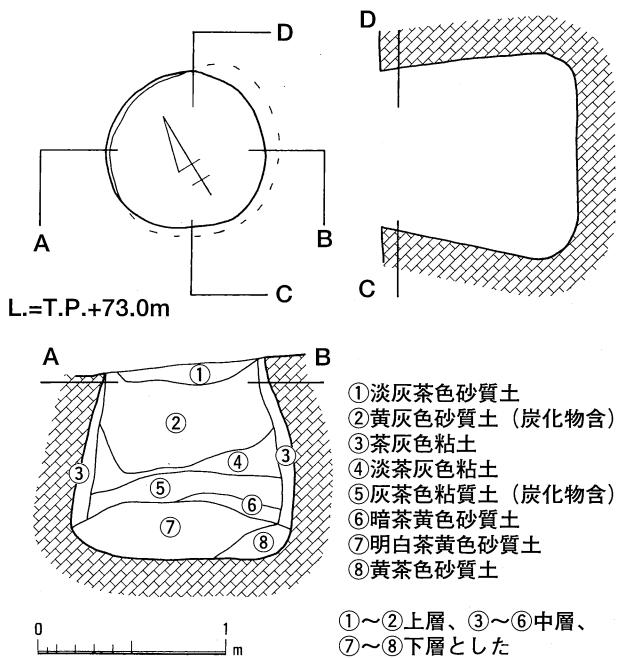


図71 SK9024平面・土層断面・断面図

148、土玉（D1）が、下層から149・150・151が出土した。

これらは55トレンチで検出したものと同様に、貯蔵穴であろう。弥生時代後期末期に位置付けられよう。

平面円形、径2mになると考えられる。平坦であるが、東半はさらに0.2mの深さに掘り窪められていた。最深部の深さは検出面から1.6mである。弥生土器が出土した。136・137・138が下層から出土した。

SK9024は検出面で、平面円形、径0.8mである。壁面はやや抉り込まれていた。深さ1.05mである。底面は平面円形、径1.2mである。平坦であるが、周囲は壁面に向かって皿状に立ち上がっていた。壁面に0.1mほどの厚さに茶灰色粘土を貼り付けていた様子が窺えた。壁面の調整であろうか。弥生土器が出土した。139・140・141・142・143が中層から出土した。

SK9026は検出面で、平面円形、径0.85mである。壁面は大きく抉り込まれ、底面は平面円形、径1.5mにもなる。深さ1.95mである。底面は平坦である。弥生土器が出土した。144が中層から出土した。

SK9028、9029は検出時は1基の大型の土壙のようであったが、内部を調査したところ、SK9029埋没後にSK9028が掘削されていた。北側がSK9029、南側がSK9028である。検出面で、平面いびつな長円形、長径1.9m、短径1.2mである。壁面は大きく抉り込まれ、底面はSK9029で平面長円形、長径1.4m、短径1.15m、SK9028で平面長円形、長径1.65m、短径0.8mにもなる。深さはSK9029で1.55m、SK9028で1.5mである。底面は平坦である。弥生土器が出土した。SK9028の下層から145・146・147が、SK9029の上層から

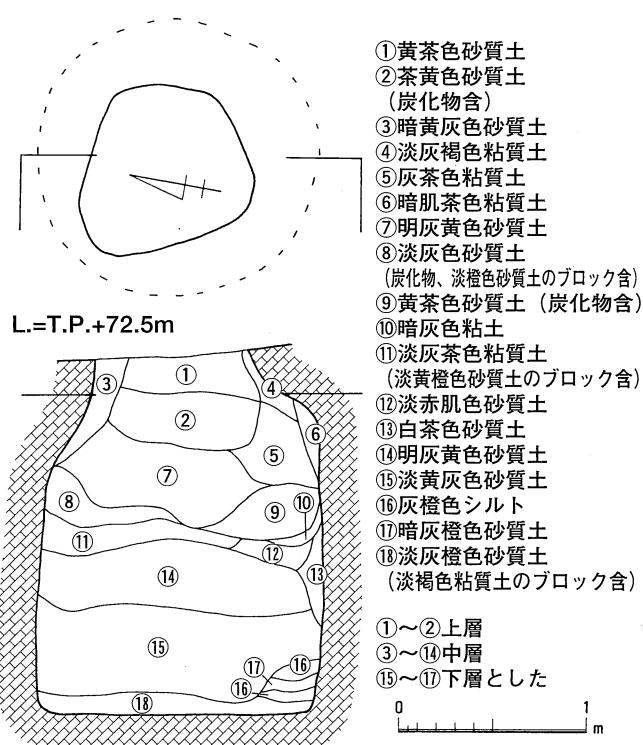


図72 SK9026平面・土層断面・断面図

SK9018は南側が斜面のため削平されていたが、検出面で、平面円形、径1.45mになると考えられる。壁面は大きく抉り込まれ、底面は平面円形、径1.4mにもなると考えられる。深さ0.5mである。底面は平坦である。弥生土器が出土した。

SK9023は平面円形、径0.9m、深さ0.15mである。壁面は斜めに掘り込まれていた。底面は平坦である。土師器が出土した。

SK9025は平面円形、径0.9m、深さ0.15mである。壁面は斜めに掘り込まれていた。底面はほぼ平坦である。土器が出土したが、摩滅が著しい。

SK9027は東側が削平されていたが、平面円形、径0.6m、深さ0.4mであろう。壁面は斜めに掘り込まれていた。底面はほぼ平坦である。弥生土器が出土した。

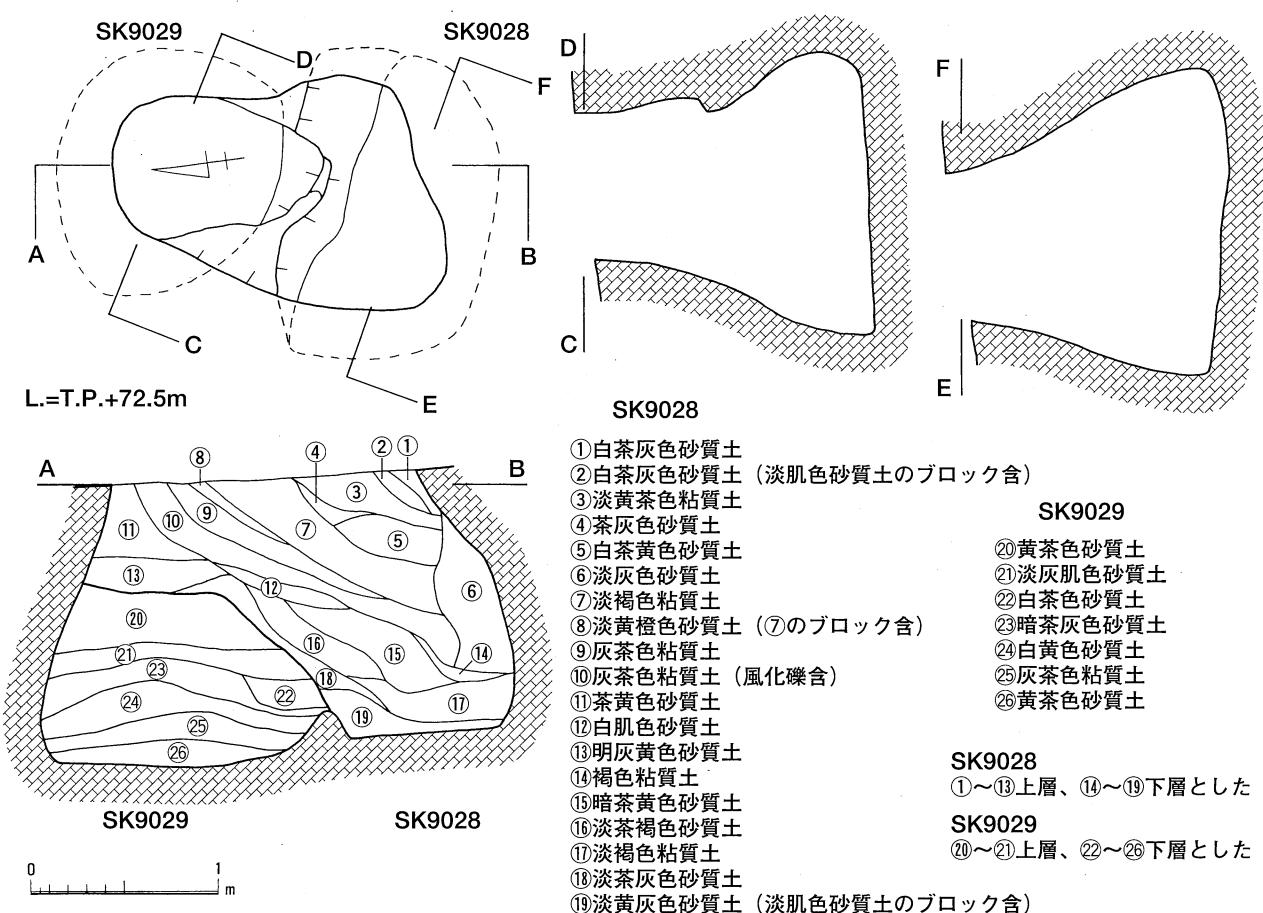


図73 SK9028・9029平面・土層断面・断面図

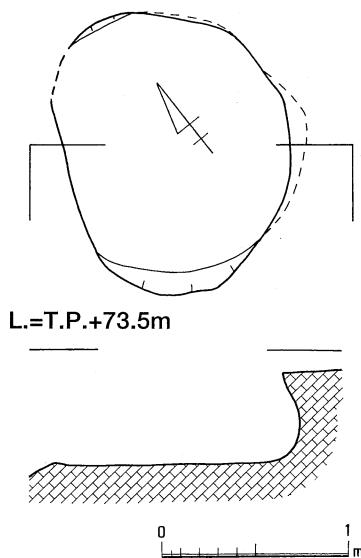


図74 SK9018平面・断面図

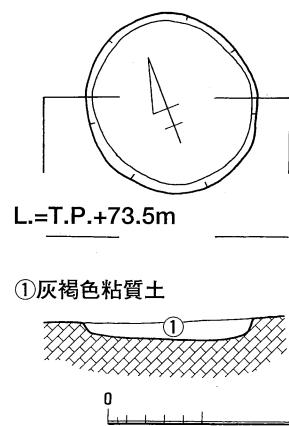


図75 SK9023平面・土層断面図

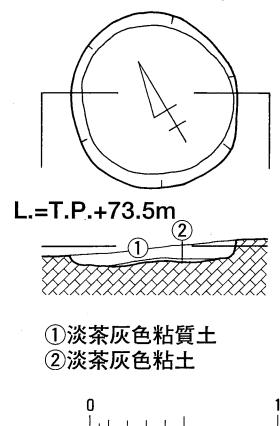


図76 SK9025平面・土層断面図

これらは55トレンチで検出したものと同様に、貯蔵穴の掘削途中で放棄したものであろうか。

ピットはトレンチ西半で検出した。平面円形が主で、径0.2~0.4m、深さ0.1~0.2mである。土師器が出土したものもある。

56、57トレンチは尾根であったものを削平して平坦面を形成したのである。開析谷を挟んだ東側の49、50トレンチの平坦面は居住域として、西側の56トレンチは作業域として利用していたのであろう。さらに、56トレンチは西側の田面とは現状で3mの比高差があることから、水はけの良いトレンチの西端を貯蔵域として貯蔵穴群を設けたのであろう。

57トレンチ

57トレンチは56トレンチの北側である。地山面で標高72.9~73.7mで、北へ傾斜していた。遺構面は3面を検出した。

第1遺構面は現耕作土層を除いた面である。現耕作土層からは弥生土器、土師器、須恵器、備前焼(152)、青磁、陶器、磁器等が出土した。ピットを検出した。

ピットはトレンチ全面で検出した。平面円形、径0.2~0.4m、深さ0.1~0.3mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。弥生土器、土師器、備前焼、磁器が出土したものもある。現耕作面から検出面までが浅く、埋土が現耕作土と同質なことから、近現代の耕作に伴うものであろう。

第2遺構面はトレンチ北半に施された整地土層を除いた面である。整地土層からは須恵器、備前焼、陶器、磁器等が出土した。トレンチ西半で溝、畦畔状遺構を検出した。

溝は1条検出した。南北方向で、幅0.3m、深さ0.1mである。礫が詰められていたことから暗渠排水路である。遺構面が北へ傾斜しているため、北端は削平されて消滅していた。本来はさらに北へ、田面の端まで延びていたのであろう。遺物の出土はみられなかった。

畦畔状遺構としたのは南北方向の帶状の高まりである。9m間隔で並行するものを2条検出した。西側のものは幅0.3m、高さ0.1m、東側のものは痕跡程度であるが、幅0.2m、高さ数cmである。北端は徐々に低くなり消滅しているが、前述の溝と同じく、本来はトレンチ北辺まで延びていたのであろう。また、畦畔状遺構の間で、これらに直交する東西方向の極めて浅い溝状の窪みがみられた。

整地土層に近世の遺物が含まれることから、これらの遺構もその時期の耕作に伴うものであろう。

第3遺構面は地山面上に堆積していた灰褐色砂質土層を除いた面で、地山面である。灰褐色砂質土

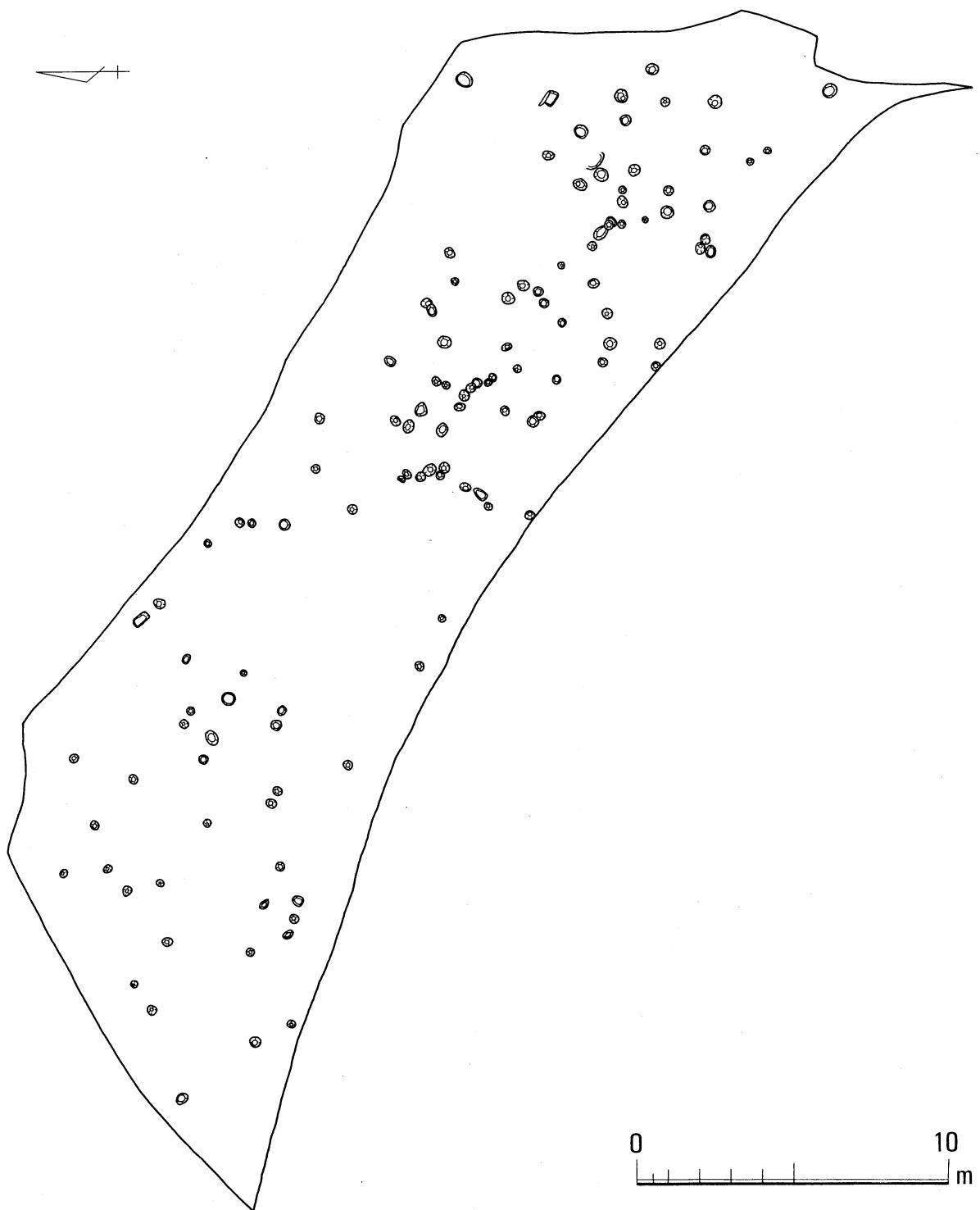


図77 57トレンチ第1遺構面平面図

層からは土師器、須恵器、備前焼、青磁、磁器等が出土した。溝、ピットを検出した。

溝はトレンチ北端で1条検出した。幅1m、深さ0.1mである。遺物の出土はみられなかった。

ピットはトレンチ北辺を中心に検出した。平面円形、径0.2~0.4m、深さ0.1~0.4mである。遺物の出土はみられなかった。

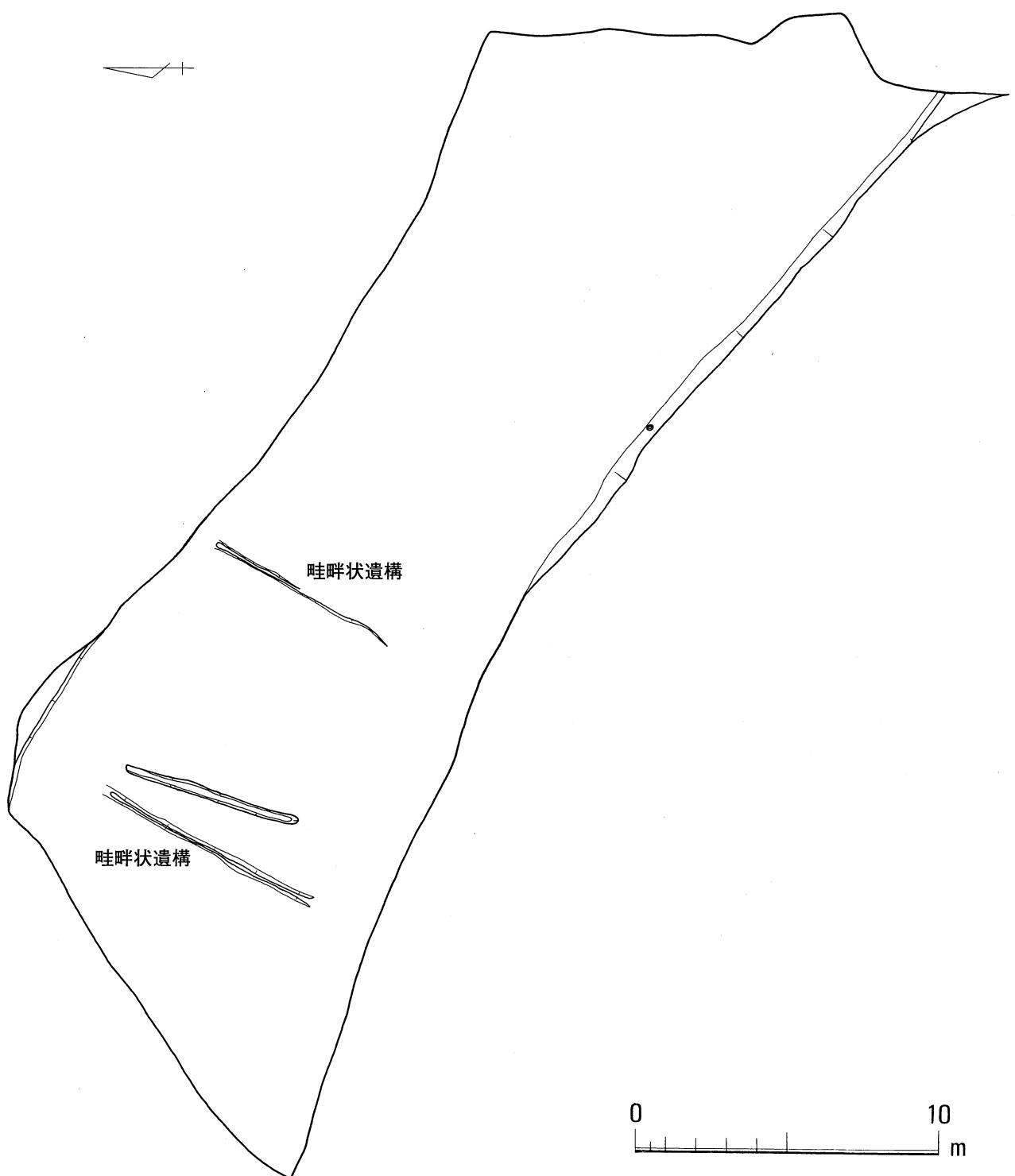


図78 57トレンチ第2遺構面平面図

58トレンチ

58トレンチは57トレンチの北側である。地山面で標高70.5~71.2mで、緩やかに北へ傾斜していた。遺構面は3面を検出した。

第1遺構面は現耕作土層を除いた面である。現耕作土層からは弥生土器、土師器、須恵器、備前焼、陶器、磁器等が出土した。トレンチ東半で溝、ピットを検出した。



図79 57トレーニチ第3 遺構面平面図

溝は2条検出した。南北方向で、幅0.7m、深さ0.1mである。遺構面が北へ傾斜しているため、北

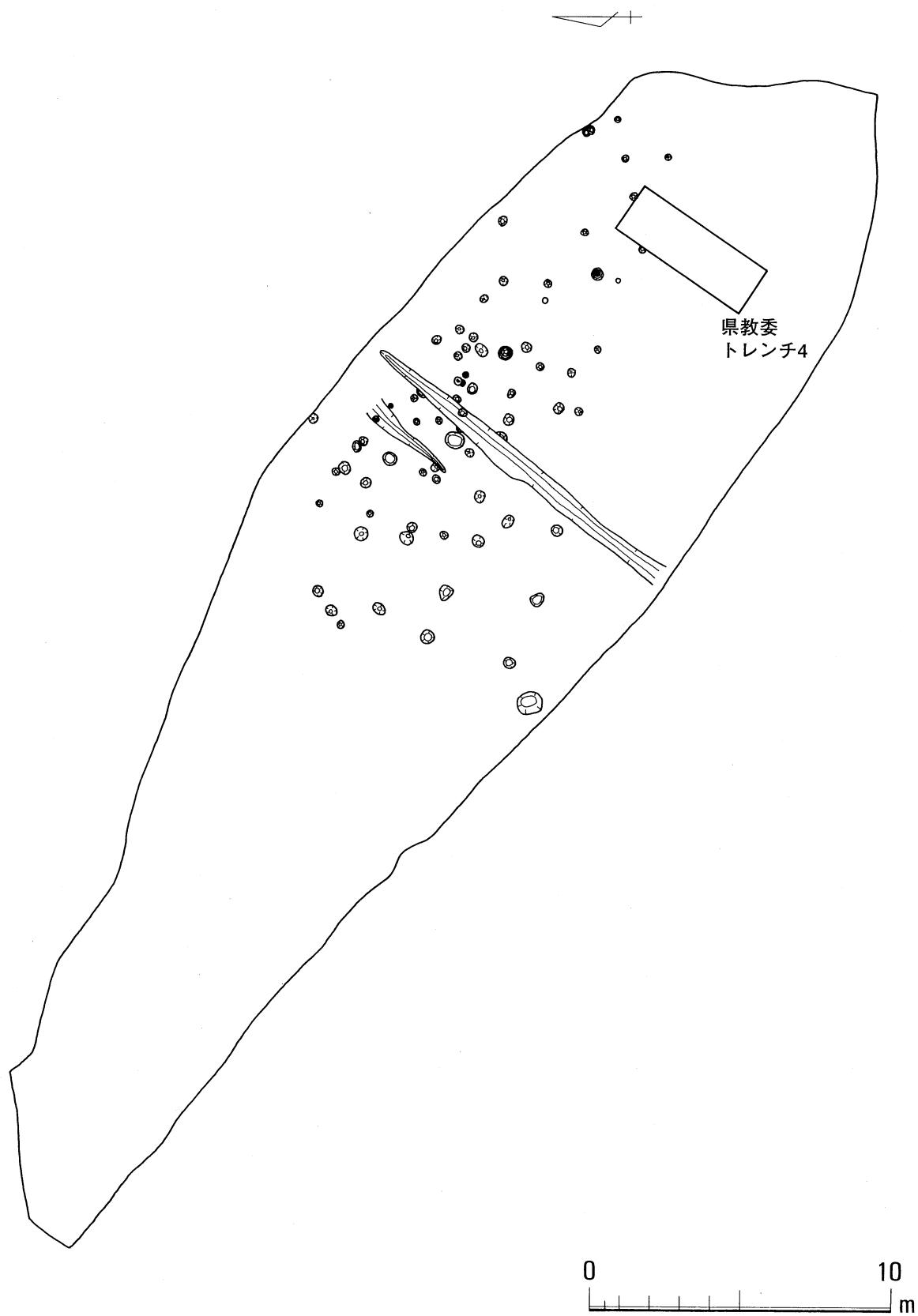


図80 58トレンチ第1遺構面平面図

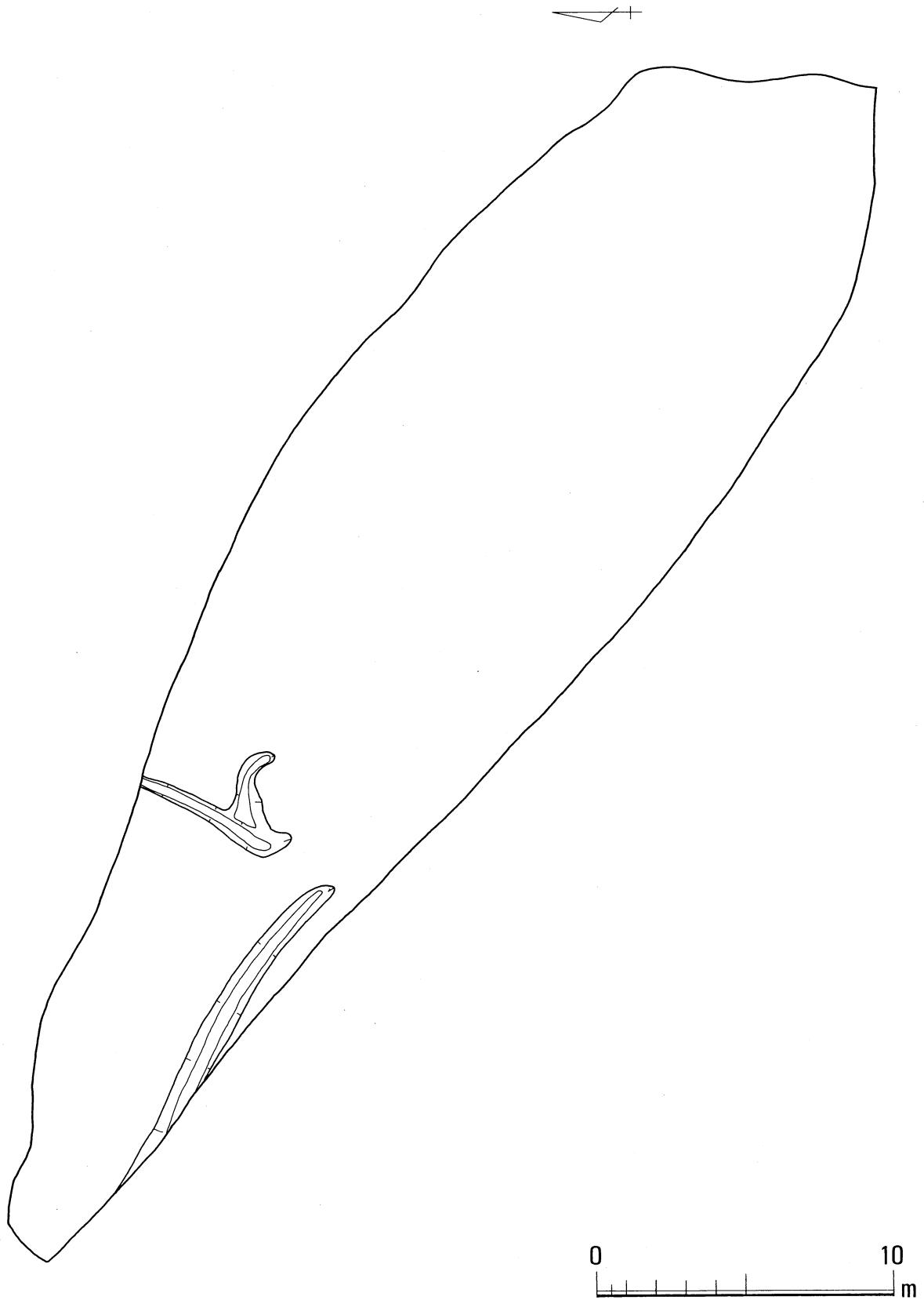


図81 58トレンチ第2遺構面平面図

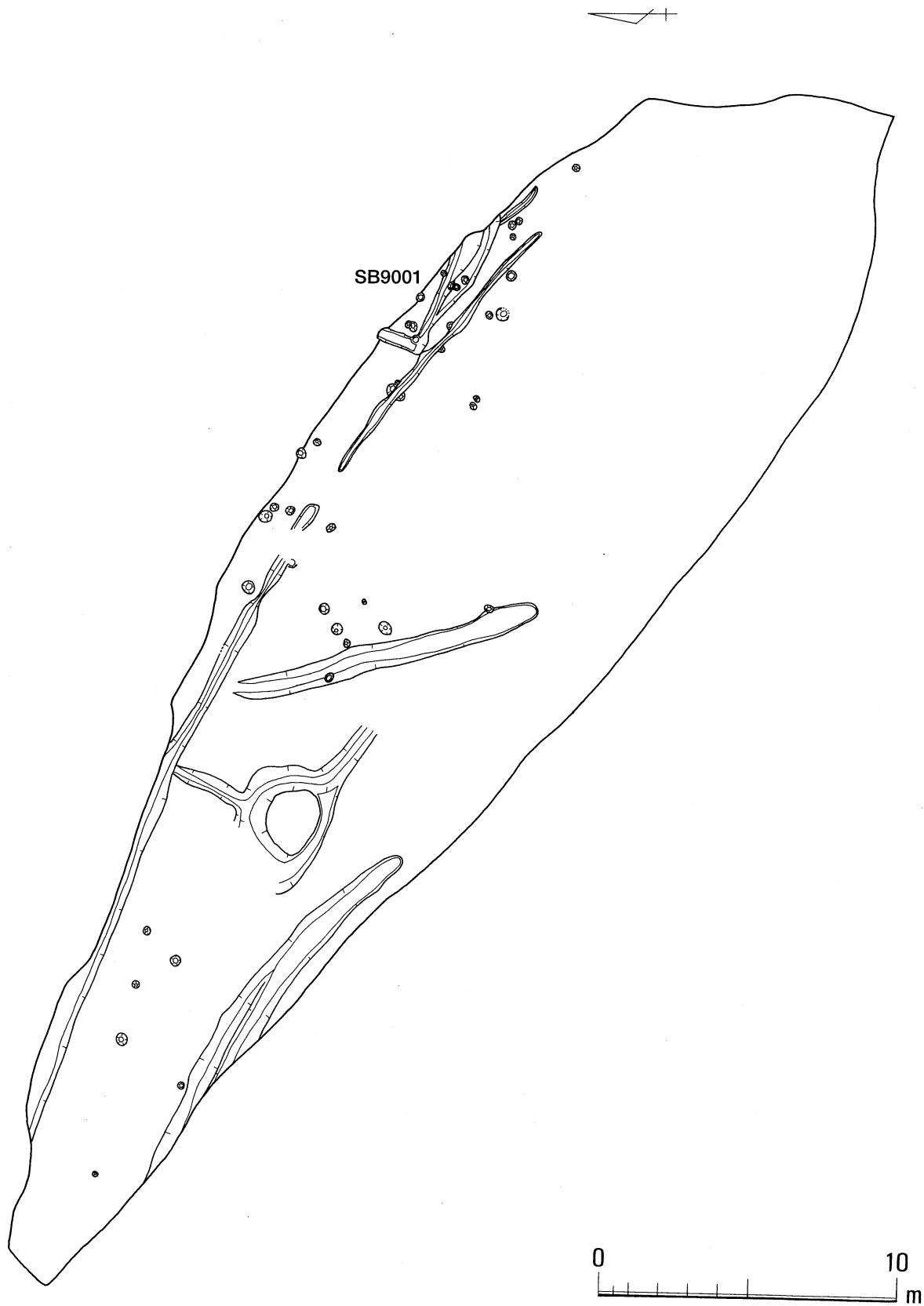


図82 58トレンチ第3遺構面平面図

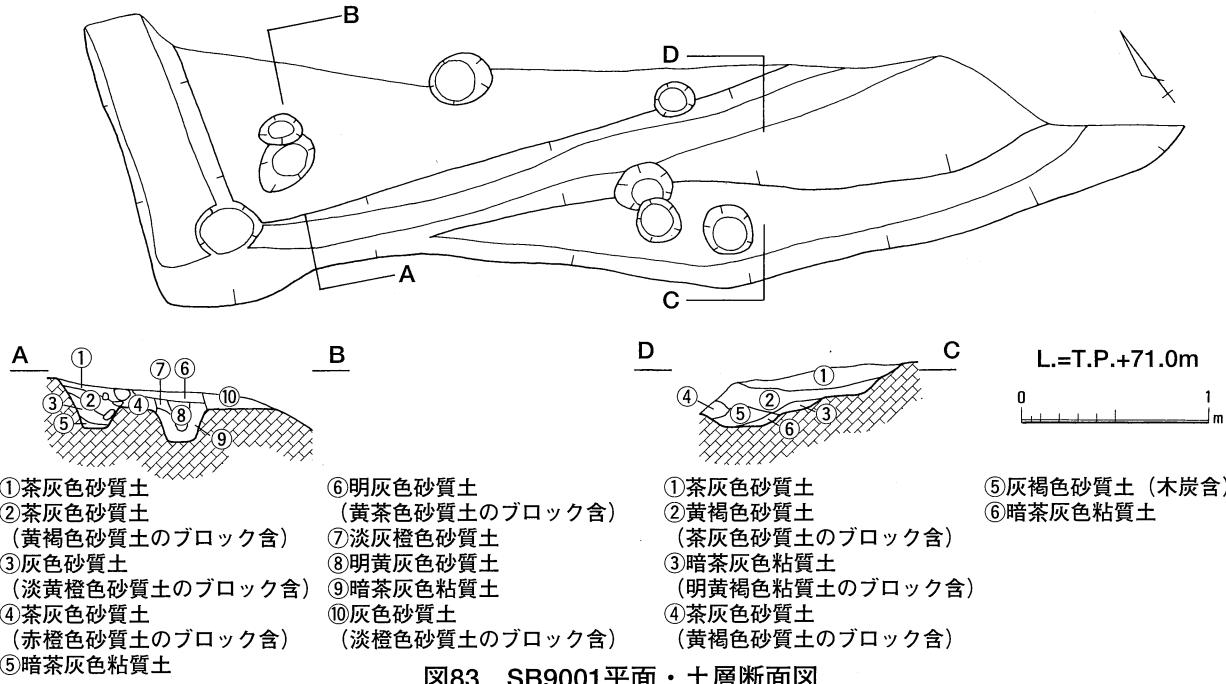


図83 SB9001平面・土層断面図

端は削平されて消滅していた。本来はさらに北へ、田面の端まで延びていたのであろう。土師器、瓦が出土した。近代の耕作に伴うものであろう。

ピットは平面円形、径0.2~0.7m、深さ0.1~0.5mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。弥生土器、土師器、須恵器、備前焼が出土したものもある。

第2遺構面はトレンチ北半に施された整地土層を除いた面である。整地土層からは弥生土器、土師器、須恵器、備前焼、青磁、陶器、磁器等が出土した。溝を検出した。

溝はトレンチ西半でトレンチの長辺に並行する東西方向のものと直交する南北方向のものと2条検出した。幅0.6~0.9m、深さ0.1mである。南北方向のものからは弥生土器が少量と多数の礫が検出されたことから、暗渠排水路であろう。近世の耕作に伴うものであろう。

第3遺構面は地山面上に堆積していた黄茶色砂質土層を除いた面で、地山面である。黄茶色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、備前焼、陶器、磁器等が出土した。竪穴建物、溝、ピットを検出した。

竪穴建物SB9001はトレンチ北辺東半で検出した。深さ0.2mの竪穴の床面からL字形の溝とピット1基を検出したのみであるが、壁体溝をもつ4本柱の方形竪穴建物の南西部分である。他の部分は後世の造成で削平されていた。壁体溝は幅0.3m、深さ0.1mである。柱穴の掘方は平面橢円形、長径0.35m、短径0.25m、深さ0.2mである。竪穴の埋土から弥生土器(153・154)が、壁体溝から弥生土器が出土した。弥生時代中期後葉に位置付けられよう。

溝はトレンチ西半を中心に検出した。平面規模は様々だが、深さ0.1m程度である。耕作に伴うものであろう。また、トレンチ西半中央で、外縁で径3.5m程度になるやや東西に長い橢円形を描くと考えられる溝を検出した。幅は東側で1m、南側で0.5m、深さは東側で0.1m、南側で0.05mである。また、この溝から東と北へ延びる溝も検出した。底面の傾斜から、水流は東側の溝から北側の溝へ抜けるようである。東側の溝から備前焼、陶器、磁器が出土した。近世の耕作に伴う水利施設であろうか。

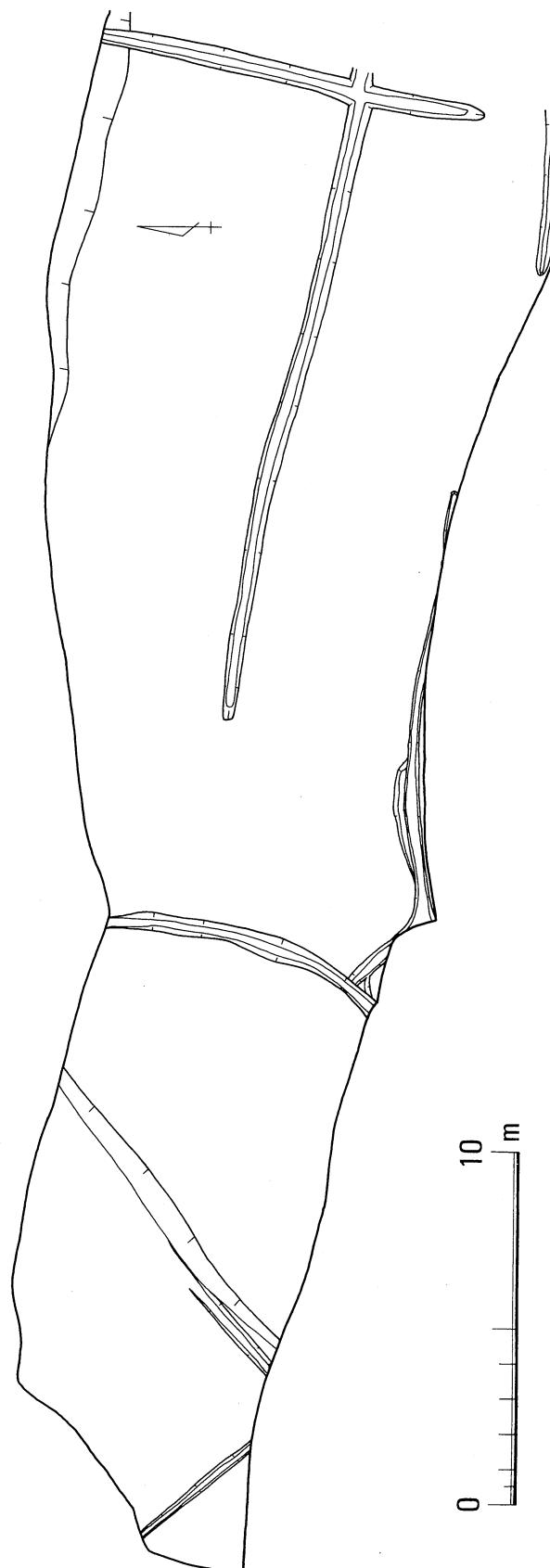


図84 59トレンチ第1遺構面平面図

ピットはトレンチ北半で検出した。平面円形、径0.2~0.4m、深さ0.1~0.4mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。弥生土器、土師器が出土したものもある。

59トレンチ

59トレンチは55トレンチの北西側である。地山面で標高66.8~67.7mであった。北へ傾斜していた。遺構面は3面を検出した。

第1遺構面は整地土層を除いた面である。整地土層からは弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器等が出土した。溝を検出した。

溝は6条検出した。東側のものは、東西方向と南北方向の2条の溝が十文字に交差していた。幅0.6m、深さ0.2~0.3mである。中央のものは、緩やかな円弧を描く南北方向で、幅0.5m、深さ0.2mである。さらに、その南端にトレンチに沿って東から延びてくるものは、幅0.3m、深さ0.1~0.2mである。西側のものは、東西方向と南北方向の2条であるが、トレンチ外の南側で直角に交わるのであろう。これらの溝は礫が詰められていたことから暗渠排水路である。弥生土器、土師器、須恵器等が出土した。近世の耕作に伴うものであろう。

第2遺構面は明茶黄色砂質土層を除いた面である。明茶黄色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、青磁、陶器、磨製石包丁等が出土した。土壙を検出した。

土壙はトレンチ西側で3基検出した。形状は様々で、深さ0.1mである。土師器が出土した。

また、トレンチ西半で島状の高まりや段差を検出した。北へ傾斜していることから、流水によって形成されたのであろう。

第3遺構面は地山面上に堆積していた淡茶灰色粘質土層を除いた面で、地山面である。淡茶灰色粘質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、青磁、白磁、陶器等が出土した。地山面は東西方向の高さ0.3mの段差を挟んだ2段の平坦面から成る。北側の平坦面で掘立柱建物、

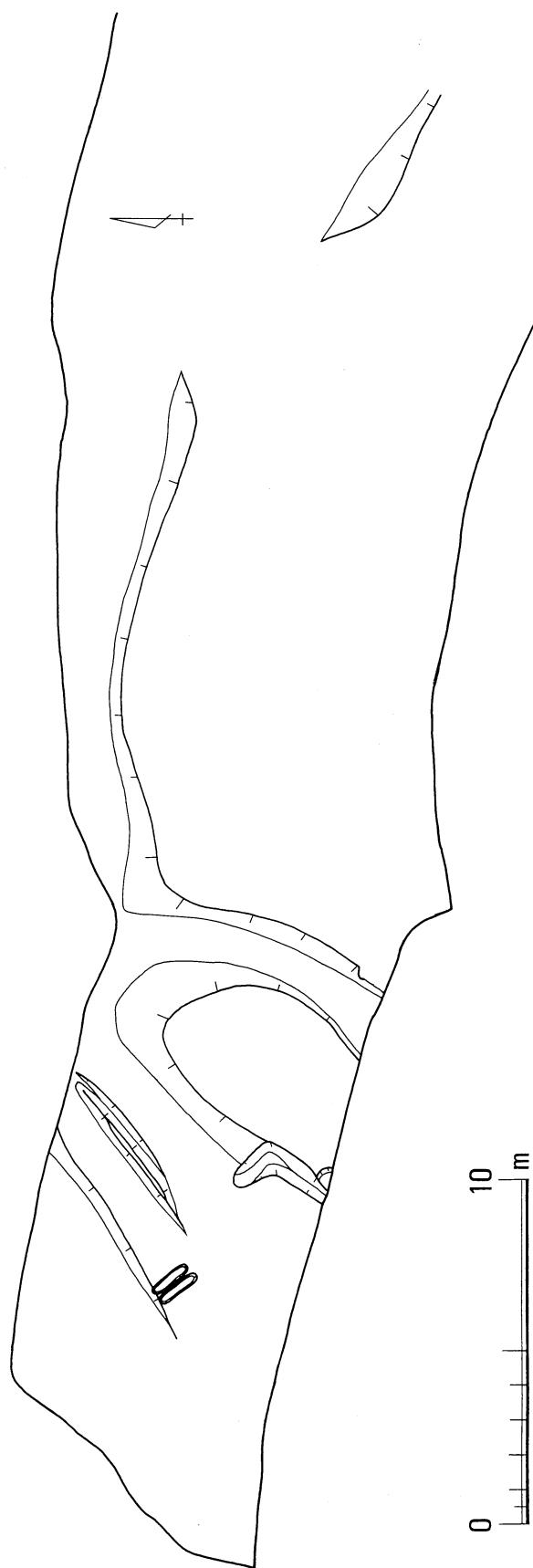


図85 59トレンチ第2遺構面平面図

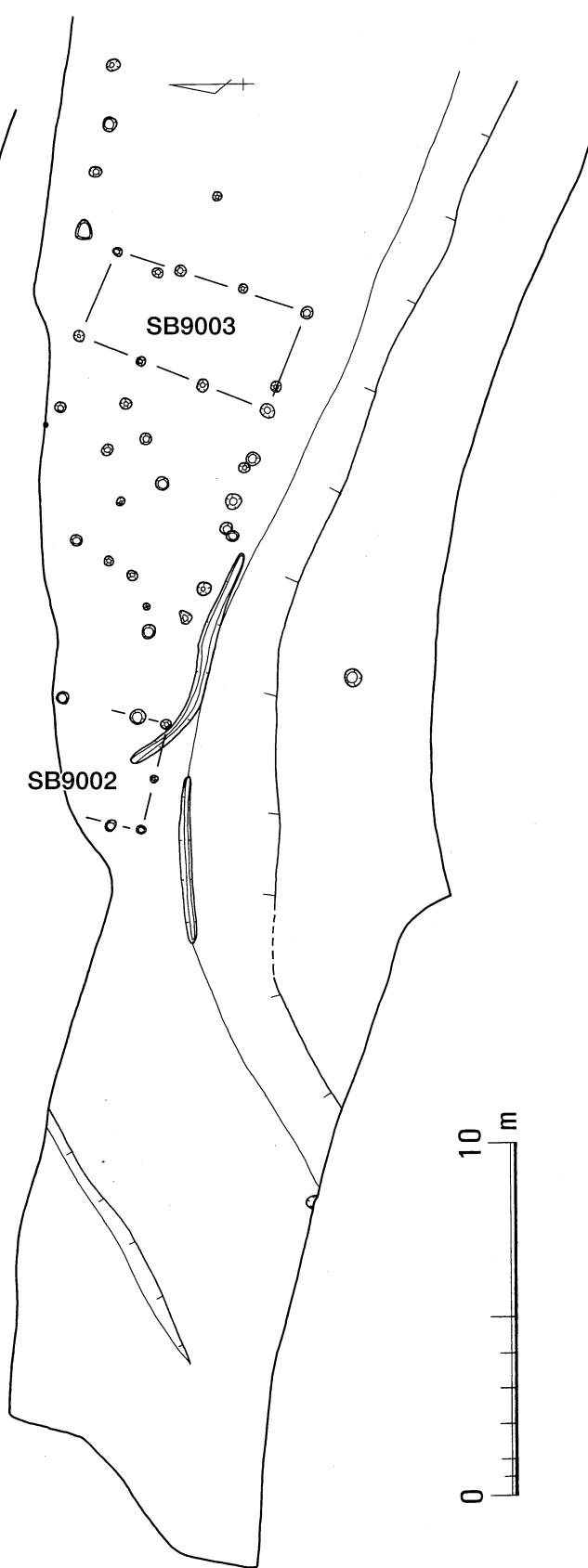


図86 59トレンチ第3遺構面平面図

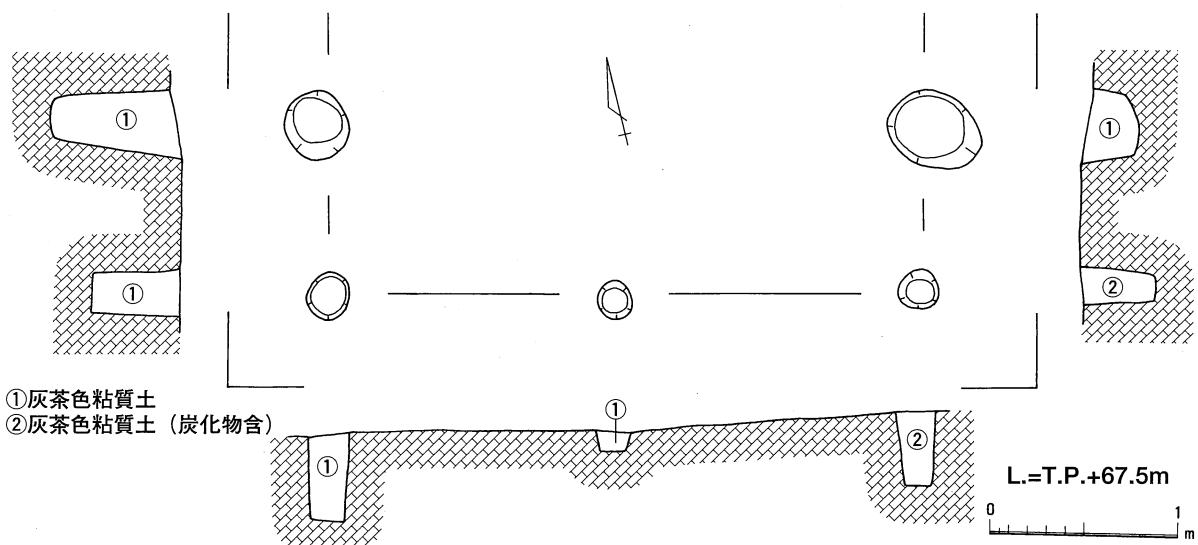


図87 SB9002平面・土層断面図

溝、ピットを検出した。

掘立柱建物はトレンチ北辺中央でSB9002、東側でSB9003を検出した。

SB9002は桁行2間で3.1m、梁間2間以上で0.9m以上の側柱の掘立柱建物の南半部分である。他の部分は後世の造成で削平されていた。主軸は東西方向と考えられる。柱間は桁行で1.5~1.6m、梁間で0.9mである。柱穴の掘方は平面円形、径0.2~0.4m、深さ0.1~0.6mである。弥生土器、土師器、須恵器、瓦器が出土した。

SB9003は桁行3間で5.75m、梁間1間で2.7mの側柱の掘立柱建物である。主軸は南北方向である。柱間は桁行で1.9~1.95m、梁間で2.7mである。梁間の柱間が桁行のそれに比して広いので、中間に柱があったのかもしれない。柱穴の掘方は平面円形、径0.25~0.4m、深さ0.2~0.5mである。弥生土器、土師器、須恵器、瓦器が出土した。

掘立柱建物の詳細な時期の決定は困難だが、大きく中世に位置付けられよう。

溝は段差に沿うように、2条検出した。幅0.3m、深さ0.05mである。弥生土器、土師器、須恵器が出土した。

ピットはトレンチ東半で検出した。平面円形、径0.1~0.4m、深さ0.2~0.5mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。弥生土器、土師器、須恵器が出土したものもある。

59トレンチの位置する田面は凸の字形を呈している。尾根を整形した痕跡であろう。狭いながらも、建物が築かれている。しかし、51~53トレンチに比べて数m低い位置であり、第1遺構面で多数の暗渠排水路が検出されたように、水はけが悪かったようである。そのため、開発されたのはかなり降った時代になってからである。

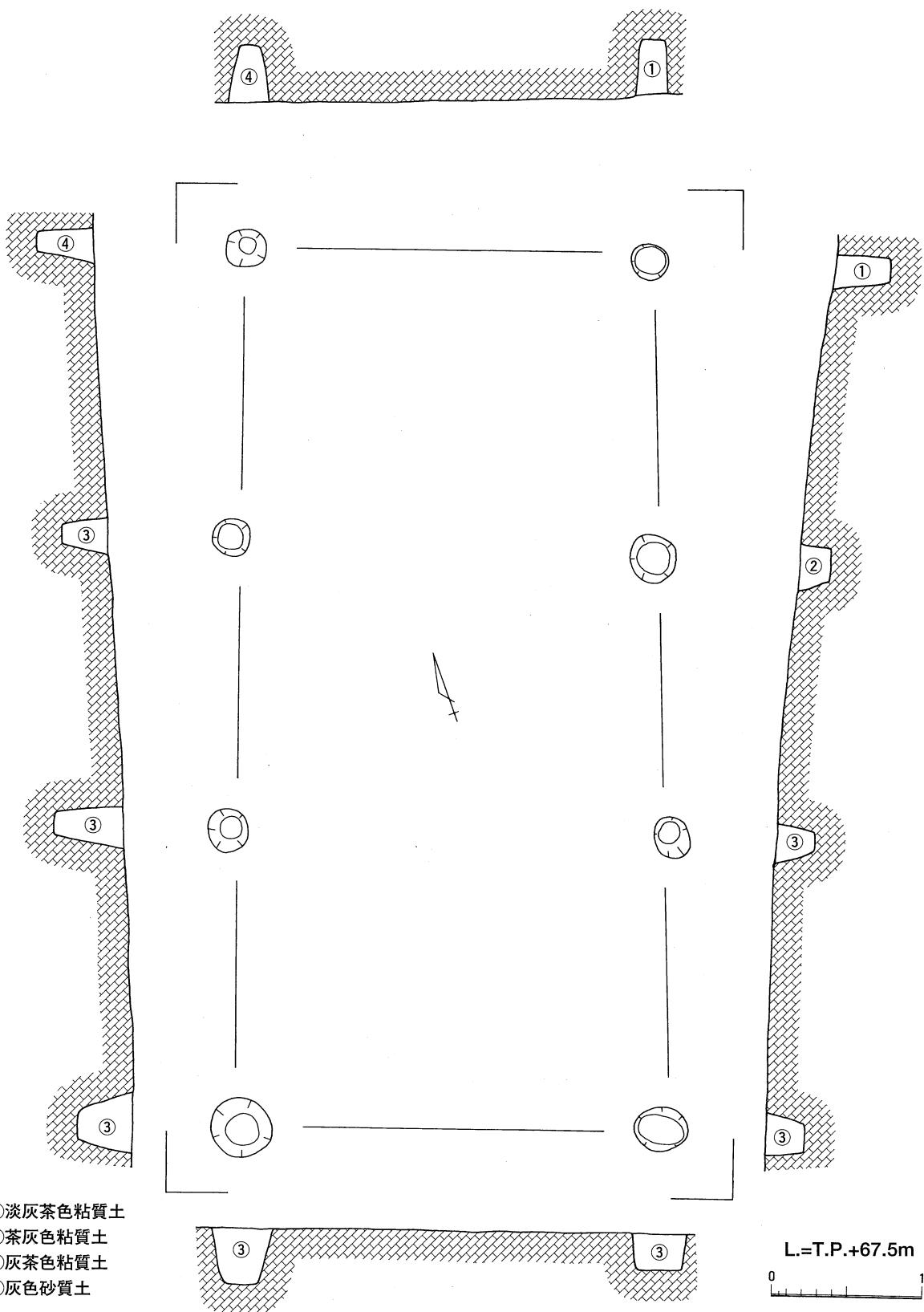


図88 SB9003平面・土層断面図

60トレンチ

60トレンチは63トレンチの北端から東へ延びる部分で、調査地の北端である。地山面で標高63.4～64.3mであった。段差を除いて、ほぼ平坦であった。遺構面は地山面上の堆積土層を除いた面で、地山面1面のみであった。堆積土層からは土師器、須恵器が出土した。

地山面は高さ0.7mの段差を挟んだ2段の平坦面から成る。トレンチ北辺中央で土壙1基、ピット2基を検出した。土壙は平面長円形、長径0.6m、短径0.3m、深さ0.1mである。ピットは平面円形、径0.3m、深さ0.1mである。遺物の出土はみられなかった。

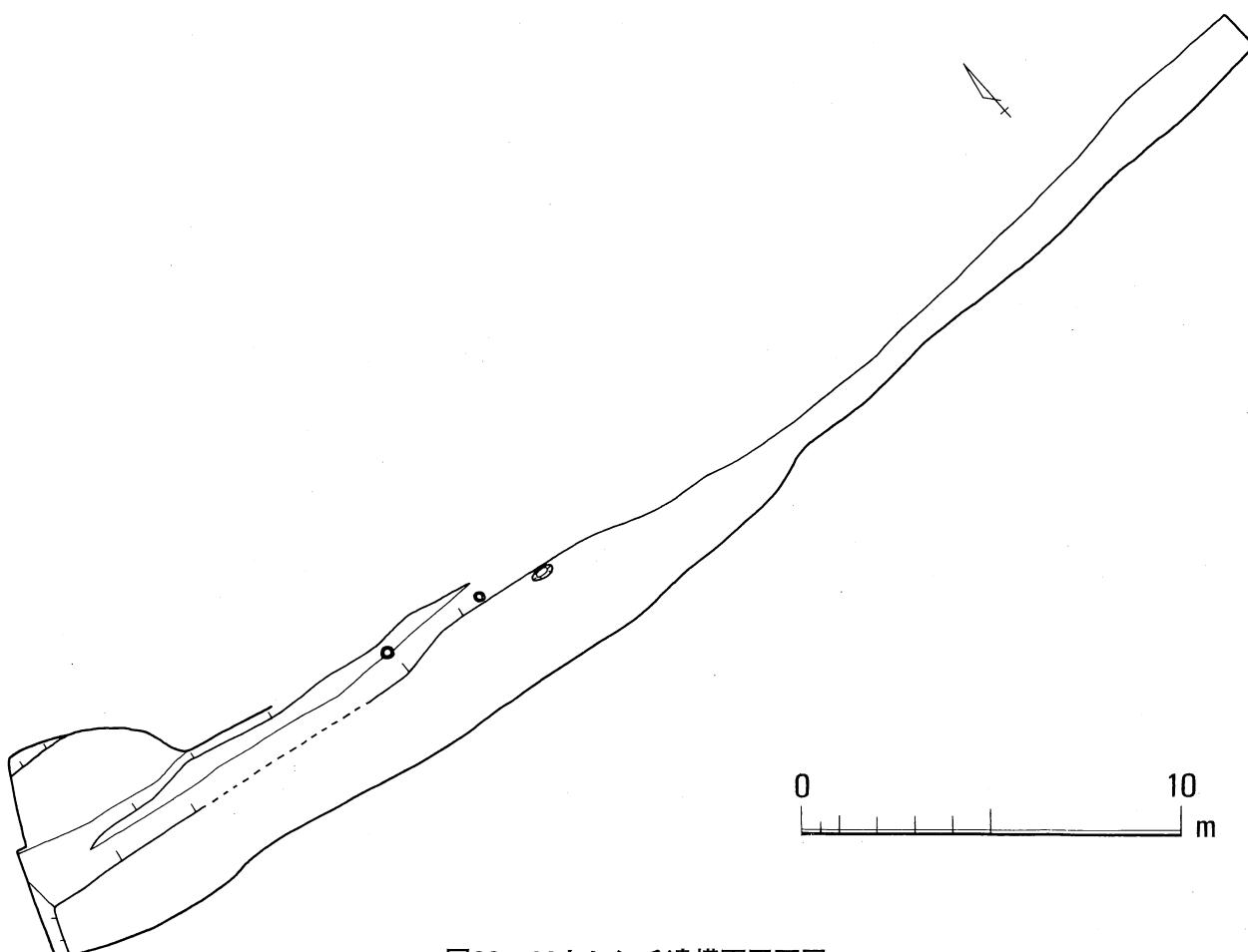


図89 60トレンチ遺構面平面図

61トレンチ

西区は大半が北向きの斜面上に立地しているが、西辺は西向きの斜面上に立地している。その部分の61～66トレンチが西向きの斜面上に立地することになる。

61トレンチは54トレンチの西側である。調査時間の制約のため、54トレンチとつながり、遺構密度が高いと想定されるトレンチ南半を中心に調査した。地山面で標高65.2～66.5mで、西へ傾斜していた。遺構面は3面を検出した。

第1遺構面は明茶黄色砂質土層を除いた面である。遺構面の東半はほぼ平坦だが、西半は西へ大きく傾斜していた。明茶黄色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、備前焼、磁器等が出土した。溝を検出した。

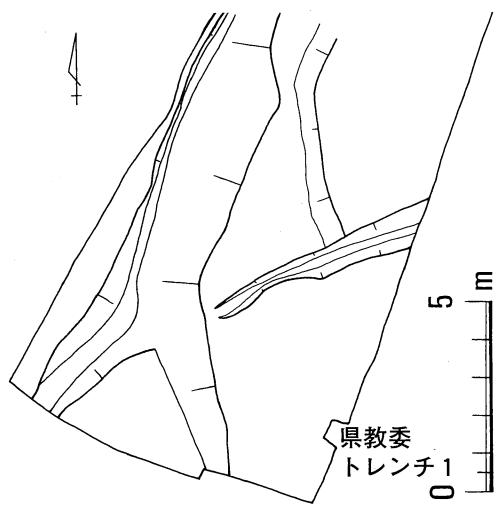


図90 61トレンチ第1遺構面平面図

溝は2条検出した。東半の平坦面で検出したものは東西方向で、幅0.7m、深さ0.4mである。礫が詰められていたことから暗渠排水路である。弥生土器、須恵器、備前焼、磁器等が出土した。西半の斜面で検出したものは、斜面に築かれていた石垣の最下段の石を据えつけるための溝である。弥生土器、土師器、須恵器等が出土した。近世の耕作に伴うものであろう。

第2遺構面は東半の平坦面上にのみ堆積していた淡赤茶色砂質土層を除いた面である。淡赤茶色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶器、磁器等が出土した。

ピットを3基検出した。平面円形、径0.3~0.4m、深さ

0.1~0.2mである。東側の2基から弥生土器が出

出土した。

第3遺構面は地山面上に堆積していた淡灰褐色粘質土層を除いた面で、地山面である。淡灰褐色粘質土層からは弥生土器、土師器が出土した。遺構面の全面で溝、土壙、ピットを検出した。溝は東

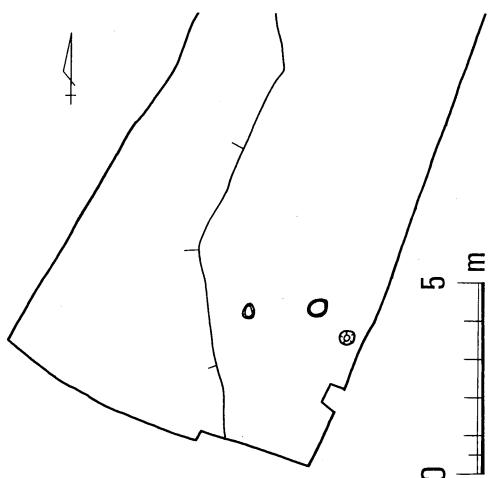


図91 61トレンチ第2遺構面平面図

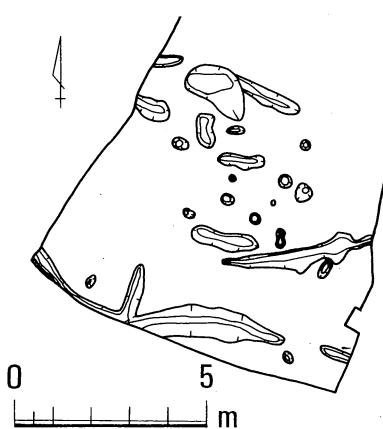


図92 61トレンチ第3遺構面平面図

西方向、幅0.2~0.3m、深さ0.1mであるが、遺構面南辺で検出した緩やかな円弧を描くものは幅0.8m、深さ0.3mである。弥生土器、土師器が出土したものもある。

土壙は平面不定形、深さ0.1m程度である。弥生土器、土師器が出土したものもある。

ピットは平面円形のものが主で、径0.2~0.4m、深さ0.1~0.2mである。土師器が出土したものもある。

62トレンチ

62トレンチは61トレンチの西側である。63トレンチと同様に南北に80数mに渡って細長く延びていた。地山面で標高64.4~66.5mで、西へ傾斜していた。遺構面は2面を検出した。

第1遺構面はトレンチ南半でのみ堆積していた褐灰色砂質土層を除いた面である。褐灰色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器等が出土した。溝、土壙、ピットを検出した。

溝は4条検出した。幅0.2~0.5m、深さ0.1~0.2mである。弥生土器、土師器が出土した。

土壙はトレンチ南辺で1基検出した。大半はトレンチ外の南へ広がる。検出した範囲で長径3.2m、深さ0.1mの不定形な落ち込み状を呈する。弥生土器が出土した。

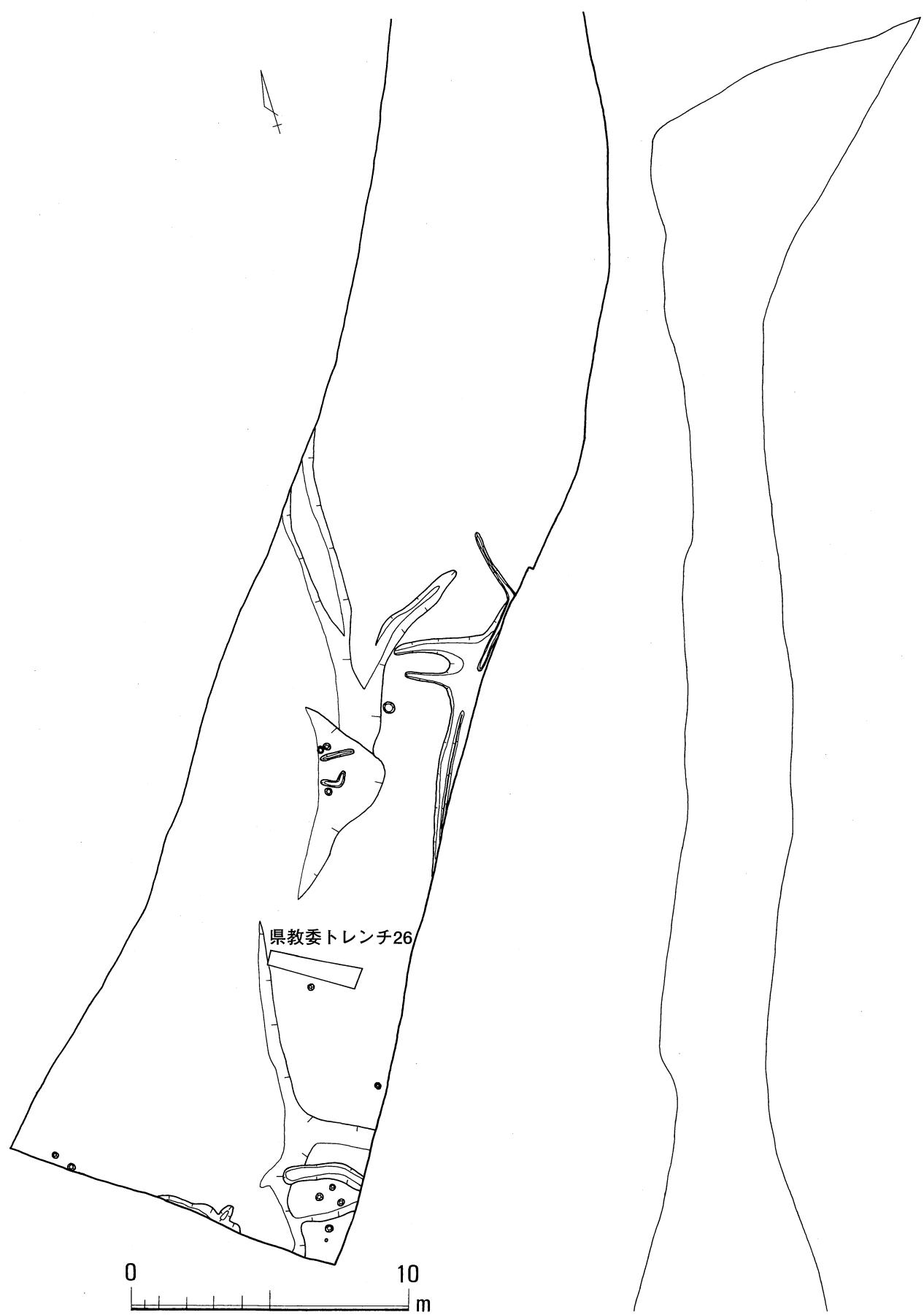


図93 62トレンチ第1遺構面平面図

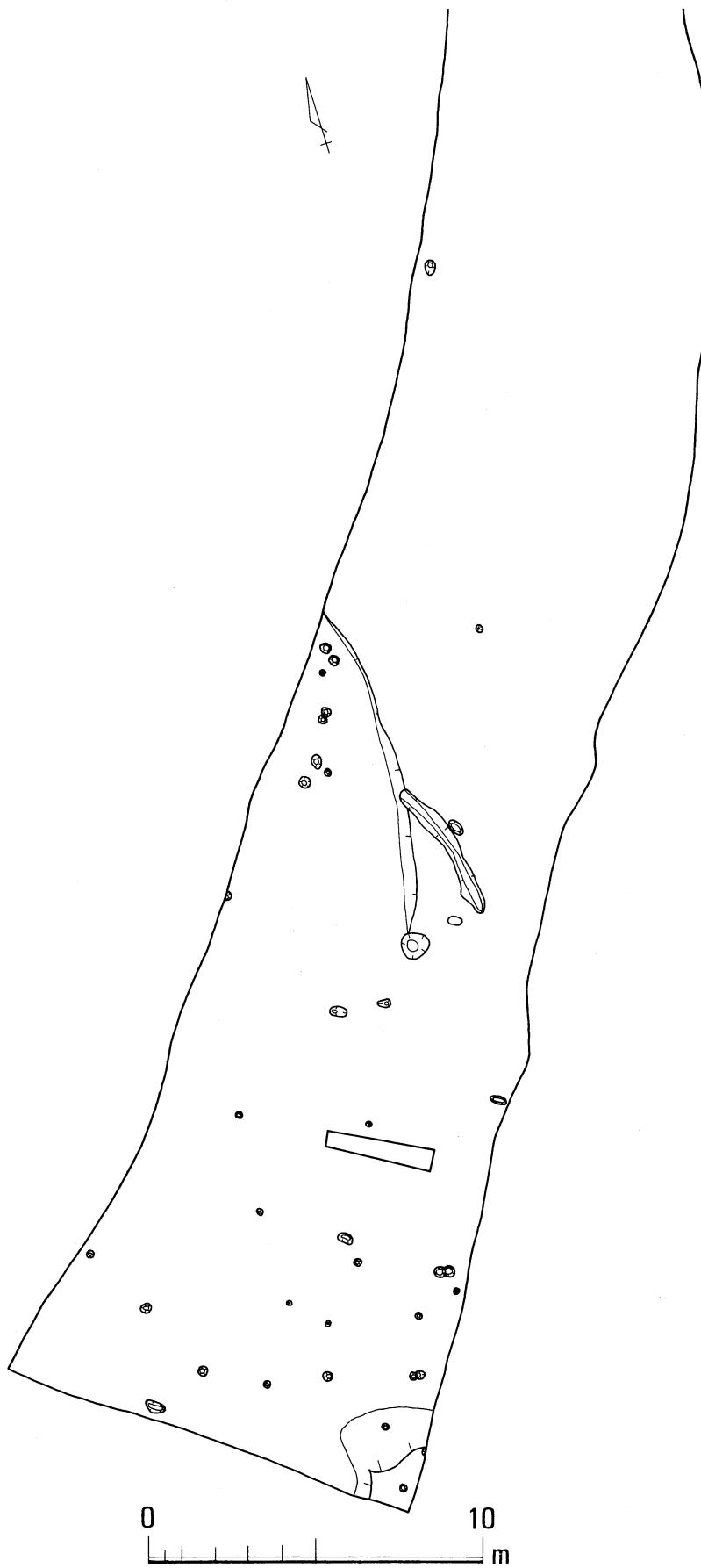


図94 62トレンチ第2遺構面平面図

ピットは遺構面の東半を中心に検出した。平面円形、径0.2~0.4m、深さ0.1~0.2mである。弥生土器、土師器が出土したものもある。

第2遺構面はトレンチ南半でのみ地山面上に堆積していた暗褐灰色粘質土層を除いた面で、地山面である。暗褐灰色粘質土層からは弥生土器、土師器、須恵器が出土した。溝、土壙、ピットを検出した。

溝は遺構面中央で1条検出した。幅0.5m、深さ0.1mである。土師器が出土した。

土壙、ピットは遺構面全面で検出した。平面円形のものが主で、径0.2~0.8m、深さ0.1~0.3mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。弥生土器、土師器が出土したものもある。

63トレンチ

63トレンチは62トレンチの西側で、西区の西辺である。前述のように、西向きの斜面上に立地している。トレンチは62トレンチと同様に南北に細長く90m以上あったため、南北に分け、南側から調査に着手した。その結果、トレンチの東半で地山面を確認し、遺構を検出した。遺構はトレンチ南東部のみに集中してピットを検出した。このように遺構が集中する所が限られ、工事の掘削深度もそこへ至らないため、63トレンチはトレンチ南東部で検出した地山面の調査をもって終了した。

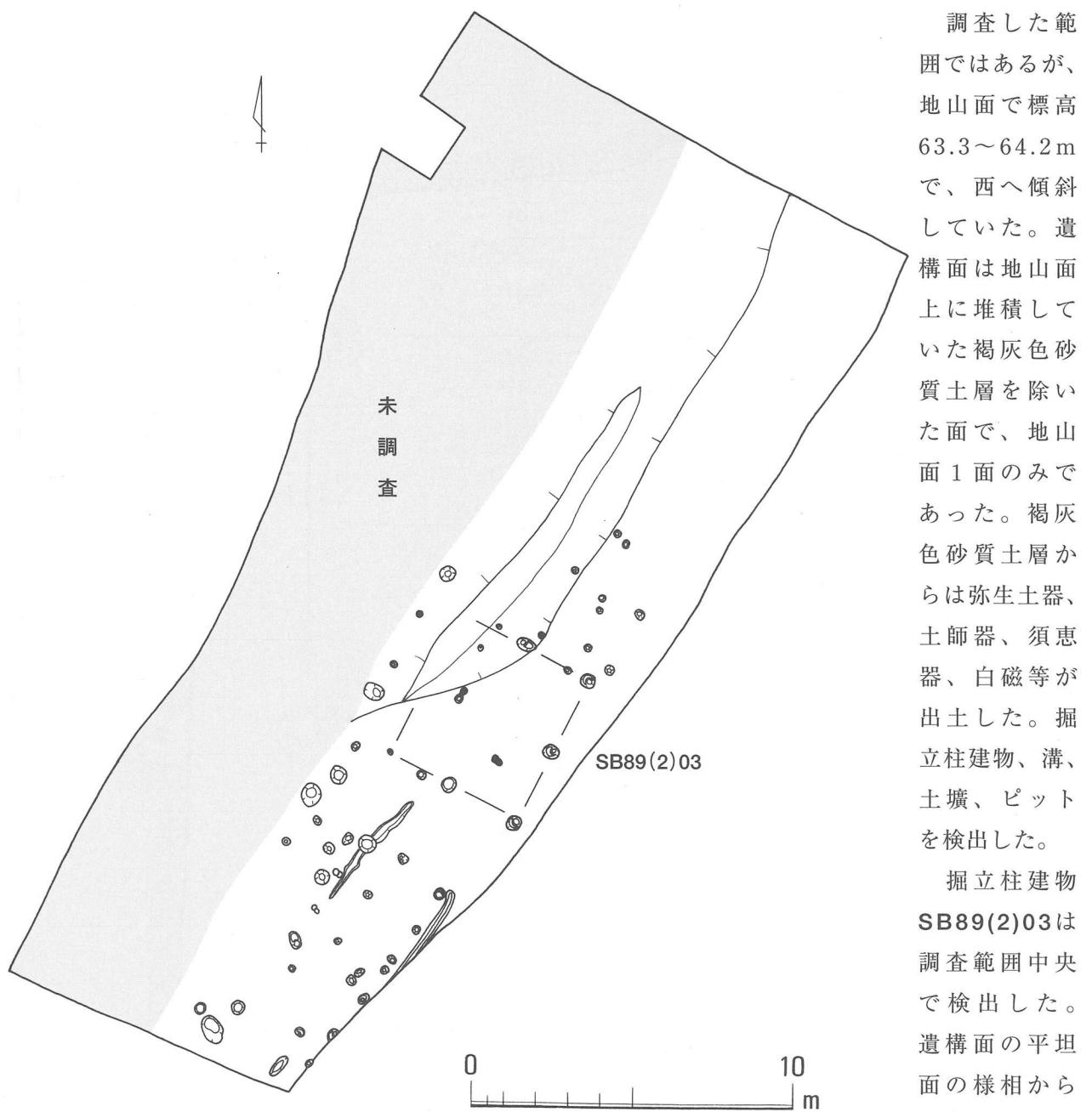


図95 63トレンチ遺構面平面図

桁行2間で4.9m、梁間2間で4.5mの側柱の掘立柱建物であろう。北角は後世の造成で削平されていた。主軸は南北方向と考えられる。柱間は桁行で2.45m、梁間で2.1～2.4mである。柱穴の掘方は平面円形のものが主で、径0.4m、深さ0.2～0.6mである。弥生時代後期の弥生土器が出土したものもある。

溝は調査範囲南半で2条検出した。トレンチの長辺に並行で、幅0.2m、深さ0.1mである。弥生土器が出土したものもある。

土壙、ピットは調査範囲全面で検出した。平面円形のものが主で、径0.2～0.6m、深さ0.2～0.6mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。弥生土器、土師器、須恵器が出土したものもある。

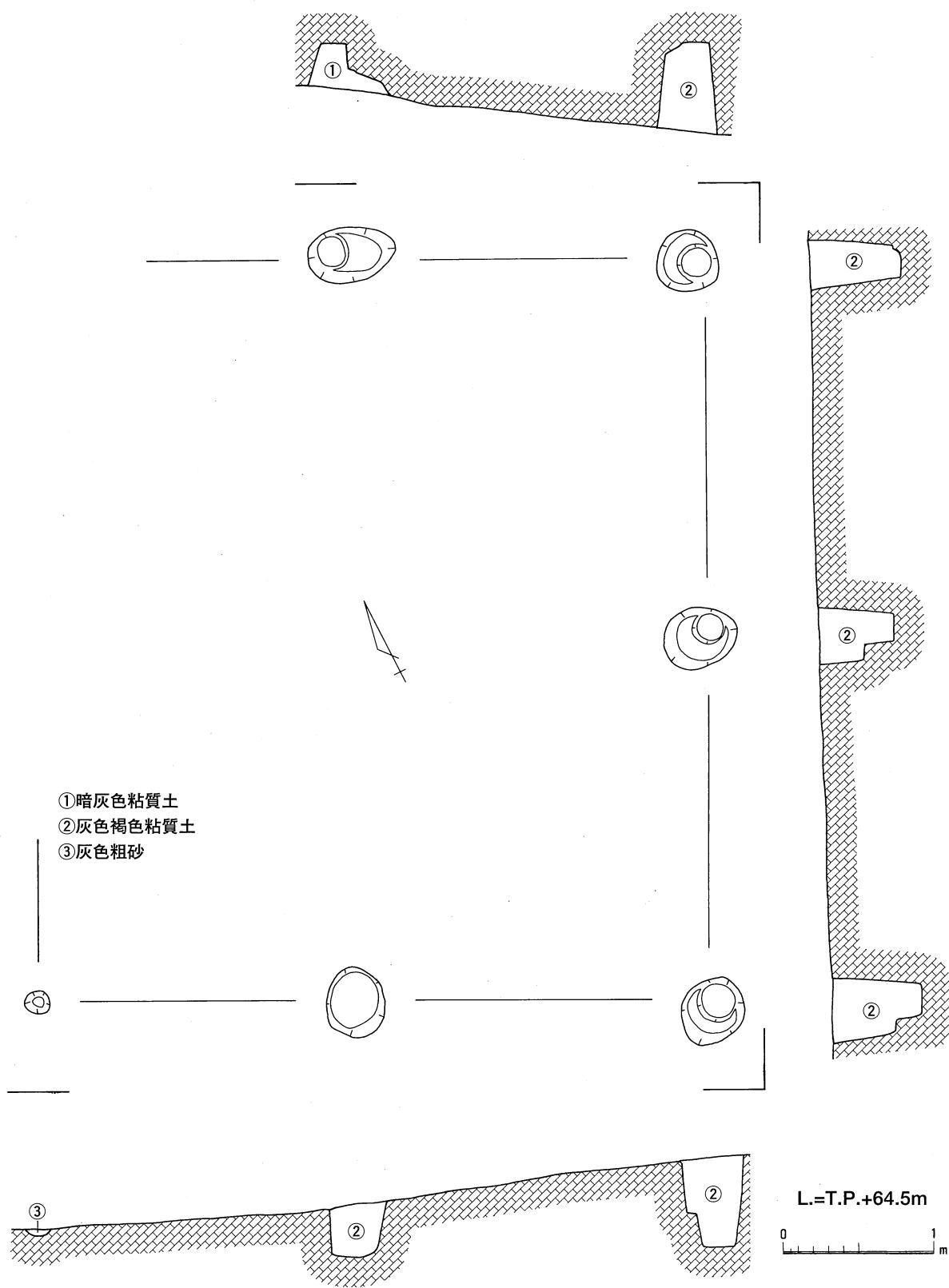


図96 SB89(2)03平面・土層断面図

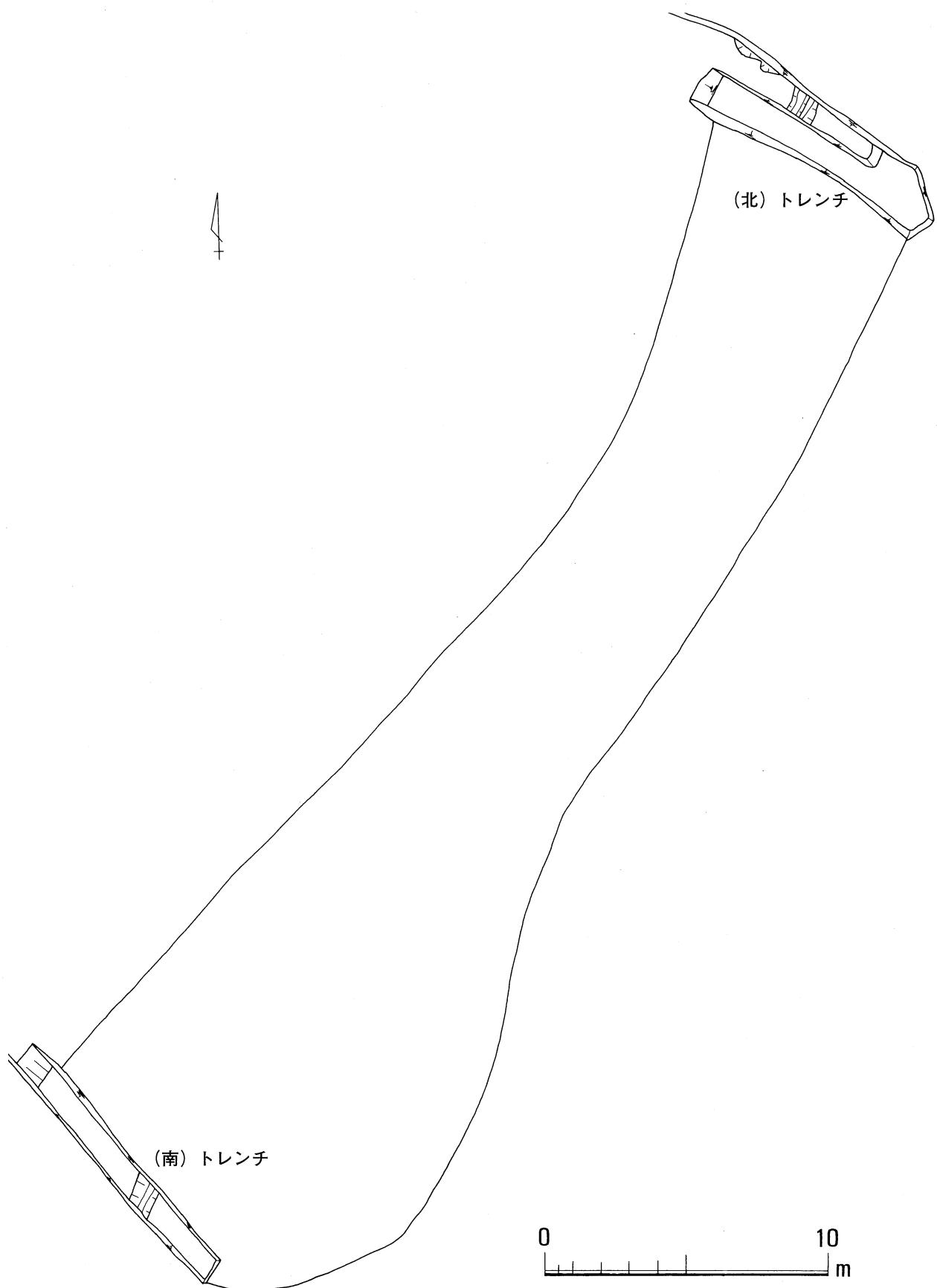


図97 64トレンチ遺構面平面図

64トレンチ

64トレンチは61トレンチの南側である。遺構面の把握のために、事前にトレンチの南北辺に沿って1m幅で地山面まで掘削した。地山面は65トレンチと同様に西北へ傾斜しているよう、北側では地表面から深い所で2mにもおよぶことが判明した。しかし、その埋土は砂質土に径2~5cmの灰色系、橙色系の粘土塊を含むことから、人為的な整地土層である。整地土層からは弥生土器、土師器、須恵器、備前焼、鉄釘（M1）が出土した。地山面では溝を検出した。検出したのはわずかな範囲だ

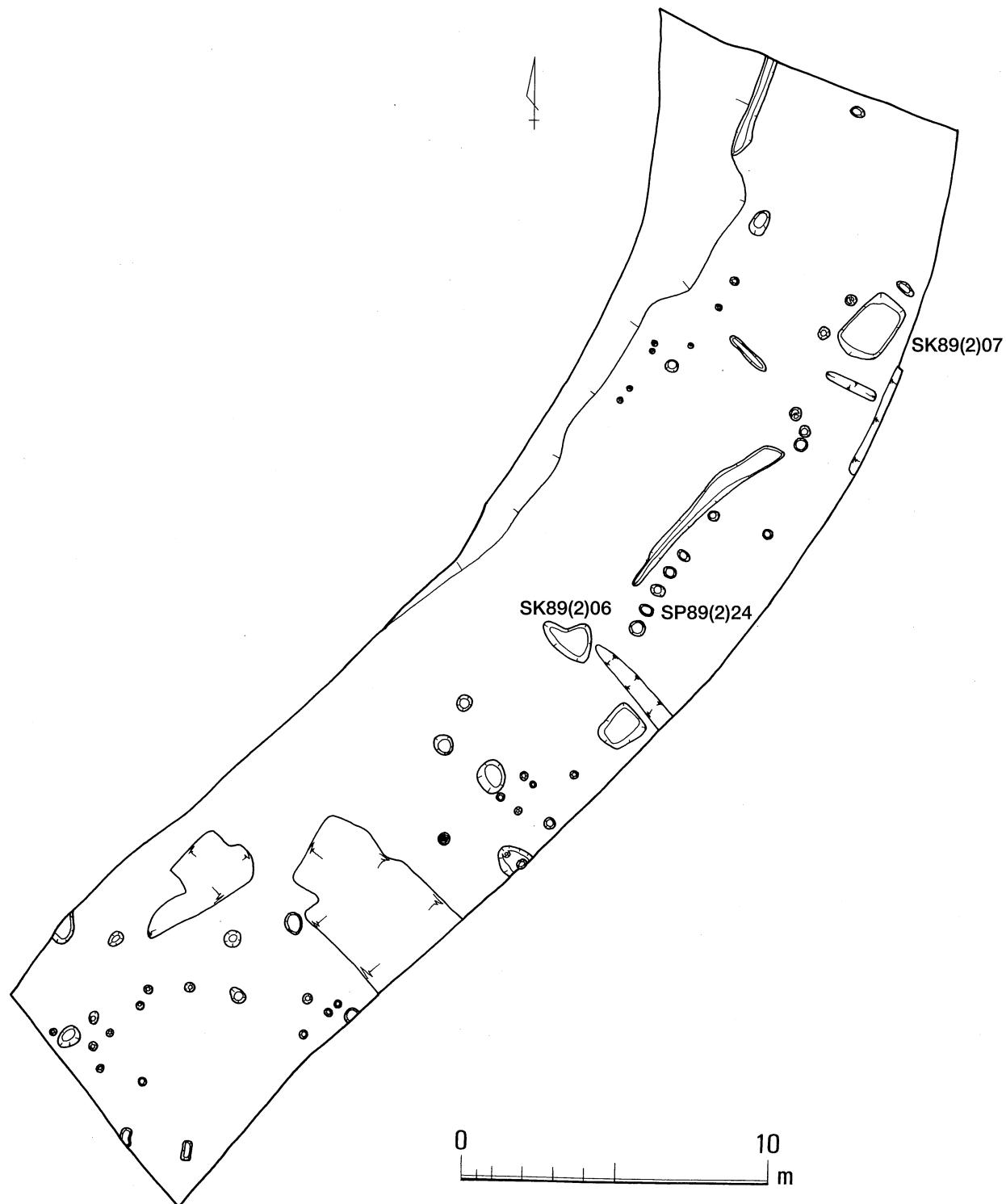


図98 65トレンチ第1遺構面平面図

が、北側のものは幅0.5m、深さ0.1m、南側のものは幅1 m、深さ0.2mである。北側の溝の埋土からは磁器が出土した。これらのことから、整地が施されたのは近世以降と考えら、地山面の遺構も希薄なため、64トレンチの調査はこれで終了した。



図99 65トレンチ第2遺構面平面図

65トレンチ

65トレンチは64トレンチの西側である。地山面で標高64.9~66.4mで、西へ傾斜していた。遺構面は2面を検出した。

第1遺構面は明灰黄色砂質土層を除いた面である。明灰黄色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、備前焼、青磁、陶器、磁器等が出土した。溝、土壙、ピットを検出した。

溝は3条検出した。幅0.3~0.7m、深さ0.1mである。土師器、須恵器が出土したものもある。近現代の耕作に伴うものであろう。

土壙はトレンチ東半で散在して検出した。平面形は様々であるが、深さ0.1m前後である。弥生土

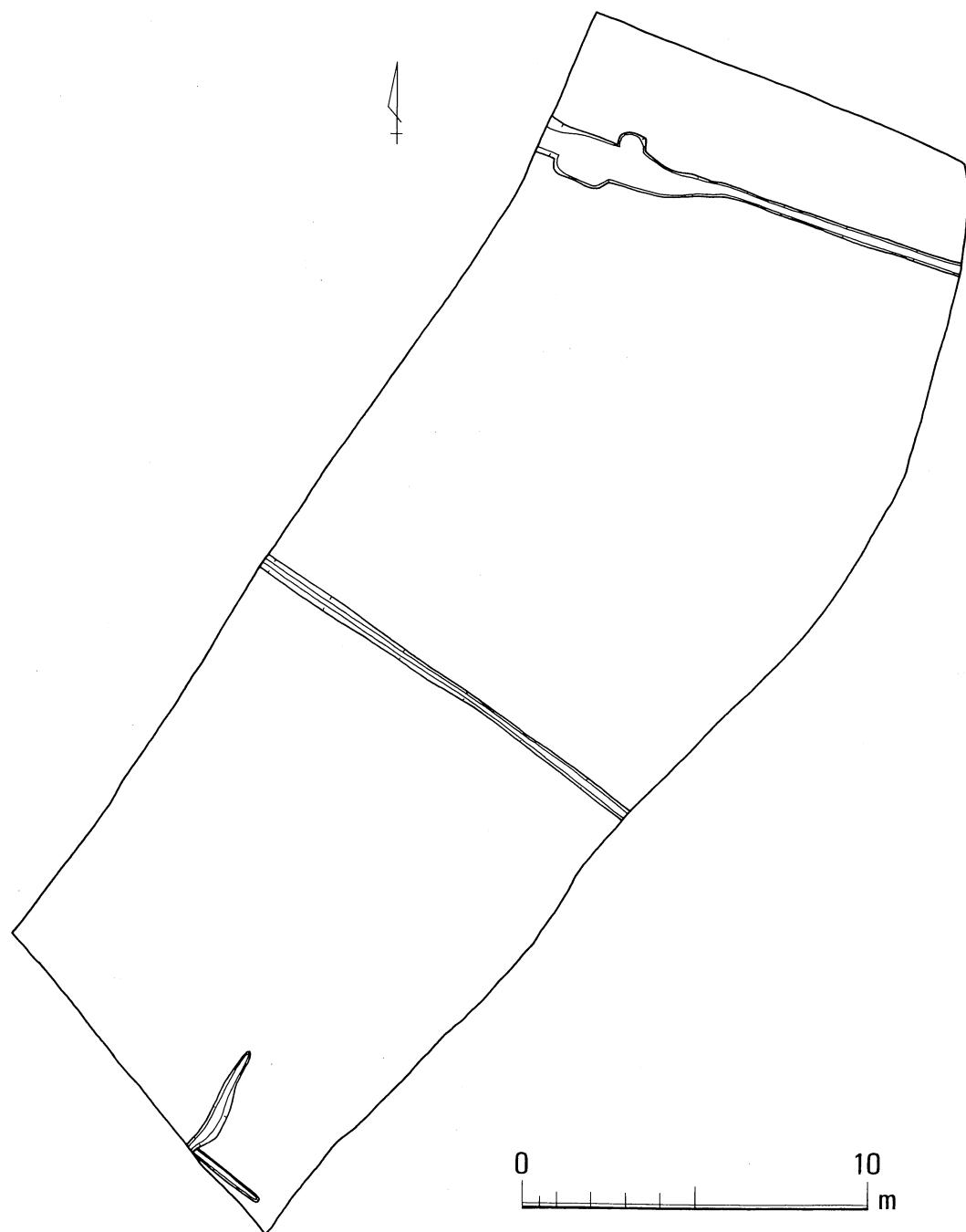


図100 66トレンチ第1遺構面平面図

器、土師器、須恵器、備前焼が出土したものもある。

SK89(2)06はトレンチ中央で検出した。平面不定形、長径1.8m、短径1.2m、深さ0.1mである。弥生土器（155）、土師器、須恵器、備前焼（156）が出土した。

SK89(2)07はトレンチ北東部で検出した。平面長方形、長辺2m、短辺1.4m、深さ0.4mである。弥生土器、土師器、備前焼（157）、染付が出土した

ピットはトレンチ全面で検出した。平面円形のものが主で、径0.2~0.5m、深さ0.1~0.4mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。土師器の小片が出土したものもある。

SP89(2)24はトレンチ中央ではほぼ等間隔に並んで検出した5基のピットの南から2基目である。平

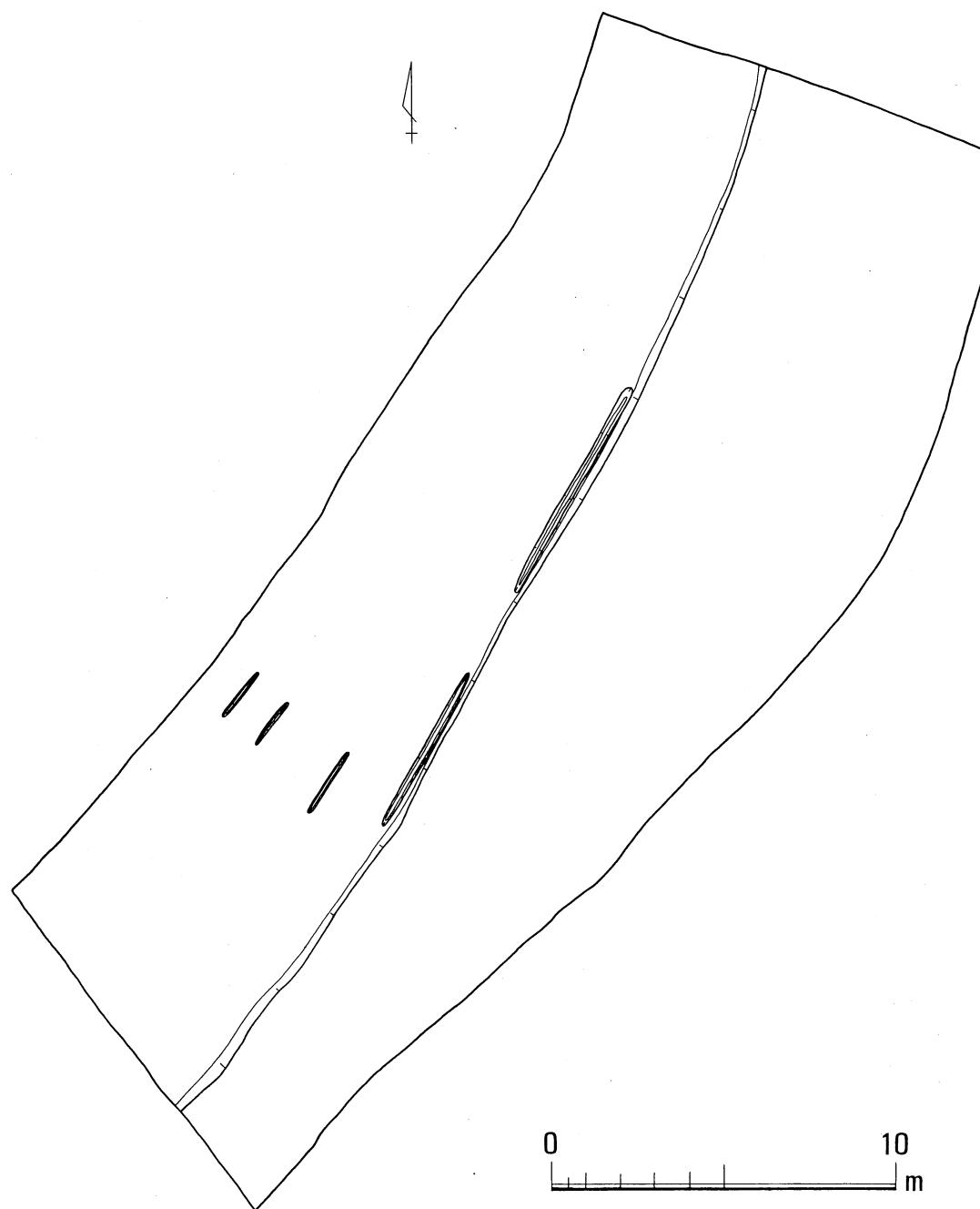


図101 66トレンチ第2遺構面平面図

面橢円形、長径0.45m、短径0.3m、深さ0.2mである。弥生土器、土師器（158）が出土した。

第2遺構面は地山面上に堆積していた淡赤茶色砂質土層を除いた面で、地山面である。淡赤茶色砂質土層からは弥生土器（159・160・161・162・163・164・165）、土師器、須恵器、サヌカイト製打製石包丁（S9・S10）等が出土した。溝、ピットを検出した。

溝は3条検出した。幅0.3m、深さ0.1mである。弥生土器が出土したものもある。

ピットはトレンチ全面で検出した。平面円形、径0.2~0.5m、深さ0.1~0.5mである。柵列等つまりのつかめるものはなかった。弥生土器、土師器が出土したものもある。

トレンチの北西部は北西方向へ段を成して落ち込んでいた。この段差は66トレンチ東辺で検出したものに続き、落ち込みの底面は66トレンチ第6遺構面に続くものである。

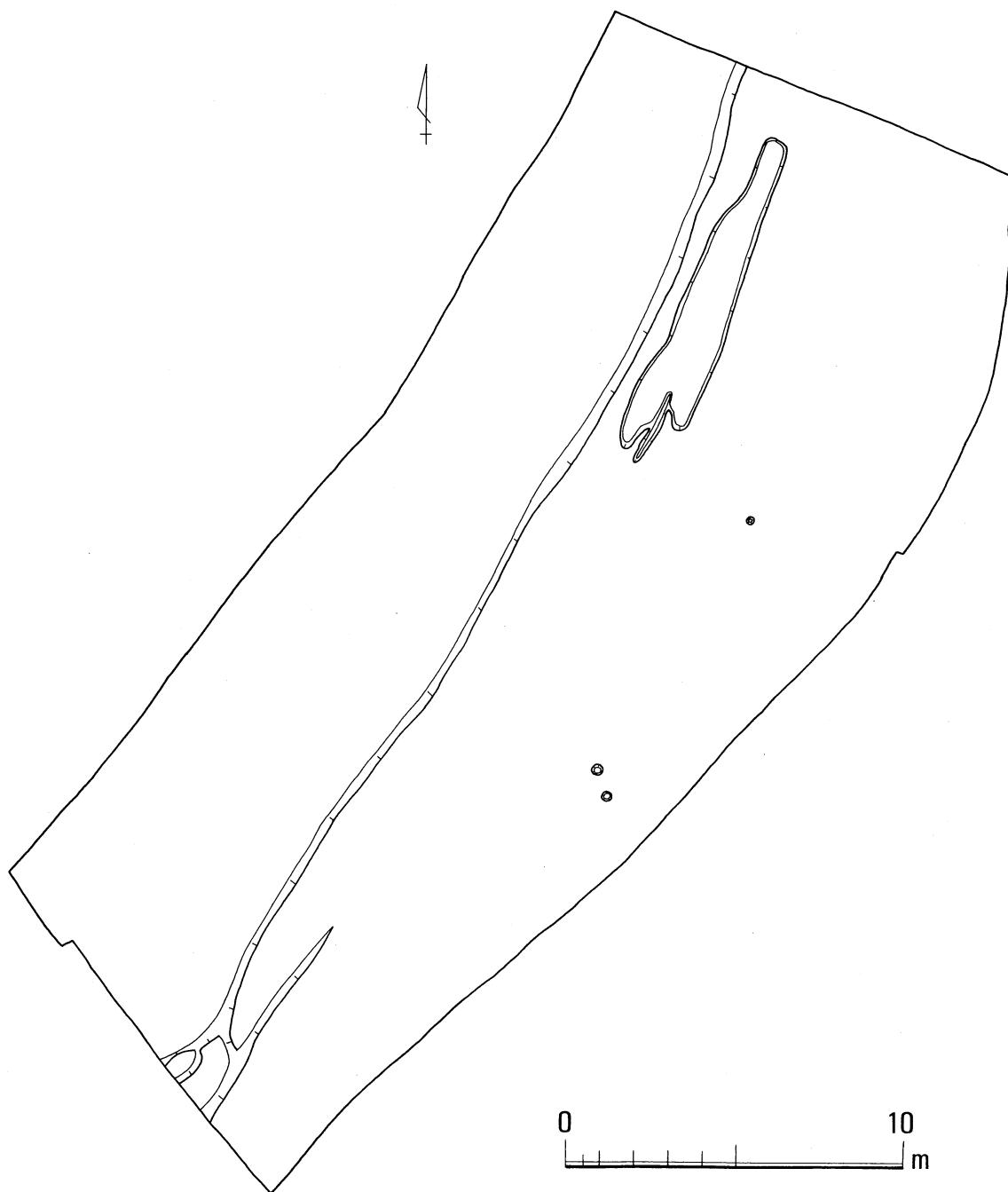


図102 66トレンチ第3遺構面平面図

66トレンチ

66トレンチは65トレンチの西側で、西区の南西端である。地山面で標高64.0～64.1mで、ほぼ平坦であった。遺構面は6面を検出した。

第1遺構面は現耕作土層を除いた面である。現耕作土層からは弥生土器、土師器、須恵器、染付が出土した。溝を検出した。

溝はトレンチを東西方向に横断する幅0.3～0.4m、深さ0.1～0.2mの2条と、トレンチ南東角の幅0.3m、深さ0.05m未満の浅い2条である。土器の小片が出土したものもある。前者は礫が詰められていたことから暗渠排水路である。後者は耕作に伴う鋤溝である。これらは近現代の耕作に伴うものであろう。

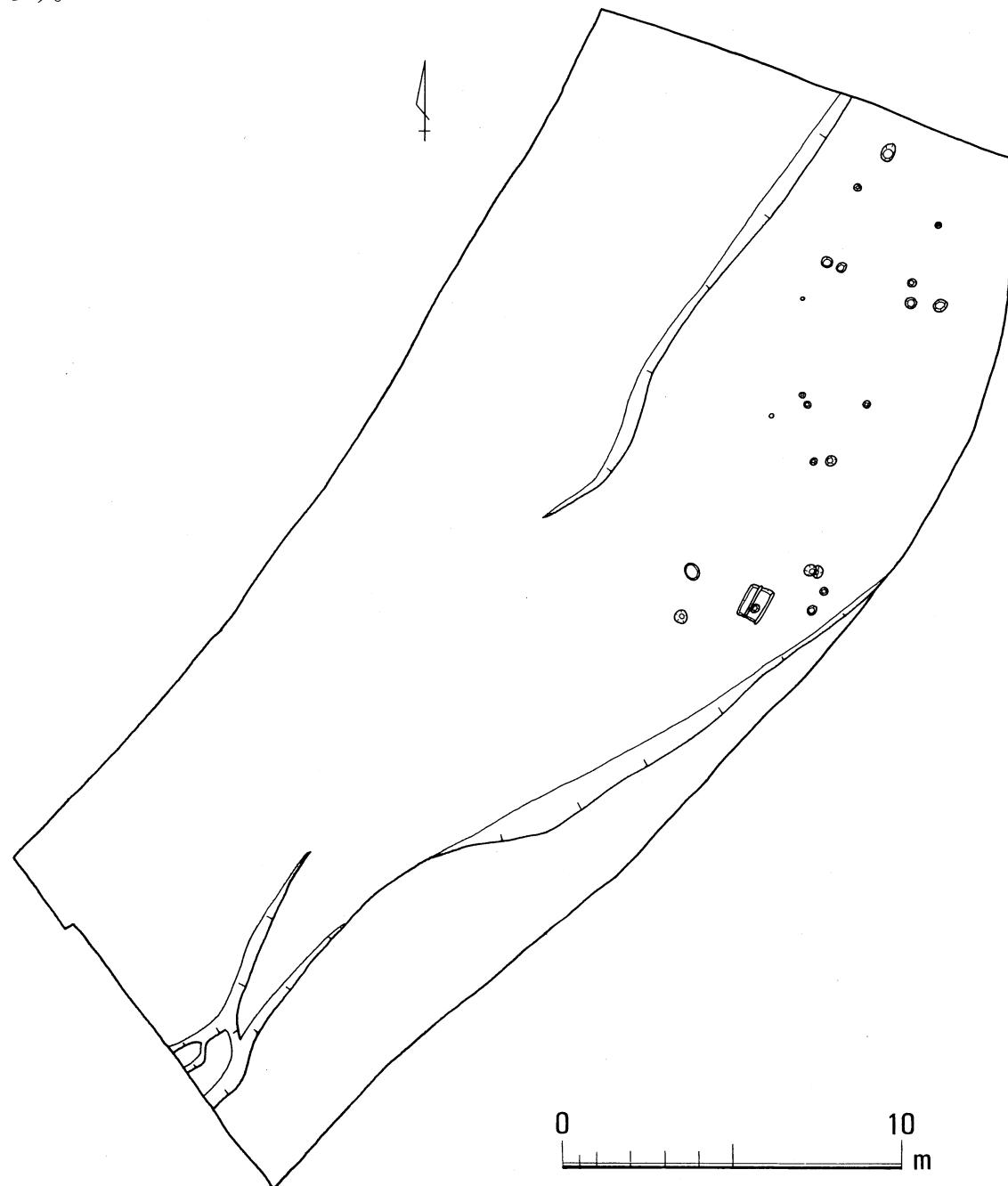


図103 66トレンチ第4遺構面平面図

第2遺構面はトレンチ西半に施された厚さ0.2mの整地土層を除いた面である。整地土層からは弥生土器、土師器、須恵器、備前焼、陶器、磁器等が出土した。溝を検出した。

溝は田面の長辺に並行する南北方向で、幅0.1~0.4m、深さ0.05m未満である。遺物の出土はみられなかった。近現代の耕作に伴う鋤溝であろう。

第3遺構面は淡茶灰色砂質土層を除いた面である。淡茶灰色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、備前焼、青磁、白磁等が出土した。ピット、落ち込みを検出した。

ピットは3基検出した。平面円形、径0.3m、深さ0.1m未満である。落ち込みは長さ10m、幅1.5m、深さ0.1mである。底面は平坦である。遺物の出土はみられなかった。これらは近世の耕作に伴うものであろう。

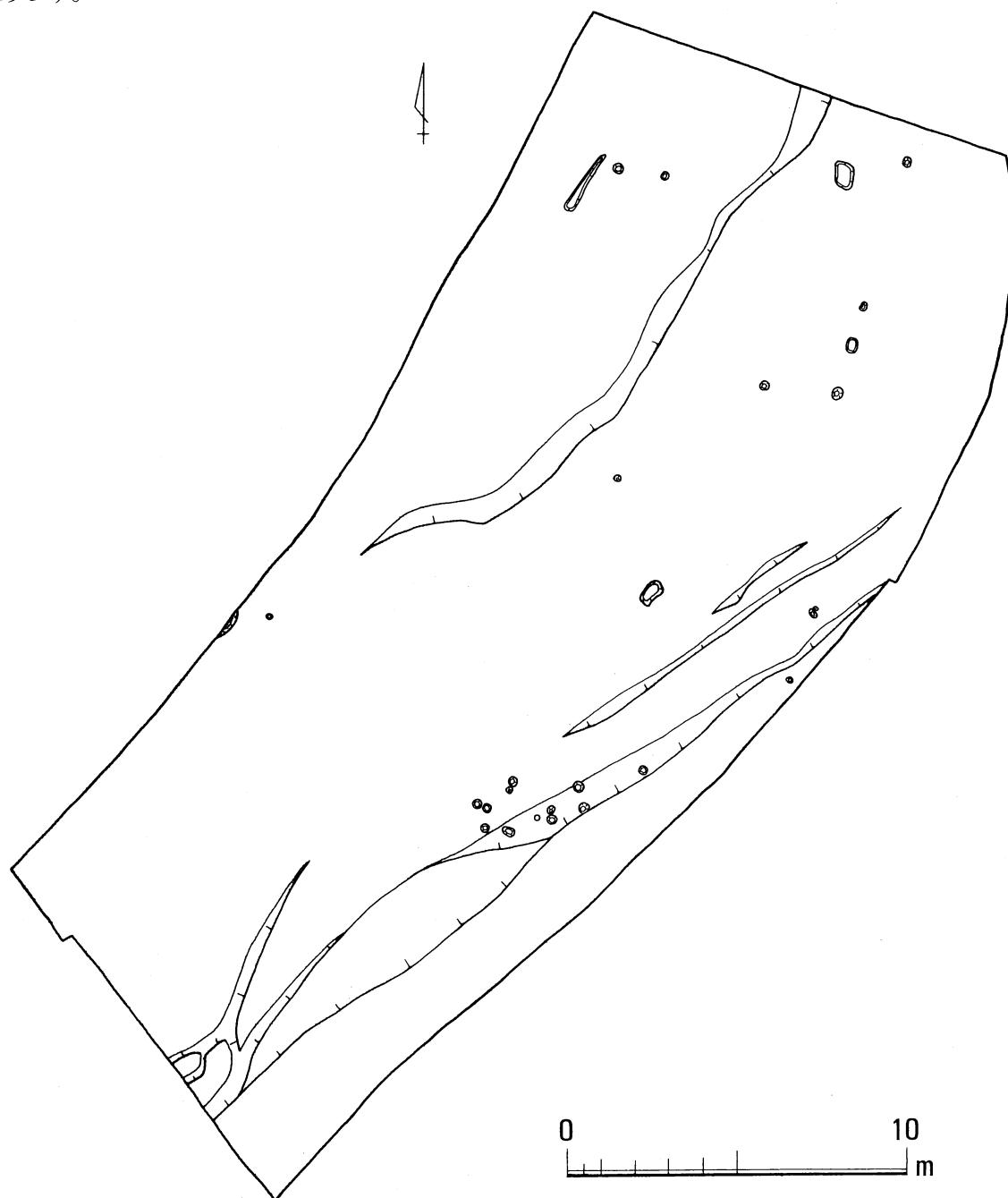


図104 66トレンチ第5遺構面平面図

第4遺構面は白灰色砂質土層を除いた面で、トレンチ北半部分で検出した。白灰色砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、備前焼、陶器等が出土した。ピットを検出したが、それらを検出したのは遺構面の東半部分である。トレンチ全体からすると北東部分にあたる。

ピットは平面円形、径0.2~0.4m、深さ0.1~0.2mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。弥生土器、土師器、備前焼の小片が出土したものもある。

第5遺構面は茶灰色系砂質土層を除いた面で、数段の段を成して、西へ傾斜していた。茶灰色系砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器等が出土した。ピット、溝を検出した。

溝はトレンチ北西部で1条検出した。幅0.2m、深さ0.05mである。弥生土器が出土した。

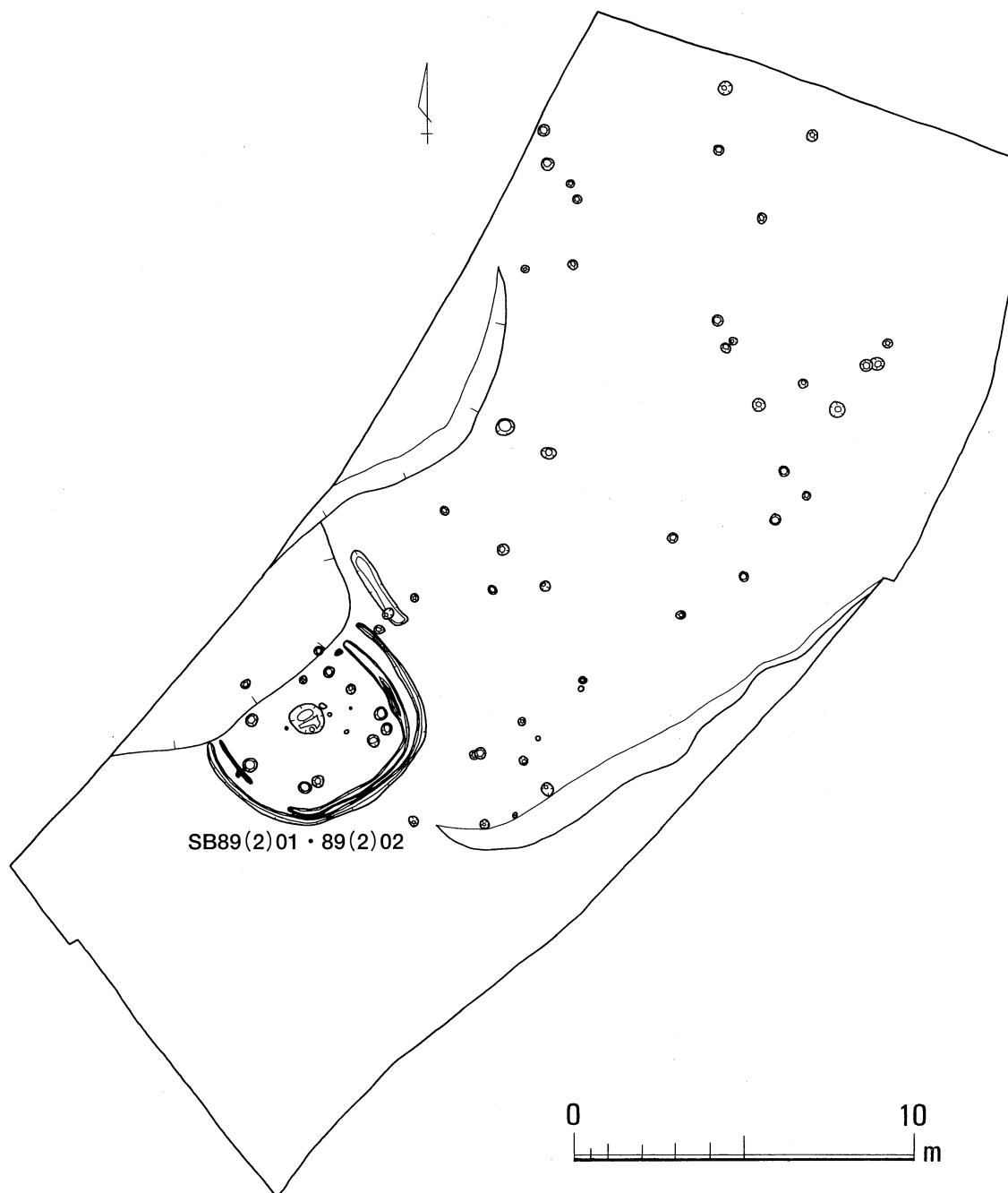


図105 66トレンチ第6遺構面平面図

ピットはトレンチ東半部分を中心に検出した。平面円形のものが主で、径0.2~0.3m、深さ0.1~0.2mである。柵列等まとまりのつかめるものはなかった。弥生土器、土師器の小片が出土したものもある。

第6遺構面は地山面上に堆積していた褐色粘質土層を除いた面で、地山面である。褐色粘質土層からは弥生土器、土師器が出土した。竪穴建物、溝、ピットを検出した。

竪穴建物はトレンチ南半中央で検出した。深さ0.5mの竪穴の床面からU字形の溝とピットを検出した。壁体溝、中央穴をもつ円形竪穴建物である。西辺は後世の造成で削平されていた。壁体溝が二重に巡ることから、径5.1mのSB89(2)01を径6.2mのSB89(2)02に拡張している。柱穴は分離出来なかったが、どちらの建物も4本柱であろう。壁体溝は89(2)01に伴う内側のものが幅0.2m、深さ0.05m、89(2)02に伴う外側のものが幅0.3m、深さ0.05mである。中央穴は2基を隣接して検出した。東側の掘方は平面円形、径0.25m、深さ0.4mで、ほぼ垂直に掘り込まれていた。西側の掘方は平面橢円形、長径0.9m、短径0.5m、深さ0.3mで、斜めに掘り込まれていた。柱穴の掘方は平面円形、径0.35m、深さ0.5~0.7mである。床面から炭化材を検出したことから、火災で廃絶したことが窺える。竪穴の埋土から弥生土器（166・167・168・169・170・171・172・173・174・175・176・177・178・179・180・181・182・183・184・185・186・187・188・189・190・191・192・193）、頁岩製磨製石包丁（S11）、サヌカイト剥片（S12・S13・S14・S15）が出土した。調査時に竪穴は



図106 SB89(2)01・89(2)02炭化材検出状況平面・断面図

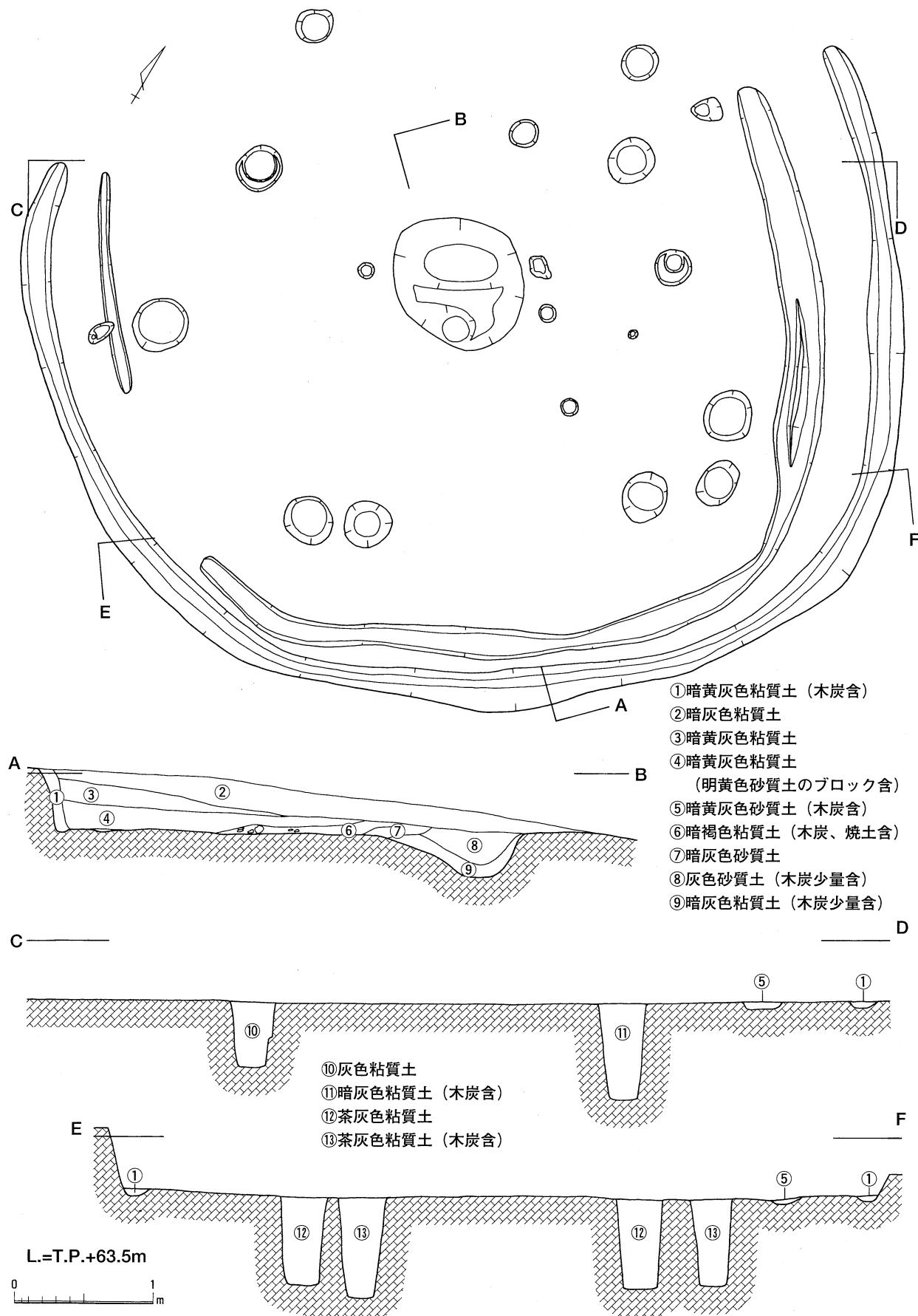


図107 SB89(2)01・89(2)02平面・土層断面図

流入水によって泥濘と化していた中を手探りで遺物を取り上げるような状況であった。床面で壁体溝を検出したことから建て替えが判明したので、竪穴の埋土から出土した遺物がどちらの建物に伴うものなののかは不明である。壁体溝、中央穴、柱穴からも弥生土器が出土した。時期は弥生時代中期後半に位置付けられよう。

溝はSB89(2)01の北側で1条検出した。幅0.5m、深さ0.1mである。遺物の出土はみられなかった。

ピットはSB89(2)01の北側で散在して検出した。平面円形、径0.2~0.5m、深さ0.1~0.3mである。柵列等つまりのつかめるものはなかった。弥生土器の小片が出土したものもある。

西区の西向き斜面上で竪穴建物を検出したのはこのトレンチのみである。地表面から遺構面までの深度の差も考慮しなければならないが、北向き斜面である他の西区や東区の様相と比較すると、西向き斜面は調査面積に比して竪穴建物が極端に少ない。SB89(2)01を含む西側斜面は他とは違った使途に供されていたのであろうか。

第Ⅳ章 遺 物

第1節 土器類

発掘調査によって出土した土器類について、その概要を説明する。全体としては、弥生時代の土器、古墳時代の土師器、須恵器、古代の土師器、中世の土師質土器や陶磁器、近世の陶磁器である。遺物の出土量からすると、弥生時代の土器が主体となる。弥生時代の土器については、中期と後期である。中期は後半、後期は前半の時期である。中期はその特徴から前（中Ⅰ期）・中（中Ⅱ期）・後（中Ⅲ期）の3時期に分けてとらえ、中Ⅰ期は従来の高田式で畿内第Ⅱ様式、中Ⅱ期は従来の南方式と菰池式で畿内第Ⅲ様式、中Ⅲ期は仁伍式、前山Ⅱ式に対応する。後期については、後Ⅰ期から後Ⅳ期の4時期に区分する。後Ⅰ期から後Ⅲ期が従来の上東式、後Ⅳ期は従来の酒津式に対応する。

28トレンチ（S D 8804）出土遺物（図108）

壺形土器（1）、甕形土器（2）、高杯形土器（3）、底部（4～6）である。いずれも器表面の風化が進行していることから、調整の詳細は不明である。中Ⅲ期の時期である。

30トレンチ出土遺物（図108）

13世紀後半の土師質土器鍋（7～10）である。口縁部の形状は「く」字形に外反するものと直口で断面三角形の突帯が貼られるタイプに分けられる。前者については、一見、口縁端部の形状は個々に異なるようでもあるが、基本的には内湾し、端部をつまみ上げる形状といえる。外面調整は風化しており、不明であるが、内面にはヨコハケが認められる。岡山平野の同種の土器鍋と比較すると、調整や整形がやや粗雑な様相を呈する。

31トレンチ（S B 8803・S D 8807）出土遺物（図108）

壺形土器（11・15・17）、鉢形土器（12・13）、高杯形土器（14）、底部（16）である。いずれも器表面の風化が進行していることから、調整の詳細は不明である。時期は中Ⅲ期と後Ⅳ期の2時期がある。S B 8803には中Ⅲ期と後Ⅳ期のものが混在しており、S D 8807は後Ⅳ期のもののみで構成される。

33トレンチ（S K 8811・S K 8818・S K 8822・S P 8827・S P 8836・S P 8840・S P 8860・S P 8864）出土遺物（図108）

S K 8811出土の土師器（20）以外は弥生土器である。土師質土器杯（20）は、10世紀後半の時期である。弥生土器の特徴としては県南部の特徴が大半であるが、甕形土器（23）は県北部の特徴を有している。各土器の調整は、比較的残りが良好であり、ハケやヘラミガキが認められる。中Ⅲ期の時期である。

35トレンチ（S B 8804・S P 8886）出土遺物（図109）

SB8804から土師器（27）が、SP8886から弥生土器（28・29）が出土した。28が中Ⅲ期、29が後Ⅰ

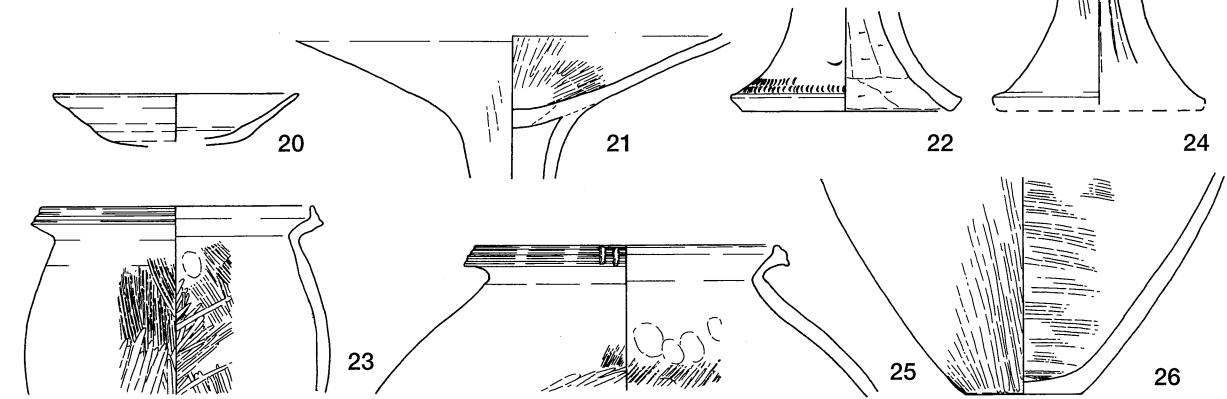
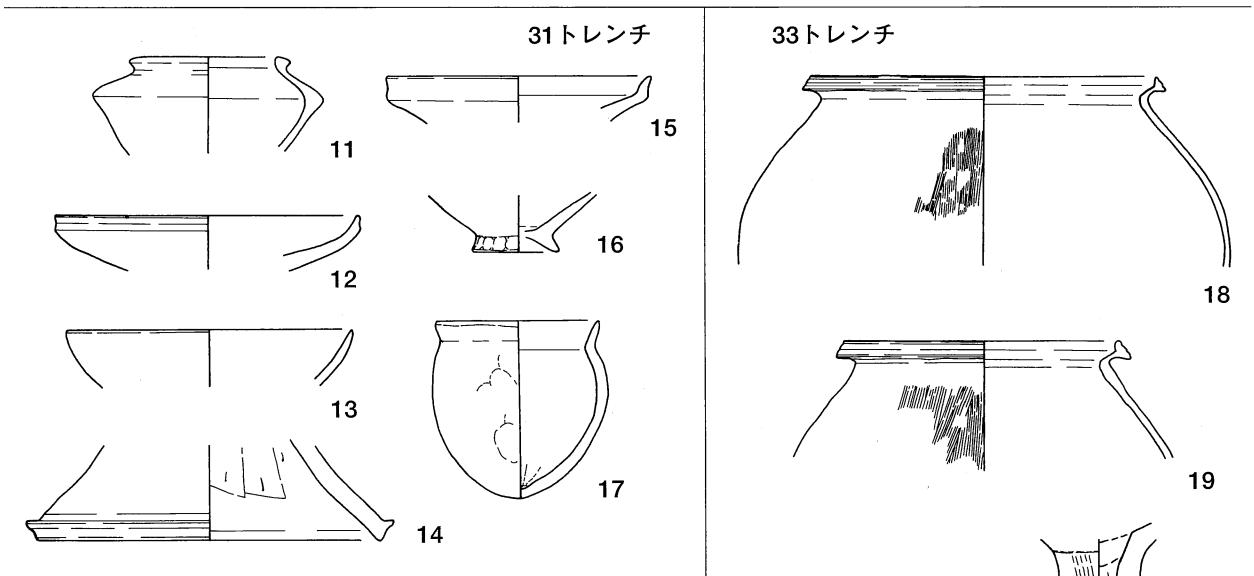
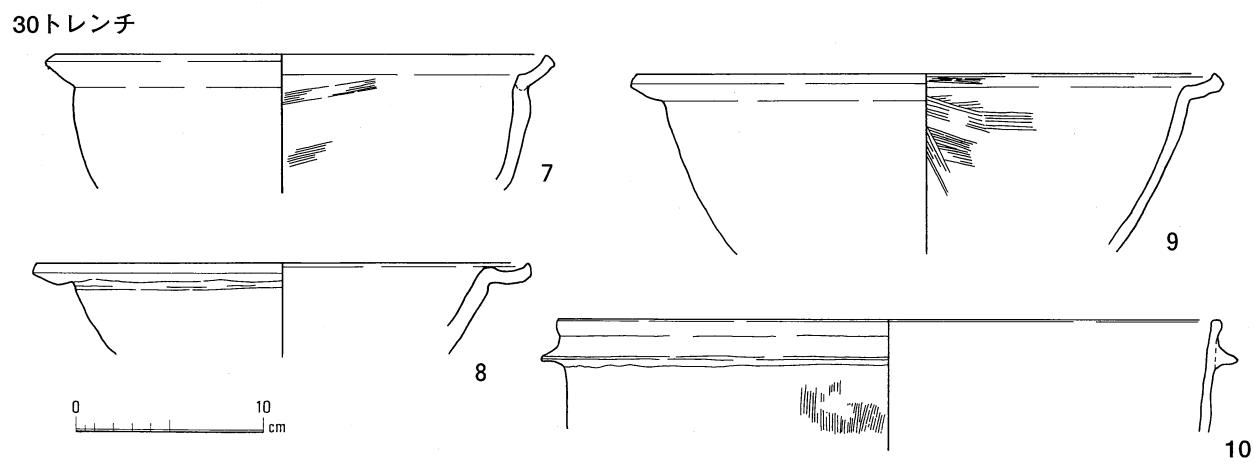
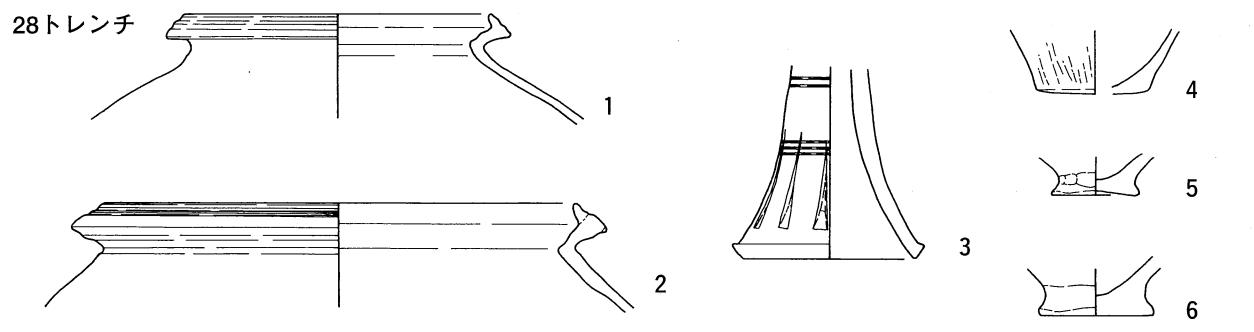


図108 土器実測図 (1)

期、27が古Ⅱ期の時期である。

36トレンチ出土遺物（図109）

遺構面の覆土から出土した土器である。弥生時代後期前半、古墳時代前期、古墳時代中期の時期である。30は古墳時代前期の甕形土器で、県南部に特徴的な、いわゆる「吉備型甕」である。31～33は後Ⅱ期の時期であり、32はおそらく砲弾型を呈する鉢形土器の胴部付近の破片であり、稚拙な鋸歯文が焼成前に線刻されている。胎土は比較的精選されている。器台の筒部になる可能性もある。33は底部である。34は古墳時代前期の小型器台形土器、もしくは高杯形土器であろう。器表面は細かなヘラミガキが施されているが、器壁は比較的厚く、在地的な土器といえる。35は須恵器杯身で、5世紀末から6世紀初頭の時期である。

38トレンチ（SK 8835）出土遺物（図109）

土器棺である壺形土器（36）は、頸部以上を打ち欠いている。内部から高杯形土器（37）が出土しており、同様の土器棺から推測すると、土器棺の蓋として使用されていたと考えられる。ただし、高杯形土器（37）は、断面等がかなり風化しており、二次的に混入した可能性もある。壺形土器（36）は、内面の調整は観察できないが、器壁も厚く、後期の特徴を有している。高杯形土器（37）の特徴から後Ⅰ期の時期と考えられる。

44トレンチ（SB 8901・SD 8912・SD 8913・SD 8919・SK 8902・SK 8908・SP 8911・SP 8913・SP 8963・SP 8965・SP 8967）出土遺物（図109・110）

中世から弥生時代中期末の時期の土器である。38・39は亀山焼の甕の胴部片である。40は15世紀の時期の備前焼擂鉢である。瓦質土器鍋（41）は14世紀の時期である。須恵器杯蓋（42）は7世紀初頭の時期である。43は土師質土器皿の小片で、風化が著しく、底部外面の調整も観察できない。土師質土器杯（44）は11世紀前半の時期である。45は備前焼甕の口縁部片で、粗雑なヨコナデが施されている。46は土師質土器鍋の破片である。小片のため全形は不明で、調整も不明である。47～54、56～64、67、68、70、71は、弥生時代後期の土器であり、57については中期末の特徴が認められる。ただし、全体的には後Ⅱ期から後Ⅳ期の時期幅の中にあり、比較的長時期の遺物や遺構が存在しているといえる。器台形土器（71）以外は小片であり、器表面の残存状態も悪く、調整等は不明であるものが大半である。47は小片ではあるが、「く」字形に外反する口縁部を有する甕形土器で、外面には平行タタキが施され、比較的薄手の器壁である。特徴的な胎土ではないが、東からの搬入と推測される。時期的に共通すると考えられる50・51は、県南部の土器の特徴を忠実に模しており、該期における地域的特徴が県南部と一体的であったことがうかがわれる。器台形土器（49）は小片であるが、断面方形の突帯があり、円形の透かし穴が認められる。胎土は比較的精選されてはいるが、基本的には普通の土器胎土である。63は外面には僅かながらヘラミガキが認められ、県南部における後Ⅱ期の小型高杯の在地化したものと推測される。手づくね土器（67）は、口縁部の特徴から後Ⅱ期の甕形土器を模していると推測される。土師質土器皿（65・66）は13世紀後半の時期である。土師質土器皿（69）は14世紀後半の時期である。

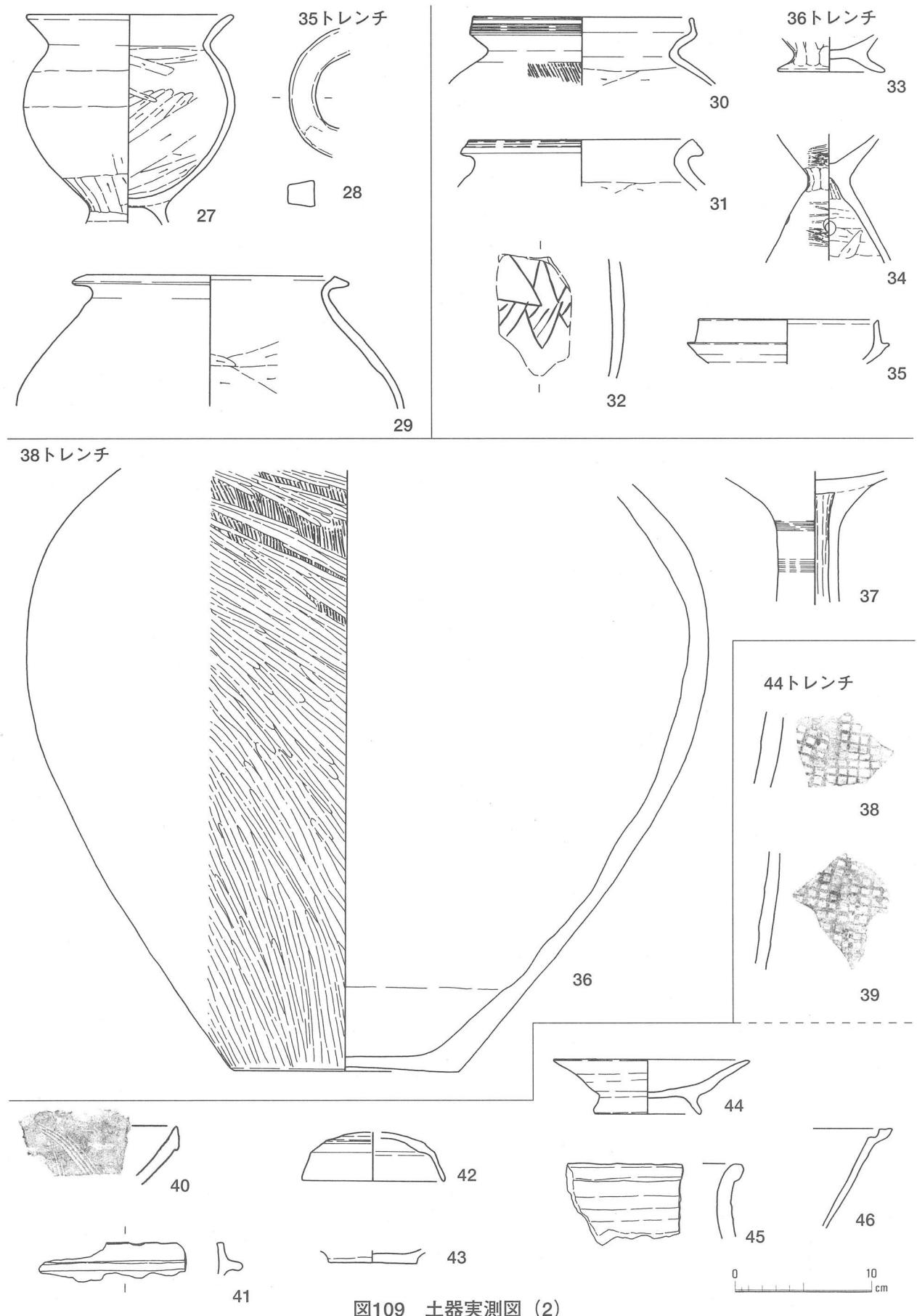


図109 土器実測図 (2)

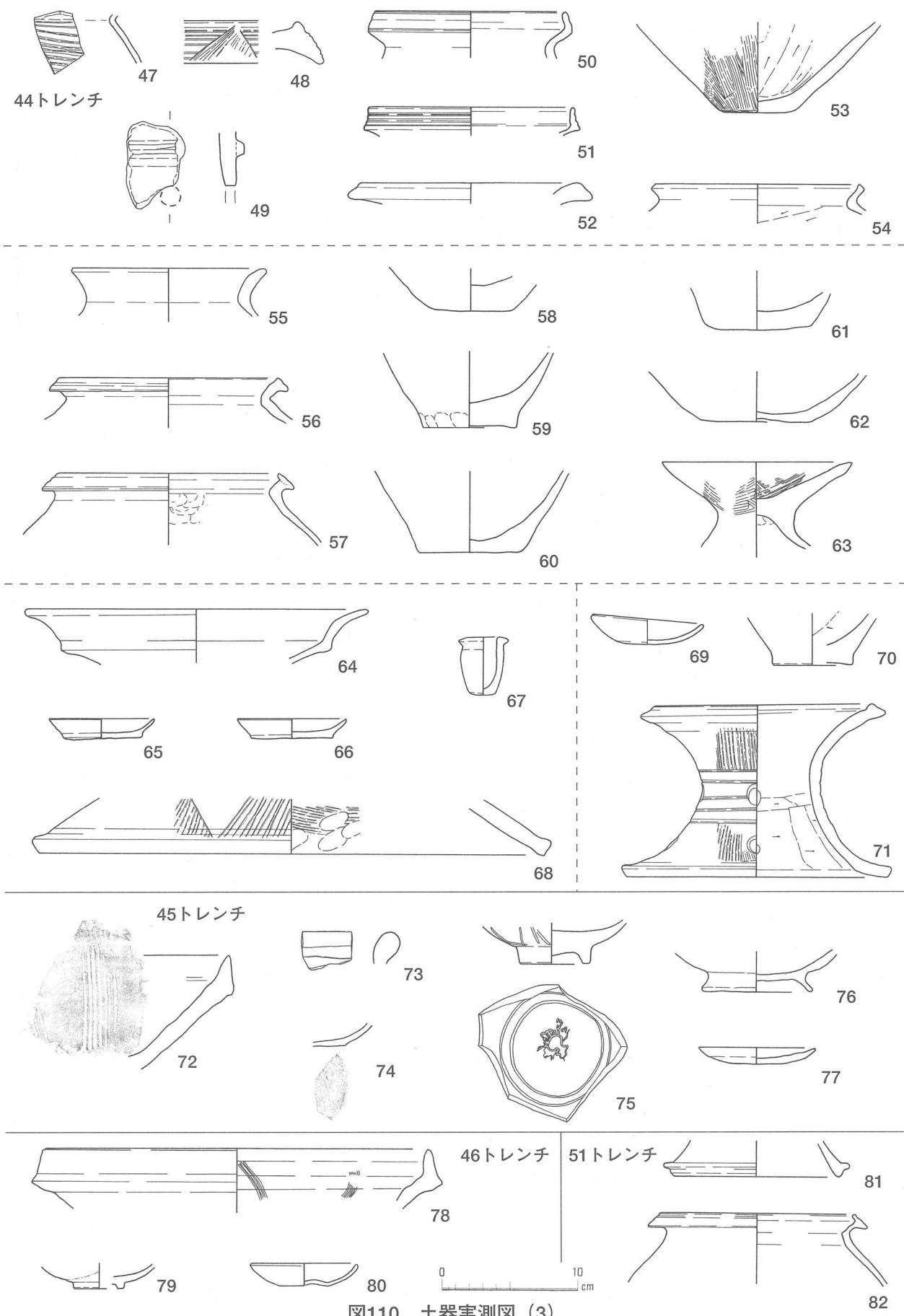


図110 土器実測図 (3)

45 トレンチ出土遺物（図110）

中世の土器のみである。72・73は備前焼の小片であり、15世紀の時期である。須恵質土器杯（74）は、小片であることから碗になる可能性もある。底部は糸切りである。75は青磁碗である。土師質土器碗（76）は12世紀前半の時期である。土師質土器皿（77）は、底部の調整は不明であるが、14世紀前後の時期と推測される。

46 トレンチ（S D 8908・S K 8905）出土遺物（図110）

中・近世の土器のみである。備前焼擂鉢（78）は15世紀後半の時期である。瀬戸系陶磁器（79）は18世紀後半の時期である。土師質土器皿（80）はいわゆるヘソ皿であり、14世紀後半の時期である。

51 トレンチ（S B 8906）出土遺物（図110）

高杯形土器（81）と甕形土器（82）である。いずれも中Ⅲ期の時期である。器表面の残存状態が悪いため調整等は不明である。

52 トレンチ（S D 8938）出土遺物（図111・112）

83は15世紀の青磁碗の小片で、84は須恵器の平瓶の口縁部、85は土師器甕である。S D 8938には中世の土器と7世紀初頭の土器とが混在しているが、主体は弥生時代の土器である。86は弥生時代後期の鉢形土器である。比較的大きな破片であることや、同期の土器の量が少ないとから、土器棺の蓋であった可能性も推測される。87～95、97～101、103～105は明確な遺構からではないが、まとまって出土した。時期的にもまとまっており、土器溜まりなどの遺構の一部である可能性が高い。甕形土器（87～90・101）のうち、89以外は、胎土も似ており、口縁端部の形状も同じである。89は弥生時代後期の時期で、他は中期末（中Ⅲ期）の時期である。図化できない土器の小片も含めても、まとまって出土した土器のなかで、後期に属するのは89 1点だけである。いずれの土器も表面の風化が著しいことから、調整の大半は観察できない。高杯形土器（91・97・98）はいずれも同時期である。91と98は接合しないものの胎土的にはよく似ている。壺形土器（99・100）は別個体の土器である。99には角閃石が含まれていることから、搬入された土器である可能性が高い。96と102も中Ⅲ期の土器であるが、まとめて出土した土器群よりも古相を示す。底部（92～95）は甕形土器のもので、器壁が薄手で中期の特徴を有している。

53 トレンチ（S B 8911・S B 8912・S D 8939・S D 8960・S D 8961・S P 89168・S P 89189・S P 89208）出土遺物（図112・113）

弥生時代後期の土器と中世の土器である。105は土師質土器皿、106は備前焼碗、107は瓦質土器鍋である。105と107は15世紀の時期であり共通する。106については時期が遡る。小片であることから、混入と考えたいが、同時期における他地域からの搬入である可能性もある。ただし、周辺地域で同時期の同種の碗は認められない。108・109は弥生時代後期の甕形土器である。110は中Ⅲ期である。111～113は、弥生時代後期の時期で後Ⅳ期である。S D 8961から出土した甕形土器（114・115）は中Ⅲ期の時期で、口縁端部の形状もよく似ており、同時期といえる。S D 8960から出土した甕形土

器（116）は、完形品であり、内外面の調整の残存状態も良好である。外面上半はヨコヘラミガキ後、下半からタテヘラミガキを施し、内面は胴部中位以下をヘラケズリしている。中Ⅲ期の時期ではあるが、口縁端部の形態から114・115よりも後出する。

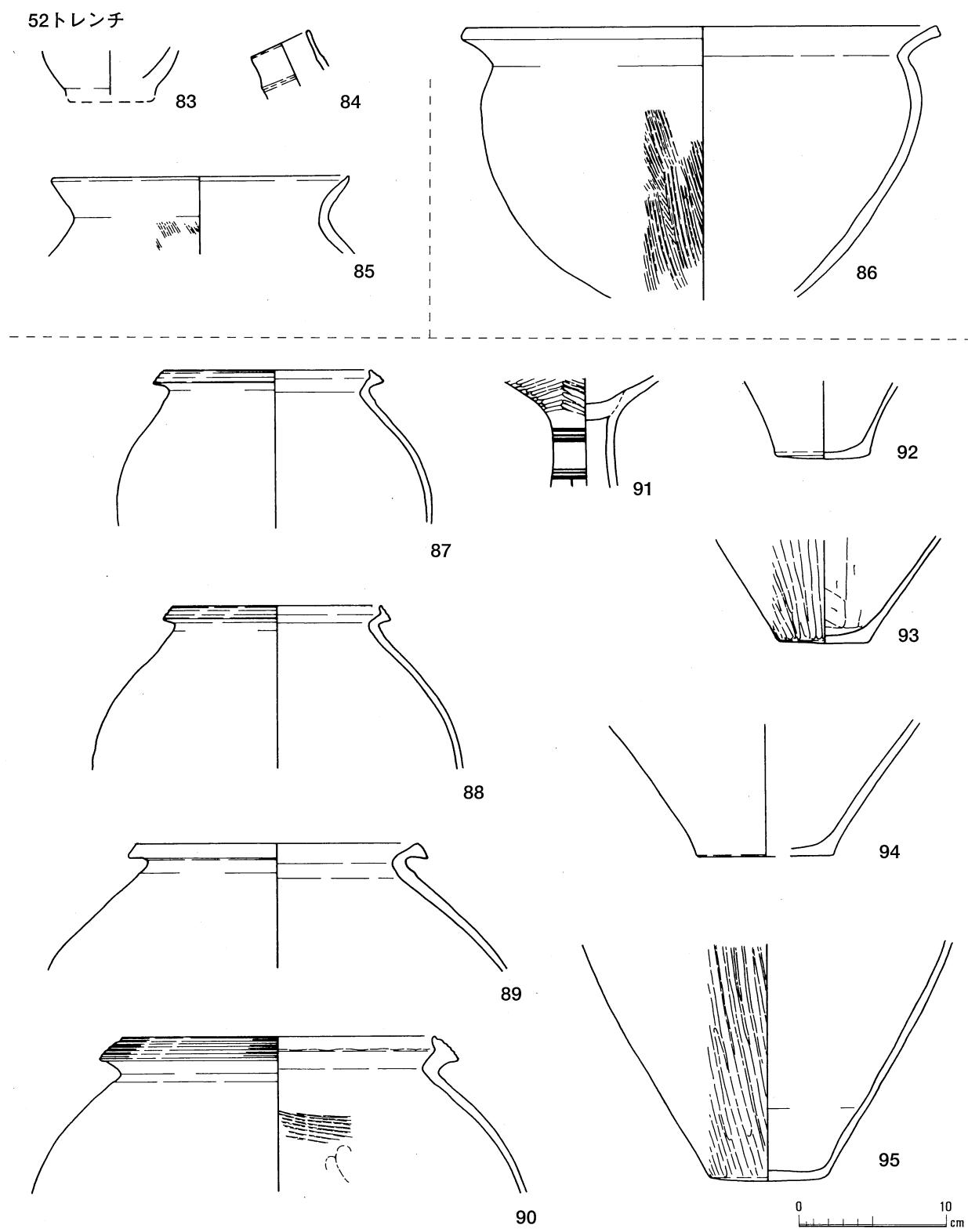


図111 土器実測図 (4)

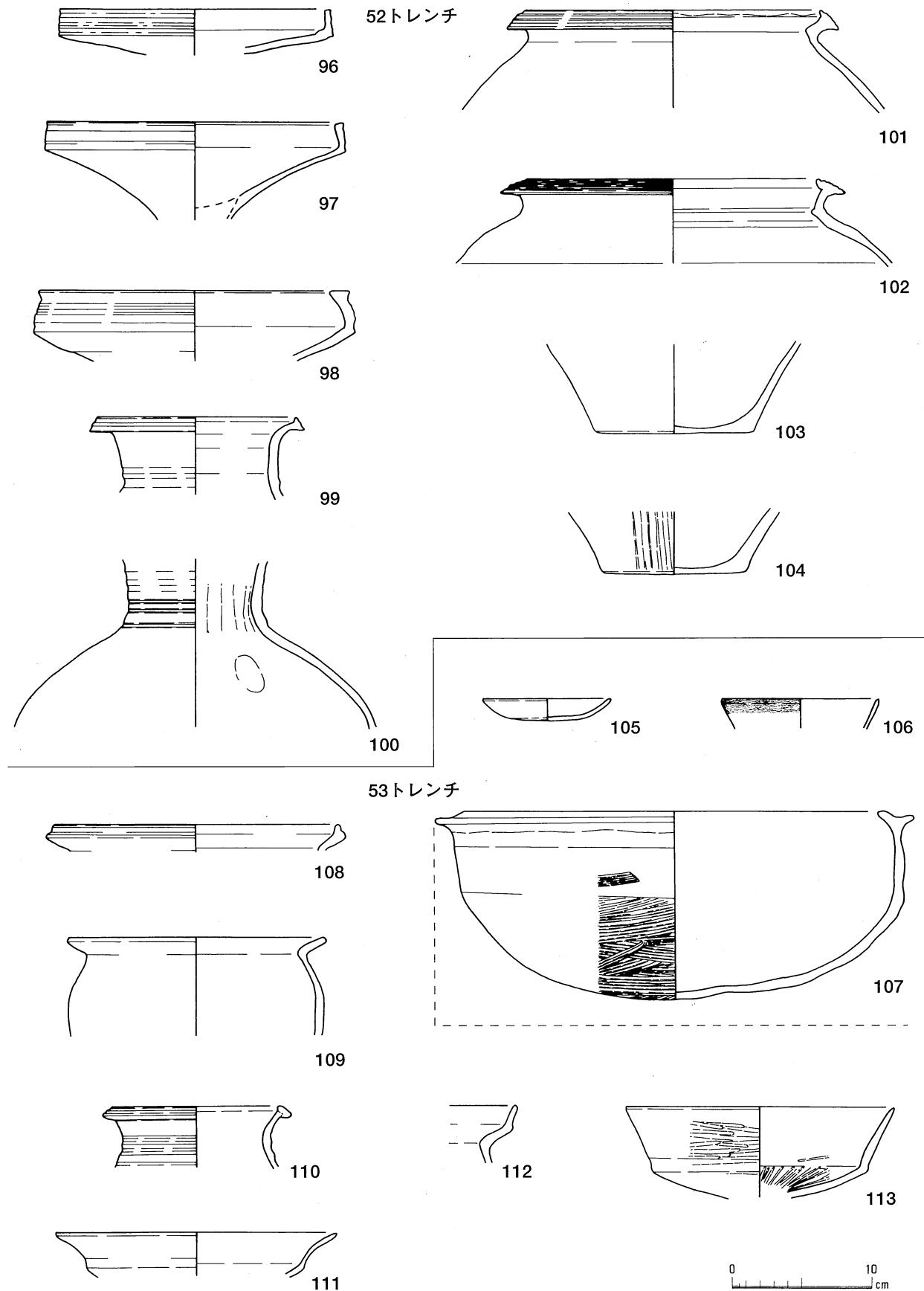


図112 土器実測図 (5)

55トレンチ (SK9011・SK9013・SK9015) 出土遺物 (図113)

SK9011から出土した高杯形土器 (117)、甕形土器 (118・119) は、後IV期の時期である。SK9013から出土した甕形土器 (123)、高杯形土器 (122・124~127) も後IV期の時期である。ただし、いずれも後IV期でも古相の特徴を有している。SK9015から出土した128・129は、いずれも小片であるが、とくに高杯形土器 (129) は、口縁部の立ち上がりが高いことから後IV期の時期といえる。55トレンチには後IV期の遺物が集中している。

56トレンチ(SK9019・SK9021・SK9022・SK9024・SK9026・SK9028・SK9029)出土遺物(図113・114・115)

SK9019からは弥生時代後期の土器が比較的まとまって出土した。壺形土器 (130) は、内外面に細かいヘラミガキが認められ、胎土も緻密である。口縁端部や脚端部は欠損しているが、他は完形である。壺形土器 (132) は、口縁部が上方に拡張されており、退化した、あるいは山陰系の要素を取り入れた後III期系譜の長頸壺形土器である。高杯形土器 (134) は水漉し粘土を用いている。器表面は残存状態が悪く、調整等は不明である。SK9019から出土した土器は、全体として同時期であり、後IV期の時期といえる。SK9021から出土した器台形土器 (135) は中空で、円孔が縦列に並ぶ。SK9022から出土した甕形土器 (136・137) と鉢形土器 (138) は、いずれも器表面の調整は風化のため不明であるが、時期は後IV期である。SK9024から出土した鉢形土器 (139)、高杯形土器 (140~143) は、後IV期の時期である。140は器表面の残存状態が良好であり、比較的細かな単位のヘラミガキが観察される。SK9026から出土した壺形土器 (144) は、外面タテハケが観察され、後IV期の時期である。SK9028から出土した甕形土器 (145・147)、は、いずれも小片であり、全形は不明であるが、畿内系の土器である。時期は後IV期の範疇に入ると推測される。146は手づくね土器である。SK9029から出土した高杯形土器 (148) と鉢形土器 (149~151) は、いずれも器表面の風化のため調整は不明であるが、後IV期の時期である。56トレンチから出土した土器は、後IV期の時期でまとまる傾向が明らかであり、該期の遺構面が良好に保存され、さらに集中していたといえる。これらのほかに弥生時代の時期と考えられる土玉 (D1) も出土している。

57トレンチ出土遺物 (図114)

備前焼擂鉢 (152) は16世紀の時期である。

58トレンチ (SB9001) 出土遺物 (図114)

SB9001から底部 (153)、高杯形土器 (154) が出土した。底部 (153) は小片であり、器表面の残存状態は悪い。高杯形土器 (154) は、ヘラナデもしくは単位の大きなヘラミガキを施しており、口縁部は受け部からわずかに立ち上がる。中III期の時期である。

64トレンチ出土遺物 (図115)

残存状態は良好ではないが、長さ約2cmの鉄釘 (M1) である。両端は欠損しており、全長は不明である。先端付近の破片である可能性が高い。断面は方形である。

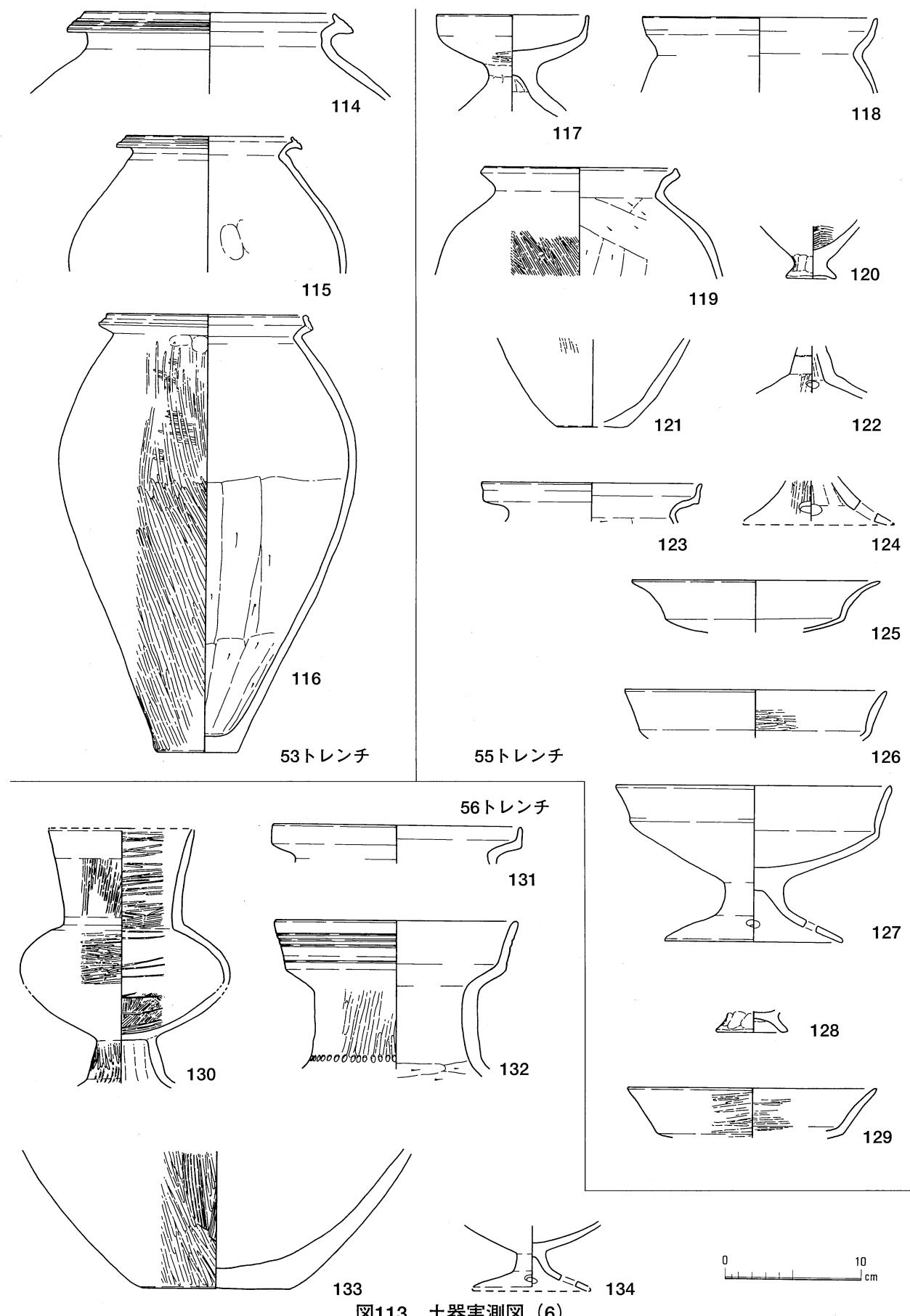


図113 土器実測図 (6)

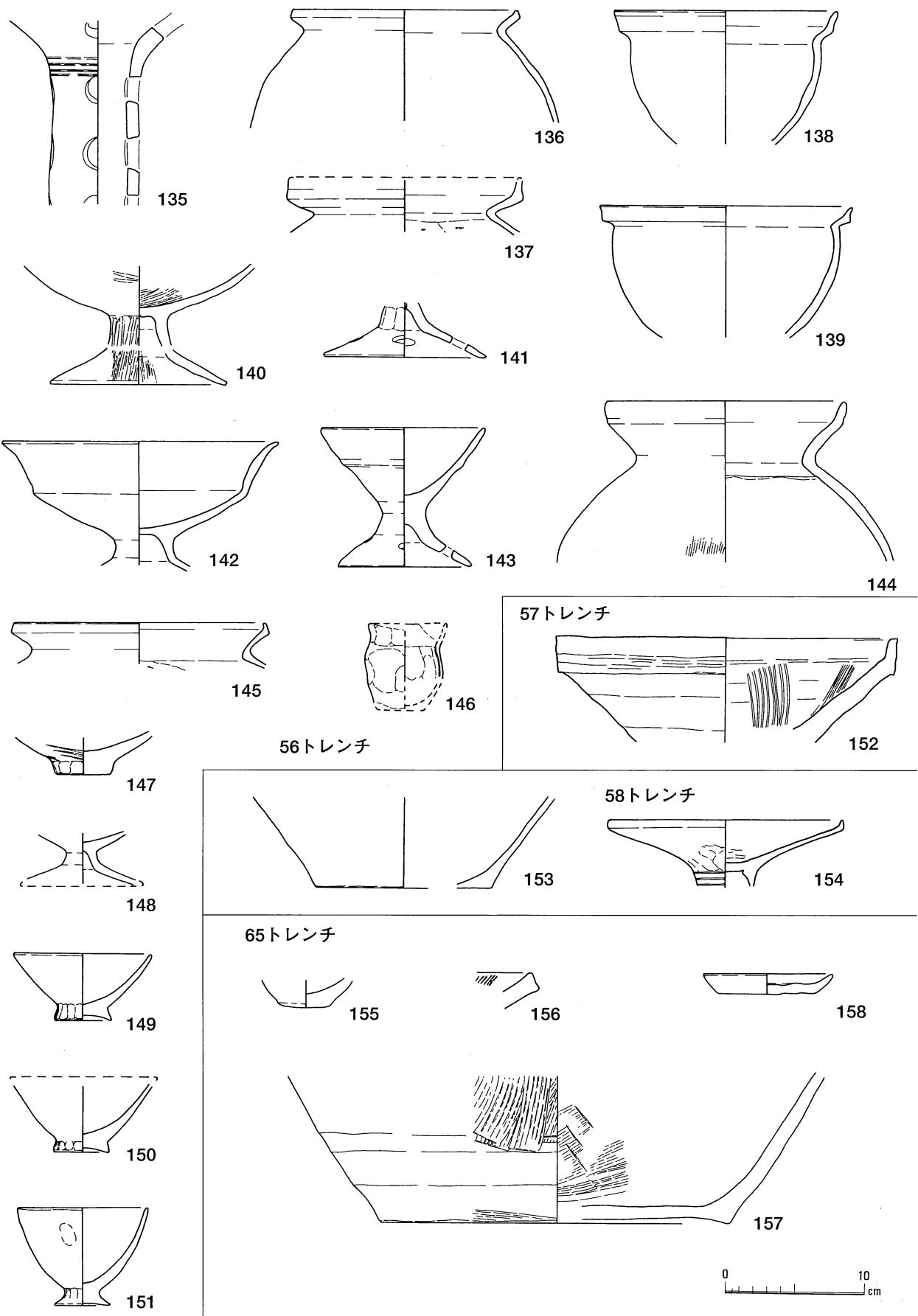


図114 土器実測図 (7)

65トレンチ (SK89(2)06・SK89(2)07・SP89(2)24) 出土遺物 (図114・116)

SK89(2)06から出土した底部(155)は弥生時代の土器である。156は備前焼擂鉢の小片で、15世紀の時期である。SK89(2)07から出土した備前焼甕の底部(157)は、時期についてはよくわからないが、焼成等は備前焼擂鉢(156)とよく似ている。SP89(2)24から出土した土師質土器Ⅲ(158)は、底部にヘラキリ痕が認められ、法量的には13世紀前後の時期と考えられる。159～165は、弥生時代中期と後期の土器である。中期は壺形土器(162)と器台形土器(164・165)である。器台形土器は、脚端部の形状や調整に差があり、時期差ととらえることができる。ただし、それは中Ⅲ期の範疇での時期差といえる。後期の土器は器表面の風化が激しく、調整等は観察できない。いずれも後Ⅱ期の時期である。

66トレンチ (SB89(2)01・89(2)02) 出土遺物 (図116・117・118)

SB89(2)01・89(2)02から出土した土器は、弥生時代中期中葉から後半の時期である。中Ⅱ期と中Ⅲ期の2時期が認められる。まず中Ⅱ期の土器は、壺形土器(170・173・174)、高杯形土器(183・184)、甕形土器(179・180)、器台形土器(185)である。いずれも破片であるが、器表面のハケメ等が明確に認められる個体もあり、残存状態は良好である。中Ⅱ期の新相の様相を呈する。中Ⅲ期の土器は、壺形土器(166～169・171・172・175～177)、甕形土器(178)、高杯形土器(181・182)である。高杯形土器(182)は、口縁部上端が平坦面となっており、そこに凹線が認められることから、後期の時期へと直結する特徴を有している。その他の土器についても中Ⅲ期の特徴のうちでもそれほど古相の様相ではない。中Ⅲ期は2～3小期に分かれることが推測されることから、SB89(2)01と89(2)02には時期差があるといえる。SB89(2)01・89(2)02からは、上記の土器のほかに絵画を描いた壺形土器の破片が2点(192・193)出土している。接合はしなかったが、同一個体であろう。長頸壺形土器の胴部と頸部の接合部付近の破片である。192はいわゆる鳥装祭祀の情景あるいは鳥装の司祭者を描いたものであり、193は寄棟造屋根構造をもつ高樓状の建物が描かれ、梯子状の構造を有していたことを示している描線も認められる。鳥取県稻吉角田遺跡の中後期後半の壺形土器の頸部には頭飾りを装着した船を漕ぐ人物と高樓建物が描かれている。ある情景を描いた構図であり、本例とも共通する。

その他の土器類

89年度1次調査の際、遺構掘削の廃土中から分銅形土製品(D2)を採集した。

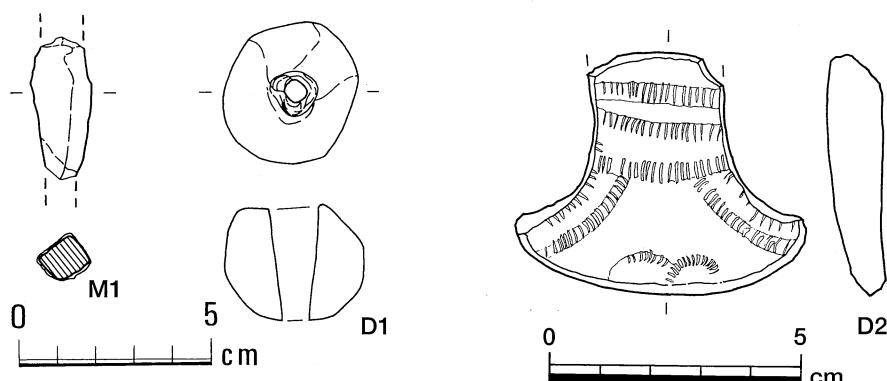


図115 鉄製品・土製品実測図

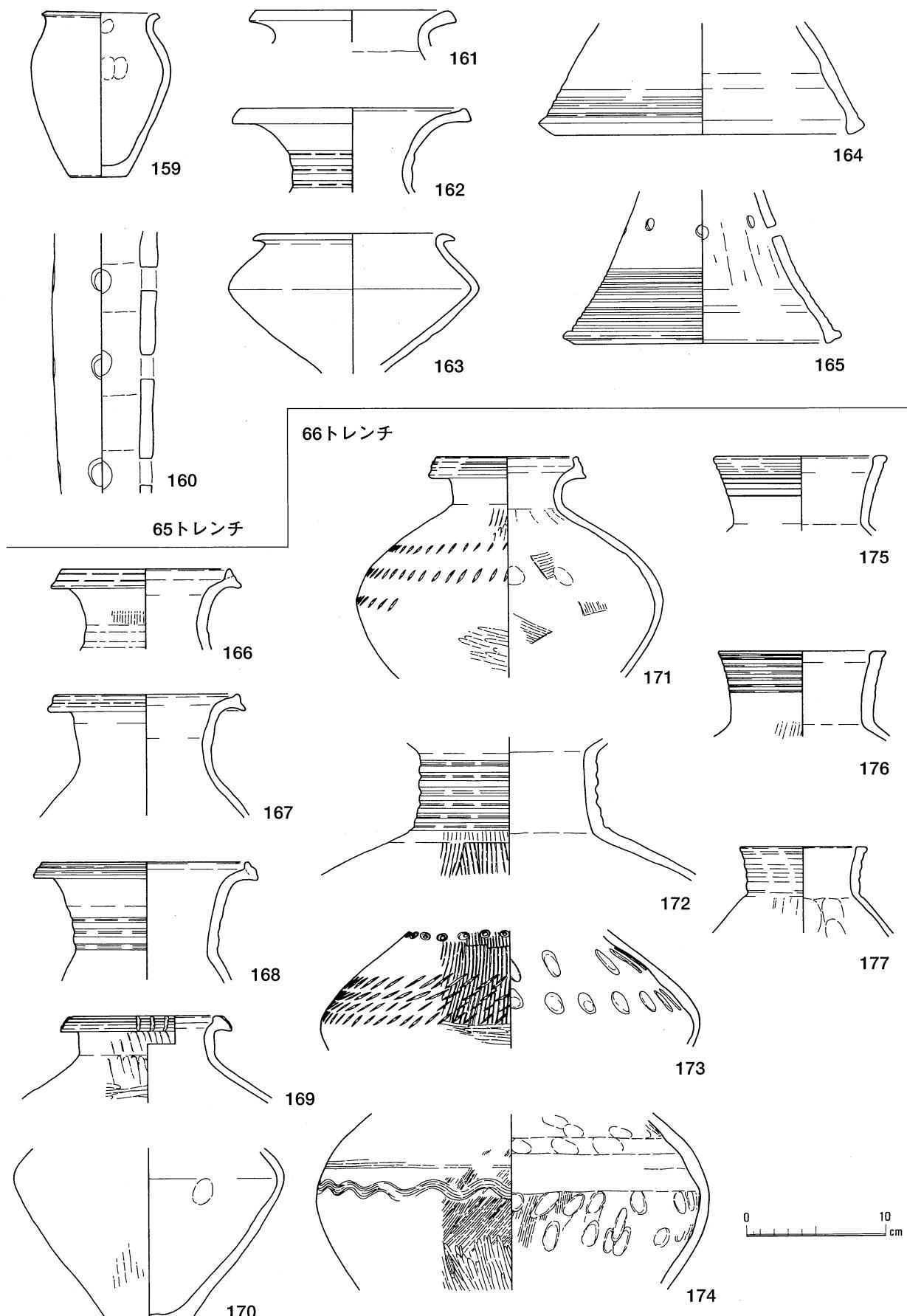


図116 土器実測図 (8)

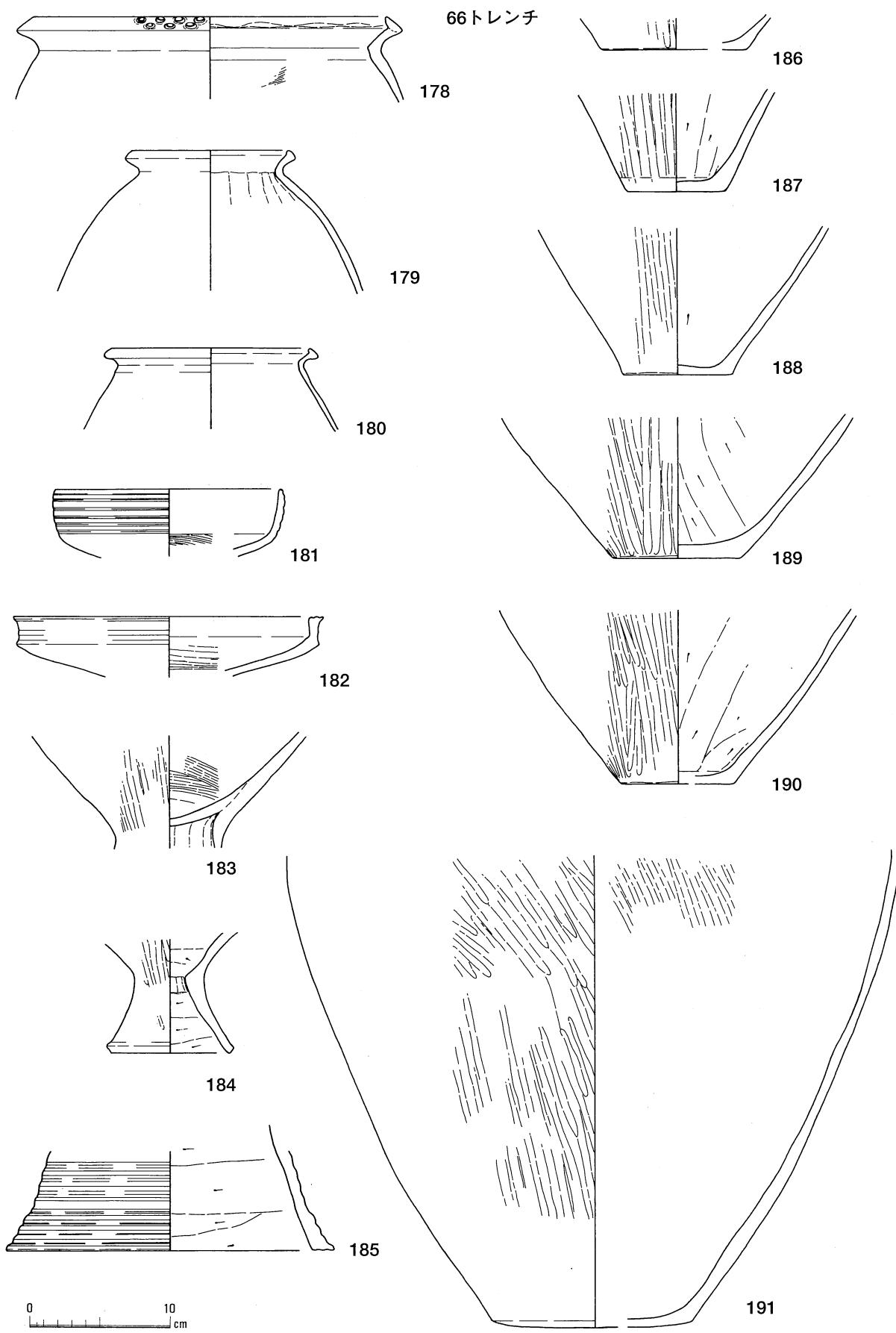
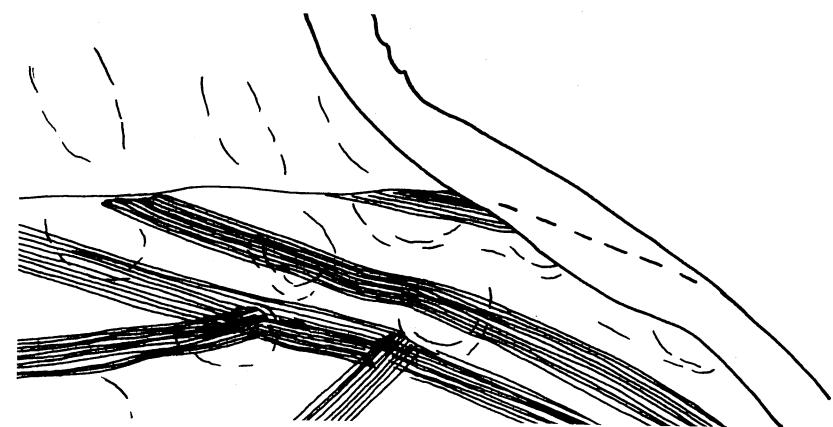
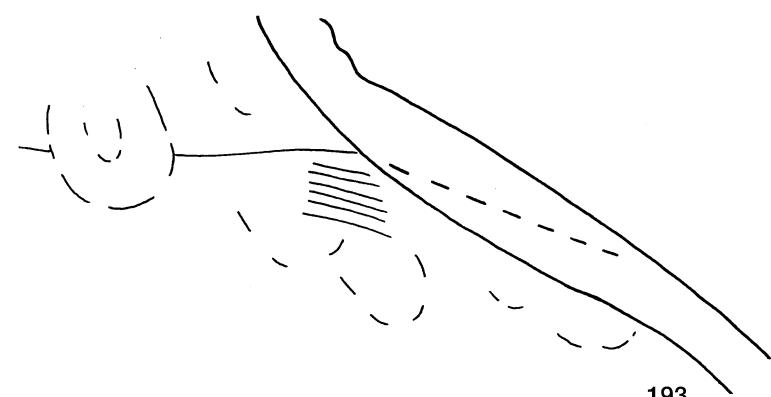
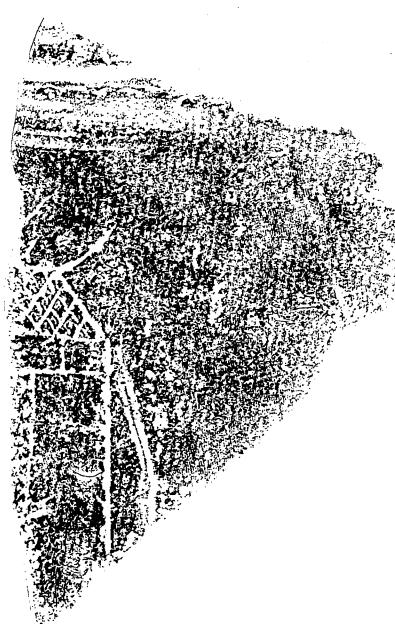
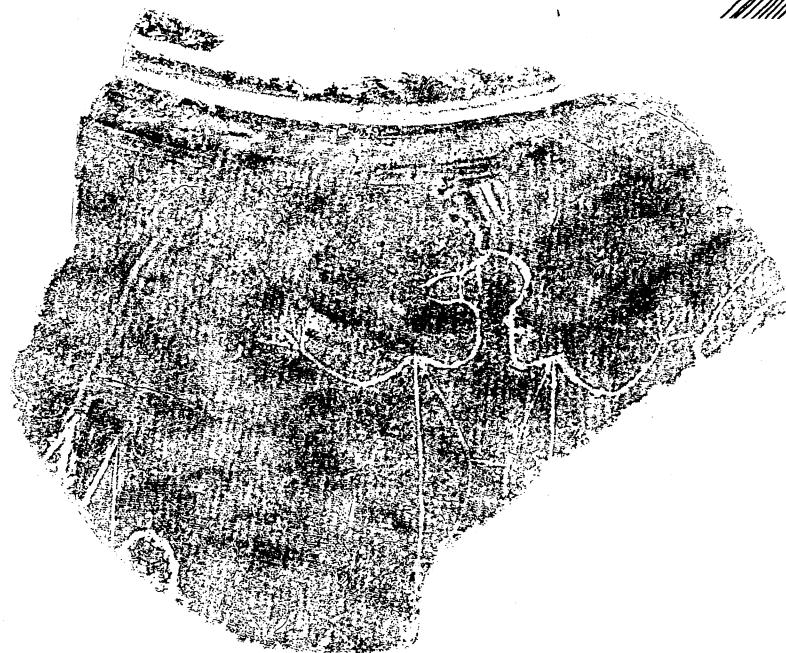


図117 土器実測図 (9)



192



193

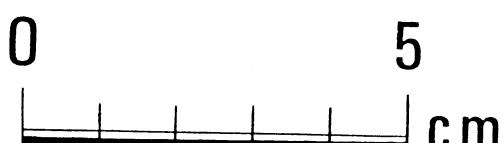


図118 土器実測図 (10)

トレンチ	遺構名	遺物番号	遺物番号	器種	法量 (cm)	形態・調整手法の特徴	胎土	色調
				口径 底径 器高				
T28	SD88804	1	88-012	弥生土器 甕	16 25	口縁端部凹線2条、調整不明 調整不明	0.1~2.0mmの長石・石英 0.1~1.0mmの長石・石英	橙色(7.5YR7/6) 橙色(7.5YR7/6)
T28	SD88804	2	88-012	弥生土器 高杯	9	調整不明、3条1単位の沈線、三角形透かしあり	0.1~1.0mmの長石・石英	橙色(7.5YR7/6)
T28	SD88804	3	88-012	弥生土器 底部	5.8	外面へラミガキ	0.1~3.0mmの長石・石英	銚い赤褐色(5YR5/3)
T28	SD88804	4	88-012	弥生土器 底部	4.6	調整不明	0.1~1.0mmの長石・石英	橙色(5YR6/6)
T28	SD88804	5	88-012	弥生土器 底部	6	調整不明	0.1~1.0mmの長石・石英	橙色(7.5YR6/6)
T28	SD88804	6	88-012	弥生土器 鍋	26	内面ヨコハケ、口縁部内外面ヨコナデ	0.5~1.0mmの長石	淡青褐色(7.5YR7/6)
T30		7	88-52	土師質 鍋	26	口縁部内外面ヨコナデ、胸部調整不明	0.5~1.0mmの長石	淡青褐色(7.5YR7/6)
T30		8	88-52	土師質 鉢	26	内面ヨコハケ、口縁部内外面ヨコナデ	0.5mm前後の長石	橘紅色(7.5YR7/6)
T30		9	88-52	土師質 鉢	30.4	内面ヨコハケ、口縁部内外面ヨコナデ	0.5~1.0mmの長石	橘紅色(7.5YR7/6)
T30		10	88-52	土師質 鉢	35	外面タテハケ後ヨコナデ、口縁部内外面ヨコナデ	0.5~1.0mmの長石	銚い赤褐色(5YR5/4)
T31	SB88803	11	88-68	弥生土器 壺	7	調整不明	0.1~2.0mmの長石・石英	明赤褐色(5YR7/6)
T31	SB88803	12	88-69	弥生土器 鉢	16	調整不明	0.1~2.0mmの長石・石英	銚い黄褐色(10YR7/4)
T31	SB88803	13	88-68	弥生土器 鉢	14.9	内面赤色顔料塗布、調整不明	0.1~1.0mmの長石・石英	明赤褐色(5YR7/6)
T31	SB88803	14	88-69	弥生土器 高杯	18	脚鉢端部外面ヨコナデ、内面へラケズリ	0.1~4.0mmの長石・石英	明赤褐色(5YR7/6)
T31	SD88807	15	88-71	弥生土器 壺	14	口縁部外面ヨコナデ	0.1~2.0mmの長石・石英	明赤褐色(2.5YR5/6)
T31	SD88807	16	88-71	弥生土器 底部	4.4	脚部外面内部赤色顔料塗布、調整不明	0.1~2.0mmの長石・石英	明赤褐色(2.5YR5/1)
T31	SD88807	17	88-71	弥生土器 壺	8.6	9.45 内外面ナデ	0.1~1.0mmの長石・石英	明赤褐色(2.5YR5/6)
T33	SP8827	18	88-66	弥生土器 甕	18.2	外面タテハケ、口縁部凹線2条	0.5~1.0mmの長石	淡青褐色(7.5YR7/6)
T33	SP8827	19	88-66	弥生土器 甕	14.2	外面タテハケ、口縁部凹線3条	0.5~1.0mmの長石	淡青褐色(7.5YR7/6)
T33	SK8811	20	88-88	土師質 杯	12.9	7 2.8 内外面ヨコナデ、底部外面へラキリ	0.1~1.0mmの長石・石英	明赤褐色(5YR4/6)
T33	SK8818	21	88-95	弥生土器 高杯		外面ヘラミガキ? 内面体部へラミガキ、口縁部ヨコナデ	0.1~2.0mmの長石・石英	明赤褐色(5YR4/6)
T33	SK8822	22	88-99	弥生土器 脚部	10.95	外面ナデ後半裁竹管文、内面へラケズリ	0.1~2.0mmの長石・石英	赤褐色(10YR6/6)
T33	SP8836	23	88-101	弥生土器 甕	14.1	内面側面部ハケ後ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ、外面ハケ後ヘラミガキ	0.1~1.0mmの長石・石英	赤褐色(5YR4/6)
T33	SP8840	24	88-105	弥生土器 高杯		調整不明、内面シボリ痕	0.1~2.0mmの長石・石英	赤褐色(5YR7/6)
T33	SP8860	25	88-125	弥生土器 壺	16	外面ヘラミガキ、口縁部貼付文、内面指頭王痕後ハケ	0.1~1.0mmの長石・石英	赤褐色(7.5YR7/6)
T33	SP8864	26	88-129	弥生土器 底部	6	外面タテヘラミガキ、内面ヨコハケ	0.1~3.0mmの長石・石英	黃褐色(7.5YR7/8)
T35	SB88804	27	88-170	土師器 合付甕	14.8	外面下部ヘラケズリ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	0.1~2.5mmの長石・石英	淡青褐色(7.5YR7/6)
T35	SP8886	28	88-177	弥生土器 把手		ヨコナデ	0.1~1.0mmの長石・石英	明赤褐色(2.5YR5/6)
T35	SP8886	29	88-177	弥生土器 甕	18.1	内面側面部ヘラケズリ、頸部ヨコナデ、口縁部クシ彫き、内面肩部へラケズリ、頸部より上ヨコナデ	0.1~2.5mmの長石・石英	明赤褐色(2.5YR5/6)
T36		30	88-180	土師器 甕	16	外面側面部ハケ後ミガキ、頸部ヨコナデ、口縁部クシ彫き、内面肩部へラケズリ	0.1~1.0mmの長石・石英	明赤褐色(2.5YR4/6)
T36		31	88-180	弥生土器 把手		内面側面部ヘラケズリ、口縁部貼付文、調整不明	0.1~1.0mmの長石・石英	明赤褐色(2.5YR4/6)
T36		32	88-180	弥生土器 鉢	16	外面ヘラ描き鋸歯文、調整不明	0.1~1.0mmの長石・石英	明赤褐色(2.5YR4/6)
T36		33	88-180	弥生土器 底部	7.6	内外面丹塗り	0.1~3.0mmの長石・石英	淡橙色(5YR8/3)
T36		34	88-180	土師器 高杯(器台)		外面ヨコヘラミガキ、内面脚部へラケズリ、内外面丹塗り	0.1~3.0mmの長石・石英	赤褐色(5YR4/6)
T36		35	88-180	須恵器 杯身	13	外面底部ヘラケズリ後内外面ヨコナデ	0.1~1.0mmの長石・石英	暗青灰色(10BG4/1)
T38	SK8835	36	88-183	弥生土器 高杯	16.9	外面ハケ後ミガキ、内面調整不明	0.1~3.0mmの長石・石英	橙色(7.5YR6/6)
T38	SK8835	37	88-182	弥生土器 高杯		外面3条1単位の凹線2力所、内面シボリ痕	0.1~2.0mmの長石・石英	赤褐色(2.5YR4/6)
T44	SK8902	38	89-13	龜山焼 甕		外面タタキ、内面ナデ		
T44	SK8902	39	89-13	龜山焼 甕		外面タタキ、内面ナデ		
T44	SD8912	40	89-38	魚住焼 擂鉢		内外面ヨコナデ		

土器類観察表

トレンチ	遺構名	掲載番号	遺物番号	器種	法量(cm)			形態・調整手法の特徴	胎土	色調
					口径	底径	器高			
T44	SD8913	41	89-39	瓦質 須恵器	鍋	10.2		3.6 外面天井部へラケズリ、他是ヨコナデ 底部外面回転糸切り	0.5~1.0mmの長石・石英、黒色粒	灰色5Y(6/1)
T44	SD8913	42	89-39	土師質	杯蓋	6.4				
T44	SD8912	43	89-38	土師質	皿					
T44	SK8908	44	89-44	土師質	杯	14.4	7.9	4 内外面ヨコナデ、底部外面ヘラキリ 内外面ヨコナデ		
T44	SP8911	45	89-47	備前焼	甕					
T44	SP8913	46	89-49	土師質	鍋			調整不明		
T44	SB8901	47	89-111	弥生土器	甕			外面タタキ、内面ナデ 外面ヨコナデ、外面鋸齒文	0.1~1.0mm長石・石英	明褐色(7.5YR5/6)
T44	SB8901	48	89-111	弥生土器	器台			外面ヨコナデ	0.1~2.5mmの長石・石英	淡紫色(5YR8/3)
T44	SB8901	49	89-111	弥生土器	器台			外面ヨコナデ	0.1~2.0mmの長石・石英	橙色(7.5YR7/6)
T44	SB8901	50	89-111	弥生土器	甕	13.95		外面ヨコナデ	0.1~1.0mmの長石・石英	橙色(2.5YR7/6)
T44	SB8901	51	89-111	弥生土器	甕	15		外面ヨコナデ、口縁部凹線3条 外面ヨコナデ、口縁部凹線1条	0.1~2.0mmの長石・石英	淡紫色(5YR8/3)
T44	SB8901	52	89-111	弥生土器	器台	16.1		外面ヨコナデ、口縁部凹線1条	0.1~2.0mmの長石・石英	淡紫色(5YR8/3)
T44	SB8901	53	89-111	弥生土器	甕	5.4		外面タハケ、内面ヘラケズリ	0.1~1.0mmの長石・石英	黑褐色(10YR3/1)
T44	SD8919	54	89-113	弥生土器	甕	15		口縁部内外面ヨコナデ、肩部内面ヘラケズリ 調整不明	0.1~1.0mmの長石・石英	橙色(7.5YR6/6)
T44		55	89-110	弥生土器	壺	14			0.5mm前後の長石・石英	鈍い黄褐色(10YR7/4)
T44		56	89-110	弥生土器	甕	16		調整不明	0.5~1.0mmの長石・石英	明赤褐色(5YR5/6)
T44		57	89-110	弥生土器	壺	16.4		内面頸部ユビ押さえ、口縁部内外面ヨコナデ	0.5~1.0mmの長石・石英	鈍い黄褐色(10YR7/6)
T44		58	89-110	弥生土器	底部	5.4		調整不明	0.5~1.0mmの長石・石英	黑褐色(10YR5/2)
T44		59	89-110	弥生土器	底部	7		内面底部ユビ押さえ、下部ヨコナデ、外面部指頭圧痕、下部エビ押さえ	0.5~3.0mmの長石	灰黃褐色(9YR4/3)・黒褐色(5YR3/1)
T44		60	89-110	弥生土器	底部	7.6		調整不明	0.5mm前後の長石	鈍い黄褐色(10YR7/4)
T44		61	89-110	弥生土器	底部	7.4		調整不明	0.5~1.0mmの長石・石英	鈍い黄褐色(10YR7/4)
T44		62	89-110	弥生土器	底部	8		調整不明	0.5~1.0mmの長石・石英	鈍い黄褐色(10YR7/4)
T44		63	89-110	弥生土器	高杯	14		杯部内外面ヘラミガキ、脚部内面ユビ押さえ、ナデ、脚部外面ヨコナデ	0.1~1.0mmの長石・石英	鈍い黄褐色(10YR6/3)
T44		64	89-118	弥生土器	高杯	25		外面ヨコナデ	0.1~1.0mmの長石・石英	橙色(2.5YR7/6)
T44		65	89-118	土師質	皿	7.6	5.4	1.5 底部外面ヘラ切り、他是ヨコナデ	0.5~1.0mmの長石・石英	橙色(7.5YR7/6)
T44		66	89-118	土師質	皿	8	5.8	1.4 底部外面ヘラ切り、他是ヨコナデ	0.5~1.0mmの長石・石英	鈍い黄褐色(10YR7/4)
T44		67	89-118	弥生土器	手づくね	2.3	1.9	4.3 口縁部内外面ナデ	0.1~1.0mmの長石・石英	橙色(7.5YR6/6)
T44		68	89-118	弥生土器	器台	37		脚裾端部内外面ヨコナデ、内面ヨコハケ後ユビナデ、外面鋸齒文	0.1~1.0mmの長石・石英	橙色(5YR7/6)
T44	SP8963	69	89-121	土師質	皿	8.1	3.9	2.3 内外面ヨコナデ、底部外面ナデ	0.1~2.0mmの長石・石英	鈍い橙色(7.5YR7/4)
T44	SP8965	70	89-123	弥生土器	底部	5.6		内面ヘラケズリ	0.1~2.0mmの長石・石英	淡褐色(2.5YR6/5)・黒褐色(5YR6/5)
T44	SP8967	71	89-125	弥生土器	器台	15.9	19	12.75 外面タハケ後、脚柱部沈線5条、内面下半ヘラケスリ、口縁部内外面ヨコナデ	0.1~1.5mmの長石・石英	明赤褐色(2.5YR6/6)
T45		72	89-15	備前焼	擂鉢			内外面ヨコナデ		
T45		73	89-15	備前焼	甕?			調整不明		
T45		74	89-15	須恵質	杯					
T45		75	89-22	青磁	椀	4.6		外外面に飴色釉薬を施し、見込み及び外面には陰刻が認められる		
T45		76	89-22	土師質	椀	8		内外面ナデ		
T45		77	89-22	土師質	皿	8.5	4	1.3 内外面ヨコナデ		
T46		78	89-16	備前焼	擂鉢	28		外外面ヨコナデ、スリメは3本	0.5~2.0mmの長石	褐褐色(2.5YR6/5)・黒褐色(5YR6/5)
T46	SD8908	79	89-19	瀬戸焼系	皿	3.6				
T46	SK8905	80	89-21	土師質	皿	7.7	3.5	1.6 底部外面ヘラキリ、他是ヨコナデ	0.5mm以下の長石・石英	鈍い橙色(5YR6/4)

土器類観察表

トレンチ	遺構名	標識番号	遺物番号	器種	法量(cm)	形態・調整手法の特徴		胎土	色調
						口径	底径	器高	
T51	SB8906	81	89-293	弥生土器 高杯	12	調整不明		0.1~1.0mmの長石・石英	橙色(7.5YR7/6)
T51	SB8906	82	89-294	弥生土器 麵	14	口縁部凹線1条、調整不明		0.1~1.0mmの長石・石英	橙色(7.5YR7/6)
T52	SD8938	83	89-304	青磁 梠					
T52	SD8938	84	89-304	須恵器 平瓶	4.2				
T52	SD8938	85	89-304	土師器 鍋	20	外面肩部ハケ後口縁部内外面ヨコナデ		0.1~1.0mmの長石・石英	橙色(7.5YR7/6)
T52		86	89-343	弥生土器 鍋	31.05	外面タハケ、口縁部内外面ヨコナデ、脣部内面へラケアリ?		0.1~2.0mmの長石・石英	鈍い黄橙色(10YR7/4)
T52	土器集中部	87	89-345	弥生土器 麵	13.95	調整不明		0.1~2.0mmの長石・石英	須赤色(25YR6/6)
T52	土器集中部	88	89-345	弥生土器 麵	14	調整不明		0.1~1.5mmの長石・石英	灰色(10Y6/1)
T52	土器集中部	89	89-345	弥生土器 麵	18.9	調整不明		0.1~3.0mmの長石・石英	橙色(7.5YR7/6)
T52	土器集中部	90	89-345	弥生土器 麵	21	口縁部内外面ヨコナデ、内面ハケ、ナデ		0.1~1.0mmの長石・石英	黃橙色(7.5YR3/8)
T52	土器集中部	91	89-345	弥生土器 高杯					
T52	土器集中部	92	89-345	弥生土器 麵	6.2	外面杯部へラミガキ		0.1~2.0mmの長石・石英	赤橙色(10YR6/6)
T52	土器集中部	93	89-345	弥生土器 麵	5.8	調整不明		0.1~1.0mmの長石・石英	黃橙色(7.5YR6/6)
T52	土器集中部	94	89-345	弥生土器 麵				0.1~1.5mmの長石・石英	赤橙色(10YR6/6)
T52	土器集中部	95	89-345	弥生土器 麵		7.5	外面タテヘラミガキ、内面調整不明	0.1~1.0mmの長石・石英	橙色(5YR7/6)
T52	土器集中部	96	89-346	弥生土器 高杯	19.0	口縁部凹線4条、調整不明		0.1~4.0mmの長石・石英	褐色(7.5YR4/1)
T52	土器集中部	97	89-346	弥生土器 高杯	21	調整不明		0.1~2.5mmの長石・石英	橙色(5YR7/6)
T52	土器集中部	98	89-346	弥生土器 高杯	22	調整不明		0.1~2.5mmの長石・石英	褐色(5YR7/6)
T52	土器集中部	99	89-346	弥生土器 鍋	14	外面ヨコナデ		0.1~1.0mmの長石・石英	暗褐色(7.5YR3/3)
T52	土器集中部	100	89-346	弥生土器 鍋					
T52	土器集中部	101	89-346	弥生土器 麵	21	調整不明		0.1~2.0mmの長石・石英	橙色(5YR7/8)
T52	土器集中部	102	89-346	弥生土器 麵	20.5	口縁部凹線6条、調整不明		0.1~3.0mmの長石・石英	灰白色(5YR4/1)
T52	土器集中部	103	89-346	弥生土器 底部	11.2	調整不明		0.1~0.5mmの長石・石英	褐色(5YR7/8)
T52	土器集中部	104	89-346	弥生土器 底部	10.2	外面タミガキ、内面調整不明		0.1~3.0mmの長石・石英	灰白色(5YR5/3)
T53	SP89168	105	89-217	土師質	9.1	1.6	内外面ヨコナデ、底部外表面へラカリ	0.1~1.0mmの長石・石英	橙色(5YR7/6)
T53	SP89168	106	89-217	備前焼 梠	11	内外面ヨコナデ、口縁部重ね焼痕		約0.1mmの長石・石英	灰白色(5Y8/1)
T53	SP89189	107	89-363	瓦質 鍋	29.3	13.5	外面下半ハケ、上半内外面ヨコナデ	0.1~1.0mmの長石・石英	褐色(7.5YR6/1)
T53	SD8939	108	89-306	弥生土器 麵	20	内外面ヨコナデ		0.1~1.0mmの長石・石英	橙色(7.5YR7/6)
T53	S8891-8912	109	89-376	弥生土器 麵	18	調整不明		0.1~3.0mmの長石・石英	浅黃褐色(10YR8/4)
T53	S8891-8912	110	89-376	弥生土器 鍋	12	口縁部内外面ヨコナデ、口縁部凹線2条、頸部凹線3条		0.1~1.0mmの長石・石英	淺黃褐色(10YR8/4)
T53	S8891-8912	111	89-376	弥生土器 高杯	19.9	調整不明		0.1~2.5mmの長石・石英	橙色(5YR6/6)
T53	S8891-8912	112	89-376	弥生土器 麵				0.1~2.0mmの長石・石英	鈍い黄橙色(10YR7/4)
T53	SP89208	113	89-394	弥生土器 高杯	19	外面ヨコナデ、内面タテヘラミガキ		0.1~2.0mmの長石・石英	橙色(2.5YR7/6)
T53	SD8961	114	89-397	弥生土器 麵	18	調整不明		0.1~1.0mmの長石・石英	淡黃色(5YR6/3)
T53	SD8961	115	89-397	弥生土器 麵	12	外面ヨコナデ、内面タテミガキ、頸部ユビナデ、口縁部内外面ヨコナデ		0.1~3.0mmの長石・石英	橙色(5YR6/6)
T55	SK9011	117	90-67	弥生土器 高杯	11	外面体部へラミガキ、内面調整不明		0.1~2.0mmの長石・石英	鈍い黄橙色(10YR7/4)
T55	SK9011	118	90-67	弥生土器 麵	17	調整不明		0.1~3.0mmの長石・石英	淡黃色(5YR6/6)
T55	SK9011	119	90-68	弥生土器 麵	13.95	外面胴部ハケ、内面胴部へラケアリ、口縁部内外面ヨコナデ		0.1~3.0mmの長石・石英	橙色(5YR6/6)
T55	SK9013	120	90-70	弥生土器 鍋	3.5	内面蜘蛛の巣状のハケ、外表面ナデ		0.1~1.0mmの長石・石英	暗赤褐色(10R5/4)

土器類観察表

トレシチ	遺構名	標識番号	遺物番号	器種	法量(cm)	形態・調整手法の特徴		胎土	色調
						口径	底径		
T55	SK9013	121	90-69	弥生土器	底部	5.1	外面ミガキ、内面調整不明	0.1~2.0mmの長石・石英	橙色(7.5YR7/6)
T55	SK9013	122	90-70	弥生土器	高杯		外面脚部ヘラミガキ?	0.1~1.0mmの長石・石英	橙色(5YR7/6)
T55	SK9013	123	90-71	弥生土器	甕	16	口縁部内外面ヨコナデ、頸部内面ヘラケズリ	0.1~1.0mmの長石・石英	橙色(5YR7/8)
T55	SK9013	124	90-71	弥生土器	高杯		外面ヘラミガキ、内面ナデ?	0.1~1.0mmの長石・石英	橙色(5YR7/8)
T55	SK9013	125	90-71	弥生土器	高杯	18	調整不明	0.1~1.0mmの長石・石英	赤橙色(10YR5/8)
T55	SK9013	126	90-72	弥生土器	高杯	19	内外面赤色顔料塗布	0.1~1.0mmの長石・石英	橙色(5YR7/8)
T55	SK9013	127	90-72	弥生土器	高杯	20	11.35 内外面赤色顔料塗布、調整不明	0.1~2.0mmの長石・石英	銚い黄橙色(10YR7/4)
T55	SK9015	128	90-75	弥生土器	底部	5.1	内外面ヨコナデ	0.1~1.0mmの長石・石英	銚い橙色(5YR6/6)
T55	SK9015	129	90-76	弥生土器	高杯	18	内外面ヨコヘラミガキ	0.1~1.0mmの長石・石英	明赤褐色(5YR5/6)
T56	SK9019	130	90-92	弥生土器	壺	15.3	脚部大型 内面ハケ後ヨコミガキ	0.1~1.0mmの長石・石英	灰黃褐色(10YR4/2)
T56	SK9019	131	90-92	弥生土器	甕	18	調整不明	0.1~2.0mmの長石・石英	橙色(7.5YR7/6)
T56	SK9019	132	90-92	弥生土器	壺	17.3	外面頸部タテミガキ、肩部刺突文、口縁部凹線4条、内面肩部ヘラケズリ	0.1~2.0mmの長石・石英	橙色(5YR6/6)
T56	SK9019	133	90-92	弥生土器	壺	11.1	外面部ヘラミガキ、内面調整不明	0.1~1.0mmの長石・石英	橙色(5YR6/6)
T56	SK9019	134	90-92	弥生土器	高杯	8.6	調整不明	0.05mm以下の長石・石英	橙色(7.5YR7/6)
T56	SK9021	135	90-98	弥生土器	高杯		外面部沈線4条、調整不明	0.1~3.0mmの長石・石英	橙色(7.5YR6/6)
T56	SK9022	136	90-109	弥生土器	甕	16	調整不明	0.1~3.0mmの長石・石英	橙色(7.5YR6/6)
T56	SK9022	137	90-109	弥生土器	甕		内面部ヘラケズリ、調整不明	0.1~2.5mmの長石・石英	橙色(5YR6/6)
T56	SK9022	138	90-109	弥生土器	鉢	16	調整不明	0.1~3.0mmの長石・石英	橘褐色(10YR6/2)
T56	SK9024	139	90-106	弥生土器	鉢	18	調整不明	0.1~2.0mmの長石・石英	灰黃褐色(10YR5/2)
T56	SK9024	140	90-106	弥生土器	高杯	12.5	杯部内外面ヨコヘラミガキ、脚部内外面タテヘラミガキ	0.1~1.0mmの長石・石英	灰黃褐色(5YR5/3)
T56	SK9024	141	90-106	弥生土器	高杯	11.5	外面ヘラミガキ、杯部内面ヘラミガキ、脚部内外面一部ヘラミガキ	0.1~1.0mmの長石・石英	淡橙色(5YR6/3)
T56	SK9024	142	90-106	弥生土器	高杯	19.8	調整不明	0.1~3.0mmの長石・石英	橙色(7.5YR6/6)
T56	SK9024	143	90-106	弥生土器	高杯	11.65	10 調整不明	0.1~3.0mmの長石・石英	銚い橙色(7.5YR6/4)
T56	SK9026	144	90-111	弥生土器	壺	17	外面脚部ハケ、内面脚部ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ、他是は調整不明	0.1~2.0mmの長石・石英	銚い橙色(5YR6/6)
T56	SK9028	145	90-116	弥生土器	甕	17.9	口縁部内外面ヨコナデ、内面肩部ヘラケズリ	0.1~2.5mmの長石・石英	銚い橙色(5YR6/6)
T56	SK9028	146	90-116	弥生土器	手づくね		内外面ナデ	0.1~1.0mmの長石・石英	褐灰色(7.5YR5/1)
T56	SK9028	147	90-116	弥生土器	甕	3.7	外面タキ、内面ナデ	0.1~1.0mmの長石・石英	橙色(7.5YR6/6)
T56	SK9029	148	90-117	弥生土器	高杯		調整不明	0.1~1.0mmの長石・石英	橙色(5YR7/8)
T56	SK9029	149	90-118	弥生土器	鉢	9.8	4 4.8 調整不明	0.1~3.0mmの長石・石英	明赤褐色(2.5YR5/6)
T56	SK9029	150	90-118	弥生土器	鉢	3.9	調整不明	0.1~3.0mmの長石・石英	銚い橙色(2.5YR6/4)
T56	SK9029	151	90-118	弥生土器	鉢	9.2	3.9 7 外面指頭圧痕?	0.1~1.0mmの長石・石英	銚い橙色(7.5YR7/3)
T57		152	90-33	備前焼	壺		スリメ8条		
T58	SB9001	153	90-26	弥生土器	甕		調整不明		
T58	SB9001	154	90-26	弥生土器	高杯		内外面ヘラミガキ、脚部沈線		
T65	SK9(2)06	155	89-2-40	弥生土器	底部	3.6	調整不明	0.1~2.0mmの長石・石英	明赤褐色(2.5YR5/6)
T65	SK9(2)06	156	89-2-40	備前焼	壺		スリメ6条	0.1~1.0mmの長石・石英	赤褐色(10R5/3)
T65	SK9(2)07	157	89-2-46	備前焼	底部	24.95	外面ハケ後ナデ、内面ハケ後ナデ	0.1~1.0mmの長石・石英	綠灰褐色(10GY5/1)
T65	SP9(2)24	158	89-2-48	土師質	皿	9.1	1.5 内外面ヨコナデ、外面部底部指頭圧痕、後内外面ナデ	0.1~1.0mmの長石・石英	橙色(5YR6/6)
T65		159	89-2-52	弥生土器	小型甕	7.8	4 11.9 外面底部、内面脚部指頭圧痕、後内外面ナデ	0.5~1.0mmの長石・石英	明褐色(7.5YR6/6)

土器類総述

トレーナー	遺構名	揭露番号	遺物番号	器種	法量(cm)	形態・調整手法の特徴		胎土	色調
						口径	底径		
T65	160	89-2-52	弥生土器	器合	13.9	調整不明		0.1~2.5mmの長石・石英	橙色(7.5YR7/6)
T65	161	89-2-52	弥生土器	壺	16	口縁端部内外面ヨコナナデ？ 外面頸部凹線3条		0.1~3.0mmの長石・石英	浅黄橙色(7.5YR3/4)
T65	162	89-2-52	弥生土器	鉢	13	調整不明		0.1~2.5mmの長石・石英	鉢色(7.5YR6/1) 鋼鉢色(7.5YR7/6)
T65	163	89-2-52	弥生土器	鉢	21	外面脚脛部ヨコナナデ、内面調整不明		0.1~3.0mmの長石・石英	赤褐色(10R6/6)
T65	164	89-2-52	弥生土器	器合	18	脚部内面ヘラケズリ、脚脛部内外面ヨコナナデ		0.1~1.5mmの長石・石英 0.1~1.0mmの鉄鉢色(7.5YR5/6)	明赤褐色(5YR5/6)
T66	SE89/20102	166	89-2-19	弥生土器	壺	12.1	外面ハケ後ヨコナナデ、頸部凹線2条、口縁端部沈線2条	0.1~1.0mmの長石・石英	橙色(2.5YR7/6)
T66	SE89/20102	167	89-2-19	弥生土器	壺	13	口縁端部凹線1条	0.1~1.5mmの長石・石英	浅黄橙色(7.5YR7/6)
T66	SE89/20102	168	89-2-19	弥生土器	壺	14.7	外面脚脛部凹線3条、口縁端部凹線2条、内面ヨコナナデ	0.1~2.0mmの長石・石英	淡褐色(5YR8/4)
T66	SE89/20102	169	89-2-19	弥生土器	壺	10.8	外面タテミガキ後肩部ヨコミガキ、口縁部内外面ヨコナナデ、口縁端部貼付文	0.5mm前後の長石・石英	銚い褐色(7.5YR7/3)
T66	SE89/20102	170	89-2-19	弥生土器	壺	6.1	外面ヘラミガキ	0.1~0.5mmの長石・石英	浅黄橙色(7.5YR8/4)
T66	SE89/20102	171	89-2-19	弥生土器	壺	10.05	外面ハケ後ミガキ、刺突文3列、口縁部内外面ヨコナナデ	0.1~1.5mmの長石・石英 内面黄灰色(2.5Y4/1)	外面部銚い褐色(10YR7/3) 内面黄灰色(2.5Y4/1)
T66	SE89/20102	172	89-2-19	弥生土器	壺		外面頸部ハケ、頸部内外面ヨコナナデ、頸部凹線6条	0.1~2.0mmの長石・石英	淡褐色(5YR8/4)
T66	SE89/20102	173	89-2-19	弥生土器	壺	27.1	外面タテハケ後下半ヨコミガキ、竹管文・刺突文、内面ユビナナデ	0.1~1.0mmの長石・石英	明黄褐色(10YR7/6)
T66	SE89/20102	174	89-2-19	弥生土器	壺	28.0	外面ハケ後下半タテミガキ上部クシシ文、内面ハケ後ナナデ	0.1~1.0mmの長石・石英チャート	淡黄色(2.5Y8/3)
T66	SE89/20102	175	89-2-19	弥生土器	短頸壺	12	口縁部内外面ヨコナナデ	0.1~1.0mmの長石・石英	明黄褐色(2.5Y7/6)
T66	SE89/20102	176	89-2-19	弥生土器	短頸壺	11.9	外面肩部ハケ、口縁部内外面ヨコナナデ、口縁部凹線7条	0.1~1.0mmの長石・石英	銚い褐色(5YR7/4)
T66	SE89/20102	177	89-2-19	弥生土器	短頸壺	9	外面ハケ後ヨコナナデ、口縁部凹線5条、内面ナナデ	0.1~1.0mmの長石・石英	明黄褐色(10YR7/6)
T66	SE89/20102	178	89-2-19	弥生土器	壺	25	口縁端部竹管文、内面ハケ	0.1~0.5mmの長石・石英	淡褐色(5YR8/4)
T66	SE89/20102	179	89-2-19	弥生土器	短頸壺	11	調整不明	0.1~3.0mmの長石・石英	銚い褐色(10R6/3)
T66	SE89/20102	180	89-2-19	弥生土器	壺	14	口縁部内外面ヨコナナデ	0.1~1.0mmの長石・石英	明黄褐色(2.5Y7/6)
T66	SE89/20102	181	89-2-19	弥生土器	高杯	15.9	杯体内部ハケ後、内外面ヨコナナデ、口縁部凹線6条	0.1~1.0mmの長石・石英	青橙色(5YR8/2)
T66	SE89/20102	182	89-2-19	弥生土器	高杯	22	杯体内部ハケ後、内外面ヨコナナデ	0.1~1.0mmの長石・石英	灰白色(5YR8/2)
T66	SE89/20102	183	89-2-19	弥生土器	高杯		外面タテヘラミガキ、内面杯部ハケ	0.1~2.5mmの長石・石英	明褐色(7.5YR6/6)
T66	SE89/20102	184	89-2-19	弥生土器	高杯	8.5	外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ、脚端部内外面ヨコナナデ	0.1~1.0mmの長石・石英	銚い褐色(7.5YR7/4)
T66	SE89/20102	185	89-2-19	弥生土器	器合	23.2	外面ヨコナナデ、外面凹線、内面ヘラケズリ	0.1~1.5mmの長石・石英	明黄褐色(10YR5/6)
T66	SE89/20102	186	89-2-19	弥生土器	壺？底部	10.4	外面タテミガキ	0.1~1.0mmの長石・石英	明黄褐色(10YR7/6)
T66	SE89/20102	187	89-2-19	弥生土器	底部	7.1	外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ	0.1~1.0mmの長石・石英	銚い黄橙色(10YR7/4)
T66	SE89/20102	188	89-2-19	弥生土器	底部	7.8	外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ	0.1~1.0mmの長石・石英	明赤褐色(5YR5/6)
T66	SE89/20102	189	89-2-19	弥生土器	底部	9	外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ	0.1~1.0mmの長石・石英	灰白色(5YR8/1)
T66	SE89/20102	190	89-2-19	弥生土器	底部	8	外面タテヘラミガキ、内面ハケ	0.1~1.0mmの長石・石英	銚い黄褐色(10YR6/4)
T66	SE89/20102	191	89-2-19	弥生土器	壺		外面ヨコナナデヘラメガキ、内面ハケ	0.1~2.0mmの長石・石英	外表面部凹線3条、ハケ、内面ユビナナデ後部分にハケ
T66	SE89/20102	192	89-2-19	弥生土器	壺	14.2	外面ヨコナナデ後部分にハケ	0.1~1.0mmの長石・石英	絵画土器
T66	SE89/20102	193	89-2-19	弥生土器	壺	最大37	外面頸部凹線3条、ハケ、内面ユビナナデ後部分にハケ	0.1~2.0mmの長石・石英	絵画土器
T56	SK9029	D1	90-117	土製品	土玉	3.1		0.1~1.0mmの長石・石英	赤褐色(5YR4/6)
		D2	89-405	土製品	分銅形土製品				明黄褐色(10YR6/6)
T64	M1	89-2-51	鉄製品	釘					

十 葵 遺 墓 簿

第2節 石器

新庄尾上遺跡では、包含層および弥生時代の遺構から、石器が出土している。広大な調査面積であったものの、出土点数は極めて少ない。遺構から出土した石器は、S1 (SK8812)、S3 (SD8823)、S5 (土器集中部)、S7 (SD8841)、S11～S15 (SB89(2)01・89(2)02) である。その他は包含層から出土した。

石包丁 (S1・S2・S4・S9・S10・S11) (図119・120)

サヌカイト製の打製石包丁 (S1・S4・S9・S10) と磨製石包丁 (S2・S11) が出土している。サヌカイト製は、S4を除き破損品で側縁に抉りを有する形態である。S2は安山岩、S11は頁岩と考えられる。

石鎌 (S5) (図119)

サヌカイト製が1点出土している。基部をやや欠いているものの、凹基式とみられる。

大型蛤刃石斧 (S3) (図119)

ピン岩製の破損品が1点出土している。刃部は良好に残存するものの、上半部を欠いている。

砥石 (S6・S7) (図119)

大型品 (S6) と小型品 (S7) が1点ずつ出土している。いずれも砂岩製と考えられる。

剥片 (S8・S12～S15) (図119・120)

SB89(2)01・89(2)02からまとまって出土している。S12～S14はサヌカイトの剥片である。S15の石材は不明である。この他、図示していないが、サヌカイトの剥片が少量出土している。

小結

新庄尾上遺跡の石器利用のあり方は、剥片石器の石材にサヌカイトを利用しながら、石斧や磨製石包丁へ非サヌカイト系石材を用いるという、吉備南部に広く見られるものといえる。また、遺跡内から石核となる板状剥片は出土しなかったものの、剥片・碎片が少量ではあるが出土しており、集落内においてサヌカイト製の石器製作が行われていたようである。

地形的にみて、新庄尾上遺跡は平野部からやや内陸部の山間部へ北上した地点に位置している。このように、吉備高原の端部に位置する旭川流域の弥生集落の調査例は多くなく、今回の調査は、弥生時代の石器利用という面からも、貴重な資料を提供したと言えるだろう。

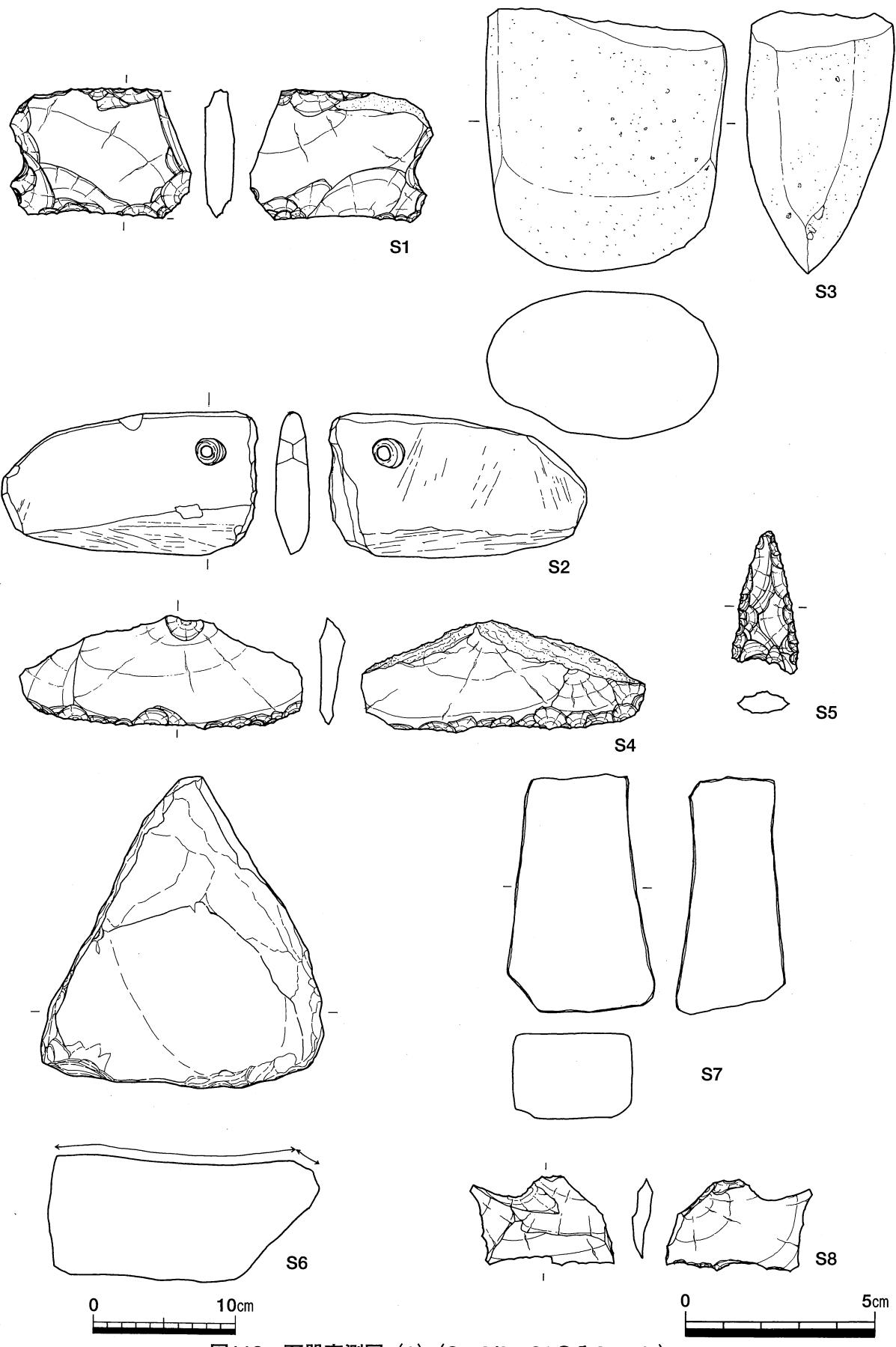
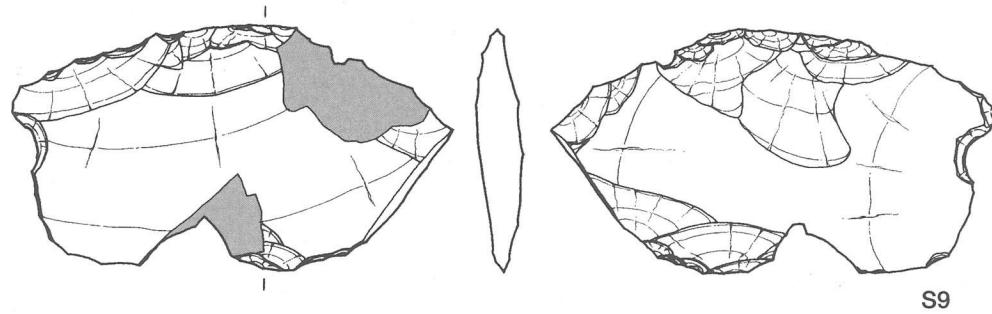
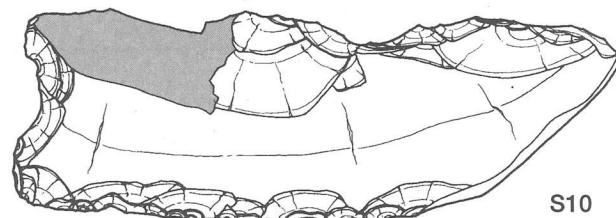
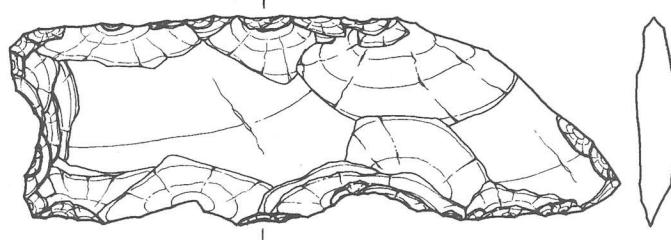


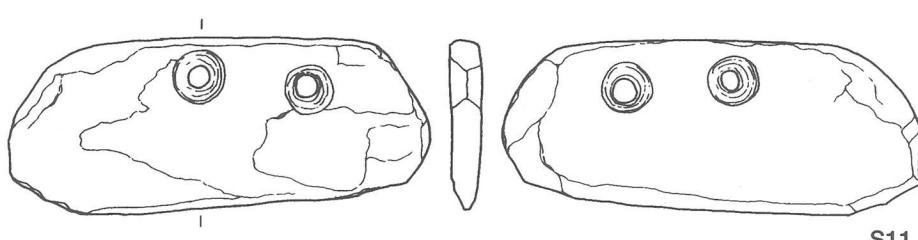
図119 石器実測図 (1) (S=2/3、S6のみS=1/4)



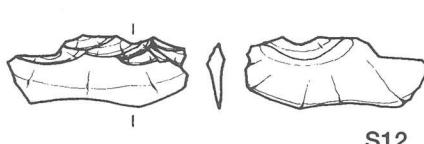
S9



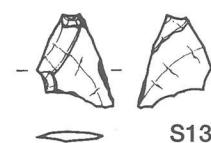
S10



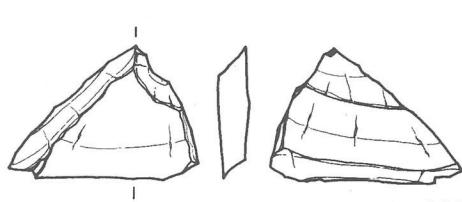
S11



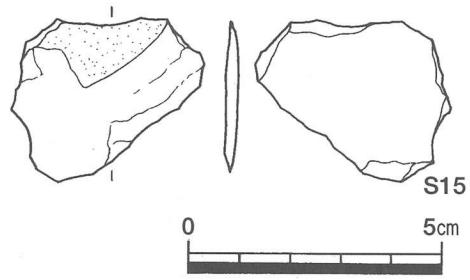
S12



S13



S14



S15

0

5cm

図120 石器実測図 (2) (S=2/3) *S9・S10のトーンは新しい欠損を表す

図番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺構	備考
S1	打製石包丁	サヌカイト	3.4	4.7	0.8	18.9	33T SK8812	
S2	磨製石包丁	安山岩	3.8	6.8	0.9	33.0	36T 包含層	
S3	大型蛤刃石斧	ヒン岩	6.9	6.4	3.9	260.9	43T SD8823	
S4	打製石包丁	サヌカイト	3.0	7.5	0.7	15.4	44T 包含層	
S5	石鏃	サヌカイト	3.8	1.8	0.6	2.7	44T 土器集中部2	
S6	砥石	砂岩	22.0	20.0	8.3	3780.0	52T 包含層	
S7	砥石	砂岩	6.3	3.9	2.3	83.7	53T SD8914	
S8	剥片	サヌカイト	2.4	4.0	0.5	3.7	54T 包含層	
S9	打製石包丁	サヌカイト	4.8	8.7	0.9	40.9	65T 包含層	
S10	打製石包丁	サヌカイト	4.2	12.0	0.8	63.4	65T 包含層	
S11	磨製石包丁	貞岩	3.5	8.3	0.6	29.7	SB89(2)01・02	
S12	剥片	サヌカイト	1.4	3.6	0.3	1.0	SB89(2)01・02	
S13	剥片	サヌカイト	1.8	1.5	0.2	0.2	SB89(2)01・02	
S14	剥片	サヌカイト	2.7	3.4	0.6	5.5	SB89(2)01・02	
S15	剥片	不明	3.2	3.8	0.3	3.6	SB89(2)01・02	

石器観察表

第V章 結語

第1節 弥生時代中期から古墳時代の土器

新庄尾上遺跡の調査で最も多く出土しているには、弥生時代中期から古墳時代前期の土器である。なかでも主体となるのは、弥生時代中期の土器である。ここではそれらの土器の時期的な変遷を整理して、新庄尾上遺跡における集落の消長について考える基礎的な資料を作成したい。

弥生時代中期（図121）

弥生時代中期の土器は、クシ描文の施文の開始がメルクマールとなる。そうすると、大枠では前期的なプロポーションの土器にクシ描文が施される段階（1）、中期的なプロポーションに変わる段階（2）、部分的に凹線文が施される段階（3）、凹線文が主体となる段階（4）の4段階が想定されるが、（2）と（3）は、各土器のプロポーションが共通していることから、ほかの段階ほどには明確に分離できるわけではない。そのため、（2）と（3）は同じ段階ととらえておき、中期を中Ⅰ期から中Ⅲ期の3区分とする。各期はさらに細部におけるプロポーションの変化や調整の差などから、中Ⅱ期は5小期、中Ⅲ期は2小期に分けられると考えられる。

〈中Ⅱ期〉

まず新庄尾上遺跡では、中Ⅱ期の土器から認められるようになる。66トレンチのSB89(2)01・02出土の土器のうち、その古相が相当する。中Ⅱ期の最終となる中Ⅱ-5期の時期である。壺形土器はやや頸が長いタイプ（A）とやや短いタイプ（B）の2種がある。胴部には、描線が弱くなったクシ描文が認められる。甕形土器は口縁端部が若干上方に拡張する傾向がある。高杯形土器は、受け部が残存しているものがないが、椀状や口縁部が「く」字形に開く形態であろう。脚部との接合部は円板充填である。脚端部はほとんど拡張せずにおさめている。器台形土器は脚端部しかわからぬが、比較的薄手で内面のヘラケズリも丁寧である。端部は水平であり、立ち上がりはない。

〈中Ⅲ期〉

この時期の土器がまとまって出土したのは中Ⅲ期と同様に66トレンチのSB89(2)01・02である。しかし、散在的ではあるが、全体の出土土器量としては最も多い。中Ⅲ期はさらに2つの小期に分けることができるが、両小期の土器を認めることができる。

まず中Ⅲ-1期は、壺形土器では頸部に凹線文をめぐらした長頸壺が成立する。ただし、口縁部の開きは弱く、口縁端部の拡張も顕著ではない。甕形土器は、中Ⅱ期の甕形土器と比較すると、口縁端部の拡張が大きくなり、外端部に凹線をめぐらす。粘土紐を付加してさらに上方に拡張するものも認められる。限定的になるが、器表面の残存状態が良好なもので見ると、外面は胴部上半までヘラミガキが及んでいる。高杯形土器は、口縁部が上方に屈曲し、外面に明確な凹線を施すものが認められる。口縁上端部は拡張されていない。出土してはいないが、椀状の形態で、端部がT字形に拡張される形態も存在する。脚端部は中Ⅱ期のようにほとんど拡張しないタイプと上方に突出して丸くおさめるタイプが存在する。器台形土器は、脚端部がやや斜め上方に立ち上がり、さらに外端面を強くヨコナデすることによって端部の断面形が丸く突出する。

中Ⅲ-2期は、66トレンチのSB89(2)01・02の新相の土器が指標となる。壺形土器は、頸部に凹線

を施し、口縁部が外開きになるのが特徴的で、口縁端部の拡張も顕著である。出土土器では典型的ではないが、口縁端部を下方へ拡張するものも顕著となる。中Ⅱ期からの系譜を引く頸の短い壺形土器Bもあるが、口縁端部が断面T字形に拡張されるようになり、しかも胴部の無施文化が主体となる。直口する口縁部で、算盤形の胴部を有し、脚の付属する壺形土器Cが認められる。算盤形の胴部の端部を外側に折り曲げる器形もあり、法量差も認められる。器種としては鉢形土器となる。壺形土器Cは中Ⅲ-1期でも存在するが、中Ⅲ-1期とは胴部の屈曲部にシャープさがない、脚部が低いといった点が異なっている。甕形土器は、大小あるものの、口縁端部を断面T字形に拡張し、外端部に凹線をめぐらせる。凹線やヨコナデは極めてシャープであり、器壁も薄い。高杯形土器は口縁部が屈曲して上方に拡張されるものと、椀状になるものがあり、前者については上端部が拡張されてヨコナデによる凹線が認められる後期の高杯形土器に近いものもある。器台形土器は、下方への拡張の方が顕著となる。

弥生時代後期から古墳時代前期（図122）

弥生時代後期の土器は、大枠では後I～IV期の4期に分けることができる。各時期はさらに2小期に分けることができるが、今回の出土土器では分離することができなかった。そのため、大枠の時期ごとに整理する。また古墳時代前期は古前I期～古前III期までの3期の大枠でとらえることができ、さらに各期2～3小期に分けることができるが、該期に属する土器は極めて少なく、大枠の時期区分で整理する。

〈後I期〉

甕形土器と器台形土器のみの出土が認められる。甕形土器は、前段階となる中Ⅲ期の甕形土器と比べると、器壁も厚手であり、ヨコナデもシャープさを失う。土器製作に対し、投下労力の減退をうかがわせる。口縁端部の拡張も下方のみとなり、顕著でなくなる。内面のヘラケズリは、頸部の下半まで達するようになる。器台形土器は、筒部径の細いタイプのみが認められ、タテ方向に円孔が並ぶ。部分的にヘラ描沈線文がめぐらされている。

〈後II期〉

甕形土器は、胴部最大径が上方に上がり、口縁部付近の拡張も後I期と比べ顕著でなくなる。内面のヘラケズリは頸部付近にまで達するようになる。高杯形土器は、口縁部が外湾して開く。器台形土器は、「ハ」字形に端部が開く大きなものと、器高の低いものがある。これらは、中期以来の器台形土器の系譜を引くもので、後III期において急速に発達して墓前に供献される特殊器台になるものである。ほかに後I期から認められる筒部径の細い小型の器台もあり、透かし孔はあるが施文のないものが主体である。筒部の形状はエンタシス状となる。

〈後IV期〉

出土した後期の土器のうち、この期に属する土器が最も多い。壺形土器は3種がある。口縁部が受け口状になった長頸壺形土器は、長頸壺形土器の系譜を引く最後の形態である。「く」字形に外反し、口縁端部を上方に拡張した短頸壺形土器、脚台を有する直口壺形土器がある。甕形土器は、口縁端部の形態によりA～Dまでの4種があるが、そのうち上方に拡張し外端部に凹線をめぐらす（B）が、いわゆる吉備型甕と呼称されるものである。この期以降当地において主流となる甕形土器である。甕形土器Cは、但馬系の土器である。ほかに播磨、もしくは畿内系の甕形土器の底部や小片も出土して

いる。高杯形土器は口縁部が屈曲して立ち上がるタイプと椀状の口縁部となるタイプがある。いずれも短脚で、細かなヘラミガキを施すものや、水漉し粘土を使用するものが主体である。鉢形土器は「く」字形に外反する口縁部を有するものと、口縁端部をわずかに上方に拡張するものや、やや高台状の底部に直口する口縁部のものがある。器台形土器は、それまでの形態のものは認められず、皿状の受け部に短い脚部を付属させた小型器台が認められるようになる。

〈古前Ⅱ期〉

極めて少量の土器しか出土していない。壺形土器は、脚部の付属するもののみで、しかもかなり粗雑な調整である。甕形土器は、いわゆる吉備型甕で、比較的薄手であるが、口縁部は稜もなく、屈曲も甘い。器台形土器は椀状の受け部をもつ小型のものである。

調査区から出土した土器を年代的に整理した結果、中Ⅱ期末から古墳時代前期前半までの時期幅にあることが明らかとなった。さらに量的な多寡からみてみると、中Ⅲ期にピークがあり、それほど顕著な密集度とはいえないが、新庄尾上遺跡の弥生集落は隆盛を迎えるといえる。この時期に属するのが鳥装の司祭者や高楼建物を描いた土器片である。その後、後期に入っても細々と集落は存続するようではあるが、後Ⅲ期、後期中葉にいたって廃絶する。後期に入ると、旭川中流域の山間部（旧御津町域）では、原遺跡（二宮1988）、上伊田遺跡（長谷川2005）、伊田沖遺跡（二宮1988）、平岡西遺跡（長谷川1991・1992）などが出現する。中期の遺跡が、現況では新庄尾上遺跡しか確認できていない点からすると、遺構密度が貧弱ではあるが、地域の拠点集落として新庄尾上遺跡が中期末に成立した後、後期に入って解体し、各所でさらに小さな領域での拠点集落が成立したと解釈される。その後、後期末に集落が一時的に傾城されるが、廃絶した後は断続的に居住地として利用されたのであろう。

ただ、後Ⅲ期において、一時期完全に廃絶した点は、この時期において、当地では墳丘を有する特定個人墓が継続的に営まれ、それが古墳時代へつながっていくことからも、地域的にみると時代の画期といえる。墓制における画期が集落の動向とも連動していることをうかがわせる例証になるものもある。

参考文献

- 二宮 治夫1988「原 遺 跡」『御津町埋蔵文化財発掘調査報告3』御津町教育委員会
二宮 治夫1988「伊田沖遺跡」『御津町埋蔵文化財発掘調査報告4』御津町教育委員会
長谷川一英1991「平岡西遺跡Ⅱ」『御津町埋蔵文化財発掘調査報告7』御津町教育委員会
長谷川一英1992「平岡西遺跡Ⅰ」『御津町埋蔵文化財発掘調査報告8』御津町教育委員会
長谷川一英2005「上伊田遺跡」『御津町埋蔵文化財発掘調査報告11』御津町教育委員会

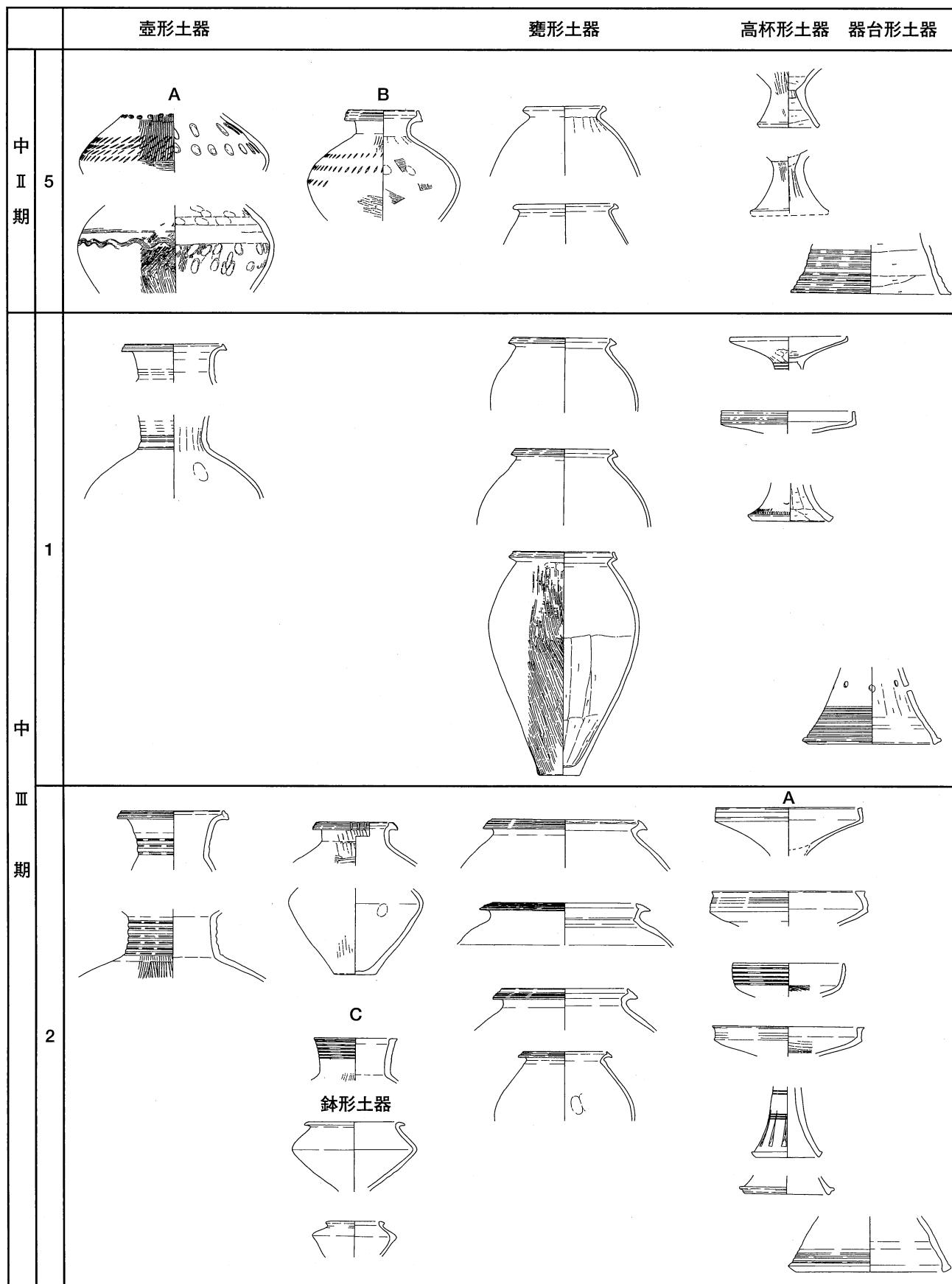


図121 弥生時代中期土器分類図

	壺形土器	甕形土器	高杯形土器	器台形土器
後Ⅰ期				
後Ⅱ期				
後Ⅲ期				
後Ⅳ期				
古前Ⅱ期				

図122 弥生時代後期から古墳時代前期土器分類図

第2節 絵画土器

新庄尾上遺跡から出土した絵画土器については資料紹介をし、公開してきた。今回、この報告書を作成するにあたって、改めて見直してみた。

絵画土器の土器

絵画が描かれた弥生土器（192・193）は66トレンチ第6遺構面で検出した竪穴建物SB89(2)01・02の埋土から、整理箱2箱分の土器に混じって出土した。調査時、泥濘の中から手探りで遺物を採集するような状況であったため、この絵画土器も後の整理作業中に発見した。土層断面観察から埋土は建物廃絶後の竪穴に東の高位側から流入した状況が窺える。土器の摩滅が少ないので、遠方から持ち込まれたものではない。

192・193は壺形土器の胴部上半である。外面は頸部への立ち上がり部に残存部で3条の凹線文を施した後に、目は粗いが丁寧なハケメ調整で仕上げられている。絵画を描くキャンバスになることを意識したのであろう。内面は全面に整形時の指頭圧痕が残存し、上半はナデ調整で、下半はナデ調整の後、粗くハケメ調整で仕上げられている。胎土には径0.5～3mmの花崗岩起源の細礫を多く含む。同時に出土した他の土器も同様の胎土で、絵画土器が特に精製された粘土を使用したようではない。新庄尾上遺跡周辺の地質は花崗岩質である。現在でも、花崗岩風化土、いわゆる真砂土の採取が行われている。絵画土器を製作した粘土も遺跡近隣で調達されたものであろう。192の外面には黒斑がみられる。調整方法や胎土から192・193は同一固体と考えられるが、接合部は無い。また、同時に出土した土器にも接合するものは無かった。他の絵画土器の出土例と同じく、廃棄時に破碎したのであろう。時期は弥生時代中期後葉、中Ⅲ期に位置付けられる。

絵画は凹線文から1.5cmほど下の胴部に、鋭利な細い串状の工具を用いて描かれている。線の太さは0.5mmシャープペンシルの芯より細い。焼成時の収縮を考慮しても、かなり細い工具を用いている。線の両側に堤防状に押し出された粘土が見られることから、土器の表面が完全に硬化する前に描かれている。線はためらい無く、一気に引かれている。線の修正も見られない。作者は絵画の描写に手馴れている様である。また、縦線の断面を観察すると、V字型の断面の右側の立ち上がりが緩やかである。描写の際に、工具を右に傾けて、引き下ろしていることが窺われる。横線も基本的に左から右へ引かれている。これらのことより、作者は右利きであると想定できる。

絵画土器（192）の絵画

192は最大で縦9.5cm、横10.5cmである。向かって右から並行する2条の円弧、人物、3.1cmの空間を開けて、半円、2ヶ所の鋭角をなす山形が残存している。左側の山形の頂点の左右から上方に、2条の並行する幅1mmほどの浅い線が描かれている。この線の工具は193の建物の絵画の右側の線と同様のものである。192の絵画は一連のものであろうが、人物の左右のものが何を表しているのかは、この破片だけでは不明である。

人物を詳細に見てみたい。絵画は原則的に上から下へ描かれている。丸い頭部は左側に不定形な三角形の突起が描かれている。突起の基部の縦線で頭部と三角形のくちばし状の部分を区画している。顔の表現は無い。頸部は頭部に比べると太く長い。胴部は長方形で、左右の角から内側に湾曲する線

が描かれている。曲線が最も接近する付近で、左右の線をつなぐ様に1条の横線が引かれている。さらに残存部の下端に横線が引かれているのが、わずかに見られる。頭部、頸部、胴部の境の表現はみられない。肩部は怒り肩風に鋭角をなしている。胴部の角の肩部から、腕を表す湾曲する線が左右に伸びる。その先端近くで、扇形に開く様に、上下に3本の直線が描かれている。指の表現は腕の線と合せて4本である。脚部は欠損している。また、頭頂部には箆状工具を斜めに押し当て、引き下ろした幅7mmの窪みに4条の凹線がみられる。左側を強く押し当てていた様で、左端の線の下方は頭部の中にまで入り込んでいる。誤って工具を当ててしまったのかもしれないが、丁寧な絵画表現や表面調整から、誤った痕をそのままにしておくとは考えがたい。これも絵画表現の一部と見るべきであろう。

人物絵画の表現しているものを見てみたい。頭頂部の線は、他の線と比較すると太く浅い。やわらかい雰囲気が感じられる。羽毛等で作られたとさか状の頭飾りを装着している様子を表している。頭部は三角形の部分と区画することによって、くちばし状の仮面を装着している様子を表している。両腕は肘を軽く曲げ、左右に大きく広げている。掌も大きく扇状に開いている。胴部は内側の鼓状のものが胴体を、外側の長方形はマントの様な衣装を羽織っている状況を表している。さらに、胴体中央の横線は貫頭衣の様な衣服を縛る紐とすれば、頭部とのバランスからも細身の弥生人とみれる。残存部下端の横線は衣服の裾を表している。しかし、衣服の襟剝の表現が見られない。他の部分の表現力から見て、書き落としたとは考えがたい。そこで、残存部下端の横線に着目したい。下端の横線と胴体中央の横線と併せると台形の区画になる。胴体の下半にあたる位置関係から、この区画が腰巻状の衣服の表現と考えられる。襟剝の表現が無いのも、上半身が衣服を着用していない裸体であることからによる。

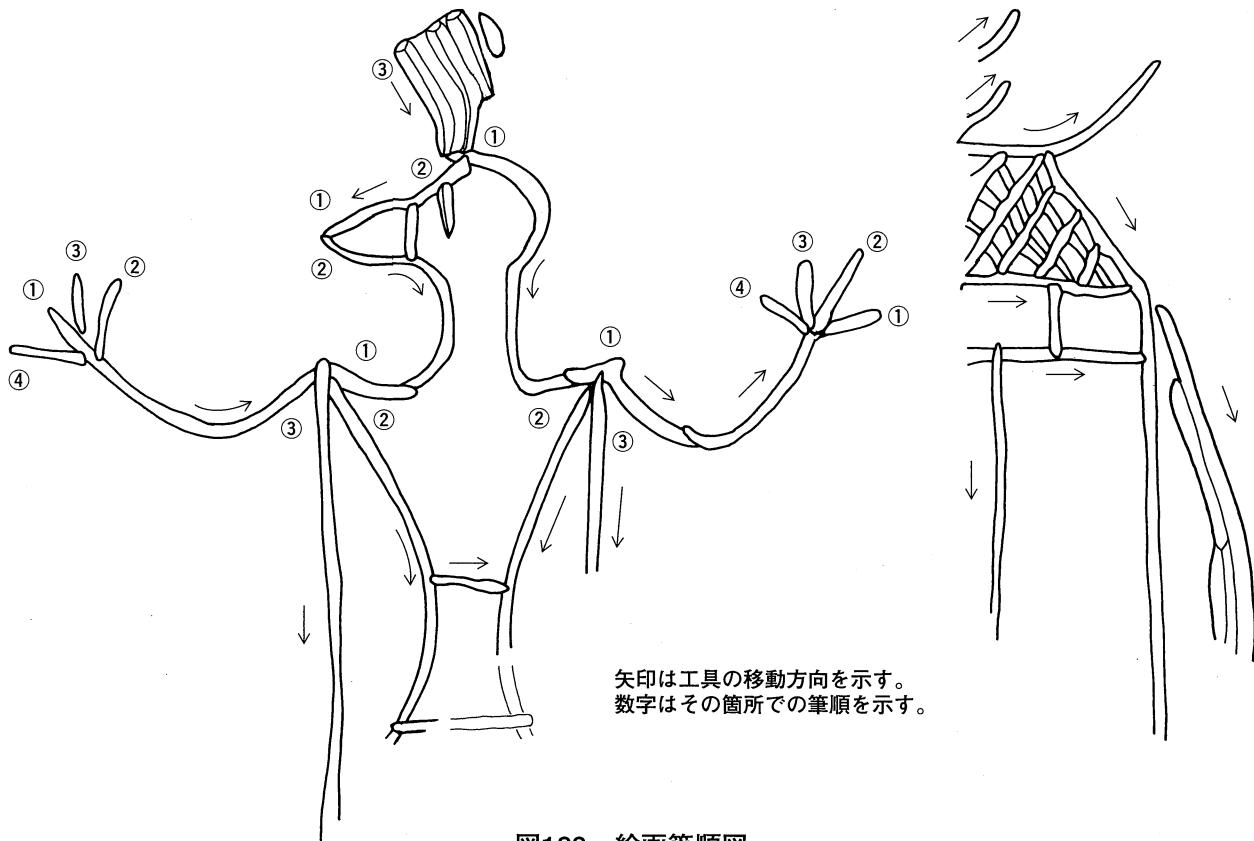


図123 繪画筆順図

頭部と胴部の向きを見ると、このままでは頭部は側頭部にくちばしの仮面を装着していることになるか、頭部を右に90度曲げていることになる。これはむしろ、仮面は顔面に装着しているが、くちばしを強調するために頭部は側面から、胴部は正面から描くという多視点画とみるべきであろう。顔の表現が無く、頭部と頸部の境の表現が無いのも、それが側頭部であるからである。

この様に、192に描かれた人物は頭飾り、くちばし状の仮面、マントを身に着けている。民俗例や他の絵画土器に照らし合わせると鳥装の人物、取り分け、マツリゴトを司る司祭者の姿を現していることになる。上半身に女性を示す乳房のような表現が見られないことから、この司祭者は男性と想定できよう。

絵画土器（193）の絵画

193は最大で縦8.8cm、横5.5cmである。向かって左側に建物の右側のみが残存している。

建物を詳細に見てみたい。絵画は原則的に上から下へ、外から中へ描かれている。輪郭と内側の線では、輪郭の方がやや太く、深く描かれている。線の使い分けが窺われる。屋根は寄棟風で、内側は斜格子で充填している。棟の先端から斜め上方へ緩やかな円弧を描きながら延びる線が描かれている。その左側にも棟から延びる線が1条見られる。さらにその上方に、棟の先端から延びる線と同様に円弧を描きながら延びる線が1条描かれている。屋根の下には1条の線で柱が残存部で2本描かれている。それに直交する1条の線で床を表している。床下には1条の線で表された高い柱が残存部で2本描かれている。右側の柱は軒から一気に線が引かれている。さらに、建物の右側に軒の辺りから幅1.5mmの1条の広く浅い線が右下へ描かれている。一見すると、2条の様に見えるが、線が完全に並行することから、細い籠状工具を用いて描かれたものである。

建物絵画の表現しているものを考えてみたい。寄棟屋根の棟端に千木が、その後ろには堅魚木が置かれている。屋根はカヤ葺きであろう。他の建物絵画例では柱は屋根から直接描かれているが、この絵画では、屋根の下には床が描かれ、屋根との間に空間が表されている。各地で復元されている高床建物に照らし合わせると写実的といえる。柱間は空白である。壁の表現を省略したのか、吹き抜けなのだろうか。床下の柱の高さは、現存部で床から棟までの高さの2倍である。かなりの高床建物である。左側の柱は床の上下で位置がずれている。屋根に注目すると、屋根の右端を表す線が棟に当たる所からその線とほぼ直角に左下へ延びる線が描かれている。人物絵画と同じく、多視点画で見てみると、この2本の線の間が側面（図124 網点部）となり、側面の左側の柱は欠損部に描かれており、現存部の左側の柱は正面から見た時の奥の角の柱を表していることになる。建物の正面から見えるものと、側面から見えるものを同一画面に表していることになる。建物の右側の線であるが、他の建物絵画例で見ると梯子の表現は2条の縦線の間に多数の横線を描いている。また、寄棟建物の

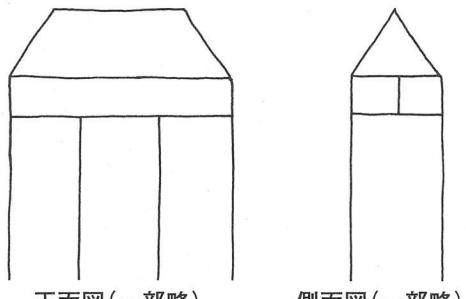
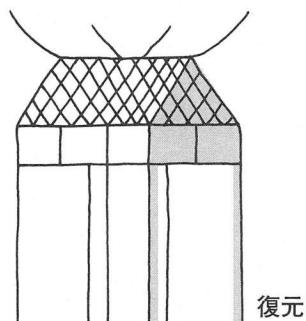


図124 建物絵画復元図

場合、梯子が建物に取り付く場所も建物の端部ではなく、床下である。この様に建物の右側の線を建物へ出入りするための梯子の表現とみるには疑問もあるが、ここでは板梯子の表現とみたい。梯子を用いた妻入り構造である。建物と線が異なるのは、梯子が常設のものではなく、必要に応じて掛けるもので、その有無という2つの場面を一度に表しているのであろう。

この様に、193に描かれた建物は棟飾りをもち、床の高さが非常に高い。日常生活で使用される建物とは考えがたい。さらに、妻入りである。この建物は古代出雲大社本殿復元図に通じるものがある。193の建物は192に描かれた鳥装の司祭者が祈りを奉げる神殿を表しているのであろう。

棟の上方に1条の円弧を描きながら延びる線が描かれている点について、棟飾りの一部、あるいは別の絵画なのかもしれないが、もう一層、すなわち二階建てで、その棟飾りの端部の表現ということをひとつの可能性としてあげたい。

絵画の内容

前述のように192、193は同一固体である。壺形土器の肩部に絵巻物風にひとつの物語を描いたのである。その物語とは鳥装の男性司祭者が高床の神殿の前で祈りを奉げるという物語である。欠損部には土地の神である鹿が描かれていたのであろう。

実際に新庄尾上遺跡でこの様な祭祀が行われていたのであろうか。前節でも述べたように、絵画土器の時期、弥生時代中期後葉は新庄尾上遺跡が隆盛を極めた時期である。地域の拠点集落として、人々が集い、鳥をイメージした装飾をした司祭者を中心に、豊穣を祈願したマツリを行っていたのであろう。

しかし、もうひとつの絵画である高床の建物に相当するような遺構は検出していない。調査区外に存在する可能性も無くはないが、実際にこの様な超高床建物が存在したとは考えがたい。弥生人の心象風景であろう。神殿に相当する建物が存在していたとしても、各地で見られる高床建物程度の規模であったのであろう。それすらもなく、壺に能力を持たせるために、神聖な司祭者や建物を壺に描いただけなのかもしれない。

空を飛ぶ鳥の姿を真似たり、異常な床の高さの建物は弥生人の高さ、空への信仰の表れであろう。空は豊穣を祈願した相手であるカミが住む所、鳥はカミとの使者と認識していたのであろう。新庄尾上遺跡周辺の人々はその後も鳥に対する信仰を持ち続けたようである。新庄尾上遺跡の北1.1kmに位置する平岡西遺跡は新庄尾上遺跡の後継集落のひとつである。そこから弥生時代後期末期に位置付けられる、スタンプ文で加飾された壺型土器が出土している。この壺型土器は焼成前に底部を大きく刳り抜かれる等、供献土器であることは明らかなものである。その土器に施されたスタンプ文の中に長いくちばしを持つ鳥形のものが見られる。非日常的なものに鳥の姿が見られるというのは、人々が鳥を特別なものとして意識していたことの表れであろう。

絵画土器が出土した66トレンチ周辺は集落の南西端部にあたる。この周辺は調査面積に比して、弥生時代の遺構は竪穴建物1棟をはじめわずかしか検出していない。積極的に利用していた状況は窺えない。ここは特殊な非日常的な空間としていたようである。つまり、祭祀場として利用し、祭祀の中で、供献された土器を破碎し、その破片が竪穴建物廃絶後の窪地へ流れ込んだと想定できよう。

最後になったが、本節をまとめるにあたり、深澤芳樹氏、根木修氏から種々有意義なご教示を頂いた。深く感謝します。

参考文献

- 安城市歴史博物館2001『弥生の絵画 倭人の顔』安城市歴史博物館
- 安藤広道2006「弥生時代「絵画」の構造」『原始絵画の研究 論考編』六一書房
- 大阪府立弥生文化博物館1992『弥生の神々』大阪府立弥生文化博物館
- 大阪府立弥生文化博物館2006『弥生画帳』大阪府立弥生文化博物館
- 大林組プロジェクトチーム2002『よみがえる古代大建設時代』東京書籍
- 香芝市二上山博物館1996『弥生人の鳥獣戯画』雄山閣出版
- 国立歴史民俗博物館1997『銅鐸の絵を読み解く』小学館
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館1986『記号と絵画』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 長谷川一英1992「御津町新庄尾上遺跡出土の絵画土器」『古代吉備 第14集』古代吉備研究会
- 春成秀爾1991「描かれた建物」『弥生時代の掘立柱建物 本編』埋蔵文化財研究会
- 藤田三郎2003「絵画土器」『奈良県の弥生土器集成 本文編』大和弥生文化の会
- 御津町教育委員会1992『平岡西遺跡 I』御津町教育委員会



1 調査地遠景
(西上空から)



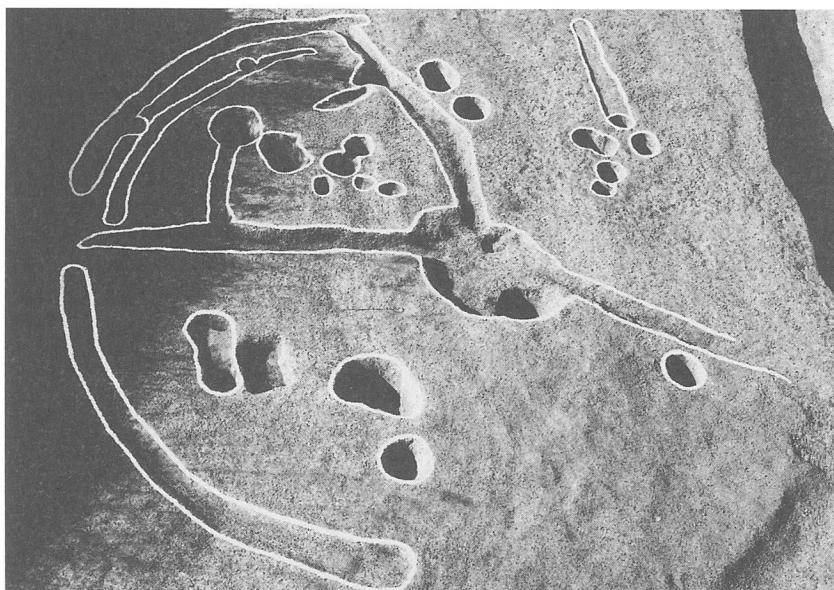
2 東区遠景
(北東から)



3 東区遠景
(北西から)



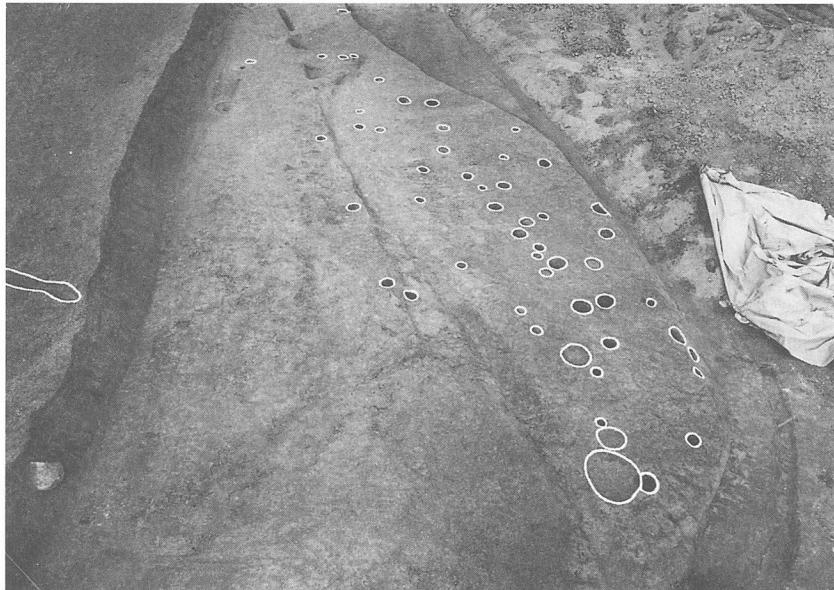
1 27トレンチ
遺構面
(北西から)



2 27トレンチ
SB8801
(南東から)



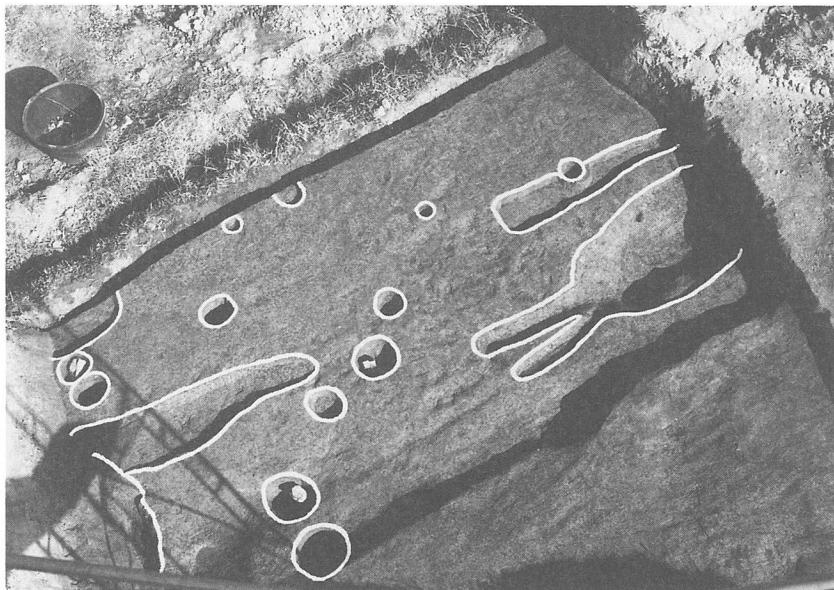
3 28トレンチ
第1遺構面
(南東から)



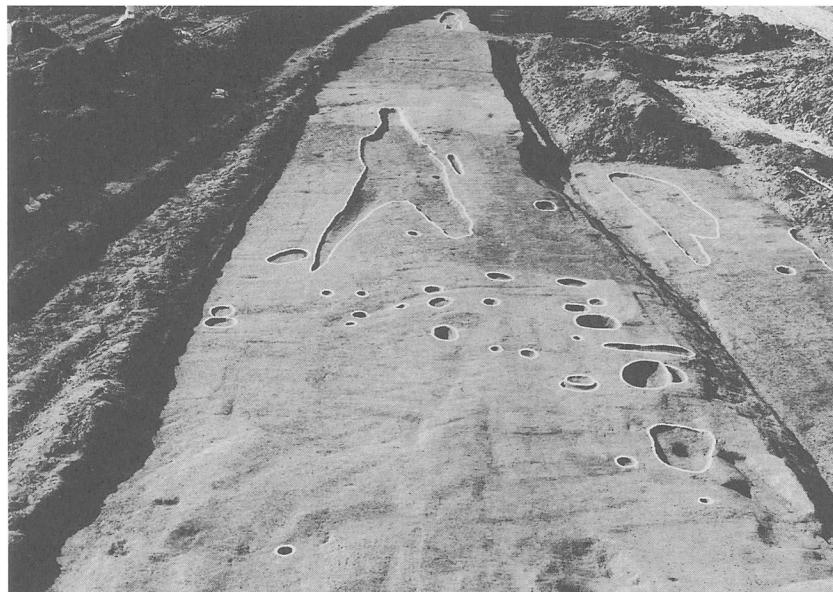
1 28トレンチ
第2遺構面
(南東から)



2 29トレンチ
遺構面
(南西から)



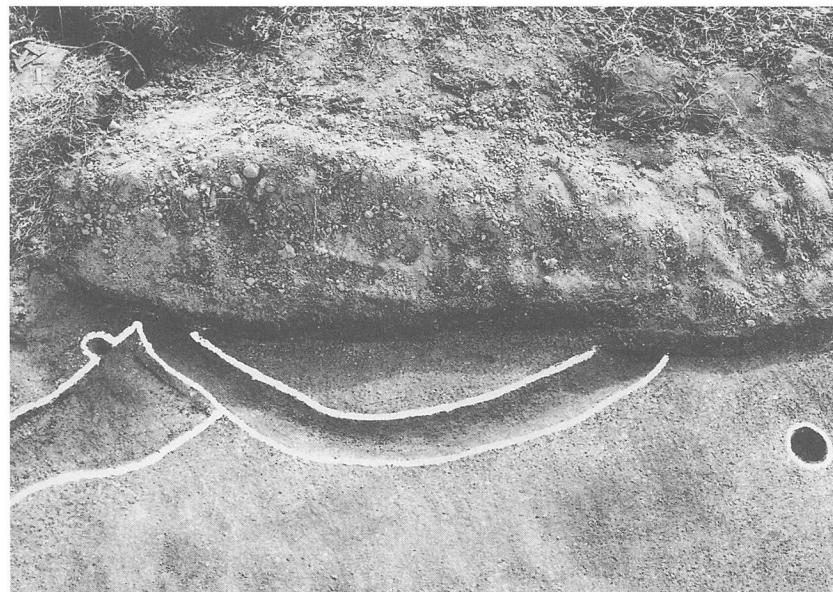
3 30トレンチ
遺構面
(南西から)



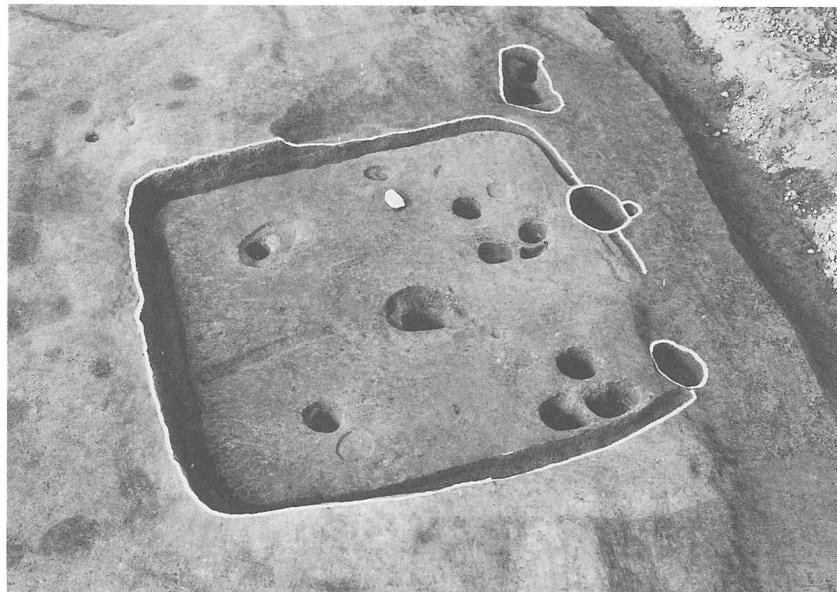
1 31トレンチ
第1遺構面
(東から)



2 31トレンチ
第2遺構面
(東から)



3 31トレンチ
SB8802
(北から)



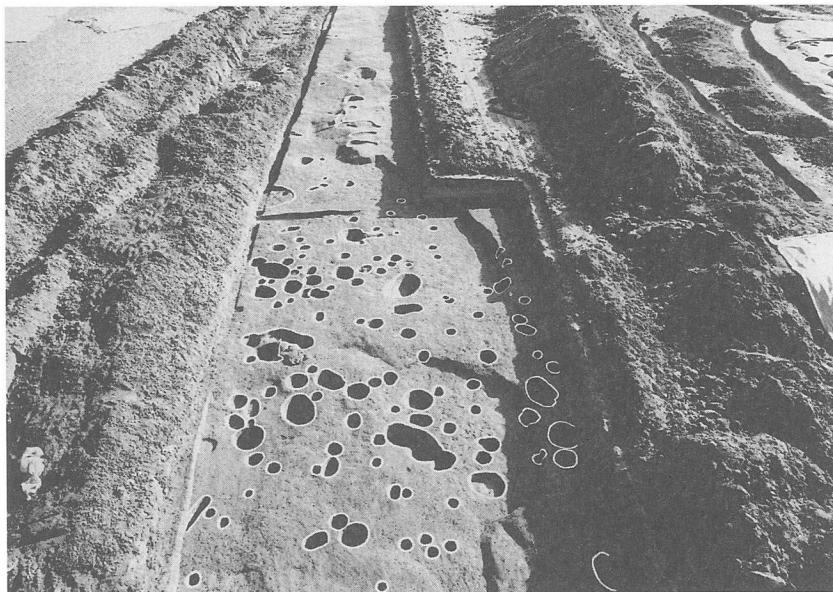
1 31トレンチ
SB8803
(東から)



2 32トレンチ
第1遺構面
(東から)



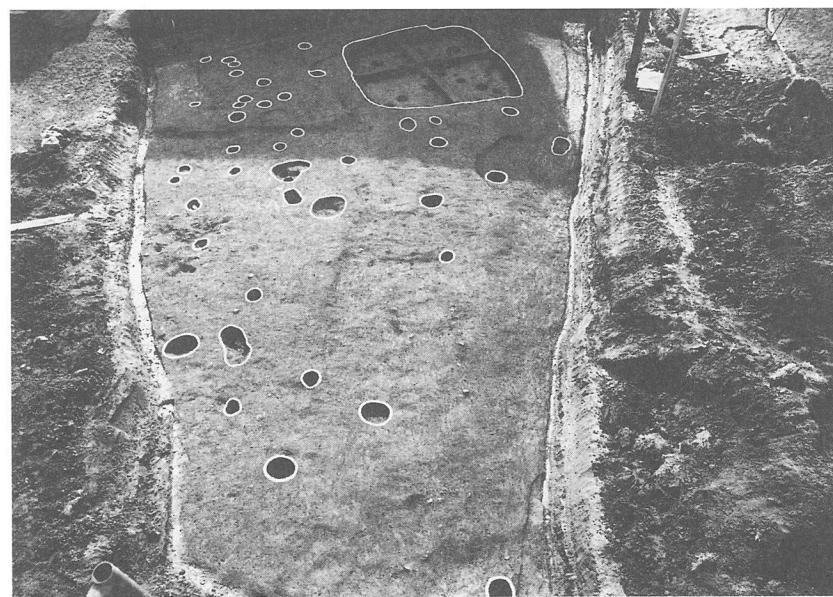
3 32トレンチ
第2遺構面
(東から)



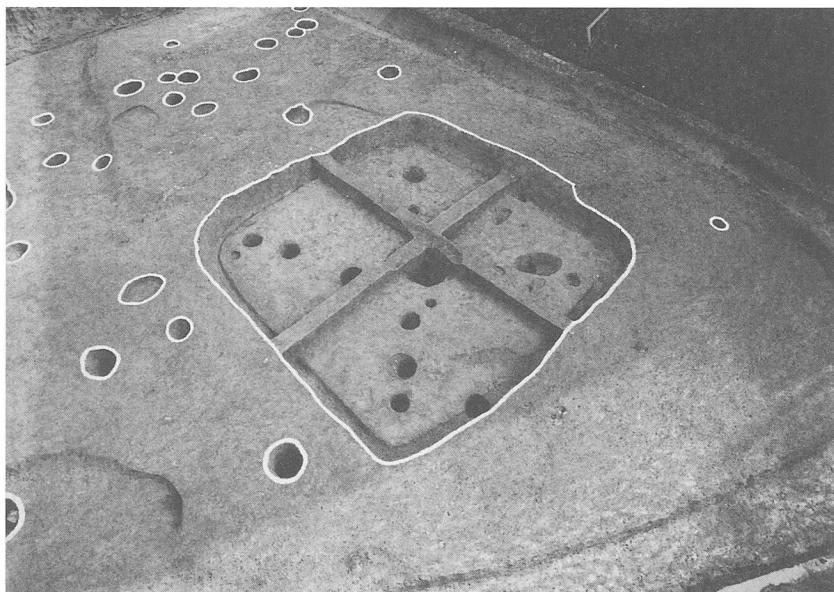
1 33トレンチ
第2遺構面
(西から)



2 34トレンチ
遺構面
(西から)



3 35トレンチ
遺構面
(北から)



1 35 トレンチ
SB8804
(北西から)



2 36 トレンチ
遺構面
(北西から)



3 37 トレンチ
遺構面
(西から)